
ブレイズソード・レックレス

陣鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイズソード・レックレス

【Zコード】

Z3880V

【作者名】

陣鳴

【あらすじ】

世界の支配者『モンスター』。その頂点『キング』を倒すため、生糞の猪突猛進娘エリス・エーツェルは旅に出た！

しかし世界は甘くない。前途多難の四面楚歌。

強敵揃いの道中で、出会つは男に女、騎士、山賊。

剣と炎と不屈を武器に、仲間と共に立ち向かう。

不利も苦戦もはねのけて、弱きが強きを凌駕する その瞬間は今ここに。

ドラステイックでトラキュラントな冒険活劇。全九章。

序章「燃えろー オーバーフレア」（1）

「イカれてるぜ、この野郎！」

激戦の剣林飛び交う最中、『モンスター』のひとりが口汚く罵った。

「ぬかせ！ あたしが野郎に見えるてめえの目のぼうがイカれてんだよ！」

正面で剣を受けるエリス・エーツェルが苛烈に言い返す。

「このイヌ野郎がつ！」

言葉に呼応するように、後方から援護の矢が飛んできた。それは彼女の前に構える『モンスター』の右目に直撃し、痛みに悶絶させる。

がら空きになつた胴めがけて斬りかかるエリスの剣が、その時、ごうごうたる炎を刀身にまとつた。

なにもないところから生み出されたかのように。

「オーバーフレア！」

炎の剣が、目の前の敵をひと斬ちする。斬り裂いた箇所から火が燃え移り、たちまち『モンスター』は火だるまと化した。断末魔が轟く。

旅人、リフィク・セントランが目撃したのはそんな光景だった。神官然とした白いローブにマント。二十代なかばという実年齢よりも下に見られがちな童顔が、呆気に取られたように口を半開いている。

旅歩きの道中、彼は辺境の村『フィオネイラ』へと立ち寄った。荒野と草原のはざまに位置する小じんまりとした村である。

そんな村の入り口で、着いた早々それに出くわしてしまつたのだ。

人間と『モンスター』の戦いに。

様々なところを旅してきたリフィクにしてみても、それは驚きを禁じ得ない光景であった。人間がモンスターに歯向かうなどというのは。

二十人ほどの人間たちは、ざっと見る限り大人の男ばかりである。恐らくこの村の住人なのだろう。使い古された『レザーアーマー』を身に、剣や槍、弓矢を手に立ち向かっている。

どことなく山賊のようだ、とリフィクは一瞬だけ呑気に思った。対する『モンスター』たちは、全身が銀色の毛で覆われ、前方に尖った口元から牙がのぞき、頭頂の両側に三角形の耳がピンと立っているといった風貌。

ちょうど狼に似た種族のようである。

数は人間たちより少ないだろう。一様に鉄製の胸鎧をつけ、やはり剣や槍などを手にしている。

数の上では互角に見えるが、戦況は人間たちが劣勢のようだつた。無理もない。一般的に人間よりも『モンスター』のほうが体も大きく力も強いからだ。現にぱっと見ただけでも、その狼族は戦っている男たちの一・五倍はある。

元々より不利な勝負。

人間たちも互いに協力し合つて奮戦しているが、それもどこまで保つかわからなかつた。

「……どうしましょ……」

リフィクはつい、戸惑いを口にしてしまつた。
迷つてゐるのだ。

亜人、獸人、魔人、化け物。地域によつて差異はあるものの、通俗的な呼び名は『モンスター』。彼らは、この世界の支配者なのだ。

圧倒的な力を振りかざす弱肉強食の体現者たち。彼らは人間を襲い、蹂躪し、そして文字通りに食らう。
リフィクも当然、逆らおうとは考えもしなかつた。

しかし目の前の人間たちは、戦っているのだ。そんな常識などものともしていないように。

そして敗れようとしている。

そんな彼らを、リフィクは見殺しにはできなかつた。見て見ぬふりなど。決して。

だから迷つているのだ。手を出すべきか、出さざるべきかを。その時。

「ぐあああっ！」

人間たちのあいだから、大きなうめき声が上がつた。モンスターの振るつた得物が直撃し、彼らのひとりが傷を受けたのだ。しかも、かなり深い。遠くから見ているリフィクでさえもそれが致命傷だとわかつた。

おびただしい量の血が地面にまき散らされる。

その凄惨さによる衝撃が、リフィクの背中を後押しした。彼の体がほのかに輝く。

「……フラッシュユージャベリン！」

そして。リフィクの周囲から、無数の光がまるで矢のようにな射し出された。

それは空を駆け、モンスターの陣営へと襲いかかる。おおよそ半数を、その光が貫いた。倒れるモンスターたち。

突然の乱入による動搖か、両陣営の動きがぴたりと止まる。

そこから最も早く動いたのは、たくましい男たちの中に混ざつた、ただひとりの少女だつた。

年の頃は十代後半。外にハネた短い茶髪に赤いハチマキを巻いた、勇ましい顔つきをしている。

「オーバーフレアあつ！」

彼女の振るう剣から炎が生まれ、モンスターの一本を斬り倒した。それが合図となつたように、再び戦鐘がかき鳴らされる。

しかしモンスターたちは、リフィクの攻撃によって戦力を半減させられていた。

数での圧倒。戦況は見るまに反転していった。

「……次はこうはいかん！ 覚えていろつ！」

やがて既視感にまみれた捨て台詞を吐き、わずかに残ったモンスターが誰からともなく退却していく。

それはひとまずの勝利を意味していた。村人側のリフィクはほつと胸をなで下ろし、すぐさま彼らのもとへと駆け出した。

「誰が覚えててやるかっ！ 顔の見分けなんかつかねえよつ！」「

律儀なのか無粋なのか、わざわざ捨て台詞に言い返すエリス・エーツェル。

退散する『モンスター』たちをにらみつけてはいたが、

「しつかりしる、レクト！」

という仲間の叫びを聞き、背後へ振り返った。そして息せききるようになり出す。

戦闘中も目に入っていた。モンスターの攻撃によつて大ダメージを受けてしまつたことを。

胸元に真つ赤に染めた青年、レクトは仰向けに倒れていた。その周りを彼やエリスと同じ『自警団』の面々が取り囲んでいる。他のみんなも大なり小なり傷を負つてはいるが、命に関わるほどの重傷は彼だけのようであった。

すでに顔からは血の気が引き、呼吸も弱々しくなつてゐる。

「レクト！ 死んだら承知しねえぞ！」

「早く医者つれてこい！」

「止血だ！ 止血！」

仲間たちは一様に、自分のケガなど後回しにして彼の処置に奔走していた。

とはいえ。彼は素人目に見てももう手遅れであった。いまわのきわ。血は止まらずどんどんと流れ出でてきている。

しかし周囲の仲間たちの表情には、決してあせりぬは浮かんでいなかつた。

そんなところへ。

「すみません、通してください……」

仲間たちの野太い声に紛れて、相反する細い声がなにやら割り込んできた。

エリスは、こんな時にどこの脳天氣だ、とわからを見やる。

声の通りに割り込んできたのは、やはり声の通りに線の細そうな若い男だった。ややウェーブがかかった金髪にタレ氣味の目。白っぽい、旅人なのか聖職者なのかよくわからない服装をしている。

「すみません……失礼します」

若い男はレクトへ駆け寄ると、大量の血を見てはつとしたように息を呑んだ。

「なんだ、あんたつ！ 医者か！？」

仲間のひとりが懷疑の瞳を送る。

「いえ、残念ながら……」希望にそえられなくて。しかし、彼は僕がなんとかしてみます

口調はともあれ表情は真剣に、若い男はビザを落とし、レクトの体へと手をかざした。

「ヒーリングシェア……！」

そしてなにかを呟くと、彼の手がほのかに光を帯び始める。するとあらうことか、レクトの胸にさしつくりと開いていたはずの傷が、見る見るうちに小さくなつていった。

周囲が驚きの声を上げ、どよめく。

やがてレクトの傷口がぴつたりと閉じ、彼の顔から苦痛の色が消え去つていた。

「はあ……」

安堵と疲労を混ぜ合わせたように、若い男が深い息を吐く。

「他に、ケガのある方はこちらに」

驚きのあまり呆然としていた仲間たちであつたが、その言葉によ

つて我に返り一斉に歓喜の声を響き渡らせた。
レクトの命を取りとめたことと、今の光景の神秘さを称えるよう
に。

時刻は夜。

村で唯一の食堂兼酒場へ、戦いに勝利した男たちが集まっていた。並ぶ木製のテーブルでおののおのメシを食らい、酒をあおり、上調子に楽しんでいる。

祝杯なのだろう。

時折他の村民たちが顔を出し、「いつもありがとう」や「我が村の誇りだ」などとお礼の言葉を残していく。リフィク・セントランは、そんな食堂のすみで少々ぐつたりした様子でテーブルについていた。

貸してもらった二階の部屋に荷物とマントを置き、今は白いローブを羽織つただけの姿である。そうしていると本当に司祭かなにかのようだった。

そんなりフィクの対面へ、大柄な誰かが腰を下ろす。

「お前さんかい。さつき加勢してくれたのは」

低いしゃがれ声で尋ねたのは、彼らの中でも最年長とおぼしき男性だった。

白髪が頭頂部からすっかりハゲ上がり、年輪のようにシワが刻まれたいかつい顔つき。

孫がいてもおかしくないほどの年齢に見えるが、その筋骨は周囲の誰よりもたくましかつた。

「オレはこの『ファニアネイラ自警団』の団長、ドート・ファーバーだ。手助け感謝する。家族の命を助けてくれたこともな

「あ、いえ、その、こちらこそ……」

なにがこちらこそなのか。リフィクは照れた様子で頬を赤らめる。「僕はリフィク・セントランと申します。……家族と言いますと、先ほどの方はご子息で？」

仲間からレクトと呼ばれていた青年のことだ。そつこえば、居並んだ団員たちに比べてかなり若かつたように見えた。

「いや

ドートは首を振る。

「けどここは連中はみんな家族みたいなもんだ。だから血がつながつてゐるかどうかなんてのは細かいことなんだよ」

決して細かくはないだろうと内心思つたリフィクだが、口には出さずあいまいな相づちを打つた。

「だいたい兄ちゃんよ、そんなケツがむずがゆくなるような喋り方よせよ。もつと楽にしとけ」

「はあ……すみません、お気になさりす。性分ですの……」
顔をしかめるドートに対し、リフィクは申し訳なさそうに頭を下げた。

いつしか、ふたりの周りには他の団員たちが集まつてきていった。元々リフィクに興味を抱いてはいたが、団長が口火を切るまでは……と遠慮をしていた部分があつたのだろう。

「まあ、んなこたあどうでもいい

自分から言い出した口調の件は放り捨てて、ドート団長は本題を切り出す。

「お兄ちゃんよ、あんたナニモンだ？ 瀕死のケガをあつとこつまに治しちまつたり、『モンスター』共をよくわからねえうちにやつつけちまつたり、なんだか妙な……妙なことをしやがる。ありやなんだ？」

うまく言い表す言葉が見つからなかつたのか、語尾がややもつれた。

「ナニモノと言われましても、ただ旅をしている身で。先ほど僕がやつたのは……」

リフィクは気を遣うように答えるながら、

「……ご存じないんですか？」

おつかなびつくり聞き返した。

「知らねえから聞いてんだ」

当たり前である。

「そ、そうですよね。すみません」

「僕が使ったのは『魔術』というもので……自然の中をめぐつてゐる力を借りて、様々なことをやつてしまえるという便利なものです。傷を治療したりできるのは『治癒術』と言つて少し違つものなのですが、だいたいは同じものと思って頂いて結構です」

なにやら。話の行き先にかすかな不安を覚えて、ドートの眉にシワが増える。

「自然と言いますか、この大地は、人間には測り知れないほどのパワーがあるのです。なのでそんな自然と心を通わし、力を借り受けることで超常の現象操ることができるものですよ。ただそれには……」

「いや、もういい。オレの言いかたが悪かつたみてえだ」

リフィクの説明が下手すぎたのかドートの理解力が限りなく乏しかつたのかとわざわざ比較するまでもなく明らかに前者の理由から、なにを言つているのかまったくわからなかつたのだ。

そもそもいきなり原理や概念を語り出す奴がいるだらうか。

「オレが聞きたかったのはな、そういうこつちやねえんだ。……つまり、あんたが奴らにぶつ放したアレは、いくらでも使えるもんなのか?」

「えーと、そうですねえ……総じて体力を消費してしまいますので、アレなら……」

エネルギー体の槍を生み出し射出する術『フラッシュ・ショージャベリン』。

「威力にもよりますが十数回……万全な状態の時の話ですけど」

「じゃあ、もっと威力を高くすることはできるのか? たとえば建物を丸ごとぶつ壊せるようには?」

ドートの様子は、興味本意で質問している範疇をかなり上回って

いた。具体的に戦力を分析するような、そんな雰囲気がただよっている。

「可能、ではあります……。強力なものはそれだけ使うのに時間がかかりますし、体力も激しく消費してしまいます」

「なんだか嫌な予感をリフィクは感じていた。

「とにかく使えるってことか。よし！ 兄ちゃんを男と見込んで頼む。オレたちにもう一回だけ力あ貸してくれ！」

ドートは机を粉碎しそうな勢いで頭を下げた。

どうやら予感は当たっていたようだ。

「ええっ！？ 」「困りますっ。頭を上げてください……」

リフィクはあたふたしながらもそれを断わった。

「……オレがここまでしてんのにか……？」

頭を下げたまま、ドートは地獄の底から響いてくるような低い声をうならせた。取り巻く団員たちからの視線にも険悪さが混じり始めた。

「これではまるで脅しではないか。山賊っぽい雰囲気の男たちが、今や完全なる山賊のよう見えた。

「だ、だつて……手を貸すといつひとま、『モンスター』と戦うつてことですよね……？」

「決まつてんだろ」

「できませんよっ、そんなこと……！」

リフィクは悲痛な表情で訴えかけた。

対面するのでさえはばかられるような相手に戦いを仕掛けようなど、もつての他だ。沙汰の限り。信じられない発想である。

『モンスター』は々よりも、今この場から逃げ出したくてしょうがないリフィクであった。

「第一、どうしてあなた方は『モンスター』と戦っているんですか？ 今日だってやられてしまいそうだったのに……いつか本当に死んでしまいますよ……」

なんとか説得しようと口走った言葉であるが、それはリフィクの

本心でもあつた。彼らを単純に心配する気持ちは。

それを耳にして、ドート団長は重々しく顔を上げた。そして真剣にリフィクの目を見やる。

「どうしてもこうしてもねえ。当たり前じゃねえか、そんなこと」
彼が断言した言葉は、リフィクの既成概念をいともたやすく打ち砕いた。

リフィクにしてみれば、『モンスター』とは戦わないことが当たり前ののだ。それはリフィクのみならず世界中の常識と言つてもいい。

下手なことをして目をつけられたら、どうなるものかわからない。そういう相手なのだ。

「奴らはオレらを食いにやつてくるんだ。戦つしかあるめえ。奴らからすりや、この村は野菜畑みたいなもんだ。一気に刈り取りはしねえだろ？ が、だからって好きにやらせとくわけにもいかねえんだよ」

守るための戦い、といつものなのだろう。自衛のための。「でも……」

そう簡単に勝てるのなら『モンスター』が跋扈などしていいない。人間と彼らとの力の差。それは歴然なのだ。

リフィクも不意打ちだからこそ撃退することができたが、とてもじゃないが正面きつては敵わない。

「わかつてゐるさ。オレらには追つ払うのがせいぜい。ケガ人も死人も毎回出ちまつ」

リフィクの言いたいことを汲み取つたかのように、ドートが言葉を継ぐ。

「けどな、兄ちゃんが力を貸してくれんのなら話は別だ。奴らをアジト」と、根こそぎぶつ倒すことができるんだ！ 賴む！」

言い切る根拠は、恐らくないのだろう。

しかしドートには不思議な確信がかいま見えた。

それは自信。仲間が瀕死の状態になつとしても最後まで悲観しな

かつたような、何事もあきらめない不屈の心。それがデートの中に満ちあふれているのだ。

「彼だけではなく、きっと血警団の全員だ。

「…………わかりました」

そんな心意気に胸を打たれたからか、もしくは生来からの強く頼まれたら断われない性格からか、リフィクはおずおずと首を縦に振った。

「一度だけなら…………皆さんの力になります」

ドートや他の団員たちの歓喜と祝福。そしてその次に振りかかってく、様々な歓迎の表現。

酒が入っているせいかそれは苛烈で、質問責めや酌の誘いなどはまだいいほうだった。自慢話や逸話を散々聞かされ、大して面白くもない芸を見せられ、さらにはそれへの参加を強要され。

飽きたのか酔い潰れたのか、リフィクの周囲が落ち着いたのは夜もかなり深まつた頃だった。

今『モンスター』たちが襲つてきたらどうするんだろ？と思う余裕もなく、リフィクは酒瓶の散乱するテーブルに突つ伏していた。元々、傷を負つた団員たちに『治癒魔術』をかけて回つた時点で相当疲労が溜つっていたのだ。

それに加えてこのバカ騒ぎである。性分故に途中で抜け出すことができなかつたが、もう限界であつた。

意志とは無関係にまぶたが落ちてくる。

「よつ」

「はつ、はい」

とはいえ。かけられた声に律儀に応えてしまつあたり、損ないうのか殊勝なというのか。

リフィクは上体を起こして、声の主へと振り向いた。そしてやや面を食らつ。

ななめ後方に立つていたのは、先の戦闘でも目立つていたあの少女だった。どうやら自警団の中で女性は彼女だけのようである。リフィクが面を食らつたのは、彼女の服装についてであった。

丈の短い袖なしのジャケットに、その下はこれまた丈の短いタンクトップ。そしてもはや下着と見まがうばかりのショートパンツ。

日中の戦闘の時から、そんな肩出しヘン出し太もも出しひつた

露出度の高い格好していたのだが、近いところでは田にしこリフィクは思わずドキリとしてしまったのだ。

田のやり場に困つて、赤くなりながらうつむく。

「お前、名前は？」

「はい、リフィク・セントランです……」

「ならリフィク、あたしの子分になれよ」

「はい……。……ええっ！？」

極度の疲労と照れから、よくわからない返事をしてしまったことに気付くリフィク。

「よし、忘れんなよ」

少女はあっさり流して、リフィクの隣に座り中身の残つた酒瓶に手を伸ばした。

「ちよつ、ちよつとまつ、まつ、ちよつとまつ、まつ……！」

リフィクは全身で動搖を表しながら、なんとか彼女に弁解を試みる。言葉が通じたかどうかは怪しいが、とりあえず少女は面倒くさそうに振り向いた。

「あー？」

「い、今なんと仰いましたか……？」

リフィクは恐る恐る尋ねる。なんだか物騒なことを言われた気がした。

「なんか、子分がどうとかつて……」

「あたしの子分になれとは言った。そんで、お前はそれを引き受けた。終わり。なんも問題ねえよ」

問題大ありである。そんなことにつっかり「はい」と言つてしまつたことに対し、リフィクは自分で自分の頬をひっぱたいてやりたくてしおうがなかつた。

「あのー、それはキャンセルみたいなことさせ……？」

「……てめー」

リフィクの取り消し宣言を耳に入れて、エリスは不機嫌そうに田

尻を上げた。

「まさか自分のその口で言つたことを撤回しようつてハラジやねえだろうな」

勢いや弾みとはいえ、言つてしまつたことには変わりない。少々乱暴ではあるが、今はエリスに理があった。一応は。

「でもつ、でも……」

まるで子供のように反論しようとするリフィク。そんなものは無視して、

「それでも男かつ！ 自分で言つたことには責任持ちやがれ、うすらバカ！」

エリスは激しく追い詰めた。まさに炎の「」とし。

「そ、それはそうですが、でもつ、嫌ですよ子分なんて！ せめてお友達から始めましょ、ねつ？」

くたくたですでに頭が回つていないので、リフィクの反論は的を外しまくっていた。

「女々しいーつ！」

「それくらいにしておけ、エリス」

今にも噛みつかん勢いのエリスを制止したのは、彼女と同年代ほどの青年であった。

山賊の一歩手前のような団員たちは雲泥の差がある、穏やかな物腰。顔立ちも思慮深そうで、なにやら場違いな雰囲気さえただよつていた。

「弟分は引っ込んでるよー」

「まだそんな昔のことを……」

青年は横目に流してから、改めてリフィクを見て、深々と一礼した。

「レクト・レイドです。死にかけていた俺を、あなたが救つてくれたと聞きました。感謝の言葉もありません」

先ほど『モンスター』の手により大ケガを負い、リフィクが術治療を施した青年。それが彼だった。

「いえ、そんな……お気遣いなく。困った時はお互い様ですから。お元気になられたようでなによりです」

リフィクは照れたように小さくなる。青くなったり赤くなったり

「苦労な奴だ。

レクトは先ほどまで団長が座っていたイスに腰かけ、再びエリスに視線を戻した。諭すような表情。

「人の迷惑を考えるといつも言つてるだり」

「うつせえバーク。そんな説教をしにわざわざ起き出してきたのかよ」

対するエリスは、まったく聞く耳持たずといつた態度だった。

「礼を言いに来たんだ。だが恩人に因縁をつけるな人間がいるなら見過ごすわけにはいかない」

「誰が因縁つけてるってんだよ、このボンクラ！ お前の目はガラス玉か？」

「あの……おふたり共、仲良く」

口ゲンカに耐えかねて、リフィクが仲裁を買って出る。

「子分は黙つてろ！」

が、エリスに一蹴されてしまった。

「だからそれはあ……もういいです」

ついに限界を越えたようだ。リフィクは観念して、再びテーブルの上に突つ伏す。

「お疲れなら、もう休んでください。エリスの言つことは気にせず、そんな様子を見て、レクトが微笑みながらそう促した。

「はあ。では、お言葉に甘えて……おやすみなさい……」

『待て』を解かれた犬のように、リフィクは心底ほつとして体を起こした。ふらふらと左右に揺れながら奥のほうへと消えていく。

祝いの席ももうお開きのようだ。帰つたり酔い潰れたりしていなのは、今やエリスとレクトをのぞいて数人ほどである。

「……無駄な心配かけさせやがつて、バカが。あいつがいなきゃ死

んでたんだぞ、てめー」

すねるよう^ノに咳くエリス。

「そうだな。……すまなかつた」

レクトは心から申し訳なさそうに、それに応えた。

翌朝。

『ファイアネイフ』の村の入り口に、完全武装を施した自警団の面々が集結していた。

前日と同じく、ないよりはマシ程度の『レザーアーマー』に、お世辞にも新しいとは言えない剣や槍、斧、弓矢。辺境の村でこれだけ集めるのは苦労しだらう。

しかしヒリス・エーツホールは、やはり昨日のような露出度の多い軽装のままであつた。服に対しても腰に吊らした剣が妙に浮いてみえる。

「よーしー、全員いるなつ！？」

団長の気合この叫令に、地響きに勝るとも劣らないうつな声が返された。

「これからオレたちを苦しめてきた、あのモンスター共のアジトに乗り込む！ 総力戦だ！ この村のために、ファイアネイフ自警団の意地を見せつけてやるひざつ……」

おおおお……とこうやかましい意氣込みに、リフィクは不調子そうな表情で耳をふさいだ。
 「どうしてこんなに元気なんでしょう……」
 そして力なく呟く。

昨夜だいぶ遅くまで酔いどれ騒ぎを繰り広げていた、昨日の今日である。というか朝である。翌朝。早朝。

諸事情により酒は口にしていないリフィクだったが、充分な睡眠も取れずに起き起にされたためにまだ頭がボーッとしているのだ。

「なにもこんな早く……」

タフすぎる彼らにはついていけそうにない。

「頼むぜ、兄ちゃん。あんたにかかるんだからな

近くにいた男性が、激励を込めてリフィクの肩を叩く。
その衝撃にすら耐えられず、リフィクはつまずいてすつ転んでしまった。

二十人弱という大所帯が、朝焼けの残る空の下を進んでいく。周囲から草木の姿が少なくなり、大きな岩石が目立ち始めた。

皆を引き連れるようにエリス・エーツェルが先頭に立ち、リフィクはドート団長と共に集団の中央辺りに控えていた。

「奴らが住み着いたのは、もう十年以上も前のことだ」

自警団の経緯を尋ねたりフィクに、ドートがいかつい表情で語り出す。

「……らへんは小さい村がぽつぽつとあるから、絶好の餌場だとでも思つたんだろ？」「……。ある日突然、オレたちの村にやつてきやがつたんだ」

当時の光景を思い起こしているのか、ドートの目にありありと炎が燃えさかっていた。

「最初にやられたのは、村の入り口で見張りをやつてたエルネスト……あいつの親父だよ」

ドートは言いながら、仲間たちの先頭に視線を向けた。リフィクの顔がわずかにしかめられる。

「エルネストだけじゃねえ。村の連中も自警団の連中も、數え切れねえ人間が奴らにやられた。今の団員たちは、だいたいがそんな仇を持つてゐる手合いなんだよ」

仇討ち。恨み。憎しみ。そういう強い気持ちがあるからこそ、『モンスター』という強大な相手にも立ち向かっていくのだろう。

そんな話を聞かされては、眠気もどこかに飛んで行ってしまうというものだ。先ほどよりもだいぶしつかりしてきた頭で、リフィクは彼らの意氣を思い知る。

「ちつぽけな村だからな。この団どじろか、村全部が家族みたいな

もんだ。黙つてらんねえんだよ、ああいう奴らに好き勝手されんのは

激情とは別に、共に生まれ育つた村を守りたいといつ意志が彼らの中にはある。だから戦えるのだ。我が身を犠牲にしてでも。リフィクはふと思つ。自分の中に、彼らのような強い意志があるのだろうかと。

答えはすぐに出た。ない。復讐を誓つような氣概も、故郷に執着するような氣持ちも。なにひとつなかつた。

故にどこか憧れを感じ始めているのかもしけない。確固たる決意を胸に生ける、このがむしゃらな人間たちに對して。

「見えてきたぞ」

先のほうからそんな言葉が聞こえてきて、リフィクは顔を上げて前方を眺めた。

なだらかな荒野。岩場に囲まれた、大きな石造りの建造物がそびえ立つていた。

塔のような円柱形で、一階建てほどの高さがある。ところどころが風化して崩れている様を見ると、それはなにかの遺跡なのかもしれない。

「こんな近いところに……」

リフィクは愕然と呟いた。村を出てから、まだいくばくも経っていない。早朝から朝に変わつた程度だ。

「見た目はあんなもんだが、地下が案外広くてな。どれくらいの数がいるのかわからねえぞ」

氣を引き締めるように、ドートが口を開く。

「詳しいんですね」

「ガキの遊び場だったんだよ、奴らが住み着くまではな」

近付くにつれ、団員たちからあふれ出るよつた氣迫が感じられた。戦意は最高潮にまで達している。

「作戦はこうだ。まずオレたちがあのアジトを取り囲む。で、お兄ちゃんが派手なヤツをぶつ放して、あのアジトを崩れさせん。……できるだろ?」

ドートの確認に、リフィクは「あれくらいなら、なんとか」とうなずいた。

「そうするとグース力眠ってる奴らは、なに」とかとアジトから慌てて飛び出してくる。そこを攻め立てるんだ」

包围。奇襲。強襲。常套手段ではある。

フィアネイラ自警団はやや離れたところから散開し、素早く包囲網を完成させていく。準備完了の合図が来たのもそのすぐだった。

「最初の一発を打つてしまふと、僕はしばらく動けなくなると思いますが……」

進攻を目前にして、リフィクが念を押す。全力を出すので最初以外は戦力になれない、と。

「心配すんな。手え貸してくれた礼だ、きつちりオレが守つてやるよ」

自分の身の心配をしていると取られたのか、そばにいたドートがたのもしくそう言い切った。それならそれで安心ではあるが。

「さあ、やつてくれ」

ドートに促されて、リフィクは意識と『力』を集中させていく。

昨日の攻撃よりも、さらに強く、深く。

この奇襲戦、リフィクにかかっていると言つても過言ではない。最初のこの一撃で『モンスター』にどれほどの損害と混乱をもたらすことができるのか。

それによって結果が左右する。ひいては自分たちの死活が。

恐怖と不安で逃げ出したいリフィクだったが、彼らの手前をうするわけにもいかなかつた。

自分を信じてここまで来ているのだ。ならば、彼らを信じなければ。

リフィクの体の周囲に、ほのかに光が集まり始める。『魔術』を

使役する時特有の現象だ。はたから見ると、それはなんとも神々しい光景であった。

「いきます……！」

意を決して、リフィクは集中させた『魔力』を解き放った。

「フランシュージャベリン！」

天から巨大な光の槍が飛来する。それが『モンスター』がアジトとしている遺跡に突き刺さった瞬間、すさまじい衝撃と轟音が周囲を支配した。

遺跡は上から叩き潰されたように崩れ落ち、大量の土砂と土煙と黒煙を巻き上げ、炎を躍らせる。その威力は半端なものではなかつた。

「すげえや……」

自警団の誰かが感嘆の声を上げる。『魔術』知識のない彼らからすれば、それはまさしく神の御業に等しかつた。

しかし見取れている場合ではない。今の一撃は、戦闘開始の合図なのだ。

やがて崩落の轟音が収まつてくると、アジトの中から様々な声が響いてきた。それは『モンスター』たちが上げる奇声、悲鳴、怒号、混乱。阿鼻叫喚の叫びであつた。

さすがに初撃で都合良く全滅とはいかなかつたようだ。いよいよとなり、武器を握る手に力を込める団員たち。

するとその時。煙りを突つ切るようにして、一体の『モンスター』が飛び出してきた。村を襲つてきたのと同じ、狼の特徴を持つ種族。降つてきたガレキに体を打たれ炎に焼かれたモンスターは、安全圏へ逃げ出た途端、待ち構えていた団員の剣によつて胸を突き刺された。

なにが起きたのかを理解する前に、彼は絶命する。

それが口火となり、炎と煙りが舞うアジトから次々と『モンスター』が吐き出されていった。

さしもの彼らとはいえ、混乱しているところを数人がかりで攻められればひとたまりもなかつた。紫色の血が吹き、死体がどんどん

と転がつていいく。

これまでの怒り。殺された仲間たちの仇。村を守ろうという決意。それらを胸に、団員たちは一心不乱に武器を振り回す。

あれほど手強かつた敵が、今はとてもなく弱く思えた。勝てる。団員たちの心にそんな気持ちが芽生えた頃。

戦況に変化が現れた。

『モンスター』たちの断末魔にまぎれて、彼らのものではない……人間たちのうめき声が混ざり始めたのだ。

優勢と思われていた形勢が、いつのまにか膠着していた。

理由は明快。奇襲開始から一拍が経ち、『モンスター』たちの混乱が薄れきてしまっているのだ。

状況を把握し始めている。

それに加えて、人間ごときが自分たちに歯向かつてきている、という憤怒が彼らの心を激しく燃え上がらせていた。

ドート団長に誤算があったとしたら、それは、『モンスター』たちの数が思つていたよりも多かったということだけであろう。

倒される仲間を目にして逆に闘志をたぎらせながら、エリスは果敢に攻め立てていた。

「人間のっ！ それも女がつ！ 生意気につ！」

『モンスター』は吠えながら、上段から斧を振り下ろす。エリスは剣をかざし、それを頭の上で受け止めた。

が、やはり力負けする。上から押さえつける斧に足腰が沈みかけた。「生意気かどうかその目でしつかり見てろっ！」

『モンスター』に負けないほど叫び返した瞬間、エリスの剣から炎が生み出された。

その炎が、まるで物質化したかのように『モンスター』の斧を持ち上げる。すさまじい力で。すでに剣と斧は触れ合つていなかつた。

「！？」

動搖するモンスターにはかまわず。

「オーバーフレアあつ！」

エリスは、炎をまとった剣を叩き込んだ。

「やつてくれたな、人間風情……！」

ドートの前に怒り心頭で現れたのは、他の者たちと比べてひと回りもふた回りも体の大きいモンスターだった。姿形は似通っているため、それが彼らの『ボス』なのだろうか。

「我らに歯向かつて、タダで済むと思つたか！」

「それはこつちの台詞つてヤツだ！」

ドートは、樹齢うん百年という木を切ろうかといつほど巨大な斧をかまえ直し、一步も引かずに言い返した。

「オレらの村に手え出しどいて、タダで済むと思つてたんじゃねえだろうなあ！ おいつ！」

鬼のような形相。並の人間ならそれだけで泣いて逃げ出してしまいそうな迫力があった。しかし相手は、並でも人間でもない。

「身のほど知らずが！」

モンスターのボス格は吠え散らして、ドートめがけてブロードソードを叩きつける。

完全に防いだはずのドートだったが、勢いと力に押されて吹き飛ばされてしまった。

単純な腕力だけなら団内一のドートでも、さすがに厳しい。モンスター相手では。

「おおおつ！」

モンスターは気合いを叫びながら幅広の剣を振り回していく。それは技術もなにもなく、ただ力任せに振つていいだけのものだった。しかしその『力』が圧倒的なぶん、脅威以外のなにものでもない。なんとかしのいでいるドートを切り崩そうと、剣の動きが激しさを増す。

「フラッシュ・ショージャベリン……！」

そこへ、リフィクが一条の光槍を放つた。

最初の全力攻撃からやや時間が経ち、ほんのわずかだけだが体力が回復したのだ。

微弱な光は上手くドートを避け、『モンスター』だけにヒットする。傷を与えるには至らなかつたが、奴の動きが、麻痺したように鈍くなつた。

それを好機とし、ドートが反撃に転ずる。

だが腐つても鯛。痺れても『モンスター』というわけか、ボス格は麻痺した体でもドートに引けを取らなかつた。

形勢は逆転に至らず、圧倒的な差をわずかに縮めただけに終わつてしまふ。

リフィクも今の術を放つたので精一杯。追撃をかける余力は残つていなかつた。

「いくら小細工を弄しようとも、勝てぬものは勝てぬのだ」
押し負けて尻餅をつぐドートを見下し、『モンスター』が勝ち誇る。

「それは今の世界が物語つていてる！」

一対一、一対二でも、正面からでは勝負にすらならない。人間と『モンスター』とでは、根本的に。

「心得ろ、弱者がつ！」

ドートは傷だらけの体をなんとか起こうとするが、力が足りずにくずおれる。

ダメージを負いすぎていた。そして目の前には、強大悪鬼な敵が立ちはだかつている。

火を見るより明らかな絶体絶命な状況。

だがドートの顔には、觀念や諦観といった感情はまったく浮かんでいなかつた。むしろ逆。余裕の笑みさえ見受けられる。

「……人間の考えることはよくわからんな」

『モンスター』は興を失したように吐き捨てて、右手に持つたブ

ロードソードを大きく振りかぶった。

一巻の終わり……。

もはや見ていられないとリフィクが目をそらした、その時。

『モンスター』の苦悶の叫びが耳に飛び込んできた。

「！？」

なにが……とリフィクは慌てて視線を戻す。
すると狼に似たモンスター、その片目に一本の矢が突き刺さつて
いた。

流れ矢が、ではない。その証拠に、一射三射と二桁にも及ぶ矢が
一斉に『モンスター』へと殺到する。

リフィクは振り向く。そこに、他の場所で戦っていた数人の団員
が弓を手に駆けつけてきていた。

ドートの援護をしに。その中にはレクトの姿もあった。

「オーバーフレア！」

そして横手から飛び出したエリスが、ボス格のロードソードを
持つ腕をばつさりとぶつた斬つた。岩場に紫色の血が飛散する。

「なんだ、これはっ……！？」

ボス格は動搖を隠し切れずに、残つたほつの目だけで自分の周囲
を見渡した。

馳せ参じたのは彼らだけではない。戦いに赴いた自警団の団員、
そのほとんどが集い『モンスター』のボス格を取り囲んでいた。

「奴らはっ……奴らはなにをやつている！？」

誰へ向けてでもなく怒りをぶつけた『モンスター』へ、

「残つてんのはてめえだけだよ

言い放つたのはエリスだつた。

「あたしらにたたつ斬られたかシッポ巻いて逃げ出したか、どっち
にしろ残りはてめえひとりだ」

「なにを、バカなことを……！」

ボス格の頭の中にあるのは、恐らく信じられないという思いだけ
であろう。

「我ら『モンスター』が人間ごとに出し抜かれるなど……！」
口ではそう言っているが、認めざるを得ない状況である。これでは。

深手を負つた自分、それを取り囲む二十人弱の人間たち。仲間が残つているなら、こんな状況にはなつていなかつ。それは明白。言つまでもなく。

「そんなことが、あつてはならない！」

「あるんだよつ！！」

『モンスター』は一番手近にいたエリスを片腕の爪で引き裂こうと地を蹴つたが、所詮は迷いのある動き。

「あたしらをここまで怒らしやあ当然つ！」

エリスはそれをたやすく剣で防いだ。

「あるつ！！」

さすがにパワー負けして弾き飛ばされる彼女だつたが、それが合図となつたかのように、取り巻く団員たちが一丸となつて攻めかかつた。

荒野の岩場に響き渡るのは、肉を斬り裂く音と奇怪な断末魔。

ドートは仰向けになつたまま空を見上げ、

「言つただる。オレたちの村に手を出して、タダで済むはずねえつて」

小さくも猛々しい声で言い捨てた。

「オレらの怒り……殺されて、食われてつた連中の恨み……人間の意地つてヤツを」

彼の瞳に映るのは、命を奪われた村の人々と、志なかばで敗れていつた自警団員たちの顔。そのひとりひとりを、鮮明に思い浮かべていた。

「思い知りやがれつ……！」

「ブレッシング・ファイアネイラ！」

祝いの時の決まり文句をドート団長が高らかに言い上げ、歓喜の宴は始められた。

村で唯一の食堂兼酒場。そこに自警団の面々はおろか村人のほとんどが会し、『モンスター』を討ち取った喜びをわかつ合っていた。寿司詰め状態ではあるがひとつずつ店舗に全村民が収まってしまう辺りに、この『ファイアネイラ』の村の小ささがよくわかる。

朝の奇襲戦。かろうじて勝利を手にしたもの、自警団は八人の犠牲者を出してしまった。

村へ凱旋し簡単な治療を済ませたあと、団の皆はまず仲間の弔いを優先した。疲労した体もなんのその、墓をこしらえ丁重に仲間たちの遺体を葬送する。

尊い犠牲は出てしまつたが、とにかくこれでこの村は救われたのだ。もう『モンスター』たちがいつやつてくるのかと怯えなくともよくなつた。

文字通り命を賭して村を守つた故人たちの分までと、村人たちは盛大に勝利と平和とを祝い合つた。

しかし、他の者たちのように手放しで喜べない者がひとりいた。今回の功労者である旅人、リフィク・セントランである。

「いやあ、参つた。明日から仕事なくなつちまうなー！」

団員のひとりが、酒瓶を抱えながら上機嫌に軽口を叩いた。そこ

ここから、それに合わせた笑い声や合いの手がひとつと上がる。

「……と言つても、完全に……心からの安心はできませんが」と、そんな時。水を差すようで申し訳ないといった様子で、リフィクがおぞおぞと口を開いた。

盛り上がった店内でその声を耳に入れたのは、周囲にいたごく数人だけであったが。

「……どうじう意味です？」

隣席の青年、レクト・レイドが不審に思つて聞き返す。村を襲つていた『モンスター』たちはすべて撃退した。たしかに生き残りはあるかもしれないが、大した数ではないだろつに、と。

「たしかに、『彼ら』はなんとかやつつけることができましたが……また他の『モンスター』がやつてくる可能性も」

リフィクは深刻な面持ちで言葉を続ける。

「だから、これで万事平和といつわけには……」

「他の……！？」

それを聞いて、レクトは目を見開いて絶句した。

リフィクの言葉は伝言ゲームのようにしてまたたく間に他の者たちへ広がり、店内を別の意味で騒然とさせる。

それも無理からぬことだらつ。決死の覚悟で挑み、さうにリフィクの助力があつてなおよつやく勝てた相手だ。

そんな相手がまたやつてくるかもしれないと聞かされたのだから。

「おい、お兄ちゃんよ」

ざわめきを代表するように、ドートが口を開いた。

「どうじうこつた。あいつらの仲間がまだいるつてのか？」

その疑問を耳にし、リフィクは薄々感づいていたことに確信を持つた。彼らは知らないのだ。『モンスター』と呼ばれる異形の強者が、世界中にはびこつていることを。そしてこの地域だけでなく、世界中の人間たちが支配されていることを。

それらを伝えると、さすがのドートも驚きを隠し切れない様子だつた。

命からがら倒した者たちが、全体のほんの一部でしかない。同じような手合いがまだまだわんさかといふともなれば、浮かれていた頭も冷静になつてしまふというものだ。

さつきまでの騒ぎはナリを潜め、店内は重苦しい空気を充満させ

つつある。

そんなシリアルスめいた雰囲気を打ち破つたのは、

「ならばあたしがやるつー！」

という威勢の良い少女の声であつた。

「他の誰でもねえつ、このエリス・ホールがやるしかあるまいつー！」

エリスはテープルの上に飛び乗り、周囲の人間を見渡して宣言した。

「その『モンスター』つて奴らがそこら中にいるなら、あたしが行つて根こそぎやつつけてきてやるよー。」「

大言壯語に、村人たちから「おおつー」という声が上がる。

「無理ですよ、そんな……危険つーそれに、いっぱいいるんですよー？」

すかさずリフィクが制止した。

「それがひいては村を守ることにもなるー。」

「聞いてくださいつー！」

数の話をするなら『いっぱい』といつ葉では済まされないほど無数にいるのだが。

そしてなにより、『モンスター』を相手に渡り合つていくつもりでいるのだろうか。すぐに死ぬ。そんな無謀さでは。

「いっぱいいるのか……じゃあ親玉だ！ 奴らにだつてこらんだろ？ そういうのは」

エリスはリフィクへと振り向き、矛先を変えた。

「それは……たしかに、『キング』と呼ばれる存在がいるとは聞いたことがあります……」

それでも質問には答えてしまつリフィクである。エリスは、我が意を得たりと歯を見せつけた。

「ならその『キング』とやらをぶつ倒しに行く！ そりやあとは鳥合の衆だ。奴らだって、自分の親玉を倒した奴には迂闊に手を出せなくなるだろ」

「ええつ！？ そつ………！？」

リフィクは圧倒される。

たしかに理屈としてはそうだが、それは屁理屈にすらなつていない。現実味が伴っていないのだ。

絵に描いたパンである。実現するはずがない。

「よし、行つてこい！」

が、しかし。無茶としか思えないエリスの提案を、ドートは立ち上がつて賛同した。

「村のことはオレたちに任せとけ、お前は『キング』とやらの首を取つてこい！ 言い出したんなら意地でもな！」

荒々しい激励に、シリアスめいた空気が吹き飛ばされていく。それが波紋するように団員や村人たちが「ぞつてエリスを応援し始めた。

「どうして励ますんですか？ 止めてくださいよー！」

リフィクはあたふたとしてドートに口答えた。彼らは『モンスター』がどういうものか、本当は理解していないのではないだろうか。『おいお兄ちやんよ、オレの前で『ハゲが増す』たあ言つてくれるじゃねえか』

「言つてませんつ……断じてつ……！」

リフィクは弁解しながら、ドートの寂しい頭に無意識に視線をやつた。

「まあたしかに。あの化け物共の、ましてや親玉に挑もうなんてのは無茶な話かもしねえ」

ドートは落ち着いた様子でリフィクをなだめていく。

「けどな、そういう無茶も、髪型を色々変えて楽しむのも、若いうちにしかできねえことだ。やれることがあんなりやつときやいい。やれなくなつてから後悔するよつはな」

「仰りたいことはわかりますが……」

リフィクはやはり胸に落ちない表情で、ドートの寂しい頭に無意識に視線をやつた。

「それにエリス・エーツェルってのは、できもしないことと言う女じゃねえ。オレはあいつを信じるぜ」

自信満々に断言してみせるドート団長。

が、信じるだけで万事うまくいくなら誰も苦労はしない。そんな現実的な考えを抱きながら、リフィクはテーブルの上で意気天を突いている彼女を困惑の目で見つめた。

翌日。村の入り口に、大多数の村民が集結していた。

昨朝と違うところと言えば、自警団以外の面々もいることとその大半が見送りであるということくらいであろう。

旅支度を整えたエリスと、そしてレクト・レイドが皆と別れや励ましの言葉を交わしていた。あのあのの話で、どうやら彼女らふたりで行くことになったらしい。

数の問題ではないかもしねないが、ふたりといつのはあまりにも心許なかつた。

「本当に行かれてしまうんですか……？」

リフィクは最後の忠告のような気持ちで、不安げにそう尋ねた。

「あたぼうよ。お前、昨日の話聞いてなかつたのか？」

まるで迷いもなく答えるエリス。もはやなにを言つても無駄らしい。

「……わかりました。では、お気を付けて。無事でおられることを祈っています」

リフィクは觀念したように悲しい声を出した。

とはいえ。冷たいことを言つようだが、祈つたところであつさりと命を落としてしまうに違ひない。接していた時間は短くともこれが今生の別れとなると切ないものだ。

ひとりしんみりしているリフィクに向かつて、

「なに他人事みたいなことぬかしてやがる」

エリスが叱りつけるように声を尖らせた。

「……はい？」

「お前も行くんだよ、あたしらと一緒にな」

「えつ……えええーつ！？」

ハトが豆鉄砲ならぬ大砲を食つたような顔をするリフィク。いつたいいつ、なぜ、そんなことになつてしまつたのであるつか。

「ど、どうして……？」

「どうしてもこうしてもあるか。子分がついてくるのは当たり前だらうが。拒否権も決定権もねえよ」

エリスは至極当然とばかりに言い含めた。

「そんなん……！」

リフィクは頭を抱える。あんな、とつさに言つてしまつたたつたのひとことがこんな事態にまで発展するなんて……。

彼女らについて行くといふことは、『モンスター』と戦うということだ。バカげている。命がいくつあっても足りないだらう。そんなことは。

「あなたに同行してもらえるのなら心強い」

せめてものなぐさめか、レクトがフォローするよつに言葉をかけた。

見るからに猪突猛進なエリスと違い、彼はそれなりに理知的な雰囲気をただよわせている。そんな彼がこんな暴挙を黙認し、なおかつ共に行こうとしているのもリフィクから見れば妙な話であった。とはいえ今はそれを言及している余裕はない。

「…………うう…………わかりましたあ。お供します」

リフィクはいじけながらも結局は首を縦に振つた。

なんだかんだで、彼女らの身が心配なのだ。自分がそばにいればそれを助けられるかもしれない。そのために行くのだ。……と、自分に言い訳をしながら。

「あのう……お供はしますから、せめてその子分といふ称号は変更して頂けませんか？」

「あー？ 子分ってのは称号なんかじゃねえよ。お前の生き様だ」

「僕の生き様を勝手に決めないでください……！」

弱々しく反論するリフィクを完全に無視して、

「じゃあみんな、行つてくる！ 親玉をやつつけたら帰つてくるからなーっ！」

エリスは高らかに別れのアイサツを告げた。

香氣にも盛り上がる村人たち。その場でひとり、リフィクだけが

今にも泣き出しそうな表情をしてた。

第一章「斬り裂け！ チリーストラッショ」（1）

輝く青い空の下。豊かに緑あふれる森の中。獣道にも近しい地面の上。そんな風景に包まれながら、三人の人間が歩んでいた。

肩で風を切つて先頭を行くのは、十代の後半ほどの少女、エリス・エーツェルである。

性格を表わしているかのように外側にハネた短髪に、赤いハチマキ。丈の短い肩出しのジャケットに太もも全開のショートパンツという、森を歩くのにこれ以上適さない服装はないだろうと言わんばかりの格好をしていた。

「くそ、またか」

エリスは不意に立ち止まって、面倒そつと自分の左ももに視線を落とした。

赤い線がナナメに走っている。恐らく草の葉で切つてしまつたのだろう。

服装からすると当たり前の結果ではあるが。

「おい、早く治せ」

エリスはふてぶてしい態度で背後へ振り返つた。

後ろを歩いていた若い男、リフイク・セントランは「またですか」と弱々しく不平をこぼした。

パツと見れば聖職者のような彼は、そのゆえんであつたローブとマントを身にまとつてゐる。

旅をしていればだいたいはそんな格好に落ち着くというものだ。マントくらいしていなければ、森や岩場を歩く時にエリスのよつて肌を切つてしまつ。

現在は肩もも、ついでにへそも丸出しな彼女ではあるが、森に入る時はちゃんとマントをつけていたのだ。しかしすぐに「うつとうし」という理由だけで脱ぎ捨ててしまい、いちいち草で肌を切り、

今に至る。

「エーツェルさん、僕のこと傷薬かなにかと勘違いされてませんか？」

リフィクは頬をふくらませながらも従順に、しゃがみ込んでエリスのものに手をかざした。

「ヒーリングシェア」

リフィクの手が光を帯びると、瞬時にエリスのすり傷が消えていた。彼が使った『治癒術』によつて。

「いや、ちゃんと『便利な奴』だと思つてゐよ。子分にしてやつた甲斐がちつたあるつてもんだ」

「……」

眉をひそめるリフィクをもつ用無しだと言外に無視して、エリスは再び歩き出した。

しんがりをつとめている、彼女と同年代の青年レクト・レイドは、幼なじみの相変わらずの横柄さに呆れるようにため息をついた。ちなみに彼は、自分とエリスとふたりぶんの旅荷物を持っている。エリスは当初リフィクに持たせていたのだが、線の細いリフィクには文字通り荷が重いと気遣い、レクトが譲り受けたのだ。

「おおっ！ 湖だつ！」

しばらく歩んだのち、エリスが突然はしゃいだ声を上げる。

鬱蒼とした木々が開けたすぐ先で、大きな湖が太陽光を反射してまばゆいばかりに輝いていた。

「きれいですねー」

リフィクが湖面まで寄つて、感嘆する。

澄んだ水は、泳ぐ魚や湖底までも鮮やかに映し出していた。驚異的清水。これなら飲み水としても汲んでいいけるだろつ。

「渡りに船だな。ちょうど水浴びでもしたいと思つてたところだ」

エリスは上機嫌にそう言いながら、いきなり着てゐる衣服をするりと脱ぎ出した。

「うつ、えつ、Hーツェルさんつ！？ なにやつてるんですかつ！？」

リフィクはすつとんきょううな声を上げ、慌てて赤くなつた顔をそっぽへ向ける。

いくら森の中とはいえ大胆すぎるだろつ。それも若い男の前だといつのに。

「なつて、だから浴びるんだよ、水を。人が言つたこと聞いてろよ」

しかしエリスはなんの抵抗もない様子であつといつまに一絲まとわぬ姿になり、水面輝く湖へ勢いよくダイブした。

高い水柱が上がる。

「ふはつ、気持ちいいーつ！」

そして顔を出し、満足げに歓喜の声を弾けさせた。

「……」

それとは対照的に、うつむいたまま硬直しているリフィク。

どうしていいものか……具体的に言つなら、見てしまつてもいいのか悪いのか、心の中で葛藤しているのだ。ああも大胆になられると逆に戸惑つてしまつというものだ。大抵の男ならば。

「あまり、お気になさらず」

口添えるようにレクトが言い開いた。

「小さい頃から自警団……男ばかりのところで育つたせいか、どうもそういう意識が薄いよつで」

「はあ……」

レクトは淡々とした様子で、エリスが脱ぎ捨てた衣服を拾い集める。そしてそれを、荷物から取り出したキレイな布と共に一ヶ所にまとめて置いた。

たしかに環境によつて性格が左右されることもあるうが、環境だけでああ育つとは考えがたい。生来の気質も深く関係しているのではないだろうか。

むしろ薄いのは羞恥心である。

「気にするなというのは、苦行です……」

リフィクは地面を見たまま、素直に白状した。

家族同然のように育ったレクトは別としても、若い女が裸でいるのを無心で済ませられる男はいない。特定の相手もいなくその手の経験も浅いリフィクならば、なおのこと。

それでもなんとか雑念を振り払い、リフィクは草木あふれる森の中へと踵を返した。

水浴びを堪能したエリスは、体を拭くためにとレクトが置いた布をなにかで一杯にして、ふたりの前に姿を見せた。

湖畔から一步森に入つた、やや広がつた場所。リフィクとレクトは荷物と腰を落ち着け、なにやら熱心に話し込んでいる様子だつた。エリスは特にかまわず、草の上にあぐらをかいて包んだ布を広げる。その中には、活きの良さそうな魚が十数匹ほど収まつていた。

「……素手で捕つてきましたか？」

リフィクが思わず問いかけた。釣りざおや網は持つていないし、こしらえられるほど時間は経つていなはずだ。

「あたしにかかりやあこんなもんよ」

エリスはあつさりとうなずいて、レクトに預けておいた荷物から自分の剣を引っ張り出す。

そして地面に無造作に転がした魚たちめがけて、

「オーバーフレア！」

白濛の『炎の剣技』をぶちかまし、生魚を一瞬のうちに焼き魚へと変えてしまった。

やや焦げていたが。

エリスは剣を戻してナイフに持ち替え、フォーク代わりに魚にぶつ刺してそのままかぶりついた。

「……うまくねえなあ」

などとこう文句もこぼしつつ。

「なに話してたんだ？」

「『魔術』について聞いていた」

耳なぐさみに尋ねたエリスに、レクトが柔らかな口調でそう答えた。そして自然な振る舞いでエリスの対面へ腰を下ろし、同じよう にナイフを持つて焦げ魚に手を伸ばす。

「はー。あたしにも聞かせるよ」

そんなレクトを黙認して、エリスは横目でリフィクを見やつた。

「あ、はい。では、最初から……」

促されて、リフィクはふたりの近くまで寄り切り出し始めた。

「俗に言われる『魔術』というのはですね、自然界に住まう『精霊』の力を借りて行うものなのです」

「もつとわかるように言えよ」

が、いきなりエリスから野次が飛んでくる。

「い、今のを理解して頂けないと話ができないのですが……」

「気にせず。続けてください」

困り顔のリフィクへ、すかさずレクトのフォローが入れられた。リフィクは「では……」と気を取り直す。

「たとえば、風の精霊、火の精霊、水の精霊。そういうしたものと心を通わし、祈りを捧げることによって力を借り受けることができるのです」

「どこにいるんだよ？ その精霊つて奴は？」

「ど、どこと言われましても……どこにでもおられます」

その時。心地良い風がふわりと吹き抜けた。

「あ、ほら」

たじろいでいたリフィクだが、良い糸口を見つけたように頭上を仰ぎ見た。

「いつして風の吹くところには、必ず風の精霊様がおられるのですよ

「……あー？」

が、しかし。エリスはまったく腑に落ちないと言わんばかりの様

子で顔をしかめた。

「何人くらいいるんだよ？」

「な、何人とかそういうアレではなくて……とにかく、我々の周りには必ず存在しているものなんですね」

「じゃあ連れてこいよ」

「つれつ……そんなん……」

リフィクはなにやら泣き声になっていた。どう説明すれば伝わるのか。

これではまるで、チンピラの妙な因縁をふつかけられているのと大差ない。

「概念的なものだよ」

と。見るに見かねてレクトが助け船を出した。

「たとえば『神』のような、無形物。見たり触つたりではなく、存在しているという考え方 자체に意味があるんだ」

「そ、そうです。その通り……！」

「なら結局いねえんじゃねえか。聞いて損した」

エリスは言葉と共に、歯に挟まった小骨をペいつと吐き捨てた。はしたない。

「……」

子供のような不満顔のリフィクをよそに、
「そういう御託はいいからよ、どうすりや『魔術』が使えんのかきつぱりさくつと教えるよ」

エリスはふてぶてしく言い放った。

決して教えてもらう人間の態度ではないが、リフィクはもはや反論する気力も失っていた。

「……教えるもなにも、エーチェルさんはもう使えるじゃないですか」

ぼそりと呟く。エリスとレクトは、そろつて意外そこに眉を持ち上げた。

「ほら、あの、剣から火が出る……あれはちゃんとした『魔術』で

すよ。それも、普通に使うよりもひとつと技術が必要な
「はー、そりゃ知らなかつた」
「え、知らなかつたつて……じゃあどうせひとつ使えるよつになつた
んですか?」

今度はリフィクが意外そうな顔をする番だつた。『魔術』を会得
するといつのは、それなりに修練が必要なものなのだが。
が、エリスはあつけらかんとして答えた。

「なんとなく」
「なつ、なんとなくつ!?」
「気付いたら」
「気付いたらつ!?」
「使えた」
「無意識つ!?」
驚くリフィクの横で、
「たしかに。よく考えると不可思議な技だ、あれは。見慣れてしま
つて疑問にも思わなかつたが」
とレクトまでもがエリスようなことを言い出し始めた。
常識からズレすぎている。リフィクは、なぜだか頭が痛いような
気がしてならなかつた。

第一章（2）

そこからおおよそ一里進んだ頃。三人はようやく人里とおぼしきところにたどりついた。

深い森にまぎれるように並ぶ、レンガ造りの家々。村の規模はさやかでこじんまりとしているものの、それでもエリスらの故郷『ファニアイラ』よりは大きいだろう。

まず目に入つたのは、倒壊した家屋だった。

その奥の家も、ボロボロな状態。右の家も左の家も、もれなく穴が開いていたり屋根がなくなっていたりと、無惨な様子で佇んでいた。

見渡すかぎり、村全体が同じような有り様となつていて。

それは恐らく昨日今日壊れたものではないのだろう。しかし、廃村というわけでもないらしい。その証拠に、ぽつりぽつりとではあるが村人たちの姿が見受けられた。

「……なあ。直さねえの？」

近くでクワの束を運んでいた青年へ、エリスがぶしつけにもその声をかけた。家やなんかを、と。

青年は足を止め、元氣のない顔を振り向かせた。

「直したって無駄だよ。どうせすぐ、また奴らに壊される」

「奴ら？」

「決まってるだろ」

青年は躊躇みするような目で三人を眺めたあと、興味を失つたようになにか歩き出した。

「『モンスター』だよ」

という言葉を残して。

エリスは表情を刃のように尖らせて、改めて村の景色を見回した。

破壊の跡。強奪の跡。蹂躪、殺戮、暴虐の跡。爪痕と傷痕にまみれた名も知らぬ村が、そこにある。

だが知らぬでは済まされないので。もし『自警団』がなければ、故郷フュニアネイラもこうなっていた。守るべき人間がいなかつたらば。

他人事では済まされない。

視界に入る村人たちの顔にも、先ほどの青年と同じような疲れと絶望が色濃くにじみ出していた。満身創痍な心根が表れている。

「……素通りできねえなあ」

エリスは拳を握つて、力強く宣言した。

「『モンスター』が近くにいるなら、片づぱしから倒す。根こそぎ！」

まのあたりにして、真の意味で理解したのだ。世界にはびこる『モンスター』たち。その所業。傍若無人さを。

「村の連中なら知ってるだろ、奴らのねぐらがどこにあんのか。そいつを聞き出して……」

「や、やめましょ、よ」

と、まるで水を差すようにリフィクが口を挟んだ。

「そういう危険な行いは」

エリスは、剣先のような視線をリフィクへ向ける。

「あー！？」

「た、たしかに無惨なことに違いありませんが、恐らく、さしあたつての危機はないはずです。首を突っ込む必要は……」

「そういう問題じゃねえんだよ！ てめえの頭ん中には、脳みその代わりに綿でも詰まつてんのかつ！」

今にも殴りかからん勢いで詰め寄るエリス。身長はリフィクのほうが高いため自然と見上げる格好になるが、それでも迫力では完全に圧倒していた。

「あたしらは奴らのトップをぶつ飛ばしに行こうつづってんだ！」

そのあたしがつ！ このエリス・エーシェルが、どうして奴らの下

つぱー」とき相手に尻に帆をかけなきゃならねえんだよー。」「下つぱと決まったわけでは……」

「言い訳すんなっ！」

「言い訳ではない。

「『モンスター』が田の前にいるつてんなら叩く！ ただそれだけだろうがっ！ 簡単っ！ 明快っ！ 小難しい御託はいらねえんだよー！」

言つていることはさておき気迫に押され、リフィクは黙らざるを得なくなつてしまつた。舌戦では勝てる気がしない。かと言つて力ずくではもつと勝ち目がないだろうが。

リフィクは助けを求めて、静観していたレクトへ視線を送つた。

「俺も、エリスと同意見です」

が、あつさり裏切られる。

「そんなん、レイドさんまでつ……」

リフィクはわかっていないのだ。

大人しやかに見えるレクト・レイドではあるが、彼も立派に『フイアネイラ自警団』の一員なのである。彼らとたがわざ、『モンスター』に対する憤りや篤い思いを胸のうちに秘めているということを。

「この惨状が『モンスター』の手によつてなされたものなら、到底見過ごすことはできません」

「これで一対一だ。まつ、子分と弟分にはハナつから投票権なんてねえけどな」

エリスは機嫌をやや戻して、しかし田つきは鋭いままで荒らされた村を再び見た。

明日は我が身。いつかファイアネイラがこんな風になつてしまつ日が来るかもしないのだ。今立ち向かつて行けないものが、土壇場で立ち向かつて行けるわけがない。

初志貫徹。もし姿勢を曲げたら、その瞬間にもう元には戻れなくなる。ならば曲げなければいいのだ。一貫して。志を。

「な、なら、せめて……」

「有象無象共つ！ エリス・エーツェルの行く先、阻めるもんなら
阻んでみろーつ！」

リフィクの提案を聞こうともせず、エリスは誰に向けてでもなく
高らかに名乗りを上げた。

横目に見る村人たちの目には、さぞや奇天烈な人間に映っている
ことだろう。

なにせ長く共にいるレクトでさえもそう思つて居るのだから。

「おや。旅のかたとはめずらしい」

日陰のベンチに座る高齢の男性が、物腰柔らかにそう口を開いた。
村の奥に位置する、これまたレンガ造りの集会所らしき建物。そ
の入り口脇に、丸太をそのまま半分に切つただけのベンチがぽつん
と設けられていた。

「あいにくご覧の通りなので、たいしたもてなしもできませんが」

「いえ、そんな」

老人の律儀な応対に、条件反射的に恐縮してしまうリフィク。

エリスは老人の隣にどっかりと座り込み、

「この村を荒らして居る奴らいるだろ。あいつら、どっから来てるか
知らねえ？」

とアイサツもそぞろにぶしつけに質問を投げつけた。

立つて居るふたり……取り分けレクトが不平そうな顔をしたが、
注意を口に出す前に老人が言葉をもらした。

「あのおぞましい者たちのことですか……」

その表情が暗いのは、日陰の下にいるせいだけではあるまい。
「残念ながら、どこからやつて来るのかは私には皆目」

「やつぱりな。こんなくたびれたジジイが知つて居るわけねえか
ストレートに失礼極まりない言葉を吐くエリス。

「いいかげんにしないか」

さすがに今度はレクトが鋭くクギを刺した。慎め、と。

が、しかし。

「はつはつ。よからう」

罵声を浴びせられたはずの老人が、愛想ではない笑いを浮かべて逆にレクトのほうをなだめ始める。

「人間、年を取ると自分の言いたいことも言わずに迎合ばかりしてしまうもの。このお嬢さんくらい素直なほうが私は好きだね」そして微笑みをたたえた顔をエリスへとかたむけた。

「なんだよ、話がわかるジイちゃんじゃねえかよ」

年齢を重ねるとそのぶんだけ寛大な心が身につくのだろうか。小首をかしげていいのか感心していいのかよくわからず、レクトは眉をひそめて口をつぐんだ。

そんな彼へ、

「バー カバー カ」

エリスの筋違ひな反撃がお見舞いされた。

「それにしても、なんだかずいぶんと……忙しそうですね、この村の方々は」

腰をかがめて目線を合わせ、リフィクが老人に世間話を持ちかけた。

口調が一瞬だけたどたどしくなつてしまつたのは、口に出す言葉を選んでいたからだ。この老人が好む素直な言い方をするなら、さしずめ『無愛想で冷たいですよね』といつたところであろう。村の惨状を見るに少しは心がすさんでしまうのも無理はないのだが、いくらなんでも取り付く島がなさすぎるのだ。

揃いも揃つてなにやら農作業や狩りの用意に没頭し話も聞いてくれない。

だからこうして、のほほんとしていたこの老人くらいしか相手をしてもらえないかったのだ。

「私にはわからないが。皆がそうしている以上、近いうちにまたや

つて来るといふことなのでしそう

老人は眉根を寄せるように細い皿をさうじ細めて、どこか遠くを見やる。

「あの異形の者たちが」

「『モンスター』！？」

エリスはベンチから飛び上がるよう腰を浮かし、語調を高めた。

「来るつてのか！？ 奴らが。近いうちに！？」

「……食料か『人間』をよこせと、脅しに来るのですよ。だから皆ああして、必死に多くの食料を集めているのでしょうか。でなければ村人が食料になる。普段はやさしく穏やかな方々ですから」

老人は悲しそうな声で淡々と告げる。年齢を重ねすぎて体が弱り、困っている皆に力を貸すことができない。そんな悔しさが表情の奥底にかいま見えた。

「食料……？」

引っかかるものがあつたのか、ぼそりと呟くレクト。

「……よくある話ですね」

その横で、リフィクが同情するようなため息をついた。

たしかに『モンスター』は人間の肉を好むが、それしか口にできないわけではない。基本的には雑食だ。

故に人間を食べてしまつて数を減らすよりは、脅迫して奴隸同然に働かせるほうが結果的には効率がいい。言うことを聞かないようならその時に食べてしまえばいいだけなのだから。

「頭の良い『モンスター』は、だいたいそうしています。僕も何度か目にしてきました」

リフィクの説明を受け、合点がいったとレクトと静かにつなずいた。

「奴らのほうからノコノコやって来るつてんなら話が早い。ふん捕まえてねぐらの場所を吐かせてやる」

エリスは意氣衝天と拳を握る。

「そのあとは一網打尽だ！」

「網が小さすぎる」

そこへ、レクトが冷静な指摘を突っ込んだ。

「奴らの総数はわからないが、俺たちだけでは確実に戦力が足りない。協力者を集めよう」

「そ、そうですよね。さすがに三人だけというわけには……」

同意するリフィク。村を発つ時にも思ったのだが、あまり自警団の戦力を減らすわけにもいかないかと飲み込んだのだ。

「アホか。一騎当千のあたしがいりやあ問題ないだろ。こちとら天下無双のエリス・エーツェル様だぞ」

その自信はなにを根拠としているのか、エリスは外聞も臆面もなく豪語した。相変わらずのビッグマウスっぷりである。

と、そんな時。

「失礼」

不意に、明後日の方向から若い男性の声が投げかけられた。

「立ち聞くつもりはありませんでしたが」

振り返った先には、いかにも旅姿ないで立ちの一組の男女が立っていた。

どちらも若く、リフィクと同じ二十代のながばほだらう。しかし彼とは違い、ただよつている落ち着きは年齢相応のものだ。

「なにやら、『モンスター』をどうこうすると聞こえましたの

で。つい

男性は高貴じみた態度で言葉を継ぎ、三人プラス老人に歩み寄つた。その背後にピタリとつくよつに女性も続く。

エリスの目を引いたのは、どちらかといえばその女性のほうだった。

友好的な男性とは正反対な、人形のように無感情な顔。しつとりと黒く長い髪。全身を覆うありふれたマントの上からでも、腰に剣を携えているのが見て取れた。

エリスが感じた最たるものは、彼女が放つ雰囲気である。

立つているだけだというのに、思わずぞっとしてしまうほどの気配がある。まるで抜き身の剣が服を着ているよつな、そんな妖しささえ感じられた。

「よければ、話を聞かせて頂けませんか？」

それに比べると、男性は至つて普通である。どこか飄々としているところが特徴かと言えばそうかもしれないが、これといって変わつたところはない。

もしくはこの女性の陰に隠れてしまつているだけなのかもしだいが。

「『話』といつまほだそれたものはありませんが」

ふたり組をにらむよつて見ているエリスの手前で、レクトが答える。

「この村を脅かしている『モンスター』を、どう駆逐するか。それを相談していただけです」

はたで聞いていた老人が、「穏やかではないね」と言いたげに眉をひそめた。

「なるほど。そういうことならば、我々が力を貸しましょう」

男性がさらりと返す。

「ええーっ！」

真っ先に間の抜けた声を上げたのは、リフィクだった。というより驚いているのは彼だけだった。

「ほ、本気なんですか？ 相手は『モンスター』ですよ？ か、考え方直したほうが……」

三人だけでは心もとないとかなんとかぬかしていたくせにこの言いようである。こいつは。

「自己紹介が遅れました。私の名はハーニス。そして彼女はリュシール。我らは、『モンスター・キング』を葬るための旅をしています」不敵に告げる男性に、今度はエリスとレクトも驚きを見せた。自分たちと同じく、『キング』を倒すという目的を持っている。そのことに対する。

リフィクは口を半開きにしたまま絶句していた。

「故に『モンスター』を憎む者でもあります。この気持ちはまさしく本気。嘘偽りはありません」

ハーニス。そう名乗った男性は、物怖じしない口調で言葉を並べていく。

「『モンスター』がいるのなら、放つてはおけない。我々とあなた方、心は同じはずです。ならば手を組みましょう。お互いのためにも」

「そういうことなら、こちらからもおねがいします」
融和的に、レクトが応じた。ちょうど手助けを必要としていた、と。

「足手まといならいらぬえからな」

話がまとまりかけたところで、エリスが口を挟む。そういう口を叩きたくしようがない性分なのだ。

ベンチにふんぞりかえって、ふたりの姿をにらみ上げる。

ハーニスはにこやかに、

「ご期待には添えられますよ、必ず。『彼女』ならばね」

そして妙に自信たっぷりに、そう断言してみせた。

彼の後ろにいる彼女。リュシールは、やはり最後まで表情を微動だにしなかった。

その後、特に発展もないまま口は暮れてしまつ。

情報や加勢どころか雨風をしのげる場所すら貸し与えてももらえず、エリスたちは仕方なく村の外れで野宿と相なつっていた。

人里に来ていながら野外で寝泊まりとは、なんとも寂しいことである。

「あなた方も『モンスター・キング』を討つべく?」

興味深げに、ハーニスが尋ね返した。

一時の同盟結託のよしみか、彼らも共に夜を明かそうといふことになつたのだ。

「なんなら子分にしてやつてもいいぞ。ふたりまとめて

「面白い人だ」

エリスの押しつけがましい勧誘に、鼻を鳴らすように笑うハーニス。冗談だと思ったのだろう。エリスは思いつきり本気であつたのだが。

その隣でリフィクが、「そう答えるべきだったんですね……」と後悔の念を惜しげもなく放出していた。

エリスら三人とハーニス、リュシールを含めた五人は、木々に囲まれた草の上に円になつて腰を落ち着けている。その中央にはたき火があり、さらにその上に多種多様な道具の入つた鍋が乗せられていた。

食材はすべて自分たちで調達したものだ。さすがに村からもひりつ
わけにはいかない。

小動物の肉に、よくわからないキノコに、よくわからない野草に、
よくわからない白っぽいなにか等々が、濁ったスープの中ぐつぐ
つと煮立っている。

ちなみに調理用具はすべてハーニスらの持ち物だ。かさばつたり
重かつたりという理由から、エリスたちはそういうたものは持ち歩
いていない。

「さあ。出来たよ、リュシール」

……最初からではあるのだが。

ハーニスとリュシールは、まるで雪山で遭難してしまったかのよ
うに互いに身を寄せ合ひ……というか、まあ、早い話がイチャイチ
ヤしながらメシを食らっていた。

小鉢に取り分けたスープをスプーンですくつて、ハーニスがふう
ふうと息を吹いて冷まし、リュシールの口に運ぶ。俗に言つ「あー
んする」というヤツだ。どこの俗だかは知ったこっちゃないが。

意外なのは、同じことをリュシールもやり返している点である。
相も変わらず寡黙で人形ヅラのまま、自分のスプーンですくつた
スープをやはり息を吹いて適温まで下げ、ハーニスの口へ持つてい
く。

表情と行動の温度さはすさまじいが、別に強要されているという
ふうでもないようだつた。

遠巻きから見るのなら、なんとも微笑ましいバカツブルである。
そんなふたりを前にしリフィクはなにやら照れて視線を外し、レ
クトは気にしないように平静を装い、エリスは穴が開くほどの勢い
でにらみつけていた。

遠くや視界の外でやつてくれるふんにはかまわないが、目の前で
やられるとたまたまものではない。

とはい、エリスがこれといった文句を吐いていないのは、食し
ている謎のスープがなかなかいける味だったからだ。

なにが入っているのかよくわからないが、とにかくいける。田の前の奇行を含めたとしても。

調理を担当したのはハーニスとリュシールである。食事と寝床と、野営の準備を分担したのだ。

不満はあれどメシがうまけりや文句はない。エリスの中ではそういう基礎理論が成り立っていた。

「どういった理由で『キング』を？」

食事の片手間、ハーニスが問いかける。

体と顔と目はリュシールのほうへ向けられているが、声だけはエリスたちへと向けられていた。

「気に入らねえんだよ。『モンスター』共が」

そのエリスが、吐き捨てるように答える。

「人を食うのも、好き勝手に暴れんのも、でかい顔してのさばつてんのも」

それは修飾をしていない、あまりにも率直な気持ちであった。エリスは理屈ではなく感情に突き動かされて生きている。

「全部が気に入らねえ。鼻持ちならねえ見過ごせねえ、ガマンできねえ耐えられねえ。他の誰にも任せちゃおけねえ。だからやんのさ。このエリス・エーツェルが！」

「故郷の村を守りたいんですよ」

内情をダイレクトにぶちまけたエリスに代わって、レクトがもう少し外側にある理由を説明した。他人にわかりやすい理由、とも言えるものを。

「いつか『モンスター』が襲つてくる可能性があるのなら、もとを絶つのが確実で早い。そう考えて」

それはそれで飛躍した考え方ではあるものの、ハーニスは納得したように「なるほど」ともらした。

「目的は同じくも理由は人それぞれというわけですか。面白いものだね、リュシール」

後半、声が妙に甘くなる。そこだけ彼女に向けられた言葉だった

からなのだろう。

「……あなたたちは、どういふような理由で？」

ふたりを包む空気の外側から、レクトが同じ質問を投げ返した。切り出されたからには気になるものだ。言いようからすると、少なくともエリスたちとは違つてゐるみたいだが。

そこでようやく、ハーニスが目線をそちらによこした。

「世界を変えるために」

やや真剣さを含んだ声色。

そのひとことで、話のスケールがいきなりとんでもなく大きくなつた気がした。

「『モンスター』にも憎しみを抱いていますが、我々はそれ以上にこの世界そのものを憎んでいます」

決して冗談や軽口の類ではない。

エリスとレクトは、思わず聞き入るようにハーニスを注視した。

「世界の担い手である『キング』を討伐することができれば、世界を根底から変えることも可能」

ハーニスの口調からは恒常的な軽さが消え失せていた。真摯な意気が言葉の端にじみ出てきている。

「それが私の本懐であり素懐です。心から望む目的。果たすべき約束とも言えます」

それだけ告げると、ハーニスはため息をつくようにして苦笑つた。

「初対面の方にはあまり言わないのですが」

その声には、それまでの軽妙さが戻つていた。

「あなた方とは、目的を同じくする同志ということです。特別に『微笑んだ表情は柔和そのもの。彼が心を開いた証なのだろうか。隣で密着しているリュシールは、やはり終始無表情でスープを食し続けていた。

「世界を……」

神妙な顔でぼそりといぼしたリフィクの咳きを、耳に入れた者はいない。

『モンスター』が姿を現したのは、一日後のことだつた。森にうずもれるように佇む小さな村。その入り口に三体。薄暗い緑の皮膚は岩のようにゴツゴツとしていて、太い足にやや細い腕。頭部は薄く、異様に突き出した口とアゴから鋭利な歯がキラリと見え、ほぼ両側にまで離れた目が鋭く辺りを見渡している。爬虫類の『ワニ』に近い風貌をした種族だと言えるだらうか。鉄の胴鎧と兜を身につけ、腰に各自得物をぶら下げている。見渡すかぎり、周囲に村人たちは見受けられなかつた。代わりに野菜や肉など大量の食物が納められたカゴが、どうぞ持つて行ってくださいと言わんばかりに置かれている。

それがこの村の住人たちの命の代価だ。村中総手でかき集めた、平穀無事な生活との引き換え券。少なくともこれを納めている限りは、『モンスター』から害をこつむることはなくなるのだろう。とはいへ、その量はあまりにも多い。これほど大量に献上してしまつたら自分たちが食べるぶんはどうなつてしまふのだろうか。いくら森に囲まれている村だとはいえ、そうそう多くは確保できないはずだ。

住民たちに元気がなかつたり妙にイライラしていたのも、もしかしたら充分に物を食べられないせいなのかもしれない。

三体の『モンスター』はそんなことなど微塵も思わぬ様子で、淡々とした食物の入つたカゴへと歩み寄る。人間から見れば大きく思えるそのカゴも、『モンスター』からすれば軽々持ち運べてしまつ程度のものでしかなかつた。

カゴに手が触れるか触れないかという、そんな時。突然。

「おうおうおうおう！　おめえらよう！」

水を打つたように静寂ただよう村に、場違いなほど威勢のいい怒

鳴り声が響き渡つた。

「このあたしの預かり知らねえところで、よくも勝手気ままに横暴やらかしてくれてるなあ！ ええ、おい！」

火を吹く勢いでタンカを切りながら、威風堂々と少女が現れる。「だがそれも今日でおしまいよう！ 他の誰がまかり通そと、このエリス・エーツェルがてめえらまとめて刺し身にしてやるぜ……」すなわち彼女が。

「……なんだ？」

三体の『モンスター』は一様に、呆気に取られた顔でエリスの姿を眺めていた。

まあ、そうだろう。当然そうなる。

しかしエリスが剣を抜いた瞬間に、『モンスター』たちの眼光が鋭くなつた。

得体はわからずとも意図はわかつたからだ。

つまりは敵対者。自分たちに弓を引く者であるということだが。だがわかったからこそ、『モンスター』の目に生まれた緊張感が一瞬にして消え失せていた。たかが人間がなにを吠えているのか、と。

「なあ、ジャヴァ」

『モンスター』のひとりが、エリスなどそつちのけで仲間に声をかける。まるで笑い話でも始めるように。

「人間の女つてのは、どう食うのがうまいんだつたか」

「そりやあ、若けりや若いほど生がいい。それが一番だ」

話を振られた仲間は答えながら、エリスの体を舐めるように見やる。

「まあ、こいつは脂が少なそうだから前菜にもならねえだろうがな」そしてゲラゲラと笑い出す三体たち。

『モンスター・ジョーク』というヤツなのだろうか。なにがどう面白いのかまったくわからない。

が、言葉の内容は明らかにエリスは揶揄したものだ。彼女にヒタ

イに青筋が浮かぶ。

「今のうちだけ笑つてろ、ワニ野郎共つ！」

言葉を完全に吐き終わらない「ひきこ」、エリスは彼らめがけて突撃していた。

「不意打ちにしましょうって言つたのに……！」

そんなエリスの独断専行を遠くから見ながら、リフイクは涙声をもらしていた。いいトシした男が出る声ではないが。

ガレキの山同然の家屋の陰から、ふたつの顔がのぞいている。それがリフイクにレクトだ。

その後ろでハーニスとリューシールが、ほとんど抱き合つて格好で立っている。

「ど、どうしましょう……」

眉のハの字にしたリフイクが、誰に向けてでもなく尋ねた。

「どうもこうも。出て行くしかないでしょ、俺たちも」

答えたのはレクトだ。弱氣でふにゃふにゃなりフイクとは違い、すでに覚悟を決めた目をしている。

不意打ちはもはや意味がない。ならば「こ」はエリスの援護をするのが最善の選択ではないのだろうか。

正面から当たることになつてしまつが、頭数は上回つてこる。勝てる要素はあるということだ。

「我々が足手まといではないと証明するチャンスのようですね」事態に反してどこか冗談っぽく、ハーニスが口を開く。

そしてリューシールの手をそつと取り、その掌にやさしくキスをした。

「頼むよ、リューシール」

猫なで声でささやく。

当の彼女はやはり無表情のまま、彼の瞳を見つめ返していた。

三体の『モンスター』のうち、エリスの相手をしているのは一体だけであった。

残りの二体は少し距離を置き、余興でも楽しむかのように戦闘を見ている。

エリスを完全に見くびっている証拠だ。舐めて、侮り、遊び、見下している。

逆を言えば絶好の勝機ではあるものの、エリスはあと一步のところで攻め切れていなかつた。

体格からしてひと回りもふた回りも大きな相手だ。客観的に見ても、やはりその優劣はいかんともしがたいものがあつた。

『モンスター』が掲げた大斧が、エリスの頭上から振り下ろされる。

それを危ういところで外側へ避け、

「オーバーフレアッ！」

得意技による反撃をうち放つた。握る剣から炎が吹き上がり、そのまま相手へ向かって斬りつける。

しかしながら異様な気配を察知したのか、『モンスター』は巨体に似合わぬスピードで後方へと飛びずさつた。

炎の剣はなにもない空間のみを斬り裂く。

「……惜しい」

エリスは獣のように獰猛な表情で、歯を見せつけて笑つた。今のが当たれば勝つていた……そういう自信に満ちあふれた顔だつた。

「妙なマネを……」

そんな気概が伝わつたのか、対峙していた『モンスター』が警戒心を高めて顔を歪ませる。

彼のみならず、傍観を決め込んでいた仲間たちも顔色を変えていた。エリスを対する認識を改めたのだ。

ただの人間ではなく、厄介なことをする人間であると。

対峙していた『モンスター』が仲間に目配せをする。

それを受け取った仲間たちは武器を構え、エリスを取り囲むべくのつしのつしと歩き出した。

「やつとわかつてきたみたいだな、ワニ野郎共。」のエリス・エーツェルが一筋縄じやあいかねえ相手だつてことが」

エリスは我が意を得たり、と笑つた。自分を見くびつていた奴らを本気にさせてやつたのだ。見返してやつた。自分自身の力で。腕をくで。

「お調子者で大口叩きだとこことはよくわかつたよ」

正面に立つ『モンスター』が、まだまだ余裕をありあまらせた口調で吐き捨てた。

「遊びはこれくらいにしておこひ。そろそろ引き上げ時だからな。ボスがオレたちの帰りを心配しちゃいけねえ」

「下つぱの使いつ走りが、偉そなことぬかしてんじやねえよ」

もはや条件反射的に言い返したエリスを、『モンスター』たちはあからさまに目の色をえてにらみつけた。

図星だつたのかもしれない。本人たちも氣にしている痛いところを突いてしまつたのかもしれない。

だがそんなことをかまうエリス・エーツェルではなかつた。

「やるならとつととやろつぜ。四の五の言つてねえで。問答無用つてヤツだ。あたしの好きな言葉をよ」

登場するなり口上と大見得を切つていたのは誰だつたかはさておき。

言葉が終わつた時、ちょうどエリスを囲む陣形が完成していった。彼女を中心に正三角形を描くように『モンスター』が立つ。このまま同時に攻撃されたらひとたまりもないだろう。わかりやすい窮地である。

しかしそんな状況に置かれて、エリスに悲観的な表情は浮かんでいなかつた。逆に胸は高鳴り、口元は不敵な笑みを作つていて。その様子に、『モンスター』は不可思議なものを感じていた。得体の知れないものに直面してしまつた時のよだな感覚が、頭のどこ

かに芽生えている。

それはエリスに飲まれてしまつたということだ。無意識的ななかが。

「やれるもんならな！」

エリスが自分の力を誇示するように舌なめずりをした、その時。視界の端で、黒い風が吹いた。

次の瞬間、左の後方から奇怪な悲鳴が響く。

弾かれるように振り向くと、エリスを包囲していた『モンスター』の一體からまるで噴水のように紫色の血が噴き上がつていた。

「ジャヴァー！？」

残りの『モンスター』のどちらかが、仲間の名を叫ぶ。恐らく血にまみれた仲間の名前を。

ジャヴァーと呼ばれた『モンスター』は、首筋を一文字に斬り裂かれていた。刀身が黒いロングソードによつて。

『モンスター』の前で腕を振り上げその剣を握っているのは、黒く長い髪に黒い衣服を身につけた、黒ずくめの女だった。

リューシール。彼女である。

彼女は体をひねり、トドメの一撃を叩き込んだ。ロングソードがまるで野菜を切るように、『ジャヴァー』の頭を斬り飛ばす。

頭部は紫の尾を引きながら放物線を描き、体は立つ力を失い崩れるように地面に倒れた。

仲間の『モンスター』が、今度こそ呆気に取られて固まつていた。唖然。あまりに予想外の事態に、脳が働きを止めてしまつたのだ。そこへ、狙いすました矢が放たれる。レクトが射つたものだ。それは風を切り、エリスの正面に立つ『モンスター』の顔面を的確に貫いた。

うめき声がかき鳴らされる。

「オーバーフレアああつ！」

そのスキを見逃さず、エリスが攻め立てた。

炎の剣でひと太刀。『モンスター』の胴を鎧ごとかつさばき、火

だ。たとえ元気な日でも

エリスが目の前の敵を倒した時には、すでにリュシールは残りの一体へと攻めかかっていた。

まさに風のように素早い身のこなしでロングソードを振りかぶる。そしてまったくの無表情のまま。ためらいも情けも感じさせずに、『モンスター』の左腕を肩からバツサリと斬り落とした。

轟く悲鳴。

驚異的な身体能力である。剣の腕前も、恐らくエリスを上回っているだろう。

強い、と認めざるを得ない

またたく間に仲間と片腕を失つた『モンスター』は、今や混乱の境地にあつた。

完全なる弱者としか見ていなかつた人間に、手痛いまでの反撃を食らつてしまつたからだ。

ことの異常さを実感し始め、彼は一寸散にその場から逃げ出した。なき片腕をかばうように必死に走る。

「逃がすかっ！」

それを追いかけようと吠えたエリスの視界に、紫の血にまみれた剣先が飛び込んできた。

「！？」

無意識的に目を見開き息を呑むエリス。リュシールの握るロングソードは、眼前で、まるでそこに見えない壁があるかのようにビタリと寸止められた。

紙一重とはまさしくこのことを言うのだろう。互いに少しでも動いていたら、紫ではなく赤い血が流れ落ちていたに違いない。

そこからひと呼吸、ふた呼吸を置いても、リュシールは剣を下げようとはしなかつた。

エリスを封殺するかの』とく突きつけたま。

「……なんだよ？」

トゲを多分に含んだ声で、エリスが口を開いた。彼女の燃えるような視線とリュシールの凍えるような視線が、火花を散らすまでにかぶつかり合つ。

「逃げられるだろうが。おめおめと。……どかせよ」手負いの『モンスター』は、すでに見えなくなるほど遠ざかっていた。

しかしリュシールはなにも答えない。まるで人形のように表情を変えず、言葉も発さず、鋭利な剣先と視線をエリスに突きつけているだけであった。

「てめえに言つてんだよ、根暗女」

「彼女の悪口はそれくらいに。ブレイジング・ガール」

ひとりで勝手に一触即発状態になつていたエリスをなだめながら、ハーニスが割り込んできた。

その場に彼がやつってきた途端。リュシールはあっさりと剣を引き、空振つて『モンスター』の血を払い腰もとのサヤへと収めた。自分の役目を彼に譲り渡すと言わんばかりに。

エリスの矛先が、自然とハーニスへ移る。

「女の『しつけ』くらいちゃんとつけとけっ！」

「彼女の悪口はそれくらいにと言いましたが」

「奴らをとつつかまえて寝床の場所を吐かせなきゃならねえってのに、みすみす見逃すようなことしゃがつて」

「私の思惑通りですよ」

「あー！？」

『ブレイジング・ガール』といつより『レイジング・ガール』なエリスにもまったく臆することなく、ハーニスは瓢々と言葉を並べていく。

「わざわざ白状されるよりも自分から案内させるより仕向けたほうが楽だと『う』ことです。『う』う風に

ハーニスは地面に目を落とす。つられてエリスも見ると、紫の血痕がところどころに散らばっていた。今々行われていた戦闘の残滓である。

その血だまりが一方向へ、まるで足跡のように伸びているのが見て取れた。先ほどの『モンスター』が逃げて行つた方向へ続いていり。

「……」

エリスは面白くなさそうに顔をしかめた。

「『モンスター』というのは大抵、群れを形成していますからね。不測の事態が起これば必ず根城かボスのところへ逃げ帰る。この血のあとが道しるべになるという算段ですよ」

なにやら得意満面に、ハーニスが説明する。

たしかに、絞め上げて口を割らせるよりは早いかもしれないが。「途中でくたばつたらどうすんだよ?」

道しるべ代わりになるほど血を流しているのだ。アジトにたどりつく前に力尽きてしまうことだってあるだろ?」

しかしハーニスはかぶりを振る。

「あの程度では死にません。『モンスター』ですから。人間と同じと思わないことです。そしてしばらくは血も止まらないでしょう。生かさず殺さず必要量の血を流させる、彼女の手加減の巧妙さを一緒に称賛しましょう」

ハーニスは一方的に言い放ちながらエリスなど眼中にないと言外に表して、凜々しく立つリュシールへと歩み寄つた。

彼女の手をやさしく握り、今度はその甲へ唇をつけた。

「ありがとう、リュシール」

そしてうつとつと、見つめ合つた。

すぐにふたりだけの世界を作つてしまつのは、まあ悪いことではないだろう。仲が良いということは。

ただ時と場合と話の流れは考えて欲しいものである。

「ふざけんなつ!」

自然と無視された形になつたエリスは、ただよう甘つたるい空氣を踏み荒らすように声を大きくする。

「死なねえのは別として、途中で川とかに入られたらどうなんだよ？ 止血とか……なんかとか、血のあとを消されたらよー！」

「そこまで頭が回る連中なら、きっと今頃あなたもこゝに転がつていたことでしょう」

『モンスター』はエリスの力を見誤り、娛樂ついでに返り討ちにしてやろうと考えていた。もしエリスの自信の源を推測し、警戒して最初から三体で対峙していたのなら、リュシールが駆けつける前に勝負がつてしまつていただろう。ハーニスはそう言つてゐるのだ。

「あんだと？」

それは『モンスター』に対する皮肉であつたが、引き合ひに出されたことがエリスの逆鱗を刺激してしまつたようである。

「あんな奴ら、三体だらうが百体だらうが丑じやねえよ！」

「あなたのそういうところ、好きですよ。頼もしい」

ハーニスはのらりくらりと言い抜けながら、戦闘で乱れたリュシールの髪を柔らかな手つきで直していく。

「でも君のほうがもつと好きで、もつと頼もしいよ、マイ・ステディー」

「そういうのは見えないところでやつてろー。濡れごとバカー！」

物言い以前に話のかみ合わなさに元のフラストレーションを募らせていくエリス。

そんなところへ、やや遅れてレクトとリフィクもやつて來た。避雷針に誘われる雷のようだ、エリスのハツ当たりがそちらに向けられる。

「何なまけてたんだよ、てめーらはつー！」

なにもしていないうりフィクはともかく、しつかり『矢による援護を行つたレクトにしてみればいいとばつちりである。

とはいえたそのリフィクも『魔術』を詠唱しているあいだに戦闘が終わつてしまつただけなのが、

「ヒーツェルさん、その……」

言い訳……という様子ではなく、なにやら狼狽しながらリフィクが口を開く。

彼の言葉を継ぐよつこ、ふたりの後ろからこの村の住人たちがぞろぞろと湧いて出てきた。

二十人、三十人はいるだろうか。エリスは彼らへ向き直る。

「おう、礼はいらねえぞ」

「なんていうことをしてくれたんだつ……！」

てつくり感謝のひとつでも返つてくるかと思つてきや、びつやいらもうではなかつた。村人たちはなにやら責め立てるような目でエリスらを見つめている。

「『モンスター』に逆らつよつなことをして……田をつかられたらどうするんだ！」

代表者なのかなんなのか、壯年の男性が先頭に立つてエリスに詰め寄る。

「奴らを怒らせでもしたら、こんな村はひとたまりもない……。よそ者が勝手なことをするな！」

正論、ではある。それを恐れてこの村は『モンスター』に従つてきたのだから。

「どう責任を取るつもりだ！　この村すべての命、その責任がお前に取れるのか？」

ははーん、とエリスは気付く。きっとレクトとリフィクは、先ほどまでこうして彼らにからまれていたのだろう。取りつく島がなさすぎたためにエリスに助けを求めるにきたと、そんなところか。たしかにこういうことはエリスに任せたほうが早い。

「我々はただ平和に暮らしたいだけだ。それを……」

「ねちねちねちねちと、卑屈なことぬかしてんじゃねえーっ！　頭だけじゃなく田までやられてんのかてめーらー！」

レクトの期待を裏切らず、男性の声をせえぎつて怒鳴り返すエリ

ス。

「なつ…」

「よく聞け！」

一切の反論を許さず、たたみかける。

「そんでもつて見る！」

そして地面を指差した。人差し指の先にある『モンスター』の死体。そこに全員の視線が集まつた。

「てめーらがビビつて恐れておののいて、へり下つておべつか使ってご機嫌とつてた『モンスター』つて奴らだ！ やられてるだろうがつ！」

迫力に圧倒されでか、村人たちは息を呑んで言葉を失う。

「今度はあたしを見ろ！」

言われるがままに、集まつた視線がそのままエリス一点へと移動した。

「あたしがヤつたんだよ！ この妖怪変化も裸足で逃げ出すエリス・エーツェルが、てめーらが勝てねえとあきらめた『モンスター』をぶつた斬つた！」

「片方は『彼女』が、ですが」
細かく口をはさむハーニス。

「黙つてろ色情魔！」

あしらうように吐き捨てて、言葉の続きを叫び散らす。

「わかるだろうがつ！ 連中よりあたしのほうが強いつてことが！ その強くてカツコイイあたしが連中をぶつ倒してくるから、てめーらは景気良く祭りでも開いてイイモン食つてろつ！」

献上すべき『モンスター』がいなくなれば、かき集めた食料は村のものとなる。たしかに祭りにしても余るくらいの量はありそうだが。

「以上！ 終了！」

一方的に言い終わると、エリスは脇目も振らずに村の外へと歩き出した。『モンスター』が逃げて行つた方向へと。

あとを追つようレクト、ハーニス、リュシールも続き、

「しつ……失礼します」

最後にリフィクが律儀にも頭を下げ、いそいそとその場を去つて行つた。

騒がしかつた村の入り口付近が、一気に静まりかえる。

残された村人たちはまくし立てられた勢いに負けて言葉を飲み込んでしまつていたが、やがて息を吹き返すように小さな喧騒が生まれ始めた。

くそつ、くそつ、くそつ！

そんな言葉を何度も吐き捨てながら、彼は必死に走っていた。体が重く、視界がかすみ、頭が朦朧としていたが、それでも必死に。

ボスのもとへ急ぐためにと。

……片腕を斬られてしまつたことは、特に問題ではない。自分たちの種族は腕だらうと足だらうと、時間が経てばトカゲのシッポのように再生することができるからだ。痛みもガマンできる。命さえ残つていれば問題はないのだ。

問題なのは、その命を失つてしまつた仲間がいること。簡単な役目のはずだった。

近くにいくつかある小さな村のひとつにいつも通りに行き、食料を奪うだけだ。度重なる力の誇示により、住人たちは抵抗することもなく差し出してくる。それをただ運ぶだけ。

なんならついでに暴れてきてもいい。そんな簡単な、子供でもできる仕事のはずだった。

それを人間ごとに。人間なんかに邪魔をされようとは。仲間がやられようとは！

よりによつて今日。自分が担当のところ、時にこんなことが起きるなんて……！

傷を負わされ、ふたりも仲間を討たれ、おめおめと逃げ帰る自分を見てボスはどうするだらう。

笑うだらうか。怒るだらうか。仕返しに動くだらうか。どれでもいい。とにかく知らせなければならぬのだ。

自分たちをあつたりと倒してしまつた人間が近くにいることとを。

体の重さが限界に達しようとした頃、彼の足によつやく帰るべき我が家が飛び込んできた。

アジトだ。やけに遠く感じた道のりももう少しで終わる。

そう思うと死きかけていた体力も復活してきた。

最後の力を振り絞つて走る速度を上げようとした、その時。

突然、彼の視界が上方へズレた。

転んだわけでもないのに見える景色が上へ向かい、青い空が映る。

そのまま視界は回り、ぐるりと一回転するように天地が逆転し、

自分の後方が見えた。

そこにいたのは、首と片腕がない、自分と同じ種族の奴。そしてそのまま近くで、黒ずくめのあの女が血にまみれた剣を高々と振り上げていた。

……ひどいことを、しゃがる……。

最期にそれを思い、彼の意識はぶつりと途絶えた。

宙を舞つた『モンスター』の首が、草むらの上に落ちる。取り残された体も立つ力を失い、うつ伏せにどさりと倒れた。リュシールを剣を振つて血を払い、サヤへと戻す。一連の動きは、ハーニスでなくても見とれてしまうほどあざやかな所作だった。

「美しいよ、リュシール。まるで女神のようだ」

「容赦なく首をぶつた斬る女神がいるかよ」

エリスのぼやきもなんのその。ことが終わるや否や早速、彼女に歩み寄るハーニス。

「……本当にあれが、『モンスター』の居所なんですか？」

それを阻もうとは考えていなかつたが、それに近いタイミングでレクトが口は挟んだ。

視線はななめ上。木々の中にそびえる石造りの建造物へと向かうれている。

それはまるで砦のようだつた。城壁や門こそないが、近付く者を

すべて迎撃すると、わんばかりの迫力と巨大さに満ちあふれている。

「間違いなく」

ハーニスは迷いなく断言してみせる。

「感じるんですよ。あの中で『う』めく『モンスター』たちの醜悪な気配を」

「気配……？」

と言わざりて、レクトにはあまりピンとこなかつた。五感を働かせるにしてもこの距離はやや遠い。もう少し近寄らなければなにもわからないだろ？

「あなたも感じていいんでしょう？ 我々と同じものを」

ハーニスは、最後尾のリフイクへと質問を投げかけた。

「えつ。ええ、まあ……なんとなく。なにかがいるかなということくらこは……」

リフイクはなにやら言ごとにくそつしつつもそう答える。それを聞いて、ハーニスは満足したように小さくうなずいてみせた。

旅を長くしてこむと、やうこつ感覺も研ぎ澄まされていくのだろうか？

「それでは作戦ですが

話を変えて切り出すハーニスに、

「なんでてめーが仕切つてんだよ

口を尖らすようにしてヒリスがつつかかつた。なんとも難癖をつけていいるに近いが。

「ブレイジング・ガール。そう怖い声を出すすに」

だがハーニスは微笑んで、やさしく諭すよにとりなした。実に

大人な対応である。

「仲良くなきましょ」

「てめーが言うかよ」

ヒリスの虫の居所の悪さは、つまるところハーニスの言動に原因があつた。ヒリスを揶揄するよつなことを言つてしまつた辺りから

始まり、ここまで彼の言つがままに行動してしまつてゐのがどうにも気に入らないのだ。

なんでも自分で決めたいエリスである。そしてなんでも自分が一番のがいいエリスである。

とはいえ殊勝にも従つてゐるのは、ハーニスの言つことにも一理あると認めてゐる部分もあるからだ。

そういう矛盾が表に出てきてしまつてゐるのである。

その様子を、レクトは「いつものことか」と諦観したような顔で。リフィクは仲裁に入りたいもヤブヘビを恐れた困り顔で。リュシールはやはり無感情な顔で、それぞれ見守つていた。

「先ほどの、私の言葉がしゃくに障つてしまつたのなら謝ります。

失礼。失敬。ごめんなさい」

ハーニスはペコリと頭を下げる。

まるでふざけていふよつつな物言ひではあるが、態度や声は眞面目そのものだった。

「なにせ、あなたが『彼女』をさげすむようなことを口走られたので……私もつい、意地の悪いことを言つてしまつたのです。お許しください」

ハーニスは頭を上げると、融和的な笑みを存分に浮かべて再びエリスを見つめた。

「捨てましよう。そんなわだかまりは。巨悪を倒すために」

その言葉に偽りはない。口よりも雄弁な彼の口がそれを物語つていた。

「あまり」存じないようですが、私はあなたのことととても買つているんですよ。あなたの強さ……そして我々と同じく、『モンスター』に抗う心を持っていることを。肩を並べるに値するほど

への字に曲げられていたエリスの口が、わずかに戻る。

「村で対峙しここにも転がつてゐる『モンスター』は、『鋼鱗族』^{じゅうりんぞく}と呼ばれる種族でして。名前の通り鋼のように強固な皮膚と、そして熱に強い耐性を持つてゐるのです。本来なら効きにくいはず炎の

技でたやすく打ち倒してしまつ、あなたの強さはまさに本物と言えるでしょう」「う

「そりやあ……当たり前だる。そんなこたあ当たり前だ。あたしにかかりやあ、どんな『モンスター』だろうとひとひねりだからな」そしられるのは大嫌いなエリスだが、褒められるのは大好きなエリスである。木に登るとまではいかないが、確実に彼女の機嫌は向上していた。

それを察知し、リフィクはほつと胸をなで下ろす。

レクトは足元に転がるワニのような『モンスター』を見下ろして、ふと思つた。鋼のように強固な皮膚……それをまるで紙のように壊してしまつた。『彼女』はいつたい何者なのか、ど。

思つただけで口には出さなかつたが。

「さて。では作戦ですが」

ハーニスは軽やかに、中断されたそれを再び切り出す。

「作戦もなにも、とつと乗り込んじまえばいいじゃねーか」

が、再びエリスが割つて入つた。今回は悪意はなく、ただ単にナチュラルな発言であるが。

「……まだ日が高いですからね。夜になるまで待ちましょつといつ話ですよ」

ハーニスはエリスの視線に留意しながら、言葉を選ぶ。

「もつとも、最終的な判断はあなたに任せますが。今すぐ乗り込んで外に出払つている連中を取り逃がすか、全員が寝床に戻つてくるのを待つて攻め込むか。そのどちらかを」

「……しじうがねえ、待つか。一網打尽にしたほうが気持ちがいいからな」

ほとんど誘導尋問にも近かつたが、そういう言い方ならばエリスも従つより他はない。短いあいだで、ハーニスは彼女の性格を把握しつつあるようだつた。

『モンスター』の死体を見つかないよう隠して、五人はひたすら日が落ちるのを潛んで待っていた。

そのあいだに、ハーネスが作戦とやらの続きを語る。

「狃うは『ボス』です。『モンスター』たちの作る群れや集団、それを率いているのが、群れの中で最も力の強い『ボス』。それを倒してしまえば、手下の士気をかなり奪うことができるでしょう」

エリスは故郷の近くにいた『モンスター』を思い出す。たしかにあの中にも、他の奴らよりひと回りは強そうな『モンスター』がいた。あれがあの集団の『ボス』だったのだろうか。

「要是我々が目的とする『キング』を討つといつじと同じですよ。

真つ先に頭を潰し、手足の動きを殺す」

数の上で不利は免れられない。多数の敵に立ち向かうためには有効な手段のひとつだらう。

「そこで、ふた手に分かれましょう。私とリュシール、そしてあなた方三人が左右からアジトに乗り込み、ピンポイントで『ボス』を捜索します。見付けたあとはそのまま倒してしまってください。我々もそうしますので」

さらりと倒せとは言つものの、そのボスがどれほどの力を持つているのかまだわかつていなければ。

彼には、相手のことなど構わないほどの自信があるのだろうか。

自信しかないエリスは、当然そんなことは気にも止めずにハーネスの話に耳を傾けている。

「もし苦戦するようなら、退散してしまつてもいいですよ。騒ぎになれば居場所もわかるでしょうしね。『彼女』が確実に息の根を止めますから、ご安心を」

「そいつは心配ご無用ってヤツだよ。苦戦にも退散するようなこともなんねえ。ちゃつちゃつと片付けてやるよ」

エリスはいつも通りといふのかなんといふのか、なんの根拠もなくそう言い切った。

「結構、期待していますよ

夕焼けも落ち着き、空から赤みが消え始めた頃。

「そろそろですね。参りましょうか」

草陰からじつと階を見つめていたハーニスが、振り返つて口を開いた。

感じる気配とやらで攻め込む頃合いを判断したのだろうか。
すでに用意はできていたと言わんばかりに、如才なく立つリュシール。

ハーニスも草陰から腰を上げると、待ちくたびれて昼寝を決め込んでいたエリスへと目線を落とした。

そして肩をすくめる。

エリスは土の上だといつに、まるで天日干ししたばかりのシーツにくるまれているかの「ごとくスヤスヤと寝入つていた。

仇敵のアジトを前にして、なんとも神経のす太いことである。

「エリス。起きるんだ」

レクトが体をゆすつて起こそうとするも、一向に目覚める気配は見られなかつた。まさに熟睡とはこのことを指すのだらう。

とはいえ悠長に待つてもいられなかつたため、レクトは強行手段に出ることにした。

抱きかかえるようにエリスの上半身を持ち上げ、彼女の頬をパシーンとひつぱたいたのだ。

するとまるで条件反射の「ごとく、眠つているはずのエリスの手が、レクトの顔面をバチーンと的確にとらえた。無意識下での反撃である。

暗くなり始めた森の中に、一発の小気味良い音がつながるようこの鳴り響いた。

エリスは重たそうなまぶたを持ち上げ、大きくあくびをする。さ

すがに起きたようだ。

「……叩いた？」

「寝ぼけている場合じゃない。時間だ」

なぜか顔面を押さえているレクトに指摘され、状況を思い出す。目と鼻の先にある『モンスター』のねぐら、そこへ攻め込もうとしていたのだった。

エリスはまどろみが抜けきれない様子で立ち上がり、頭をかき、なんとなく痛いような気がする頬をなでた。

「……叩いたよな？」

「……」

無言のレクト。

否定しないということは肯定だ。幼少期からの経験によりそれを把握しているエリスは、カマキリが獲物をとらえる時のように素早く、レクトの頬をスパーンとぶつ叩いた。

因果応報。やつたらやり返されるのは仕方のないことである。とはいえる場合、反撃はすでに済ませてあったのが問題だ。本人の意図していない時に。

ナチュラルに倍返しをしてしまう辺りに、エリスの転んでもただでは起きない性根がうかがえる。

「あのー、なんだか今さらなんですが……本当に乗り込むつもりですか？」

おずおずと、リフィクが口を開く。

本当に今さらである。ここまで、いつ機会も時間も山ほどあったるべ。このことについて彼の往生際の悪さがこじみ出でてこむところなのだ。

「お気持ちはわかります」

しかしハーニスは呆れるでもつづけんじんに返すでもなく、丁寧に応対した。

「相手は『モンスター』。凶悪な者たちです。しかし大丈夫。私の

リュシールが、行く手をふさぐすべてを切り開いてくれますから「自信たっぷりな豪語。」こちらもこちらで、あまり根拠を伴つてはなさそうな自信であつた。

「ですが、やはり無謀な気が……」

「ハナつからできねえと思つてるてめーにはできねえだらつよ！」依然として消極的なリフィクへ、エリスが割り込むように喝を入れた。どうやらまじろみはどこかに引っ込んだらしい。

「けどあたしは違う！ やると決めたことをただやるだけだ！」

エリス・エーチョルの過剰なまでの自信。それはなによりも自分自身を信じ疑わないといつとこりに起因しているのではないだろうか。

病は気から、などという言葉もあるよつて、精神的の姿勢といつのはなかなかどうして悔れないものである。

「子分だつたら子分らしく、あたしの後についてきてりゃあいいんだよ！ 余計なことは考えんな！」

「の、望んで『子分』になつたわけでは……」

リフィクは口を尖らせて、ぐちぐちといぼす。

たしかに子分にさせられたのも旅に連れてこられたのも、エリスの恐喝寸前の迫力に負けたせいだ。ひと回り弱も年齢が下の少女に氣迫負けしてしまつたからである。

が、最終的に選んだのは自分なのだ。あきらめるといつことを選んだ。それに変わりはない。うじうじとぼやいているのは男らしくないというヤツだ。

「黙つてあたしについてこいつ！」

そんな諸々を、エリスはそのひとことに簡略して叩きつけた。

「始めましょう。では、我々はあちらから！」

改めて仕切り直し、ふた手に分かれるべく行動を開始する。

ハーネスはリュシールの腰に手をそえながら、黒く染まりつつある森の中を歩いて行つた。

「……あいつら、あのまんま茂みでチークタイム始める気じゃねーだろーな」

彼らの背中をこりみつけて、エリスが呟く。たしかにそんな雰囲気ではあるが。

「それは……ご本人方の自由ですよ」

微妙に赤面しながら著しくズレたフォローを入れるリフィク。
それを横目に、

「彼らの心は本物だ。俺たちこそ、彼らの信頼に応えるべきだろー」とレクトがまつとうなフォローを入れ直した。

ふたりきりになつた途端に、ハーニスが熱っぽくしゃきかける。

「どこまでがんばれると思つ? あの三人」

リュシールはなにも答えず、一度だけハーニスの皿をのぞき込んだ。

まるでそれだけで意志の疎通が計れたかのように、ハーニスはふつと顔をほころばせる。

「僕はね、とても期待しているよ。もしうまくいつたらこれから の旅も彼らと一緒に行こうか?」

リュシールはやはり、なにも言わなかつた。

ハーニスはそんな彼女の髪を、片手でいとおしくもてあそぶ。

もともどが巨大な建造物なだけに、辺りが暗いと輪をかけて圧迫感を覚えてしまつものである。

「さて、どうやつて乗り込むか

石造りの外壁に手をはわせながら、エリスが呟く。

近くに来てみてわかつたが、どうやらこの皆は相当古いもののようだつた。歴史的知識が皆無なエリスにはまったく見当もつかないが、とにかくだいぶ歳月が経過しているように思える。故郷の近く

にあつた遺跡……あれと良い勝負ではないだろうか。

「……上から行くか」

顔と手を持ち上げるエリス。

この階のようなアジトは恐らく一階構造だろ？。一階部分だけでも巨大であるが、その上にせり出た凸型の一階階部分が乗つかっている。

普通の出入り口から正面切って乗り込んでもいいのだが、それではあまりにも芸がないというものだ。そのパターンはもう少し後に取つておくことにしよう。

「なあ、ばーっと飛べる『魔術』とかつてねえの？」

エリスは振り向いて、リフィクに尋ねた。

「えーと……ないこともないんですけど、とっても危険なのでやつぱりないです」

どこか含みのある言い方である。

「なんだよ、じゃあるのか？」

「いえ、だからないですって」

ふたりが話す間、レクトは黙々となにかをこしらえているようだつた。

荷物の中からロープを取り出し、その先端にナイフの柄を結びつける。簡易な『かぎなわ』といったところだろうか。

それをカウボーキよろしく振り回して、

「あぶねつ！」

勢いをつけてナナメ上へ投げ飛ばす。

弧を描いた即席『かぎなわ』は、吸い込まれるようにして一階のバルコニーへと放り込まれた。

ロープを引っ張ると、うまい具合にナイフの部分が欄干に引っ掛けたようである。あつといつまに侵入路が完成してしまったというわけだ。

「おおっ！ でかした」

「すごいですね。一回で……」

リフィクは顔を上へ向け、ついでに口を半開きにして、感心するよつに呴く。いろいろと要領の良い手腕だった。

「持つべきもんは弟分だな」

エリスは誇らしげに歩み寄りながら、当たり前の「」と「一番乗り」を果たそうとロープに手をかける。

が、それに先んじて、レクトが腕の力だけで軽々とロープを登り始めた。

「エリスは一番最後だ」

「なんでだよ！？」

当然のように飛んでくる抗議。

エリスを先に行かすと、上に登つた途端、仲間の到着も待たずして突撃してしまう恐れがあるからである。といつか確実にそつなるであろう。

「大将は後ろでドンと構えているもんだわ！」

思うは思うものの口に出すといろいろと問題が出てくるため、レクトは適当にお茶は濁した。

「ひこうことを自然に行える辺りに、ふたりが共に過！」してきた時間の長さがうかがえる。

が……兄弟姉妹のように一緒にいたとしても、相手のことなど完全にはわからないものである。

一瞬は「それもそうか」と納得しかけたエリスだったが、文字通り一瞬後に「いや、そうじやねえ」と思い直す。

「大将だからこそ一番槍だろ！ 後ろでふんぞりかえってたってつまんねえよ！」

感じ思つたことをそのまま口にしながら、エリスは田の前にぶら下がるロープへと飛びついた。

ちなみに先ほどから大声を上げまくついているため、侵入する前に見付かってしまうのではないかと気が気がでないリフィクである。

「なにを考えている！」

レクトの叱責も右から左へ、ひょいひょいと身軽にロープを登つ

ていくエリス。

「だからあたしが一番槍だつて言つてるだろ？が。どけよー。」

「無茶を言つな！」

段々と空氣が弛緩していく。

エリスが暴れるために、ふたりのつかまるロープは大きく揺れ始めた。

「あ、危ないですよー。」

リフイクの注意も、時すでに遅し。

ロープの振動につられて上で引っかかっていただけのナイフが動き、ズレ……弾き飛ばされるようにして外れてしまった。

そのあとのこととは言つまでもない。

そんな茶番を経て、ようやくアジトの一階バルコニー部へと侵入を果たした三人である。

日は完全に沈み、辺りは暗闇に包まれていた。もはや光がなれば、すぐ先になにがあるのかもよくわからない。ただよう空氣も心なしかひんやりとしてきた。

バルコニー部分はおおよそダブルベッドほどの広さしかないだろうか。三人も並ぶとやや窮屈さを感じてしまう。

物はなにも置かれておらず、正面に木の扉がポツリと備えられているだけだった。『モンスター』サイズにこしらえられているのか、普段目にするものよりひと回りもふた回りも大きな扉である。

その隙間から、室内の明かりが漏れ出ていた。

ここから先は、まさに死地だ。

扉ひとつくれば敵地。人間をはるかに凌駕する強者たちが待つている。

ハーニスの感覚を信じるならば、かなりの数の『モンスター』が集まっているはずだ。

その中に突撃し、下つぱ共をくぐり抜け、控える『ボス』をうち倒す。そんなタイトロープ渡るような戦いがこれから始まるのだ。この扉を開けた瞬間から。

「……行くぞ」

さすがのエリスも気を引き締めているのか、なにやら神妙な顔で口を開いた。

そして木製扉に寄る……と思いきや逆に、バルコニーの先まで後退する。

ふたりの見守る中、エリスはそこから助走をつけ、「だらつしゃあつ！」

と珍妙なかけ声を発しながら、扉を飛び蹴りでぶち破った。

「なんだつ……！？ 人間！？」

飛び込んだすぐ先の部屋で、早速『モンスター』と出くわしてしまった。

そこは外面とたがわず石壁に石床に石天井な、かなり広い部屋だつた。中央あたりに赤いカーペットが敷かれ、丸テーブルや棚が置かれ、天井近くに燭台が並んでいる。

その丸テーブルに、二体の『モンスター』が腰かけていた。テーブルの上に酒の瓶やグラスがうかがえるあたり、晩酌でもしていたのだろうか。

どちらも眉間に見たのと同じ、ワニに酷似した特徴を持つ種族のようだった。

ハーニスがなになに族と名前を口にしていた氣がするが、エリスはまったく覚えていない。

エリスたちの出現に声を出して驚き腰を浮かした『モンスター』が他のそれとさほど変わりない容姿をしているのに対し、もう一体はかなり異質な雰囲気をただよわせていた。

サイズがひと回りは違う。でかいのだ。単純に巨大。

それだけではなく体の色もより濃く暗く、顔にも風格じみたものが見て取れた。明らかに他の連中とはなにかが違う。

「先手必勝！」

しかしエリスはそんなこともお構いなく、問答無用に剣を抜き放ち烈火のごとく突撃した。

普通サイズの『モンスター』が、大型なほつをかばうべく前へ飛び出す。

「ボス！ ここは私が！」

「ボスーつー？」

『モンスター』の放った言葉を耳にし、エリスは勢いあまつてすつ転んでしまった。

今、確實に口にしたはずだ。『ボス』と。

「いきなり！？」

リフィイクも思わず声を上げた。

言われてみれば、たしかに『ボス』である。雰囲気がそれっぽい。しかし、いくらなんでも早すぎるだろう。たまたま真っ先に乗り込んだ部屋にボスがいるなんて、そんな都合のいいことがあっていいのだろうか。

先手必勝と言いつつともない不意打ちを食らってしまったエリスである。

「まあいい。幸運すらをも従わせる女だつてことだ、あたしは！このエリス・エーツェルは！」

ことあるごとに自分の名前を口にしたがるのは自己顯示欲の表れなのだろうか。

エリスはすぐに飛び起き、剣を正眼に構え直す。

目の前に立ちはだかる『モンスター』は、やはり村で出くわした連中と寸分たがわぬ姿をしていた。

連中同士はどうだか知らないが、少なくともエリスには皆同じに見える。

『モンスター』は胴鎧をつけてはいるが、くつろいでいたためか武器は持つていなかつた。素手。とはいえ鋭利な爪や強靭な腕力などは、それだけで充分に脅威に値するが。

手下の後ろから、『ボス』が不敵な様子でエリスたちを眺めていた。乗り込んだ時と変わらず、イスに腰かけたまま。手下とは違い、みじんの動搖すら見受けられなかつた。

うなずける。心身共に『ボス』なのであるつ、奴は。

「夜襲とは。氣でも狂つたか……人間共」

手下の『モンスター』が、低く呴く。基本的にエリスたちのことを見下してはいるものの、そこはボスと同席していただけのことはあるのか、油断はしていなかつた。

正対しているエリスだけではなく、彼女の後ろに控えるレクト、

リフィクにも威嚇するような視線を飛ばしている。相手の出方をうかがうべく。

なかなかできる奴のようだ。

「あたしにしてみりや、てめえらにへーーいら頭下げる奴らのほうがよっぽど狂つてゐるよつて見えるぜ」

しかし、そんなことはお構いなしなエリスである。相手の力は重要ではない。自分の力をいかに発揮するかが重要なのだ。

自分が上回つていれば勝つし、下回つていれば負ける。ただそれだけのことだ。やらなきやわからないことをやる前から考えるのはバカバカしい。

戦いというすべての場合において、エリスの頭にあるのはそれだけだった。

今回も同じ。

「あたしは嫌いなんだよ、てめえらが。嫌いなもんを片っぽしからどかしてきやあ、楽しい生活つてのが手に入る」

相手の力量は考えない。相手が強ければ負けるし、弱ければ勝つ。

「そういうもんだろ、人生つてヤツは」もし負けてしまったのなら、自分はそこまでの存在だったということだ。いつそ死のうが悔いはない。

日々を全力で生きているからだ。

自分の心をごまかしたり、隠したり、遠慮したり出し惜しみしたりしない。常に思つままに、思う通り生きている。故にエリス・エーツェルに後悔の一文字はなかつた。

全力を尽してなお果てたのなら、それはそれで満足な死に方なのだ。

「けど大抵の奴はしねえんだよな、そういうことを。嫌いもんを嫌いなまんまで放つといてやがる。それこそ狂つてゐるぜ」

エリスの自己主張に、目の前の『モンスター』はまるで耳を貸し

ていなかつた。

貸すまでもない、といった心境なのだひつ。なにをわけのわからぬことを、と。

恐らくはエリスたちのことを単なる侵入者としか思つていなかつた。

自分たちの繩張りに入り込んできた不屈き者。それをただ排除するのみ。あわよくばボスに良いところを見せよひ。頭にあるのはそんなところではないだらうか。

だから油断はしないなくとも、付け入るスキといつものが生まれてしまうのだ。

「あたしは違う。大嫌いなてめえらを根こそぎぶつ倒して、楽しい生活をつかみ取んのさ。グッドな未来つてヤツを！」
エリスは剣を背負うようにして振りかぶる。

その意見にはレクトも同意だつた。平和な暮らしを勝ち取るには『モンスター』を討つしかない。

仲間の仇や村を守るためという大義名分はあるものの、究極的にはそれである。

自分の力量は知れているが、エリスならそれを成し遂げてくれる。そう信じているからこそ、いつもして一見無謀とも思える旅にもついてきているのだ。

たとえ年下であろうとも、女であろうとも。彼女の双肩を頼もしく思つてゐるから。

「エリス！」

「この腕つぶしど！」

レクトの声に背中を押されるよひに、エリスは仇敵めがけて突っ込んでいった。

『モンスター』と戦うなど、少し前のリフィクからすればとても

じやないが考えられないことだつた。

状況に流されてこんなことになってしまっているのに対し、少なからず後悔はある。

しかしそこで立ち止まるほどリフィクは愚かではなかつた。

流れでいるのなら、流れの中で体を動かす。からうじてそれができるくらいの根性は持ち合わせていた。

考え方によつては、やることは簡単である。最悪な結果にならないように、ベターな行動を取ればいい。あとは『流れ』がなんとかしてくれる。

この場合の最悪な結果とは、エリスもレクトもリフィクも、三人ともども死んでしまうことだ。『モンスター』に殺されてしまうこと。

それを避けるべく行動すればいい。彼女らを助ければ、自然とそれにつながつていく。

普段ならすくんでしまうような足も、他人の命がかかつているとなると不思議としゃんとしてくるものだ。

だからリフィクはそれを唱える。

「フラッショージャベリン！」

天井、ギリギリに出現した光の槍が、一直線に『モンスター』の体を刺し貫いた。

しかし攻撃速度を優先したために、物理的なダメージはほとんどないだろう。体の神経伝達を鈍らせ、動きを一瞬だけ制限する程度である。

が、充分すぎるほどの援護。

そこへ、バツチリなタイミングでエリスが飛び込んだ。

『モンスター』の首筋に狙いを定めて剣を振り下ろす。

この上ないというほどの直撃。

しかし剣先が生んだのは鮮血ではなく、甲高い衝撃音だった。刃が通つていない！

『モンスター』の強靭な皮膚が、エリスの渾身の斬撃を防いでしまったのだ。

硬い……！ 剣を持つ手がシビレが走る。

その直後。『魔術』の拘束から復活した『モンスター』が、無防備に近いエリスめがけて右腕を振りかぶった。

鋭利な爪は、もはや刀剣などと変わらない。

レクトの射る矢も皮膚に弾かれ、『モンスター』の腕はまっすぐ振り下ろされた。

石床に敷かれたカーペットの上に、ひとつまみほどの茶色い髪と赤いハチマキがハラリと落ちる。

軽やかに後退して距離を置いたエリスは、やや寂しくなった自分のヒタイを無意識のうちに押させていた。

「……気に食わねえなあ。あの氷像姉ちゃん、いつたいどんな剣振つてやがる」

そしてあらぬ方向へ向け、面白くなさうに舌を打ちつけた。

「けどな、あたしにはコイツがある！」

エリスは気を取り直し、再び剣を振りかぶる。

その間にも、レクトによる援護射撃は続けられていた。

『モンスター』の頭部を中心に、文字通り矢継ぎ早に連續して矢をお見舞いしていく。

レクトの狙いは正確だった。それ故に、『モンスター』は矢を防ぐのに集中せざるを得なくなっている。

顔を覆う腕、その外皮によつてすべて弾き落とされてしまつが、『モンスター』の動きは完全に止まつていた。止まらなければならぬといふことなのだろう。

鋼のように強固な皮膚に守られているとはいへ、やはり急所はあるようだ。泣きどころとも言つべき弱点が。

それは後方に控える『ボス』も同じなのかもしれない。レクトがそれに思い至つた時、

「フラツ・シユ・ジヤベリン！」

リフィクが、先ほどと同じ『魔術』をもう一度うち放つた。

光槍はたがわづ『モンスター』に命中する。防御していた腕がだらりと下がり、無防備な体があらわとなつた。

「燃えろ！」

そこへすかさず、エリスが走り込んでくる。振りかぶつた剣からまばゆいばかりの炎が吹き上がつた。

「オーバーフレアあつ！」

『モンスター』の首筋を、灼熱をまとつた刃がばつさりと両断する。

直前の不手際を帳消しにするほど、それは鮮やかな切れ味を見せつけた。

火だるまと化した『モンスター』の頭が飛び、床に転がる。するとカーペットに火が燃え移り、またたく間に炎が広がってしまった。

エリスたちは慌てて、部屋の隅へと待避する。カーペットは中央部にしかなく周囲は石造りなため、それ以上燃え広がる心配がないのが救いといえば救いだった。

「我が片腕ガーディフを葬るとは……それなりに腕の立つ人間ではあるようだな」

ゆらめく熱気の向こうから、低い声が響く。

今まで戦いを静観していた『ボス』が重い腰を上げ、燃え盛る炎の中に平然と立っていた。

まるで猛火などにするものぞ、と言わんばかりの振る舞い。「自信の源は『魔術』とやらか。こんな辺境にも使い手がいるとは驚きだ」

座っていた時も思つたが、立ち上がって改めて思う。でかい。手下の『モンスター』の時点で一般人よりもひと回り大きな体をしているが、この『ボス』はさらにそのひと回りは巨大である。エリスと比べると、まるで犬と馬ほどの違いがあった。もはや頭が天井に届きそうである。

「だが所詮、そんなものは付け焼き刃よ」

『ボス』はただでさえ大きな口を、さらに大きくしてニヤリと笑つた。

その巨体は美術品を思わせる彫刻の入つた胴鎧で包まれている。足を守るブーツにも同じ意匠が見て取れた。

案の定武器は手にしていないものの、巨大さそのものが凶悪な武器になる。やはり人間と『モンスター』。基本的な部分からして大きく水をあけられているのだ。

「弱者の浅知恵。圧倒的な力の前では、なんの役に立つものぞ」

「言つてろよ、ボンクラ！」

ボスの放つ威圧感にまつたくひるむことなく、エリスが猛々しく言い返す。そういうところは彼女の数少ない美点であろう。

背後に控えるレクトやリフィクからは、さすがに少なからず気圧されているような様子がうかがい知れた。

「わかつてんのか？ てめえの子分がもう何匹もやられてんだよ。あたしが！ このエリス・エーツェルが叩きのめしたんだよ！」

正確に言つなら、エリスが倒した（奴の手下とおぼしき）『モンスター』は一体だけである。

何体もと言えなくもないのだが、半数以上を葬つたのはリュシールだ。

もしハーニスがこの場にいたら、すかさずそう訂正していたところだろう。

しかし今はそんなヤボなことを言う人間はいない。

「余裕しゃくしゃくなことをぬかしてられんのも今だけだ！ すぐにてめえも同じ田に遭わせてやるからな！ 腹あくくつとけ、このワニ野郎め！」

にこじぞとばかりに言い連ねるエリス。セリフだけを見るなら三流の悪党にも近しかつた。

しかし彼女の威勢の良い弁舌を耳にし、レクトは不思議と安堵していた。畏怖が薄れたのだ。

言葉の力は大きい。

たとえそれがハッタリや強がりだつたとしても、聞いた人間の心を突き動かすこともできる。そして他人のみならず、言った本人の心すら動かすことができるのだ。

自分の影響を最も受けるのは自分自身である。

故にエリス・エーツェルは、常に大言壯語を振りかざしている。他の誰でもない、自分自身に対する鼓舞のために。

そうすることで彼女は彼女たり得ているのだ。エリス・エーツェルの理想とするエリス・エーツェルに少しでも近付くために、虚勢を張り続けている。

表には決して出さないそんな姿勢を知っているからいや、レクトは彼女を信頼しているのだ。

信頼するに値する。そのひた向さは。

「ワニ野郎……？ 我らをあのような生物と同じにしてほしくないものだな」

意外と罵倒の効果があったのかなんなのか、『ボス』は不敵な笑みのままそう言い返した。

「一緒にやねえかよ。そつくりだ」

たしかにエリスの言つ通り、部分部分で見ると酷似している。喋るでかいワニが一足歩行で鎧を着ているようなものだ。

「違うな」

が、ボスは首を振る。そして自信たっぷりにこう付け加えた。

「なぜなら、我らは泳げない」

「弱点言いやがつた！？」

エリスは思わず身をのけぞらせた。

普通に考えるなら自信満々に言つことではないが、そこは『モンスター』。やはり人間とは『普通』の範疇が違つてゐるのだろうか。『愚かな貴様らに、せめて名くらいは教えておいてやる』。……クローケ・ディール。死ぬ際には、我が名を口惜しく叫ぶがいい

『ボス』の声には、ぞつとするほどの迫力が込められていた。本能的にそう思つてしまふのだろうか。絶対的強者に立ち向かうという異常性を知らしめるために、頭の中で鳴らされた警鐘なのかもしれない。

「クローケ・ディール……」

顔を青くしながら、リフィクがオウム返しに囁く。

「……クローケ・ディール？」

緊張感の力ケラもなく、エリスが呟いた。

「クロコダイルか」

そんなエリスによつて緊張を払拭されたレクトが、やはり呟いた。

「結局ワービヤねーか、てめえ！」

エリスが人差し指を突きつけて叫ぶ。ボスは愉快そうにふつふつふつと笑っていた。

「ふざけやがつて、この野郎が」

それが本名なのがどうかは置いておくとして。

こうも漫才じみたかけ合いをしていられる以上、クローケ・ディール（仮）には相当な余裕があるということなのだろう。

それは裏を返せば油断。すなわち勝機である。ディールが本腰を入れる前に、一気に勝負を決めてしまつのがベストな勝ち方だ。この場合は。

しかし、と、他のふたりはともかくリフィクは慎重に思案をめぐらす。

クローケ・ディールは先ほどからずっと、激しく燃えるカーペットの上に立っている。

だといつのに、熱や炎をまったく苦痛と感じていない様子なのだ。そういうえばハーニスがそんなことを口走っていた気がする。恐らく身体構造的に火には耐性があるのだろう。

「……」

リフィクは最悪な状況を思い浮かべながら、祈るようにエリスの背中を見つめていた。

ディールは足元に敷かれた燃焼中カーペットを乱暴につかみ取り、丸め、エリスたちへ向かつて投げつける。

「！？」

慌てて散らばる三人。

言葉通りの火だるまとなつたカーペットは、正確に三人が乗り込んできた出入り口をくぐり抜け、バルコニー部分に転がつた。まるでたき火のように、夜闇の中に炎が浮かぶ。

「こんなものも怖がる。人間というものは」

ディールは面白がるようになざ笑つた。

「びっくりしただけだよ！ そんな顔、すぐにできなによにしてやる！」

エリスは威勢をぶつけながら、正面切って突撃をかけた。

片手で思いきり振りかぶった剣から勢い良く火炎が噴出する。

「あたしのオーバーフレアで！」

エリスは飛び上がり、炎をまとった剣を大上段から叩きつけた。

……が。

その炎ごと、クローカ・ディールの右手が刃をつかみ取った。なんのためらいもなく。たやすく。

行き場をなくした炎が、まるで鳥が翼を広げるよう拡散する。エリスは微動だにしない剣の上で、逆立ちの体勢で膠着していた。

「効いていない！？」

レクトが目を見開いて、思わず口走る。

今まで見たことがなかつたからだ。エリスの炎の剣技が防がれたところなど。

「やつぱり……！」

予見していたことが当たつてしまい、リフィクは顔を曇らせた。もともとが火をなんとも思わない種族なのだ。手下の『モンスター』は斬れても、その上位種とも言える『ボス』には通用しない。道理の通つた話ではあるが。

さすがのエリスも、少なからず驚きを表情ににじみ出させていた。

「知つたか？」

自分の力を誇示するような堂々たる声で、クローカ・ディールが吐き捨てる。

「身のほどを！」

そしてディールは剣をつかむ右腕を引き寄せ、同時にエリスめがけて左腕を振り上げた。

爪によって裂かれた肩口から、真っ赤な血が弾け飛ぶ。

そのまま剣ごと投げ捨てられ、エリスは受け身もままならずに石の床へと叩きつけられた。

それでも剣を手放さない辺りはさすがと言えようか。

「くそつ……！」

エリスは苦悶の声をもらしながら、起き上がりひとつ腕を踏んばらせる。

が、どうにも左腕に力が入らなかつた。

裂かれた左の肩から滝のように流れる血が、腕を真つ赤に染めあげている。

エリスはうつ伏せのまま奥歯をかみしめた。

「エーツェルさん！」

そこへ、悲鳴に近い声を上げながらリフィクが走り寄つてくる。

「ヒーリングシェア！」

すかさず傷口に片手をかざし、『治癒術』を唱えた。

リフィクの手が光を放つてすぐに、バツクリと裂かれていた傷口が跡形もなく消え去つていた。

「助かる！」

自分の腕に力が入る感覚を取り戻し、エリスは弾け飛ぶような勢いで跳ね起きた。

そして剣を両手でしっかりと握り直す。

それを横目に見ていたレクトは、『治癒術』……それによつて自分も命を救われたということを痛感しながら、クローケ・ディールめがけて矢を射飛ばした。

矢は風を切つて、ディールの（人間で言つといふの）眉間に命中する。が、刺さるどころか傷ひとつすらつけられずに、豆鉄砲のように弾き飛ばされてしまった。

ディールはレクトのほうなど見向きもせずに、エリスだけを興味深そうに眺めていた。

単なる矢など脅威どころか興味にすら値しない。言外にそう表しているのだろう。

レクトは「」の無力さに歯を食いしばらせた。

そんな時。

「一回でダメなら！」

負傷から立ち直つたエリスが、気迫を口にしながら再びディールへと立ち向かつていつた。

「一回目がある！」

炎の剣が叩き込まれる。

しかしやはり。それも腕を振るつただけの『ティール』に、いともたやすくあしらわれてしまつた。

「一回がダメなら！」

エリスは三再び、体をひねる。

「三回目ええ！」

奮闘するエリスの姿に、そうじやないか、トレクトは考えを改めさせられた。

力が及ばないと嘆いていても仕方がない。できないのだとしても、できるまでやり続ければいいだけの話なのだ。

トレクトは息を吹き返したように表情を明るくし、背負つた矢立てから再び矢を引き抜いた。

エリスはなおも剣を打ち込んでいく。

防がれ、それをかいくぐつたとしてもダメージを『られなくとも、がむしゃらなまでに攻撃をし続けた。

トレクトも同じように、ひたすら弓を引き矢を放つ。

互いの息はぴったりと合つていた。どちらかといふとエリスの動きにトレクトが合わせていると言つた具合だらうか。

互いに互いの動きをジャマすることなく攻撃を続けている。

しかし、通用しなければなんの意味もない。

リフィクは理解に苦しむように眉をひそめていた。

太刀打ちできないとわかつていてはばなのに、なぜそもそも抗うのか。なぜそうも抗えるのか。

ただ単純に、それが不思議でならなかつた。

立ち尽くしているだけのリフィクであるが、完全にあきらめているわけではなかつた。

動きあぐねているのだ。

剣や炎なら無理でも、他の『魔術』なら多少のダメージを負わせられるかもしねりない。

だが屋内という狭い空間では、威力の小さな術しか使えないのだ。

大規模なものは巻き添えを食つてしまつ。

それにもしエリスたちが傷を負つた時に素早く『治癒術』を使えるよう、なるべく体力を温存しておきたいのだ。

ある種のジレンマである。

唯一の救いは、いまだクローカ・ディールに明確な殺意が宿つていないことだ。

遊んでいるのだ。彼は、圧倒的な優位に立ち、無駄なあがきを続ける者たちの姿を見て樂しんでいる。

それだけが今の救いだ。最後の命綱。

リフィクの願う最良の展開は、ディールが本気になる前にこんな戦いなど放棄して、さつさと逃げ出してしまつことに他ならなかつた。

射つた矢が、クローカ・ディールの左目に直撃した。

口元をほころばせかけたレクトだったが、すぐにそれは覆えられる。

たしかに当たつたはずの矢が、何事もなかつたかのように弾き飛ばされてしまったのだ。

レクトは一瞬だけ呆然とするも、素早く真相に気付く。

クローカ・ディールは目……すなわち眼球すらも、驚くべき硬度を誇つているということに。

「有り得るのか……？」

そんなことが。

レクトは無意識のうちに呟いていた。

手下と『ボス』にこれほどの差が存在していようとは……。

このクローカ・ディールに比べれば、故郷で対峙した『モンスター』の『ボス』など到底『ボス』とは呼べない。せいぜい『中ボス』がいいところだ、あんなものは。

背後に回したレクトの手が、宙をつかむ。

はたと氣付いて視線を向けると、背負つた矢立てが空になつてしまつていた。矢が尽きたのだ。

とはいえ矢自体は部屋のあちらこちらに散らばつてるので、それを拾えれば済む話ではあるが。

「……」

しかしレクトは呼吸を落ち着かせて、少し頭を冷やすことにした。やり続けることは間違つていなが、ただ同じことをやつしていくも発展がない。

「……？」

そこでレクトは、ディールのつけていいる胴鎧に着目した。装飾が派手なだけのプレートアーマー……。剣も効かぬほど強固な肉体を持っているにも関わらず、なぜ奴はわざわざ鎧をつけている？

エリスは腰を落とし背を丸め、肩でぜえぜえと息をしながらクローケ・ディールをにらみつけていた。

早い話がバテてしまつたのだ。

『魔術』は激しく体力と精神力を消耗する。エリスの使う炎の剣技も分類するなら『魔術』の一種だ。

初っ端から全力全開で使いまくつていれば息切れしてしまつのも無理はない。不運なことに、エリスの辞書にペース配分という言葉は載つていなかつた。

「あきらめたか？ ようやく」

その様子を見て、ディールが笑いながら勝ち誇る。

幾度となく攻撃を見舞つたものの、結局さしたるダメージを『え

ることはできなかつた。

ディールの体には焼け跡はおろか焦げ跡すらない。まさに難攻不落。生きる體である。

「アホぬかせ！ ちょっと疲れただけだよ」

エリスは素直に言い返した。

とはいえる「ちょっと」という部分は素直ではない。「かなり」というのが正確な本音だ。

あらゆる意味において先行逃げ切り型なエリス・エーツェルである。性格的にも能力的にも、長期戦は向いていない。

「おい！回復っ！」

内心焦りがあるのか、エリスは後方に待機するリフィクへ乱暴に指示を飛ばした。

が、しかし、

「傷は治せますけど、体力を戻すことは……」
申し訳なさそうな返事が送られてくる。

エリスが思つてゐるほど『治癒術』というものは万能ではないのだ。ちゃんとした原理にのつとり、可能なことと不可能なことがハッキリと分けられている。

「使えねぇ！」

エリスはツバのよう口吐き捨てた。

完全な不可抗力だが、リフィクは怒鳴りつけられて小さくなる。
「そんなことを言われても……」とは反論したくてもできない状況だ、今は。

「『モンスター』！」

と、その時。

「貴様にひとつ尋ねる」

めずらしく挑戦的な口調で、レクトが声を張り上げた。

「どうしてそんな鎧をつけている？」

あえて問い合わせたのは、多少なりとも時間を稼ぎたかったからだらう。エリスが息を整えるまでの時間を。

「必要ないだろう？ そんなもので身を守るまでもない。貴様ならレクトの言葉を聞き、エリスとリフィクは「そういうば」いう文字を顔に浮かべて、ディールの腹部を注視した。

「なぜだ！」

「これは趣味でつけている」

相変わらずというべきか、ディールは冗談とも本気とも取れないような口調でそう答えた。

「どうかな？」

なおも挑戦的にレクトが続ける。

「『ワニ』の弱点は腹だと、昔から相場が決まっているが」レクトが気付いたのはそれであつた。鎧をつけてまで守らなければならぬにかがある。それこそがすなわち彼らの急所ではないか、と。

憶測の域を出ではいないが、このまま同じことをし続けるよりはよっぽど建設的である。

「我らをワニなどと同じにするなど言つたはずだが」嘲笑するように言づテイールをよそに、エリスは作戦の変更に賛成の意を示した。

「乗つてもいいぜ、レクト。お前にな」

ほんのわずかな小休止であつたが、なんとか呼吸を落ち着かせたらしい。いつものふてぶてしい表情が戻っていた。

「腹か……。んなもん後生大事に守りやがつてよ」

吐き捨てるように咳く。

普段からへソ出しルックが基本で腹部を守る気ぜ口な彼女からすれば、まあそれは異質な行いに思えてしまふのだろうか。

「リフィクさんは『魔術』を擊つてエリスを援護してください。動きを制限する程度でかまいません。あとは……エリスに任せん」レクトは祈りを込めるようにして指示を出した。

それを、ディールがせせら笑う。

「ずいぶんと筒抜けな作戦会議だな」

たしかに筒抜けもいいところである。ただレクトも、思い立つた時点から隠す気などはほとんどなかつた。

だまし討ちのような手が通用する相手でもなかつた。

そしてなにより、作戦と呼べるほど立派な考へはないのだ。ただ狙いをつけてやつただけ。最終的にはエリスの腕に一任することに

なる。

「わかりました」

リフィクはうなずいて、すぐに『魔術』を放つために意識を集中し始めた。彼の周囲がぼんやりと輝き出す。

エリスはそれを今か今か待ちながら、体をうずうずさせている。

そしてクローケ・ディールは、まるで見せ物が始まるのを待つているかのような表情で、三人の動向を眺めていた。

相変わらずの余裕っぷりである。弱点を知られたとこりで危機にすらならないとタカをくくっているのか、もしくはレクトの日論見が見当外れだと笑っているのか。

しかしこの際、どちらでもいいのだ。やればわかる。すべては結果が示してくれる。

「フラッシュ・ショージャベリン！」

放つた言葉に呼応するよう、リフィイクの眼前から『光の槍』が発射された。

その数、幾本無数。雨のことく、数えきれないほどの光条がクローケ・ディールへ向けて飛んでいく。

『槍』は次々にディールの手足を貫いていった。

そしてまるでりつけにでもするように、ディールの体を大の字に開いていく。目標としていた胸が、がら空きになった。

そこへ走り込むエリス。リフィイクの術を避けるように迂回しながら、剣から炎をほとばしらせ、勇猛果敢に突撃する。

「うおおお！」

その時、ディールが吠えた。

今までの余裕じみた態度とは一変、気合の声と共に全身に力を込める。

そして力任せに、自らの手足を拘束する『光の槍』をひきちぎつたのだ。

……『魔術』など、強大な力の前ではなんの役にも立たない。ディールが放つた言葉が思い起こされる。それを証明してみせたのだ。自らの力で。

「そんなん……！？」

リフィイクが息を呑む。

術による援護は効力を失つたが、だからといって足を止めるヒリスではなかつた。

「食らええつ！」

剣を振りかぶり、正面から突つ込む。

それを迎撃するために、ディールはすくい上げるように右腕を振

り上げた。

エリスはななめ前へ飛び込むように、その攻撃をヒラリとかわす。先ほどまでは、当たればどこでも良いという精神で剣を振つていたエリスである。しかし今は、明確な攻撃目標が頭の中にある。

その違いは体の動きにまで表れていた。

冷静に相手の攻撃を読み、いなし、踏み込む。

ディールが右腕を振り上げたため、再び胴体は開放されていた。今この瞬間に、エリスとそれとを阻むものはなにもない。

「オーバーフレア ああっ！」

単なるブレートアーマーなど、彼女の炎の前では紙にも等しい。エリスの渾身を込めた一撃は、鎧を碎き散らして、クローケ・ディールの腹部へとダイレクトに叩き込まれた。

エリスは、息を詰まらせる。

直後、自分の両腕に激しいシビレが駆け上がりつてくるのを感じた。

「作戦は、それで終わりか？」

頭上から、あざ笑うような声が降りかかる。

エリスは振りあおぎ、その声の出所と自分の目の、ちゅうじ中間に当たる場所を注視した。

そこはクローケ・ディールの腹部。つい先ほどまで鎧に包まれていた部分である。

鎧はたしかに碎いた。

破片が周囲にちらばっている。しかし肝心の、その下にあるものが砕けていなかつた。

腕や足と同じ質感をたたえた、腹部の硬質な皮膚。それがエリスの剣を受け止めたのだ。

「だとしたら興醒めだ」

ディールは軽く追い払つよう、足元のエリスを蹴つ飛ばした。

己の読み間違いを、レクトは心から後悔していた。

なんてことはない。勘違いだつたのだ。

奴は本当に趣味で鎧をつけていたのだ……！

どんなものにも弱点はある。そんな甘い思い込みにすがりつき、決めつけていた。それに他のふたりも巻き込んでしまったのだ。

レクトは拳を握る。

蹴り飛ばされたエリスは、猫のように器用に空中で体勢を整え、なんとか着地にまでこぎつけた。

しかし直後にヒザを折る。その口端から、一筋の血が流れ出ていた。蹴られたのは腹部だ。ディールにしてみれば軽くだつたとしても、人間にしてみれば充分脅威に値する。ただ単に口の中を切つただけなのか、その衝撃が内臓にまで達していたのか……。

それに気付き、リフィクは慌てて駆け寄り『治癒術』を施した。いたたまれないのはレクトである。自分の判断ミスのせいで彼女を危険にさらしてしまったのだから。

「……なに人生の終わりみたいな顔してやがる」

そんなレクトを見かねてか、エリスは立ち上がりつて彼と視線を向き合わせた。

「……すまない」

「詫びならあとでいくらでも聞いてやるよ。……で、他にねえのか？ もつきみみたいなヤツ」

エリスが求めているのは先ほどのような『作戦』だ。彼女も彼女で、このまま続けていてもラチがあかないと思い始めているのだろう。

「……手立てがない」

レクトは正直に弱音を吐く。

現時点では、言葉の通り勝ち目がない。その手段が想像すらできないのだ。

加えて、エリスとリフィクの体力も今や心許ない。冷静なレクトだからこそ、状況を正確に把握することができる。手立てがない。それがまごうことなき事実なのである。

「ねえのかよ。……ならい。ひたすら、ぶつ倒れるまで攻め続けるまでだ」

それは自分が倒れるまで、という意味なのだろうか。再び前を向くエリスへ、レクトが無念そうな表情で提案する。

「一度、下がる。体勢を立て直す必要がある」

体力を回復させ、対策を練り、ハーニスたちと合流して。再戦。そうするべきだ。

「バカ言つてんじゃねえよ」

しかし、エリスはそれを即座に却下した。

「なにがバカだ。今は負けず嫌いを發揮している時じゃない。頭を冷やすんだ」

「頭を冷やすのはほつだよ。」レクトシップを巻いてビリスなんだ

めずらじくも穏やかな声量で。まるで諭すよつて、エリスが言い返す。

「あたしらが倒そうとしたのは、田の前に立るローリングの、やがて上にいる奴なんだぞ」

レクトは田だけで答えを送る。

わかつていて。そんなことは、と。

「『モンスター』の『キング』だ。そりやあ、もつとずっと強えんだろうよ」

それを耳にしたのか、ディールが笑い声をこぼした。苦笑、であろう。

「それだけじゃねえ。『イツみみたいな奴だつて、それこそ『ロロロロ』いるはずだ。そんな奴らと戦うたびに、てめえはそつやつておんなじことを言つつもりかよ」

エリスの声が徐々に熱を帯びてくる。それは普段の取つてつけたような熱気ではなく、芯からこじみ出でてきた熱意だった。

「人生なんてのはなんでも一発勝負だ。一旦下がるとかやり直すとか、そんなことやつてるヒマなんかねえんだよ」

「……精神論はいい。現実を見るんだ！」

ついにレクトは、叱りつけるように声を張り上げた。

「お前の言いたいこともわかる。だが、このまま続けてなんになる！？ 無駄死にするだけだ！」

直接的な単語が、はたで聞いていたリフィクの顔をひきつらせた。今のレクトの根本的な願いは、身の安全である。エリスとリフィクと、そして自分。命の危機を肌で感じているからこそ言つて方も強くなってしまうのだ。

「そう簡単に死ぬかよ。だつてあたしは『主役』だぜ？」

エリスは口元に、ふつと笑みを浮かべてみせた。

「は……？」

気勢を削がれてしまつたように、レクトは顔をしかめる。なにを言つてるんだ、という文字が顔中に浮かんでいた。

「考へてもみるよ。あたしの『物語』はまだ始まつたばっかだ。自警団の団長になつて子分を山ほど従えるつて夢の前に、『モンスター』の『キング』をぶつ倒すつていう一大行事が待つてゐる

スケール的に順番が違うのではと思わずにはいられないリフィクだつたが、あえて口には出さなかつた。

「今あたしがいるのは、さらにその途中だ。こんな中途半端なところで死ぬわけねえよ。お話にすらなんねえだろ」

その理論で言つうなら世界中の全員が『主役』ということになつてしまつ。誰しも皆、自分だけの物語を持つてゐるのだから。

「……現実は、物語のように都合よくはならない」

レクトはゆるみかけた緊張感は再び引き締めた。

「そりやそうだ。精神論つてヤツだよ。現にあたしには、この状況を一発で逆転できるような都合のいい秘策なんてのはねえ」

なぜかズれてしまつた話の内容が、現実側に立ち戻つてくる。

具体的には言つていないものの、エリスにもわかっているのだ。今まではクローケ・ディールに勝てないといふことが。

「けどな、だからつてあきらめたくねえんだよ。あきらめないかぎ

り負けじゃねえ。……あがく！ 最後の最後までな

エリスは再び、レクトを見た。

彼女は恐らく理想家なのだろう。胸に抱く理想を原動力に昇華させ、何事にも立ち向かっていく。だからその理想に反することはなるべくやりたくないのだ。

たとえ客観的に見て正しいことであつても。

「最後つてのはこんなところじゃねえだろ。……勝とうぜ、レクト。リフイクもな」

自分はカヤの外だと勝手に思い込んでいたリフイクは、不意の視線と言葉についドキリとしてしまった。

「みじめつたらしくてもいいじゃねえか。身がちぎれようが食いついて、地べタ這いずつて、泥まみれになつて、あがいて、もがいて、かつこ悪いって笑われても……それでも勝とうぜ」

『モンスター』と人間の力の差を、エリスは我が身をもつて知つている。それでなお、こんな言葉が出てくるのだ。

幼なじみながら、時として彼女がとてもなく遠い存在に思えてしまうレクトである。

「もしそこまでやつても勝てねえようなら、三人一緒に死んでやりやあいい。あたしにできねえつてことは、世界中の誰にもできねえつてことなんだからよ」

エリスは言葉とは裏腹に、快活に笑つてみせた。

明確な活路はなくとも途方に暮れる必要はない。そんなことを主張しているかのような表情だった。

リフイクは自分も勘定に入つてゐることに気が付き、やや肩を落とした。ありがた迷惑とはまさにこんな時に使う言葉なのだろう。

「……勝つ。当然そうだ。俺も勝つつもりでいる。だからこそ、この場は……」

退くべきだ、と続けよつとしたレクトだが、突然その言葉を飲み込んでしまった。

はつと気付いたのだ。

一連のやり取りを眺めていたクローケ・ディールの雰囲気が、ガラリと変化していたことに。

今まで楽しむように笑っていた顔が、いつのまにか興を失つた
ように冷めきつている。

「なかなか良い余興であつたが」

口調もそれに伴い、低く鋭くなつていた。

「わしもそろそろ眠くなつてきた。幕引きといこうではないか」
しかし一番の変化は表情でも口調でもなく、ディールからにじみ
出る気配だった。

徐々に高められていくそれは、殺意。まるで野生にはびこる獸が
まとう殺氣そのものだった。

リフィクの背中を冷たいものが走る。

感覚的に悟つたのだ。ついに『ボス』が本気になつたと。
それはエリス、レクトも同じだった。

戦慄。

意識無意識とは違う本能的な部分が、命の危機だと叫んでいる。

「夜伽代わりには楽しめたぞ」

ディールが足を、一步踏み出す。ズシリ、という重厚な震動が、

有無を言わせず三人の足腰を揺るがせた。

体の大きさだけではなく、存在そのものが圧倒的な迫力をかもし出
している。

「……これが本物の『モンスター』つてヤツか

エリスはヒタイに汗を浮かべながらも、恐れ知らずに笑つてみせ
た。

「抗い甲斐があるじゃねえか……！」

ちょうどその時、であった。

彼らがこの場へやつてきたのは。

それに最初に気付いたのはディールだった。

他の者に比べ精神的に余裕があつたからだろう。

「ほう。まだ仲間がいたか

ななめ後方へ振り返り、部屋の出入口を見やる。通路から部屋へノックもなく入ってきたのは、若い男女のふたり組だった。ディールにとつては知らぬ顔の人間だが、エリスたちにとつては見知った顔である。

ハーニスとリュシール。

「てめえら、今さらノコノ口出できやがつて……！」

叱責するようにぼやくエリスとは対称的に、レクトとリフィクはわずかに胸をなで下ろした。

この危機的状況で味方が増えたのは、単純に心強い。

「おや。『ご期待に反してしまったのなら、お詫びします』

その場にそぐわないどこか軽妙な口調を飛ばしながら、ハーニスは部屋の中を進む。

「ただ私としては予定の範疇でしたが」
エリスたちとクローケ・ディールと、正三角形を描くような位置でその足を止めた。つれあいの黒衣の女剣士は、やはり人形めいた面持ちで彼の背後にピタリとついている。

「このアジトにのさばる『モンスター』共をすべて始末していたら、これくらいの時間はかかるだろうと。想定通りでした」

「……なんだと？」

じわり、とディールが反応を示した。

「冗談のセンスが悪いな。人間というの」

「否定はしませんが」

ハーニスはもつともらしく肩をすくめる。

「私の言葉が冗談なのかどうかは、ご自分の部下に直接お確かめになられては……あの世とやらでね」

そしてこれ以上ないというほど不敵に言つてのけた。

彼の言葉を体現するようにリュシールが動く。彼のとなりに並び、小さい動作で剣を抜いた。

知らぬ人間が見れば、命知らずもはなはだしい奴だと思うのだろう。少しばかり知っているエリスたちでさえそう思ったのだから。「無茶だ……」

レクトが呟く。

しかし彼らは、言わば少し前の自分たちである。客観視すると、こうも危なつかしく見えてしまうのだろうか。『モンスター』に戦いを挑むという行為は。

「たぶん……大丈夫です」

レクトのひとりごとに、リフィクが割つて入つた。

「彼らを信じましょう」

「信じる?」

しかし身をもつて強さを思い知った相手である。レクトからすればそう樂観的にとらえることなどできはしない。

「その根拠は……?」

「根拠は……ありませんけど……」

エリスは口を一文字に結んで、にらみつけるようにハーニスらを注視していた。

「やはり人間は、頭の悪い生き物よ」

ディールは鼻で笑いながら、ハーニスたちへ体の正面を向け直す。自然と、エリスたちがカヤの外へ押し出される形になつてしまつた。正対する一体とふたり。

ディールは、石造りの床が崩れてしまつのではないかといふほど巨大な足音を響きわらせながら、ふたりへと歩み寄つていく。もしもただの人間がその光景を正面から眺めていたら、ヘビにのらまれたカエル以上に固まつてしまつていただろう。

しかしふたりは違つた。平然と、身にかぶさる影を見上げている。

「さらばだ」

ディールは無造作に右腕を振り上げ、ハーニスめがけてまっすぐ振り下ろした。

その後。

ディールの視界を、『腕』が横切った。

「……？」

丸太ほどもあるう深緑色の腕が、ドサリと床に落ちる。ディールの頭の中では確実に斬り裂いたはずのハーニスは、しかし、なに食わぬ様子でその場に立つたままだった。

その代わりに、彼のとなりにいたはずのリュシールが、いつのまにか位置と体勢をわずかに変えていた。

振り抜いたばかりのようなロングソードから、紫色の血が滴り落ちている。

なにが起こったのかを理解するのに、ディールは少々の時間を要した。

呆然とする間に、自分の右腕に目を落とす。

先が、ない。

ぼたぼたと血を流している断面があるだけで、途中から先が忽然となくなっていた。

ないはずだ。本来あるべきものは、近くの床に転がっているのだから。

「……なにをした……！？」

直前までの余裕は消え去り、ディールの顔はただただ驚愕で埋め尽されていた。

自分の体を斬り得る者など、そうそういないはずだ。しかもそれが『人間』ともなれば、皆無。未だかつて出会ったことなどなかつた。

豊富すぎる戦果によって築かれた自信も、ヒビを入れられてしまつたらこれほどもろいものか。

ディールは自分でも驚くほど混乱していた。

「貴様が……やつたのか……！？」

しぶり出すような声とともに、リュシールへ視線を向ける。

「ええ、やりました」

答えたのは、彼女ではなくハーニスだつた。

たたみかけるように、短い言葉を言い浴びせる。

「斬り落としました。私のリュシールが。あなたの腕を。ひと太刀で。目にも止まぬ速さで。鮮やかなまでに！」

クローケ・ディールに負けず劣らず驚いているのはエリスたちである。

なにせ自分たちが死力を尽しても傷ひとつつけられなかつた相手を、ああもたやすく斬つてのけたのだから。

「なにをしたんだ……！？」

レクトは知らぬうちに、ディールと同じ言葉を呟いていた。

「あなた方の祖先は、太古の時代、火山の火口の中で生息していた種族であると言われています」

自分の優位を強調するかのごとく、ハーニスは子供のように得意げな笑みを浮かべながら語り出す。

「故に灼熱の溶岩をものともしないほどの、硬質な肌と耐熱能力を持ち合わせている」

リュシールは剣をかまえたまま、ハーニスとディールのあいだに立つてゐる。その様はまるで、主君を守る騎士のようだつた。

「しかし一方に特化すれば、一方に極端に弱くなつてしまふのも自然の摂理というものです。それははるかな年月を経て進化を果たしたとしても、脈々と受け継がれます」

いやにもつたいぶつた言い方は単に彼の趣味なのだろう。

「そこにいるブレイジング・ガールにとつての天敵があなただつたように。あなたにとつての天敵は、高温の溶岩地帯では縁遠かつた

……寒冷。すなわち冷氣」

立ちはだかるリュシールの瞳は、ディールをとらえて離さない。その場のパワーバランスが変化しつつあった。

「氷の剣技『チリーストラッシュ』を扱う彼女の前では、あなたの体など布きれにも等しいのですよ」

ハニースは「ニヤリ」という文字が浮き出るかといつほど、妖しく笑つてみせた。

ハニースの口上を聞いても、ディールはいまいち釈然としなかつた。

わずかとはいえ時間が経ち混乱から立ち直り、冷静さを取り戻したからこそ、釈然としない。

妙だ。

ディールも当然、自分の種族の成り立ちは心得ている。そしてその弱点を突いてくる者とも何度も相対してきた。

だからこそ妙なのである。

今までに受けた冷氣の『魔術』にしろ剣技にしろ、これほど強力なものは滅多に見たことがない。

ディールは探るような目でリュシールを見た。

そもそもこの腕を斬り飛ばすなど、人間には無理な話だ。

どんな剣技を用いようと所詮は人間。そして女。単純に、腕力と重量が足りるはずがない。たとえ斬れたとしても、一刀両断などできるはずがないのだ。

それだけは覆らない。人間と『モンスター』の生物的な格差だ。ではなぜ、現にこうなったのか。

そうして考えをめぐらせていたディールは、自然と、ある結論にたどりついた。

そうとしか考えられない。そう考へば、納得もできる。すべて。部下たちが斬り伏せられてしまつたといつことにも、信憑性が出てきた。

人間でありながら『モンスター』にも匹敵する能力を持つ。そんなものは……。

「よもやと思ったが……貴様、『リゼンブル』か」

それを耳にし、少しだけに目を細めるハーニス。

「『モンスター・リゼンブル』……忌まわしき者共」

「その呼ばれ方は、ひどく嫌いなのですがね」

前に立つリュシールは、眉ひとつ動かさずディールを注視したままだった。

「なんだ……？」

「……『モンスター・リゼンブル』……？」

同じく耳にしたエリスとレクトが、思い思いに疑問を口に出す。聞いたこともない言葉だ。しかし『モンスター』という単語が頭にくついている以上、そのまま聞き流すこともできない。

「……混血種のことです」

が、その疑問はすぐに解かれこととなつた。かたわらのリフィクが、ためらうそぶりを見せながらも説明する。

「つまり、人間と『モンスター』の……」

「まさか!?

「マジかよ!?

再び驚くレクトとエリス。リフィクは「事実です」と念を押すようにならずいた。

驚愕の実態である。人間と『モンスター』の混血種。そんなものが存在していようとは。

……となると自然と、人間と『モンスター』とのあいだで生殖行為が行われたということになる。

「……」

どういった組み合わせであれ、あまり想像したくのない光景である。

「いるのかよ……そんな奴」

エリスは信じがたいといった表情で、臨戦体勢のふたりへと視線を向けた。

「いるのですよ。世の中には」

呴いたつもりの言葉は、しっかりとハーニスの耳に届いていたらしい。

「そういう奇的な連中がね」

なれば自虐的ともとれる言葉が返ってくる。

彼らを見るレクトの目が、あからさまなまでに変質していた。

今のディールには、エリスとハーニスのやり取りを律儀に聞いていられる余裕はなかつた。

やすやすとは動けずにいる。

その原因はリュシール。

剣を構え立ちはだかる彼女の視線が、ディールから余裕を奪い取

つてた。

危険な目。

弱小な奴らだと見ていたエリスたちとは一線を画す危険な奴。敵。命の奪い合いにもなり得る存在。ディールはそう認識を改めた。

だから慎重にリュシールの様子を探つてているのだ。殺意あふれるまなざしで。

「……さて」

ふと、ハーニスが声の調子を一段階上げた。矛先はディールへと向けられている。

「そろそろ心の準備が済みましたか？」

「……なに？」

「彼女の力を持つてすれば、こうして顔を合わせるまでもなく、あなたの息の根を止めることも可能でした」

「冗談とは違う、確信のある口調でハーニスは続ける。

「しかし我々は、あなた方『モンスター』のよつに無慈悲ではあります。死にゆく者にせめてもの優しさ……覚悟を決める時間を与えてさし上げたのです」

彼は笑う。愉快そうに。勝ち誇ったよつに。

それとは対照的に、ディールは不愉快そうに顔を歪めた。

「混ざり者の分際で。調子に乗りある」

「さあリュシール」

『モンスター』の言葉など聞く耳持たずと切り捨てるように、ハーニスは彼女の名前をいとおしく呼びかける。

「彼に引導を」

その言葉に忠実に応えて、リュシールは剣を振りかぶつて床を蹴つた。

ウサギのような駿足さを見せ、瞬時にディールへ肉薄する。

「おおおっ！」

ディールは裂帛の気合い込めて叫び、彼女を迎え討つ。

そのクローケ・ディールは、エリスたちが見てきた姿とはまったくかけ離れたものだつた。

みなぎる闘志、闘氣、殺氣、殺意、戦意、迫力。

それがディールの真の姿なのだ。遊んでいた時とは違つ、『モンスター』としての本性。

体の動きまでもが先ほどとは見違えていた。

巨体をものともしないスピードで、ディールは残つた左腕を腰もとに引く。そして踏み込み、向かつてくるリュシールめがけて矢のように打ち出した。

リュシールはその爪撃を、真正面に剣を立てて防ぐ。

金属同士がぶつかった時にも似た、耳鳴りを伴う高音が部屋中に響きわたつた。

驚きなのは、そこから一秒一秒、両者の動きが膠着していたことだ。

力が拮抗していたのである。

リュシールはふた回りは違うであらうディールの攻撃を、ガシリと受け止めていた。

そこから一步も押させない。ディールも一步も押し進めない。

黒衣の剣士。驚異的な身体能力である。たしかに、並の人間とは地力が違つている。

そこから次の動きに転じるのはリュシールのほうが早かつた。正面で立てている剣の位置をわずかに横にずらし、ディールの左腕を受け流す。

体重を乗せていたぶん肩すかしを食らつたよう、ディールは前のめりによろけてしまつた。

たらを踏んだのを見逃さず、リュシールは一気に奴のふところへと飛び込んだ。

胸元へ、ひと突き。

皮膚の硬さなどまるで感じさせずに、刃は根本まで深々と刺し込まれた。

それは拍子抜けするほどあっけなく、この戦いの終わりを意味していた。

腹部を弱点と見たレクトの観察眼は、あながち間違っているとうわけでもなかつた。

おおよそは合つていた。

手足の再生すらたやすいほどの生命力を持つディールら種族の弱点は、人間と同じく頭部と胸部なのである。すなわち脳と心臓。そこを潰されれば、いかに生命力が高かろうが死に至る。

狙いは合つていた。

エリスとリュシールの、得意とする剣技の違い。そこが両者の戦果を隔てたのだろう。

「へえー……。『モンスター』との混血ねえー……。はー……」

エリスは感心するやら感嘆するやら、リュシールの顔を至近距離でまじまじと眺めていた。

正面から（リュシールのほうが身長が高いため、やや下から、といふことになるが）、右から、左から、後ろから。舐め回すように、無遠慮に視線をはわせている。

すぐ近くには動かないクローケ・ディールが転がっているのだが、どうやらエリスの興味は完全にそちらから外れてしまつたらしい。

「見た目は普通の人間と変わんねえのになあ……」

全方向からジロジロと見られていても、やはりリュシールは表情を変えなかつた。

無感情なままで、どこか一点だけを見つめている。

そういえば彼女とは数日ほど一緒にいるが、喋るどころか、声すらも聞いた記憶のないエリスだった。まさか本当に人形……というわけでもあるまい。

「人とか食つの？」

リュシールを眺め続けたまま、エリスがなんとなく尋ねる。

「とんでもない」

答えたのは、やはりハーニスだった。

「たしかに我々には『モンスター』と同じ血が流れています……が、彼らのような暴虐は好みません」

デイールはリュシールを見て混血種だと言つたが、この口ぶりからするにハーニスもその混血種ということになるのだろうか。

「それに我らには人間の血も流れていますからね。共食いということは、おぞましいことです」

「まあ そうだろうな……」

自分で尋ねたにも関わらず、生返事を送り返すエリス。たしかに彼らに人間を食す嗜好があるのなら、エリスたちなどとつぶにガブリといかれてしまつているはずだろう。

なにせ数日は一緒にいたのだ。睡眠時を始めとした無防備な状態を、何度もなくさらしてしまつてはいる。現にこうして食われていないうことが、なにより物語ついているということだ。

「しかしブレイジング・ガール。少々がつかりしました」

やや強引に話を変えるように、ハーニスがそんなことを切り出した。

あまり自分たちの話をしたくないというのが本音なのだろうか。「苦手な相手であろうとは承知してましたが、それでもある程度は対抗して頂きたかった。あなた方には」「そこそこは対抗してたつての」

「それは彼が遊んでいたからでしょう。気配でわかつっていました。もし彼が最初から本気だったなら……」

そこでエリスは、ようやくハーニスへと視線を移した。そして自慢するように笑う。

「『もし』なんでもんはねーんだよ。アイツがなにを考えてたって、所詮は頭の中の話だ。実際の結果はコレ。あたしは生きてる。アイ

ツは死んでる。つまりあたしの勝ちってことだ」

逆に称賛してしまったほどの結果論である。まるで現実を見ていない。とてもじゃないが、いつ死んでもおかしくなかつた人間の言葉ではないだろう。

「そのポジティブさには感服しますが……勝つたのは彼女です」
律儀というのかめんどくさいというのか、ハーニスは首を振つて反論した。

「そうか？ ならみんなの勝利だな。生きたもん勝ちだ」

無邪氣とも言えるくらいのエリスの笑顔を前に、ハーニスはうつかりこぼすように口元をゆるませた。

他人からはどう見えようと、エリスは常に本心を口にしている。今々の言葉もハーニスからすれば『ちゃんちらおかしい負け惜しみ』であるが、エリスからすれば単にそう思つただけなのだ。

脳天氣と切り捨ててしまつたやういが、実際問題そこまで前向きでいられるのは尋常な精神力ではない。

大物、ということなのだろう。良い意味でも悪い意味でも。

「……おかしな人ですね。あなたは」

ハーニスがそう思う理由はもうひとつある。

表情に真剣さをたたえて、それを切り出した。

「我々の正体を知り、なおも変わらず接しているといつのは……おかしなことなんですよ」

正体、というのは例の『モンスター・リゼンブル』のことなのだろう。

「普通の人間ならば、恐れ、忌み、嫌い、近寄らないものです」

「他の奴はどうだか知らねえけど、別にあたしはどうとも思わねえよ」

エリスは逆に不思議と言いたげに、小首をかしげる。

「あたしが嫌いなのは、威張り散らして人間を食つて、それを楽しんでるような手合いだ。あんたちは、まあ気に食わねえ部分もあるが、奴らと同じつてふうには見えない」

だから正体とかはどうでもいい、と付け足して、エリスは見解を締めくくつた。

真面目な顔で聞いていたハーニスは、力を抜くように、再び笑みを浮かべる。

「本当に面白い方です、あなたは」
しかしすぐさま真面目な表情に戻し、
「ただ……」

エリスの後方へと目線を動かした。

「あなたのお仲間は、そう思つてはいないようですが」
目線の先では、レクトが今にも矢を放とうと弦を引き絞つていた。

臨戦体勢である。

レクトの瞳からは、ありありとした殺氣が立ち上っていた。

指の力をほんの少しでもゆるめれば、たちまち矢は発射されてしまう。その狙いは正確にハーニスへと定められていた。

「なにやってんだよ？」

まるで食事中に同席者がうつかり皿をひっくり返してしまった時

のような軽い口調で、エリスが尋ねる。

どうして『なんかを構えているんだ、と。

「お前こそなにをやっている…」

しかし返ってきたのは、対照的な罵声にも似た声だった。

「忘れたのか！？ 村を襲い、皆を苦しめ殺し続けていたのは、他

ならない『モンスター』だぞ」

「そりや忘れるわけないだろ」

「ならば離れる。『モンスター』と同じ血を引く、そんな奴らから

は……！」

「あー……？」

エリスは、ため息のような疑問符をこぼす。

その横から、肩をすくめたハーニスが皮肉っぽくさわやこった。

「これが普通の反応です」

エリスとレクトは、完全に意見を一分していた。

『モンスター』は害悪なれどハーニスら自身には関係がないと感じるエリスに、害悪な『モンスター』の血を受けたハーニスらに嫌悪感を抱くレクト。

感性の問題だ。恐らくどちらが間違っているといふことでもないのだろう。

だがそれだけに、両者の隔たりは天と地ほども大きい。

リフィクはそんなレクトのそばで、止めようにも止められず、中途半端におろおろしているだけだった。

「まあ、あんな奴のことは放つとけ」

バ力に付き合つてられない、とでも言いたげ早々に興味から外して、エリスは再び彼らへと体を向き直した。

「無理難題を」

しかし今にも射抜かれようとしているハーニスとしては、そう簡単に放つておける問題ではなかつた。

「とりあえずあんたらふたり、あたしの子分になれよ」

だがそんなことなどお構いなしに、エリスは自分の望みを一方的に切り出した。

「エリス！」

すかさずレクトから抗議が飛んでくる。

どちらから対処していいのかに悩み、ハーニスは少しだけ言葉を詰まらせた。

「……リュシール」

とはいえ、危険のありそうなものを先に対処しておぐのがベターな選択だらう。

彼のひとことでそんな心情をすべて悟つたのか、リュシールはたちどころにレクトめがけて突撃した。

まさに風のような速さで疾走する。

レクトは向かつてくる彼女へ素早く狙いを移して、迷うことなく指を放す。

飛んだ矢は、しかし、サヤから抜き打つたロングソードによつてあつさりと弾かれてしまつた。

リュシールは返す刃で、レクトに斬りかかる。

振り抜かれる剣。それが斬り裂いたのは、レクトの手に収まつていた。「だけだつた。

「……！」

見事なまでに、まつぶたつ。これではもはや使いものにならない

だろう。

彼女の動きの鋭さに、ただただ息を呑むしかないレクト。ついでにリフィクも息を呑む。

リュシールはそれで役目は終わったと言いたげに、剣を収めてハーニスのもとへと踵を返した。

行きとは対照的に、堂々たる様子で歩く。

「君の虜だよ、リュシール」

「まつ、お前じゃ勝てねえよな」

それらを見ていたふたりから、別々のふたりへ、ささやかな感想が投げかけられた。

「さてブレイジング・ガール。先ほど、なんと言いました？」

一方を手短に片付け終わり、ハーニスはもう一方に取りかかる。

エリスは、

「その変な呼び方やめろよ」

と無駄にトゲのある前置きをしてから、仕方なく先ほどの言葉を繰り返した。

「だからあたしの子分になれって」

「……あなたの『冗談は、時として面白くない場合がありますね。今とか』

ハーニスは一笑して跳ね飛ばす。が、エリスとしてはかなりの領域で本気だった。

「別に冗談つてこたあねーよ。そっちの無口な姉さんが強いのは認めるし、そういうところ含めて気に入った。だから子分になれよつったんだ」

相変わらず横柄な物言いである。もつ少し態度と言葉のチョイスが違つていたら、結果も変わっていたかも知れない。

ハーニスはうんざりするように、眉をひそめる。

「……ガール。あなたが『彼女』の子分になるというのなら、話は別ですが」

「そつちこそ、つまんねえ冗談言つじやねえかよ」

エリスの理不尽な要求など、普通に考えれば通るはずがない。

うつかり通してしまったリフィクが恐ろしいほどマヌケだったといふ、ただそれだけのことだ。

「とにかく、我々はあなたの誘いを受けません。丁重にお断わりします」

リュシールが戻ってきたのは、ちょうどそんな時だった。彼の近くで、控えるように立ち止まる。

「断わるつてのかよ」

「ええ、断わります」

「そうかい。じゃあ、断われないようにするしかねえな！」

言いながら、エリスは素早く剣を引き抜き、リュシールめがけて斬りかかった。

激しく火花が散る。

エリスより何段階も速く、リュシールが抜き打つて迎撃した。

「おおつと！」

弾かれた勢いに踏みとどまれずに、エリスはその場でコマのよう

にクルリと回転してしまった。

「……なんのつもりです？」

理解に苦しむように、眉根を寄せせるハーニス。

ひと回転したエリスは、剣を構え直してそれに答える。

「簡単だよ。勝負だ。あたしが勝つたら、あんたたは大人しくあたしの子分になつてもらう。そういうつもりだ」

「いいかげんにしろ、エリス！」

再び、レクトが怒鳴り声を飛ばした。

しかしエリスは聞き入れない。

彼女の意図を理解し、ハーニスは呆れたように目を細めた。

「勝つ……？ 私のリュシールに、あなたが？」

その声には、多少のイラ立ちが含まれているような気がした。先

ほどまでの親和的な雰囲気がナリを潜めていく。

「それ以上『彼女』を愚弄するつもりなら……思い知つてもらいますよ。その身を持つて」

リュシールは彼をかばうような位置に移り、いつでも剣を振れる体勢を維持していた。

「別に愚弄だのなんだのをする気はねーよ。もうどちらも剣を抜いてんだ。さつさとやつちまおうぜ。わかりやすくな」

口元には笑みを浮かべてゐるもの、エリスの目は真剣そのものだった。

本気で、この賭博のような勝負が成立すると思つてゐるのだろう。「……よろしいでしょ。どうやらあなたは、言葉ではなく行動を持つてしか納得のできない気質らしい」

ハーニスは、やれやれと言わんばかりの様子でその要求に応えてみせた。なんだかんだでノリの良い奴である。

彼は視線を、リュシールの背中に移す。

「君の力、彼女に刻みつけてあげようか。……ただし、一撃だけでいい。殺す必要はないよ」

リュシールは返事もしなければ、うなずきもしない。しかしハーニスが言い終わつた瞬間、彼女の周囲の空気が、音を立てるかといふほど急激に変化した。

至近距離で正対しているエリスは、それを肌で感じ取る。まるで空気が温度を下げるようだつた。

突き刺さるほどヒンヤリとし、体の熱を奪つていく。吐いた息が白く残るような錯覚さえ覚えた。

鬼気迫る、というのはこんなことを言つのだらうか。

「一撃なんてケチなことぬかしてねえで、ことんやりつけ」

しかしこちらは、鬼をも恐れぬエリス・エーシュルである。

「そうしなきや納得できねえだろ? お互いにさ」

挑戦的に歯を見せながら、剣を振りかぶつて先手を取つた。

勝負は、一撃で決した。

剣をなかばから碎かれ、胴を派手に斬り裂かれ、エリスはもんと打つて石の床に叩きつけられた。

「そういえば、我々が勝った場合の条件を聞いていませんでしたね」「エーシェルさんっ！」

事実上の勝利宣言をするハーニスに構うことなく、リフイクは切迫した声を上げてエリスに走り寄る。

倒れた彼女を見て、息を呑んだ。

大きく斬り裂かれたはずの胴体からは、血が一滴たりとも流れていなかつた。

傷口が凍りついていたのだ。

通常ならば即死とも思えるほどバッサリとやられた斬傷に、まるで止血処置のように氷が張りついている。

これもリュシールの剣技とやらによるものなのだろうか。しかし出血は皆無なもの、当のエリスは声にならない声を上げながら激しいまでに身悶えていた。

傷に張りついた氷が、徐々に広がっている。それが恐らく内側：体の内部へも侵食しているのだろう。

氷のむしばみ。その苦痛は尋常ではないはずだ。

「ヒーリングシェア！」

リフイクはすぐに『治癒術』の行使を試みる。

それによつて氷の侵食はなんとか止められたが、傷の治りは普段と比べて明らかに遅かつた。

その『氷』が術の作用を妨害しているのだろう。なんとも厄介な技である。

それでもリフイクは、懸命に『ヒーリングシェア』を唱え続けた。そんな光景を横目に、レクトは険しい表情でふところからナイフを取り出す。

現在、彼に残された武器はそれだけだつた。

ナイフを剣のよつに構えて、ハーニスたちに向き直る。

「……今すぐ去れ」

「脅しのつもりですか？」

ハーニスが肩をすくめて苦笑う。

「それともあなたも、私のリュシールと勝負するおつもりで？」
「そんなつもりはない。だが、意地だけは張り通させてもらう」
レクトの目からは、強い意志があふれ出ていた。相手が誰であろうと一步も譲らない、それほどまでに強い拒絕の意志が。

緊迫する空気。

その瞳を正面から受け。

「……いいでしょ」

いくばくかの逡巡を見せたのち、ハーニスは深く長い息を吐いてそう答えた。

「我らとしては残念ですが、その無謀さに免じて大人しく退散することにします」

やけにあつさつと受け入れたのは、レクトとしても少々意外だった。

「……そう言われるのは、慣れていますから」

ハーニスは目を伏せ声色を落とし、うら寂しげに言葉をもらす。
それは彼が一瞬だけ垣間見せた本音の部分なのかもしれない。

しかし、そんなそぶりも一瞬だけだった。すぐに目線を上げ、リフイクに顔を向ける。

「ヒーラー」

恐らくリフイクのことを呼んだのだろう。

「我々と共にに行きませんか？」

「……！」

彼の言葉を聞き、リフイクとレクトが同時に驚く。リフイクはつい『治癒術』を中断し、見開いた目でハーニスを見た。

「私から見るに、彼らは危つい。危険を危険と判断できない子供のようだ」

皮肉を言つてこるとこつよつけ、まるで身を心配しているような言い方だった。

「我々と同行するのなら、そいつが肝を冷やすことにはならないと保証できます」

「……せっかくですけど」

リフィクはすぐさま顔を戻し、治療に専念する。

「僕は、あなたたちとは行きません」

申し訳なさそうに示されたのは、否定の意志。レクトは内心ホッとする。

ハーニスは「残念です」とだけ言い残して、前言通りに踵を返した。

田を覚ましたエリスが最初に見たのは、武骨な石の壁だった。

「……やつてくれるぜ……あの姉ちゃん」

しゃんとしない意識の中、上半身を起します。

すぐとなりに、眠つているとおぼしきリフィク。そして少し遠くに、転がっているクローケ・ディールが見えた。

徐々に意識がしつかりとしてきたところで立ち上がり、辺りを見回してみる。

わざわざ見回すまでもなく、そこはティールと一戦やらかした例の部屋のままだった。

「……もうちよつとうまくいくと思つたんだけどな」

呟いた言葉を聞く者はいない。

「ちえっ……」

扉が壊れたバルコニー部分から見える窓は、うつすらと白んでいた。朝……なのだろうか。

次にエリスは、自分の体を見下ろしてみた。たしかリュシールに、剣ごとバッサリやられてからの記憶がない。服こそ切れているものの、その下の体自体はキレイだった。無傷。傷跡すらない。

エリスは眼下のリフィクをチラリと見てから、見当たらないうつひとりを探すべく、再び周囲を見渡した。

「中を見て回つてきた」

レクトが戻ってきたのは、エリスが目覚めてほどなくだった。

「大量の『モンスター』の死体があった。……奴らがやつたんだろう」

「……」が憎々しく一コアンスを含ませながら、皿にしてきたものを報告する。

「……」といえば、ディールと対峙した時にハーネスがそんなことを口にしていた気がする。

自分が気を失っていたあいだの状況と筋内部の状態を聞き終わつた頃には、すっかり太陽が顔をのぞかせていた。

エリスは大きくのけぞつて、ぐうーっと体を伸ばす。

「とりあえず、あの村にでも戻るつぜ。いつまでもこんなトコにいてもしょうがねえしな」

「……エリス」

「いつになく真剣さをただよわせた様子で、レクトが切り出す。

「折れた剣は直せばいい。傷ついた体も、また治せばいい。だが、それを治してくれる人にも限りがあるんだ」

言外に指しているのはリフィクのことだ。

リフィクはかなりの長時間、エリスの治療を行つていたらしく。それほど厄介だったのだ。あの氷の剣技は。

そして体力を使い果たし、倒れるように眠つてしまつた、と。

戦闘中からしてもそうである。彼がいなければ、今のエリスはないだろう。

「だからこれからは、あまり無茶をするな」

その口調は、まるで子供にやさしく言い聞かせる保護者そのものだつた。

「……わかってるよ、そんなことは」

エリスはめずらしくも殊勝に、その忠告を受け入れた。

「けど、これから先どうなるかなんてのはわかんねえ。その時になつてみなきやな」

怒られてすねる子供のよう、口を尖らせた。

「こうしたいつて思つてもガマンするようなのは、ちつとも楽しい生き方じゃねえ。お前はどうだか知らないけど、あたしはゴメンいうむる」

「抑えるとは言わない。周りと、少し先のことを見てくればいい。それで充分だ」

物腰やわらかく、肯定的に願い出るレクト。

エリスの性格上、強く言つても逆効果なのだ。幼い頃から変わらない。真に聞かせたいことがあるなら、下手に出る。それに限る。

戦闘中のことも、レクトがもう少し冷静だったなら、そういった言い方を考える余裕もあつただろう。今とは展開が違つていたかもしれない。

しかしすでに終わつたことだ。「もし」なんていう有りもしないことを考えていてもしょうがない。レクトも、その点はエリスと同意見だつた。

初めて直面した状況につまく対応できなくて仕方のないこと。ただ、次に同じテツを踏まなければいいだけなのだ。

エリスは面倒くさそうに、息を抜く。

「……覚えてたら、そうするよ」

エリスとレクトが両側から肩を支えて運んでいても、リフィクは一向に目を覚まさなかつた。

『魔術』使用の消耗というのはそれほどまでに激しいものなのだろうか。

高い頻度で休憩を挟んでいたせいか、例の森の中の村にたどりついた頃には、すっかり日が傾いてしまつていて。

ちなみにリフィクはまだ眠つたままである。

三人が戻つたことは、すぐに村中に広がることとなつた。出て行つた時と同じように数十人の村民が、村の入り口でエリスたちを取り囲む。

代表として歩み出たのは、やはりあの時と同じ壮年の男性だつた。

「村長だ」

「村長だつたのかよ！」

「まさか無事に逃げ帰つてくるとはな……てつきり『モンスター』に食われてしまつてゐるかと」

「誰が逃げ帰つたつてんだよ。奴らのアジト知つてんなら行つてみろ。みんな死んでるから」

簡潔に事実を述べるエリス。さすがにアレを自分がやつたとまでは言わなかつたが。

それを聞き、村人たちがざわざわと驚き始める。

「本当なのか……！？ いや、しかし、そんなことが……」

その中でも、一際驚いていたのは村長らしき男性だつた。

皆をまとめる人間として、『モンスター』の手強さを最もよく思はれられたからだつ。にわかには信じられないのだ。

「だから行つてみろつて。若い奴ならパツと行つてパツと帰つてこられるだる」

そんなエリスのひとことに背中を押されたのか、村長は後ろに引つ込み、住民たちとなにやら話し始めてしまつた。

自然と孤立する三人。完全にカヤの外だ。

「おーい！」

エリスは自分の存在を主張するかのように呼びかける。

「そんなんどうでもいいから、とりえずどつか休めるところ貰せよ。こいつをこのまんま野ざらしにしどくつもりか、お前ら」

こいつ、とは、依然として意識を失つたままのリフィクのことだ。草の上とはいえ地面に仰向けに転がしてある。

だがエリスの言葉は彼らには届かなかつた。それどころではないのだ。

近くから『モンスター』がいなくなつたとなれば、生活そのものがガラリと変わる。もう奴らのために、身を削つてまで食料集めに奔走しなくとも済むのだ。

気持ちはわかる。

わかる、が、それで納得するようなエリスではなかつた。

無視されたことに頬をふくらませて、文句の十や百でも言つてや

らうといきり立つ。

「それなら、私の家に来るといい

エリスが行動に移る寸前に、そんなやさしい言葉が投げかけられ

た。

村人たちの輪を迂回して三人のもとへやつてきたのは、ひとりの老齢の男性。

それはハーニスらと出会つた場に居合わせていた、この村で唯一話相手になつてくれたあの老人だつた。

「ひとり暮らしには持て余す家です」

「助かる！ ジィさん

「ありがとうござります」

手厚い親切に、深く礼を言うエリスとレクト。

どっぷり話し込んでしまつている村人たちをよそに、ふたりはリフイクの体を再び持ち上げた。

深き森の中を、静かに歩く男女がふたり。

頭上高くで折り重なつた枝葉が、太陽の光をほとんど遮断していつた。

「困つた子だつたね、彼女」

男。ハーニスが、微笑みながら語りかける。

女。リュシールは、相づちも打つことなくただ彼のとなりを歩く。「彼女……エリス・エーツェルなら、僕らを理解してくれたかもしないのに。残念だつたよ」

彼は無反応な彼女を、特に気にすることなく語りかけ続ける。ふたりのあいだでは、それがごく自然な光景なよつ。

「けど……僕らは共に、『モンスター・キング』を討とうとしている。目的が同じ以上、また会うこともあるかもね」

ふとハーニスは足を止め、彼女に顔を向けた。
「もしもつ一度会つたら」

ピタリと彼女も立ち止まり、彼の目を見る。
ふたりの視線が熱っぽくからみ合つた。

「その時はどうしたい？ リュシール」

破壊が好きだ。

殺戮が好きだ。蹂躪が好きだ。攻撃が好きだ。殺傷が好きだ。断絶が好きだ。

悲鳴を聞くのが好きだ。苦しむ様を見るのが好きだ。悲しむ様を見るのが好きだ。怒り狂う様を見るのが好きだ。怯える様を見るのが好きだ。もがく様を見るのが好きだ。息絶える様を見るのが好きだ。

未来を奪うのが好きだ。希望を奪うのが好きだ。夢を奪うのが好きだ。物を壊すのが好きだ。物を崩すのが好きだ。物を消し飛ばすのが好きだ。物が積み重ねてきた歴史を消し去るのが好きだ。形あるものを破壊するのが大好きだ。

トヨループは心の底からそう思つていた。

彼は、この世界で最も差別はしない者であると言つても過言ではない。

人間も、同胞『モンスター』も、混血種も、動物も、そしてこの大地も。命あるもの無いもの関わらず、彼にとつて自分以外のすべては破壊の対象でしかないのだ。

故に『モンスター』によく見られるような、群れや集落に混ざることはない。手下を引き連れることもない。

己の身ひとつで。

定住も永住もせずに、この世界を渡り歩いている。
そして目をつけたすべてのものを破壊して回るのだ。

差別はない。区別もない。見境いもない。ただ破壊する。自分が快樂を得るためだけに。

それは眞の意味で『モンスター』らしい生き方と言えるだらう。

そんなトユループであるが、なるべく破壊しないと決めているものがいくつかあった。

強者。そのひとつがそれである。

気ままに放浪し破壊をし続けていれば、戦いになることも少なくない。

その中で出会った強者。最低でも自分に血を流させることのできた相手には、トユループは好意に近いものを感じることがあった。彼の力の前では、大抵の者は言葉通りの瞬殺をされてしまう。そんな中で攻撃をしのぎ、なおかつ反撃し、ダメージを貰えてくるような希有な敵。

そういう強者をトユループは気に入るのだ。
しかしやはり、そういうわけではない。ここ最近で出会った中では、たったのふたりだけだ。

混血種の、若い男女のふたり組。

男の放つ『魔術』と女の扱う氷の剣技が見事に合わさり、トユループは多少の手傷を負った。

勝つこと自体はたやすくはなつたが、トユループはそれで満足し、戦いもなかばにあつさりとその場をあとにした。
たまにはそうして、「戦いごっこ」というものもしてみたくなるのだ。

故に生かしておぐ。またのちのちの遊び相手とするために。

今日も今日とてトユループは行く。
気ままに、気まぐれに旅をする。
焦土と化した地の上空から咲笑が聞こえてきたら、それはきっと彼のものだらう。

第一章「消し去れ！ デイストラクトレイ」（1）

パルヴィー・ジルヴィアの胸は、興奮と緊張で高鳴っていた。年頃は十代の後半。うら若き……などといつ言葉も似合つ、まだ未熟な少女である。しかし彼女の格好は、同年代の少女たちと比べてさぞか風変わりだとと言えた。

セミショートの髪を覆う額当て。軽量さと頑丈さを兼ね備えた白銀色の胸鎧。左腕には小型の盾を付け、腰元にはショートソードをぶら下げている。

彼女を見た十人に九人が、その姿を『騎士』と思うだろう。

ちなみに残りのひとりは、単なる演劇の出演者だとも思つかもしれない。まだまだ若い顔や体つきとのギャップがそう思わせる。草原の端の木陰で、パルヴィー・ジルヴィアは立っていた。正確には待つていて、と言つべきだらうか。

彼女の近くには、彼女と同じ格好をした、もうふたりの人間がいた。

ひとりは女性だ。

束ねた長い髪に、秀麗な顔立ち。年齢は三十の真ん中を過ぎた辺りなのだが、本人の前ではもっぱら禁句となつてゐる。

最後のひとりは、パルヴィーの父と言つても通用しそうな年代の男性である。女ふたりと並んでいると、さすがに桁違いの体つきを誇つていた。

三人の格好の違いは、それぞれほんのわずかな部分だけである。鎧もその下の衣服も武器も、示し合わせたように『デザインが統一』されていた。

「……そろそろ現れる頃よ」

女性が、芯の強い声で仲間に呼びかける。

男性は低く「ああ」とつなずき、パルヴィーは、
「腕が鳴りっぱなしです！」

と、『二』かはしゃいだ声で、待ちきれないよつてに剣に手をかけた。

「なあー、よー、そもそも『モンスター・キング』つてのはどーじてんじるんだ？」

まるで草の海とも呼べるほど広大な、草原地帯。かかる橋のよう
に伸びる街道を進む荷馬車の上から、氣だるげうな声が投げかけら
れた。

手綱を握る中年男性。そのとなりに座る僧侶じみた若い男、リフ
イク・セントランは、まばゆい青空を見上げながらぼんやりと答え
た。

「ど二じてんじるんでしょうね……」

彼の金髪の頭が、背後から伸びてきた足にゲシリと小突かれる。

「……『ルル・リラルド』とこうところにいる、とこうのは聞いた
ことがあるんですけど……」

リフィクは頭を押さえながら、弱々しく弁解した。

「それがどこにあるかまでは知らないんです」

再び足が飛んでくる。

「舌かみそうな名前つ！」

「それは僕のせいじゃないですよつ……」

馬車の荷台には、主に織物の詰まつた木箱がびっしりと並んでい
た。それらが布とヒモで、丁寧に固定してある。

その上で、エリス・エーツェルはだらしなく寝転がっていた。
外にハネた短い茶髪。下着と混合しそうなほど丈の短い白いタン
クトップに、これまた丈の短い緑色のショートパンツ。

相変わらずといふのが、なんといふのが、健全な男には目の毒な

格好である。

ただ。大きな町に向かう途中だといつこの荷馬車に快く乗せてもらえたのは、もしかしたらそんなエリスのファッションセンスのおかげかもしだが。

「今の俺たちに必要なのは、共に戦ってくれる仲間だ」

行儀の悪いエリスとは違いちゃんと座っていた青年、レクト・レイドが、真剣な口調で切り出した。

「何回するつもりだよ、その話。別に取り立てて必要つてほどでもねーつて」

エリスの抗議も取り合わず、話を続ける。

「繰り返すのはお前が真面目に聞かないからだ。いいかエリス、お前の力はたしかに強い。だがその力は、さしづめこの馬と同じなんだ」

レクトは人差し指で、せつせと歩く一頭の馬を指し示した。

「はあ？」

「人を乗せるなら鞍が必要になる。荷物を運ぶなら荷車が必要になる。力だけあっても、それを有効に使えなければしょうがないだろう」

「……説教くせえところは母親似だな。そういうのはガキの頃に聞き飽きてんだよ」

エリスはスッと話をすり替える。舌先三寸では彼女に分があった。「村の外で遊んでもガミガミ、夜遅くまで起きてでもガミガミ、メシで嫌いなもん残してもガミガミだ。あたしのこと目の仇にしてんだよ、ブリジッタ・レイド」

「こうなつてはこれ以上なにを言つても効果なしかと悟り、レクトは小さくため息をついた。

「……当然だろ。お前が心配をかけるようなことばかりをして、なおかつ聞き分けがないから言い方も強くなつたんだ」

「ガキの頃だけならまだしも、あんにやううこの前まで言つてやがつたんだぜ？『そんな肌を出した格好をするもんじやない』だの

『もつとキレイな言葉遣いをしなさい』だの。いつちの勝手だつてのに』

まあ、レクトの母親でなくともなにか言いたくはなるだろ。エリスのこの惨状をまのあたりにすれば。

ふたりのやり取りを、リフィクと御者は微笑ましい表情で聞いていた。

「……けど。あのうるせえ小言も、聞けなくなつたらなつたでなんかアレだな」

エリスはほんのわずかに声のトーンを落とす。素直に寂しいとは言わない辺り、真性の意地つぱりな証であろう。

それに応えるように、レクトは目を細めて彼女を見た。

「そうだな。俺たちは村の中の世界しか知らなかつた。いつも近くにあるのが当然だと思つて、今まで深くは考えていなかつた」

村を離れた経験はない。家族同然に接してきた村人たちと離れた経験もない。

あるとすると、まだほんの子供の頃。『モンスター』も知らなかつた昔に、村の外へ遊びに行き、夢中になつてそのまま野外で夜を過ごしてしまつた時くらいだ。

一日ほどである。それ以降は大人しく村の中で遊んでいたし、成長してからはずつと自警団として戦つていた。

レクトとしても、寂しく思う気持ちがないと言えばウソになる。だがそれを凌駕するほど、強い思いが胸にあるのだ。

「……いつか帰ろつ。必ず。『モンスター』の『キング』を討つて、もつ一度と村が危険にさらされないようになつたら」

無論、『モンスター』以外にも危険というのは山ほどある。だが目に見えて最も厄介なのは奴らに他ならない。

無慈悲な破壊者たち。

たとえ故郷の村でなくとも、同じ人間が奴らに苦しめられているのなら、放つておくわけにはいかない。可能な限り助けたい。

それはレクトの中にある、衝動にも似た感情だった。

「そうだろう? エリス」

「当たり前だろ、んなこと。今さら言つまでもねーよ」

エリスは寝転がった体勢のまま、歯を見せて笑顔を作つてみせた。

道の起伏に合わせて、荷車が小さく上下する。そんなところで横になり、暖かくやわらかい陽射しが降り注いでいるとなれば、否応なく眠気が湧き上がつてくるというものだ。

馬車が目指す大きな町はおろか、途中の村に着くのにさえ、まだだいぶかかるらしい。

特に面白いことがあるわけでもないので、エリスの意識はどこか遠くをさまよつていた。

心地良さそうにまどろんでいる。

狭い荷車の上で体勢を変えるたびに、徐々に彼女の衣服が乱れていく。ただでさえ丈の短いタンクトップは、もはや、性格とは対照的な控え目なバストが見えてしまいそうなまでにめぐれ上がつていた。

レクトはそれを注意してやるべきか、そつと直してやるべきか迷つたが、誰も見ていないならいいかと放つておくことにした。呆れるようにため息を吐く。

荷馬車が大きく揺れたのは、そんな時だった。

二頭の馬が、突然暴れ出したのだ。

前足を大きく跳ね上げ、悲鳴のような鳴き声を上げる。なにやら異様な興奮状態にあつた。

御者が手綱を引いて落ち着けようとするも、なかなか治まらない。レクトはバランスを保つていられずに、たまらず荷車から飛び降りる。エリスは寝たまま地面に転がり落ち、ぐえつ、というカエルのような声を上げた。

「なつ、なにがあつたんですかっ!?

御者席でうたた寝していたリフィクも、異常に気付いてうろたえ

る。

そんな中で御者の男性だけが、特に慌てる」となくも馬を静めていた。

「なんなんだよ！ いきなり！ ここの馬共はっ！」

砂を体中につけたエリスが、ややあつて静かになつた馬車に飛び乗りながら、激しくタンカを切る。

その怒鳴り声で馬が再び暴れ出してしまっては……と、う配慮は一切なかつた。

「ああ、すまなかつたね。ケガはなかつた？ よくあることだよ」

御者は苦笑いしながら、ほがらかに弁解する。

「ここの近くには『奴ら』の住みかがあるから、ここにいらも齎えちまうのや」

今や一頭の馬もすっかり大人しくなつていて、これも熟練がなせる技なのだろうか。

「前に何度も出くわしたことがあつて……その時のことを思い出すんだらう」

「奴ら……？」

街道上で停止している荷馬車。自然と見上げるよつた体勢で、地面からレクトが尋ねる。

「『モンスター』だよ」

その答えを聞き、エリスの顔がこれ以上ないといつほど輝いた。

「狙いました……スラッシュショット！」

白銀色の鎧をつけた少女が、手持ちのショートソードから鋭い衝撃波を撃ち飛ばす。

「続けてっ」

少女は風見鶏のようにクルリと回転して、間髪を入れずに再び剣

を振った。

「クロスショート！」

幅広と縦長の二種類の衝撃波が十字に組み合わさり、『シカ』に酷似した頭の『モンスター』を斬り伏せた。

その背後では。

「リジエクションファイールド！」

同種族の『モンスター』の攻撃を、凛々しい女性が『光の壁』で防いでいた。

奴の剣が、まるで本物の壁に阻まれたように、女性の目前でピタリと静止している。

『モンスター』がどれだけ力を込めても武器は通らない。

「ぬん！」

その横手から飛び出した男性が、大斧で、女性の眼前の『モンスター』を豪快に叩き斬った。

大草原の外れでエリスたちが目撃したのは、そんな光景だった。

馬車の御者に『モンスター』の住処らしき場所を聞き、乗せてくれた礼を言つて別れ、しばらく進んだといひで……それに出くわしたのだ。

十数体の『モンスター』に囲まれながら戦つ、同じような格好をした三人の人間。

彼らは決して個人個人が孤立しないように立ち回り、見事な連携で『モンスター』らに対抗していた。

洗練された戦法。

ひと目で戦い慣れているということがわかつた。

「どうして……！？」

リフィスクが困惑するように声を詰まらせる。なぜ『モンスター』と戦っている人間がいるのか……不思議に感じているのだろう。

しかし他のふたりは、特に不思議とも思つていなかつた。

「強いな。どういう人たちなんだ……？」

「終わつてから聞きやあいいさ。それより、ひとつとあたしらも加わろうぜ」

レクトとエリスは荷物を置き武器を取り出し、着々と戦闘準備を整え始めていた。

リフィスクがふたりのほうを見た時には、すでにそれは済んでいた。

「オーバーフレアあつ！」

『シカ』のような頭部をした『モンスター』が、背後から焼き斬り裂かれて地面に倒れる。

「なつ、なに！？」

そんな光景と、乱入してきたエリス・エーチェルの姿を目にし、

少女騎士パルヴィー・ジルヴィアは思わず上ずつた声をこぼした。

突然の乱入者に驚いたのは、彼女だけではなかつた。

彼女の仲間の男性、女性、『モンスター』たちに至るまでその場の全員が一瞬だけ止まる。

「ようよう。ずいぶん楽しそうなことやつてんじゃねーかよ、お宅ら。あたしも交ぜろよ」

エリスは挑戦的に笑いながら、堂々とした足取りで戦場を横断する。

まるで仲むつまじいカップルにからむチンピラのようなセリフは、この際どうでもよい。

文字通り一瞬後には、激しい集団戦が再開されていた。

襲いかかる『モンスター』。それに抗戦する三人とひとり。

「なに……？ 誰？」

距離的に一番近いところにいたパルヴィーが、『モンスター』の振るう大剣をヒラリヒラリと避けながら、見知らぬエリスに問いかける。

余裕があるといつよりは、単に肝がすわっているだけであつ。そんな彼女に横つ腹を向けるような位置取りで、エリスは飛び跳ねながら剣を振る。

「人呼んでエリス・エーツェル！」

まあ本名なのだから人もそう呼ぶしかないだらう。

「名前は聞いてなあーい！」

当然の反応を投げ返して、パルヴィーはショートソードを天を突くように掲げた。

「ウインドライン！」

頭上から発生した幾本もの『風の矢』が、周囲の『モンスター』めがけて降り注ぐ。

それ自体によるダメージはないものの、突風にあおられて『モンスター』たちの動きが鈍つた。

そこへすかさず彼女の仲間が斬りかかる。エリスも負けじと剣を

振りかぶる。

『風の矢』が放たれたのと時を同じくして、どこからか、本物の矢も戦場の中へと射ち込まれていた。

それは女の勘のような鋭さで、次々と『モンスター』の顔や武器を持つ手に命中していく。

「仲間？」

遠方から狙い撃つ青年射手の姿をチラチラとうかがいながら、パルヴィーは質問を口にする。

襲いかかる棒状の鈍器を回り込むようにかわして、反撃を叩き込むエリス。

「弟分だよ！」

「良い腕じゃん！」

パルヴィーは追撃とばかりに、エリスがダメージを与えた相手に衝撃波をたたみかける。

それによって体勢を崩した『モンスター』に、

「オーバーフレア！」

エリスが豪快にトドメを刺した。

やや離れたところから戦場を見ているレクトには、三人組の強さがありありと感じ取れた。

強さの理由は、やはり連携戦術。

少女が先陣を切つて囮となり、女性が支援役を務め、男性を攻撃の要とする……といったところだろうか。そして必ず敵一体に対して複数で攻める。それを徹底しているのだ。

もはや自分が手を出す必要もなく、勝つてしまうかもしれない。

「……試してみるか」

余裕が生まれたレクトは、『』を背中に収め、戦場へ向けて右手を突き出した。

彼とて、先の『モンスター』のボスとの戦いでなにも学ばなかつたわけではない。無力さを思い知ったからこそ、懸命に修練を重ね

てきたのだ。

リフィクの教えは言い方がへタすぎるてよくわからなかつたが、感覚をつかめたあとは自己流でなんとかなつた。

実戦で使うのは初めてだが、余裕のある今が試し時だらう。スッと意識を集中し出したレクトの片手が、ぼんやりと光を帯び始める。

「フラッショジャベリン！」

声に呼応するように、右手から閃光の槍が射出された。

それは高速で飛び、『モンスター』の一体に突き刺さつた。吹き飛ぶように倒れる。

「よし！ ……！」

成功を喜ぶレクトだが、次の瞬間、とてつもないほど疲労感に襲われてしまった。

ついヒザをつく。

「……力の加減は、まだまだか……」

「伏せて！」

パルヴィーはひとことだけ忠告したと同時に、

「スラッシュショット！」

エリスに向かつて衝撃波をぶつ放した。

いきなり伏せると言われても、すぐには反応できないのが人間である。

「ばかやろう！」

反射的に文句を吐きつつも、エリスは寸前で後方へ倒れ込むことに成功した。

半透明な衝撃波が、胸と顔の紙一重上を通り過ぎていく。ほんの少しでも遅れていたらどうなつていったことか。

エリスが背中を思いつきり打ちつけるのと、パルヴィーの放つた『スラッシュショット』がエリスの後方から迫っていた『モンスター』に直撃したのは、ほとんど同時だった。

上がつたうめき声はどちらのものだったのか。

そのスキへすかさず、男性が大斧を叩き込んでトドメを刺した。紫色のしぶきを噴き上げながら、倒れる『モンスター』。それが最後の一撃だった。

すなわち戦闘の終了を意味している。

人間たちは軽傷こそあれ、重傷者は誰ひとりとしていなかつた。倍近いほどの数の『モンスター』と戦つていたにも関わらず、である。

それはひとえにパルヴィー・ジルヴィアら三人の戦い方が為した結果だろう。もしエリスたちだけだったならこうはいかなかつたはずだ。

「てめえ、いつたいどういうア見だよ！」

起き上がりすぐさま、エリスは少女騎士に激しく詰め寄つた。

「あつ、大丈夫だつた？」

パルヴィーは、まるで小石につまずいた友人を心配するような軽い口調で返事をする。

まつたく悪びれる様子もなく、あつけらかんとした笑顔だつた。

「あははは、ごめんごめん。危なかつたから」

背後から『モンスター』が襲いかかってきていた。たしかにそれが危うかつたのは認める。しかし直線上にエリスがいたにも関わらず攻撃を打ち飛ばしたのは少々乱暴な援護である。

普通に考えれば、むしろそちらの危ないだろう。

「ごめんで済むかつ！ あたしの『メロン』を輪切りにするつもりかよ！」

さりにすいと詰め寄るエリス。彼女とは、背格好がだいたい同じくらいだつた。年齢もほとんど同じだらうか。

「『メロン』？」

パルヴィーはいぶかしげな表情で、少しだけ目線を落とす。

「せいぜい『レモン』がいいとこでしょ」

「これからなる予定だ！」

「夢見がちなこと」

せせら笑いながら目線を戻したパルヴィーが、あつ、と小さく声を上げた。

エリスのアゴの先がごく薄く切れていることに気付いたのだ。位置的に、まず間違いなく先ほどの『スラッシュショット』でついた傷だろう。

無傷ならともかく、傷をつけてしまったのなら悪く思つ部分もないこともないパルヴィーだった。

「じゃあじゃあ、お詫びに治してあげる。それで後腐れナシね。…

…ヒーリングショア」

パルヴィーは人差し指をエリスのアゴに持つていく。すると指先が口ウソクのように光り出し、傷が見るまに消えていった。

「ほら、べつぴんさん。だからそんな恐い顔しないでよ」

「誰のせいだよ！」

吐き捨てたエリスはほんのわずかだけ溜飲を下げて、互いの距離を離した。やけになれなれしいからなのか、妙に調子の狂う相手である。

「……てめえも『ここ』やつとけよ」

エリスは言いながら、自分の右頬を指差した。

パルヴィーの顔の同じ部分に、目立つ傷があつたからだ。一こちらは恐らく『モンスター』の攻撃がかすつてついたものだろう。なんだかんだあるも、そういう気遣いのできるエリスだった。

「え？」

パルヴィーは言われるままで、自分の左頬を触つてみる。そして手の平を見た。

斜線走つた赤い血のり。

「あああっ！ わたしの美顔に傷がつ！」

「凡顔の間違いだろ」

「えーん、アリーシェ様あー」

パルヴィーはあきらかな泣きマネをしながら、仲間の女性のもとへと駆けていった。

「イラつく奴」

エリスが素直な感想を口にしたのとほぼ同時に、女性がパルヴィーに『治癒術』を施した。彼女の顔の傷が光と共に消えていく。

「……自分でやりやいいのに」

「『治癒術』は、自分自身には使えないんですよ」

「ぼそりとこぼしたエリスの弦きに、どこからか現れたリフィクがそう答えた。

「体が自然に治ろうとする力を相手に分け与えるという術ですからよくわからない理屈である。

エリスはその情報を即座に、頭の中にある『いらない物』と書かれた箱に放り捨てた。

「んなことよりよ、てめえ今までなにやつてたんだ？」

顔をぐいっと近付けながら詰問するエリス。

戦闘中レクトの援護は確認できたが、リフィクの援護はまったく見受けられなかつた。

リフィクはばつが悪そうに、顔をそむける。

「僕は、その……陰ながら応援を……」

どすつ、という鈍い音が、なにやらリフィクのスネ辺りから聞こえてきた。

「次にサボつてたらケツをローストしてやるからなー、肝にめいじとけつー！」

やけにくたびれた様子のレクトがやつて来る頃には、エリスのもとにその場の全員が集まっていた。

「協力、感謝します」

三人を代表するように、女性が折り目正しく頭を下げる。年齢は三十の中頃か、その少し上だろうか。艶っぽく美しい顔立ちに品性のある立ち振る舞い。水々しいロングヘアは、動きのジヤママにならないよう背中の辺りで束ねられている。

白銀色の防具と腰のロングソードがなければ、どこかの女伯爵と言つても通じるほどの風格をただよわせていた。

「アリーシュ・ステイシーの名において、あなた方の助力に最大限の謝辞をお送りします」

いやこりゃうやしい口調が逆にエリスのシャクにさわったものの、文句を言つまでは至らなかつた。

「別に感謝されるいわれはねーよ。あたしはあたしの好きにやつたまでだからな。そこに『モンスター』がいればたたつ斬る。それだけだよ」

その言葉を聞き、アリーシュ・ステイシーはわずかに眉を持ち上げた。

「そう……。あなたたちも、『モンスター』と戦つてはいるの？」

「戦つてるなんてもんじやねーよ。連中の親玉を倒しに行くところだ」

エリスがさうりと言つてのけた内容に、アリーシュは小さく息を呑む。

「まさか『キング』を……？」

「当然」

その顔には、信じがたい、という心境がみなみと表れていた。

無理もなかろう。普通はそうなる。

彼女のみならず、他のふたりも同じような表情でエリスを見つめていた。なにを寝ぼけたことを言っているんだ、と。

彼らに握手を求めてくなるほど共感するリフィクだった。

「バカじゃないの？」

呆れるように少女騎士が口を挟む。

「『モンスター・キング』を倒すつて。わたしたちでさえ、『ボス』って呼ばれてるような奴には苦戦するくらいなのに……。できるだけ？」

「やつてやるよ」「

「根拠は？」

「あたしが根拠だ」

パルヴィーは、ふつと噴き出した。

「なにそれー？ もしかしてないってこと？ なーんだ、ただ考えナシなだけじゃん。アリーシェ様あ、一緒に笑つてやりましょーよー」

バカにするような笑顔で、猫なで声を出す。

「あははははっ！ ばーかばーか」

そしてパルヴィーは人差し指を突きつけながら、本当にあざ笑い始めた。

「おうてめえ良い度胸じゃねーかよ！」

無論、そんな態度を取られて黙つていられるエリスではない。頭突きをお見舞いするかと錯覚するほど詰め寄り、鼻と鼻とを突き合わせた。

「いやあーん、バカが怒ったあー」

ひるむこともなく、おちよくり続けるパルヴィー。たしかに度胸は良さそうである。

「バカはどつちだつ！ ここのバカつづらー！」

その時。押し黙つてなにかを考え込んでいた様子のアリーシェが、ふと口を開いた。

「……途方もない、と一笑には付せない話ね」

そんな咳きに気付き、パルヴィーはからかうのをやめて彼女を見る。

「今まで考えもしなかつたけど……たしかに、元凶から断つという考え方は間違いではないわ」

アリー・シェは、パルヴィーとエリスのふたりを見ながら口にした。というよりふたりの顔が接近しているのでどちらか片方だけを見るということができるだけなのだが。

「ええーーー？」

パルヴィーと、そしてなぜカリフィクが、声を含させて異を唱えた。

「ほら見ろ！ わかる奴にはわかるんだよ」

賛同者が現われ機嫌を上向きにするエリス。

レクトと騎士然とした男性は、特に口出しすることもなく成り行きを静観していた。

「アリー・シェ様あ、それマジで言つてます？」

パルヴィーは彼女にすりよりながら、口の横に手を立ててひそひそと真意を確かめる。

「考え方という点ではね」

アリー・シェはやわらく微笑み、そう答えた。

「可能か不可能かは別として……。私たちがやつてている行いは、『現状維持』が精一杯よ。今以上に悪い方向に進むのを防いでいるだけ」

つむぐ言葉に合わせて、彼女の顔が段々と真剣さを帯びてくる。

「ただ、もし『モンスター・キング』を討伐することができたなら……それは前進に他ならないわ。世界を変えることができるかもしれない」

世界を変える……。同じ目的を抱くハーニスも、たしかそんな言葉を口にしていた。

「とはいって、現状から言えばあまりにも遠い話だけね。それでも

考慮に入れる価値はある……と、私は思つたわ

アリー・ショは最後に再び表情をゆるめて、穏やかに締めくくつた。聞いていたパルヴィーは「おおっ！」と驚きと感嘆の混ざつた顔

をし、

「さすがアリー・ショ様。そんな深いところまで考えているんですねっ！ たしかにその通りですよ」

あつさりと自分の考えを一転させた。

唯々諾々……とは少し違うが、似たようなものを感じるエリスだつた。

「考えナシはてめーのほうじゃ ねーかよ」

チクリと反撃するも、それは華麗に無視されてしまう。

アリー・ショは気を取り直すよつに一步踏み出し、エリスと向かい合つた。

「たしか、エリス・エーツヒルさんと仰いましたね」

戦闘中に大声で名乗つたのを、彼女も聞いていたのだろう。

「我々は今、この近くに棲息する『モンスター』を討伐しに行く途中です。あなた方の力を貸してもらえると心強いのですが……」「力を貸す貸さないも、あたしらも『そいつら』をこらしめに行くところだからな。一緒に行きたきやつしてくりやいい」

どうにも上の立ち場から物を言つヒリスである。少しば人当たりというものを考えて欲しいレクトだつたが、

「そう。それなら、一緒させてもらいます」

相手があまり気にしていない様子だったので、目で注意するだけにとどめておいた。

「けど、ついてくるならそういう堅つ苦しい喋り方はやめろよな。うう」とうじこから

周囲の風景が、開けた草原から木々の多い林間部へと移り変わつていいく。

「どうしてステイシーさんたちは、『モンスター』と戦っているですか？」

尋ねたのはリフィクだった。

「どうして、と言われても困るけどね」

今や倍に増えた一行の中心で、アリーシュ・ステイシーが苦笑う。彼女は仲間ふたりに確認を取るような視線を送ったあと、再び口を開いた。

「私たちは『銀影騎士団』の一員よ。苦しめられている人々を少しずつでも救うために、『モンスター』と戦っているの」つまり善意で戦っているということなのだろうか。それだけとうのも考えにくいものがあるが。

「三人ですか？」

口を挟んだエリスに、アリーシュはくすりと微笑みを返す。

「まさか。同志たちは各地に散っているの。総勢は……四十人弱といつたところかしら」

世界中にはびこる『モンスター』。そこから比べると、なんとも頼りない数である。

しかし彼女たちを見るに、技術や知恵を駆使してでも奴らに立ち向かっている。生半可な覚悟で戦えるものではないはずだ。その覚悟が、すでに強力な武器となっているのだろう。

「へえ……」

エリスは素直に感心したあと、

「おいつ！」

と振り返つてリフィクにつかみかかった。

「てめー、『モンスター』とは戦わないのが当たり前、戦うヤツはバカだとかなんとかぬかしてやがったよな。けどこうして戦つての連中がそこら中にいるそつじゃねーかよ。どういうこった

「そんなふうには言つてませんけど……しつ、知らなかつたんですよ……」

リフィクはあわあわとうろたえながら弁明をする。

出会つたばかりの頃の話を引つ張り出してくる辺り、ビリやらわりと根に持つていたらしい。

そこへアリー・シェが、救いの手を差しのべる。

「私たちの存在は、表には出でないから。彼が知らなくて無理はないわ」

「なんで隠してんだ？」

リフィクをぱっと放して、エリスは彼女に顔を向ける。エリスの性格からして、『モンスター』を倒したのならそれを大々的に言いふらしてやればいいのに思つてているのだろう。

「人々を守るためよ」

アリー・シェはわずかに堅さを含めた声で、答える。

「『モンスター』に反抗している人間たちがいる……それが彼らに知れ渡つたら、どんな報復がなされるかわからないわ。関係のない人々を手辺り次第に襲うかもしれない。……見せしめのために」

エリスはつい口をつぐんでしまう。

「私たちはそれを一番恐れているのよ」

たしかにその通りだ。その可能性は充分に考えられる。

エリスが目にしてきた『モンスター』は、總じて人間を完全なる弱者だと見下している。そんな弱者に牙をむかれ手をかまれたとなれば、それは沾券に関わることだ。

故郷フィアネイラに手を出していた『モンスター』も、追い返すたびに攻めてくる数が増えていった。

つまりその規模がとてつもなく大きくなるということか。

「……」

今まで、そこまで考へてはいなかつた。

ただ『モンスター』を倒せばいいと思つていたエリスからすれば、まさしく胸を突かれたような気分だった。

不意に。

「……止まれ」

しんがりを務めていた男性が、低く鋭く制止の声を上げた。

自己紹介の時に名乗った名前は、ゼーテン・ラドニス。短く刈り込んだ髪に、たくましい長身。恐らく『騎士団』のトレードマークであろう白銀色の防具は、アリーシェとバルヴィーが胸鎧なのに対しガッシュリとした胴鎧を身につけている。よく見ると小手やブーツ、額当ても彼だけ微妙にデザインが違っているのだが、男女で違うのかサイズで違うのかはこの際どうでもよかつた。

ピタリと足を止める六人。しばし、さわさわと風が枝葉を揺らす音だけが生まれ、消えていく。

「……なんだよ？」

「足音だ」

不思議に思ったエリスに、ラドニスが短く答える。

「一足歩行だが、人のものではない重さ。……『奴ら』だろう。数は四」

それを聞き、六人のあいだにピリリとした緊張感が走り始めた。

ラドニスの耳を頼りに、六人はそれぞれ木の陰に隠れ、接近者の様子をうかがつてゐる。

それはやはり『モンスター』であつた。

恐らく先ほど一戦やらかした連中と同じ種族であろう。そしてまたやはり、数は四体。全身覆う茶色い体毛をさらに鉄の鎧が覆い、それぞれ剣や槍といった武器を保持している。

進行方向から予測すると、ちょうどビーリスたちが潜むすぐ近くを横切ることになるだらうか。

ざつくりとはいえ林立する木が田くらましになつてゐるためか、向こうはまだこちらの存在に気付いていないようだつた。

「私が合図したら、一斉に飛びかかつて」

風に消え入りそうな小声で、アリーシェがジエスチャー混じりに指示を出す。

「なんでてめーの言う通りにしなきゃなんねーんだよ」

エリスもできる限りの小声で異論を送り返した。異論といつよりは、いぢやもんに近かつたが。

見かねたレクトが、やはり小声で彼女に言い聞かせる。

「エリス、年の功だ。年長者の言つことは尊重したほうがいい。いくつ上の人だと思ってるんだ」

悪気はまったくなかろうが、レクトのひとことアリーシェの女心に小さく傷を付けた。

「なにが年の功だつ。あたしらの倍ぐらいくつ生きてゐるのがそんなに偉いのかよつ」

そしてエリスの言葉が追い討ちをかける。

「倍……！」

直視したくない現実である。

「ちょっと、アリーシュ様の前で年齢の話はしないでよつ。気にしてるんだから、婚期とかつ」

パルヴィーもつられるように参加し出し、フォローなのトドメなのがよくわからぬ言葉を口にした。

小声とはいえ飛び交うセリフに、いつバレてしまつのかとハラハラしつぱなしなリフィクであった。

「……私のことはいいとして」

あらぬ方向へひた走る話を、アリーシュは自力で修正する。

「……それなら合図はエリスさんに出してもうつわ」
なにやらその表情から元気がなくなつていいよう見えるのは、木漏れ日の差し加減によるものだらうか。

「ガツテンよ……！」

彼女とは対照的に、エリスの表情には元気が満ちあふれていた。

紫の血にまみれた『モンスター』の死体が四つ、転がつてゐる。それらを見下ろしながら、エリスは剣をサヤに収めた。

「まつ、不意打ちならこんなもんか」

加えて言うなら、数の上での利もあつた。

エリスとしてはあまり実感していないものの、やはり頼もしいものなのである。仲間というものは。

「住みかは近そうね。『彼ら』を見るに、方向もこぢらで合つていいようだし」

アリーシュは今々倒した『モンスター』たちがやつてきた方角へ、顔を向ける。エリスたちが荷馬車の男性から聞いた場所も、たしかそちらで合つてゐるはずだ。

「なあ」

ひと息つくアリーシュへ、エリスが声をかける。

「あたしらが『奴ら』に歯向かつてゐるつてのを奴らが知つたら、関係ねえ人間を巻き込むかもしれないつていうのはわかつた」

先ほど彼女が言つていたこと。それをエリスは、自分なりに考えていたのだ。

「けどそれを隠し通すつてのも無理な話じゃねえか？ いつか絶対バレるだろうよ」

現にこつして戦い、スズメの涙ほどとはい『モンスター』は減つているのだから。完全なる隠蔽など不可能に近い。

「そうね」

無論のことと肯定するように、アリーシュがやわらかく返事をする。

「ただ、知れ渡るのを可能な限り防ぐ方法というものもあるわ。私たちはそれを心がけているの」

「なんだよ？」

「簡単よ」

アリーシュは女神のような微笑みのまま、それを告げる。

「私たちの姿を見た『モンスター』を、すべて葬ればいいだけ」
やさしげな表情とは裏腹に、物騒なことを言つてのける彼女である。とはいえそれはそれで、言つは易し行つは難しというヤツではなかろうか。

「なるほどな」

しかしエリスは「たしかに簡単だ」とあっさり納得し、「いろいろ考えて損した」

それまで頭の中で考えていた一切合切を適当なところへ放り捨てた。

林を抜けた先に、すたれた小さな村があつた。

箱のようないす根が四角い木の家が並び、村を横切つて穏やかな広い川が流れている。

家々の外見は古く、といひては破損しているように見えた。
人が住んでいる気配はない。

それもそのはず。

そこには、『モンスター』たちが住んでいた。

「彼らが作ったにしては小さい家の……村」と略奪された、といつたところね」

林に身をひそめながら村を遠目に、アリーシェが冷静に咳く。「街道を行く人間を無差別に襲つ、野盗じみた連中ですもの。暮らしていた人間たちはもういないと見てよさそうね」

彼女の拳が、ぐつと握り込まれた。

「……許せない」

瞳に映るは激昂。静かだが激しく燃える彼女の戦意に、エリスは同調するように犬歯をのぞかせた。

村をざつと見渡してわかるのは、奴らが道中で出くわしたのと寸分変わらぬ『シカ』に似た頭部をした種族だということ。そしてそれほど大量にいるわけではないということだ。

建物の中にいるであろう連中を計算に入れても、せいぜい二十体以下。アリーシェらが最初に戦つっていた『モンスター』たちよりいささか多いくらいだろう。

特技のかなんのか、ゼーテン・ラドニスがそう断言した。根拠は己の聽覚らしい。耳の良さは先ほど証明済みである。

さほど多くはないとはいえ、それでも正面からやり合つては危険な数だ。

「いつまでも隠れてないで、さつさとやつまおうぜ」「いつまでも隠れてないで、さつさとやつまおうぜ」

が、まったく危機感のないエリスである。

普段通りといえば普段通りなのだが、了承も得ずに飛び出したりしない辺り少しさは成長しているのかもしねれない。

「やつぱり考え方ナシ

パルヴィーがぼそりと呟いた。

「黙つてろ、マヌケつづら」

同じくぼそりと言い返すエリス。パルヴィーは頬をふくらませた。

「つていうかナニその薄着。戦う気あるわけ?」

「てめーみたいなんだせえカッコでもしろつてのかよ。んなもんあたしの勝手だろうが。口出しすんな、ふぬけつづらが」

「なによ。女は愛嬌つて言葉知らない？ 品なさすぎ」

「それしか能がねえ奴はせいぜいお上品に愛嬌振りまいてろよ」

ふたりは視線と視線を静かに激突させた。水面下で激しい火花が散つている。

双方さすがに身をひそめている状況でそれ以上発展させるつもりはないらしい。

どこか緊張感に欠ける両少女を横目に、アリーシュは気を張つて思案をめぐらせていた。

普段の三人での戦術は一旦よそに置き、エリスらを含めた六人の作戦行動を組み立てているのだ。

人数が増えれば可能なことも増えるぶん、選択肢も増えていく。その中から最善の策を導き出すのは、少々骨が折れる作業である。

「あの川は使えませんか？」

熟考するアリーシュへ、レクトが進言した。

川。たしかに村の真ん中を通り、幅の広い川が流れている。幅が広いとはいっても水量はそれほど多くなく、底は浅い。水かさは大人のスネまでもいいかれないだろうか。

レクトは自分の案策をテキパキと伝える。

「……うまくいけば、一網打尽に」

今まで聞いて、アリーシュは感心するように「なるほど」とうなづいた。

川を利用して一網打尽。……机の上では可能な作戦ではあるが、実際にやるとなると話は違つてくる。

レクトとしてもそこから先の現実的な算段は、自分よりも経験の多いアリーシュに意見をもらおうと思っていた。

「半分が引っかかるば上出来……といったところね」

アリーシュの予測はそれである。さすがに一網打尽とまではいか

ないだろ？

「それでも半数を無力化されれば勝機は見えてくる。……あなたに乗るわ」

アリーシュは作戦に賛成の意を示してから、気付いた改善点をいくつか提言した。

『モンスター』の暮らしがいつても、人間とそれほど差があるわけではない。

村の広場をざつくり見てもわかる。

立ち話に興じている者がいたり、武器の露店を開いている者がいたり、日も高いうちから路上で酒をあおいでいる者がいたり。

人間の生活場でもよく見られる光景である。

しかしその実体は、人間たちのそれとはまったく異なっていた。立ち話の内容は、手にかけた人間の恐怖や混乱の様子をあざ笑っている。

武器を見る客は、それでどうやって人間を虐殺しようか考えている。

飲んでいる酒類も、人間たちから奪つた物だ。

まさしく暴虐の徒。

しかし彼らにとつて、それらは『じく普通のこと』なのだ。なんてことはない日常。

弱肉強食。強き『ら』が、弱き人間らから思つがままに搾取する。当たり前のようだ。

そこには悪気も、感謝も、罪悪感もない。それが許されているからだ。

故に彼女らは反抗する。

最初に『それ』に気付いたのは、取り引きを終えて手の空いた露

店商だつた。

大小様々並べられた武器の前に座つてゐる彼の目は、村の外へと向けられてゐる。

「……？」

ひとりの人間が、こちらに向かつて走つてきていた。

人間が『モンスター』を種族の違いでしか見分けられないように、『モンスター』も人間をそうそう見分けられないものである。体が大きいか小さいか。若いか老いているか。男か女か。それくらいでしか判別できないのだ。

村の外から走つてくるのは、若い女だつた。人間を見分ける能力の低い『モンスター』なら、髪の短さや肌の露出具合から男だと思うかもしれないが。

なぜ人間が……？ と露店商が疑問に思つたと同時に、人間は走

りながら腰元の剣を引き抜いた。

「……！？」

村と外との境界線付近で笑い話をしているふたりは、それに気付いていない。

「オーバーフレアああーつ！」

自分の存在を主張するかのように叫んだ人間の剣から、炎が勢い良く噴き上がつた。

突然のことに驚いている『モンスター』を、炎の剣技でひと太刀。返す刃で、すぐそばにいたもう一体も斬り裂く。

そうしてエリスは、村の広場にいる『モンスター』たちへ勝ち誇るような視線を走らせた。

「やーいやいやいやー！　このあたしをどなたと心得る…」

『モンスター』たちは、一様にぽかんとした。

そりやそうだろう。いきなり現れて「どなたと心得る」と言われても、どなたとも心得ていらないに決まっている。

「立てば戦神、座れば鬼神。歩く姿はヨリの花。悪魔も泣いてひれ伏すエリス・エーツェルたあ、あたしのことよー！」

しかしエリスは気にも止めずに、常日頃から考えていた名乗り口上をズバツと言い切った。

得意満面な表情。きっと本人の中では、声を出して笑いたくなるほど見事に決まつたと思っているのだろう。

「うわははははー！」

というか実際、笑い出した。

毎度毎度、自分のことをよくもそこまで持ち上げられるものである。

一瞬は「なんだこのイカレ頭は」と言いたげな顔を向けていた『モンスター』たちだが、ふと我に返る。

彼女のかたわらには、火だるまになつて倒れている同胞がいるのだ。

呆気に取られて意識から吹つ飛んでいたが、彼女によつて斬られたのである。

エリスの視界に映る『モンスター』は六体。そのうち武器を所持

していた三体が、彼女めがけて問答無用で突撃してきた。

エリスが何者であるかはどうでもよいが、仲間を手にかけた者を（しかも人間を）、生かして帰すわけにはいかない。そんな心境だろうか。

それはエリスとしても望むところであった。

先頭に立つ『モンスター』が、走る勢いのままロングソードを振り下ろす。

人間よりもひと回りは大きいであろう体から放たれた攻撃は、しかし空を切った。

エリスは寸前でななめ前へと飛び込んでいる。

そのまま側面から反撃をお見舞いしようとしたエリスの全身を、その時影が覆つた。

直感的に真横へ跳ぶ。

紙一重のところを、振り下ろされた斧がかすめていった。

「ぎりぎりいっ！」

エリスは樂しむような声を上げながら、片手で側転、バック転を軽々こなし、二体から距離を置く。

しかしそこへ、槍を持ったもう一体が襲いかかってきた。

ただでさえ大きなリーチ差が、槍なんぞを持ち出されたらさらに差が離れていく。はた目では、もはや勝負にもならないくらいだ。

「あたしを阻むものはすべてっ！」

正面に向けたエリスの剣が、まるで翼を広げるよつに炎を吐き出した。

そのまま突つ込む。

「焼き斬り裂く！」

突き出された槍をも飲み込んで、巨大な炎の刃は『モンスター』の胴体を刺し貫いた。

「なんでえなんでえ、そんなもんかよ！」

広場を縦横無尽に駆けめぐるエリス。

「他の奴を相手にしてきた時もこんなザマなのかよっ！」

彼女が一筋縄ではいかない手合いだと感じたからか、その場にいる『モンスター』は当初の倍近くにまで増えていた。

「ちゃんちゃんおかしいーっ！」

武器を持ち合わせていなかつた連中はこぞって露店の武器屋に押しがけ、さらに騒ぎを聞きつけた他の『モンスター』たちが村の奥から次々と姿を見せる。

エリスを中々仕留められないと彼女の挑発が相まり、躍起になつてているのだろう。

四方八方から浴びせられる攻撃を、ひらりひらりといなしていくエリス。

もともと反射神経や運動能力が総じて良い彼女である。攻めつ気を抑えて立ち回れば、そつそつ捕まることはない。

とはいえしばらく続けていれば、自然と疲労はたまつていぐものだ。

前方から振り下ろされるメイス。

それを後方に回避した時、思いがけず体のバランスを崩してしまつた。なんとか倒れはしなかつたものの、たたらを踏む。

そこへ水平方向から刃が迫つてきた。

とてもじゃないが避けられる体勢ではない。

エリスはとつさに剣を盾のように体の正面に出し、からうじてそれを防御した。

しかしこの体格差で持ちこたえられるわけはない。

エリスは蹴られた小石のように、やすやすと打ち飛ばされてしまつた。

なかば朽ちかけたような小屋に激突。壁を突き破る。そこは倉庫だつたのか馬小屋だつたのか、なにも物が置かれていなかつた。

「派手にやつてくれやがつて……！」

エリスは吐き捨てながら、木片をかきわけて外に出る。当たりどころが良かつたのか、さほどダメージは負つていなかつた。打ち身

程度だろうか。

エリスの視界には、小屋を半円形に取り囲む『モンスター』たちの姿が映っている。数は十と五……といったところだろうか。皆が皆殺意にあふれるギラギラとした眼差しで、飛びかかるタイミングを図っていた。

「まつ……こんなもんでいいか」

見渡したエリスは咳き、走り出す。

そして『モンスター』の集団をあざやかにすり抜け、村の奥へ向かって突き進んでいった。

村のシンボルであるかのように存在感を主張している広い河川。恐らくこの川があつたからこそ、この場所に村が作られたのだろう。清流が近くにあれば生活はとても楽になる。

そんな先人たちの思いもむなしく、今は『モンスター』に躊躇されてしまっているが。

村で起こっている出来事とは正反対なまでに、やさしく穏やかに流れている川。

その中へ、疾走してきたエリスがそのまま駆け込むのが見えた。細かく水しぶきが散る。目測通り、水かさは浅かった。スネが半分もつからない。

足を止めることなく下流へ走るエリス。彼女を追撃すべく、『モンスター』の集団も一体一体と次々に川へなだれ込んでいった。

「……たいしたものね」

上流の草むらにひとりひそむアリーシュは、無事に予定地点まで現れたエリスを見て、感嘆するように咳きをもらした。

身体能力はもとより、目を見張るべきは度胸である。

大抵の人間ならば、あれだけの数の『モンスター』に囲まれれば否が応にも恐怖心が頭をのぞかせてくるだろう。結果萎縮してしまい、本来の力を出せなくなる。

しかし彼女には、それが無いように思えた。

大物なのか異様なまでに鈍感なのか、どちらにしろ普通の胆力ではない。

ここまで怖いもの知らずと云うことならば、『モンスター・キング』へ挑もうという発想が出てくるのもうなずける話である。

「私も負けてはいられない」

エリスに誘い込まれた『モンスター』たちがすべて川へ入ったのを見て取り、アリー・シェは草むらから立ち上がった。
そして川岸へ走る。

それに反応するように、向こう岸にひそんでいたリフィクも姿を現した。

川を挟んで立つふたり。水面に両手をかざす。

『モンスター』たちの意識はすべて下流のエリスへ向けられるため、上流のふたりに気付く者はいなかつた。

「さあ、いくわよ」

「はい……！」

アリー・シェの合図と共に、両者はそろって『魔術』を発動させる。
「フローズンワールド！」

「まだかよっ！」

エリスは、じれるように背後に視線を飛ばす。

さすがの彼女も足が水につかっている状態では思うよに動けなかつた。

陸で稼いだ距離も、見る間に詰められていく。この辺りはやはり体格がものを言うのだろう。

幅広な川。その中央をひたすら走り下るエリスに対し、『モンスター』たちは取り囲んでしまえとばかりに横に広がる。
速度の差は明らかだ。このままでは、じきに追いつかれてしまうだろう。

エリスが何度も振り向いたのち。

「アレか！？」

それが見えた。

自分を追走する『モンスター』たち。そのさらに後方。水面。上流からこちらへ向かつて、川の色、太陽光の反射具合が、わずかに変わつてくるのが見えた。

事前に聞かされていなければわからなかつたろうが、川が凍りついているのだ。アリーショトリフィクが施した術によつて。氷の侵食は、馬のような速さでこちらに向かつてくる。『モンスター』たちは気付いていない。

エリスは、どんびしゅりなタイミングで飛び石を蹴り、高らかに飛び上がつた。

直下を冷ややかな風が吹き抜ける。

着地した時には、すでにそこは氷の世界に包まれていた。足を滑らせてすつ転ぶ。

『モンスター』たちのあいだに衝撃と動搖が走つた。

一瞬のうちに、自分たちの足ごと川が凍りついていたからだ。両足が固定されたため、身動きが取れない。

これがもし普通の氷だつたなら、強引に抜け出すこともできただろう。しかし『魔術』によつて生成された氷である。

砕けない。そう簡単には。

「ざまあみろっ！」

滑つて転んで尻餅をついたエリスが、立ち上がりながらほくそ笑む。

そして剣を旗のように振り下ろして、

「よーし！ エーツエル騎士団、突撃いつ！」

高々と号令を言い放つた。

「勝手に名前変えないでよーっ！」

その呼びかけに応えるよつて、川の両側から、パルヴィー・ジル

ヴィアとゼーテン・ラディースが飛び出した。

アリー・シヒら同様、息をひそめて待機していたのだ。

『モンスター』たちの動搖が、日に見えるまでに大きくなる。ふたりとひとりは、それぞれ武器を手に、動けぬ敵へ斬りかかった。

さしもの『モンスター』といえど、動けなければ脅威ではない。背後に回ればなにもできなくなるのだ。

「はああつ！」

ラドニスが大斧で、胴をまつぶたつに両断する。

「ゼロ距離からのーー。」

パルヴィーは『モンスター』の背中にショートソードを突き刺し、

「スラッシュショット！」

そのまま剣先から衝撃波をうち放つた。それは体の内部を食い破り、胸に風穴を開ける。

『モンスター』たちはなんとか上半身を動かして応戦しようとするも、それは無駄なあがきでしかなかった。

中には冷静に足元の氷を砕こうとしている者もいるが、みすみすやらせてはおかない。川岸から連続で放たれた矢が、その行為を許さなかつた。

エリスも今ばかりは、得意の剣技を封印しているようだった。

下手に炎を散らして氷が溶けてしまっては、せっかくの作戦が徒労に終わってしまう。その辺りはしつかり考えているらしい。

いつかの老婆心も無駄ではなかつたということか。

レクトは岸から弓矢を射ながら、作戦にたしかな手応えを感じていた。

これでどうにかクローケ・ディールと戦つた時の不手際を雪辱でしきただろうか。

しかし最後まで氣は抜かない。

「……」

三人の立ち回りを遠目から見つめながら、レクトはふと思つ。エリスの剣技にしろ、衝撃波を矢のように飛ばす彼女　パルヴィーの剣技にしろ、あれは『魔術』の応用技だ。

直接放つのではなく、武器を介して相手にぶつける。故に通常の『魔術』よりも威力や攻撃範囲、バリエーションは限定されるが、格段に扱いやすくなる。

リフィクの説明ではたしかそういうものだったはずだ。

「……」

実戦で『魔術』を使うには、あの形がベストかもしれない……。特に制御もままならない自分にとつては。

レクトは戦いに向けられる頭の片隅で、そんなことを考えていた。

アリーシュとリフィクがその場へ駆けつけた時には、すでに『モンスター』の数は半分以下にまで減っていた。

斬り裂かれた死体、肉片が、至るところに転がっている。凍つた川には水ではなく紫色の鮮血が流れていった。

思わず顔をしかめるリフィク。

しかしアリーシュは、冷酷とも取れる表情でその光景を見つめていた。

そして心のうちに思う。凄惨だと。だが『モンスター』によつて流された人間の血は、こんなものではないのだ。苦しめられた思いも、虐げられた心も、こんなものでは到底足りない。

「つぐないにすら遠い……！」

アリーシュは川沿いを走りながら、腰元のロングソードを引き抜いた。

村とはいっても規模の小さな類である。

故に騒ぎが起これば、それはすぐさま村中へと響き渡る。

『モンスター』アドレー・カギュフは、自宅に飛び込んできた手下の報告により、それを知らされた。

アドレーはまず昼寝の邪魔をされたことに腹を立て、バカに大げさに騒ぎ立てていることに、さらに腹を立てた。

人間たちによって仲間が次々とやられている。手も足も出せずに。しかも人間たちの数は十にも満たない……。

そんなことを聞かされたら、大抵の『モンスター』はこう言つて笑うだろう。

「なにを寝ぼけたことを」

それはアドレーの場合も同じであった。ただ実際に寝ぼけていたのは彼のほうであったが。

アドレーは取り合わずに寝直そうとするも、手下のやけに必死な態度に免じて、とりあえず様子だけは見てやることにした。

以前は恐らく村長でも住んでいたであつて、村で一番大きな家を出て、川辺へ赴く。

そして現場の状況をまのあたりにしたところで、アドレーの眠気は一気に吹き飛ばされた。

まわしぐ言葉通りのことが起きていたからだ。

「どうします！？ ボス……！」

「……どうするかだと？ 決まつているだろ？、そんなことはつ…

…」

焦りを隠せない手下を叱るよつて、アドレーは鋭く指示を飛ばした。

「残つている者をすべて集めろ…」

「てめえで！」

「ラストつ！」

エリスとパルヴィーが、即席にしてはなかなか息の合つた動きで、左右から交差ざまに斬撃をお見舞いした。

飛び散る血しぶき。断末魔。

これで川へ誘い込んだ『モンスター』、十五体すべてを斬り終えたことになる。

が、次の瞬間。息をつくヒマも祝杯を上げるヒマもなく。

「ラドニスさん、後ろつ！」

レクトが切迫して声を張り上げた。

戦場を見渡せる場所故に、いち早くそれに気付いたのだ。

「！」

「うおおおおつ！」

反対側の川岸から、一体の『モンスター』が雄叫びを上げながら猛進してきた。

一見それは、他の連中と同じ『モンスター』に思えた。『シカ』に似た頭部。こげ茶色の体毛。鋼鉄製のフルプレート。

しかし肉薄するにつれ、違いがわかるようになってくる。

まず第一に、他の奴らよりも体が大きい。角も雄々しく立派だつた。その時点で、他とは一戦を画す存在だということは瞭然である。この群れのボス格……！。

瞬時に、六人の脳裏に共通した認識がかけめぐつた。

『モンスター』は、牛をも一刀両断できるかというほど巨大な剣を握っている。一番近いところにいたラドニースめがけて、走る勢いのままそれを叩きつけた。

避けようにも避けられず、大斧で正面から受け止めるラドニース。が、たやすくせり負けてしまった。

防ぎ損ねた大剣が滑り、肩口から赤いしづきが弾け飛ぶ。

「出できやがつたか、元締めが！」

「フォグスクリーン！」

アリーシュは即座に、霧を発生させる『魔術』をうち放つた。まるで水蒸気爆発でも起きたかのように、辺りが一瞬にして白い世界に包まれる。

煙幕代わりであろうか。迅速な判断だ。

「ここでは戦えないわ、ひとまず下がつて！」

なにはともあれ氷上である。動けない『モンスター』をただ斬るだけならともかく、まつとうな戦闘を行うには足場が悪すぎる。

しかも相手は恐らくボス格だ。不安要素は少しでも減らしておかなくてはならない。

「しょうがねえ！」

エリスも素直に従い、踵を返した。

視界はゼロに近かつたが、皆の目指す先はおのずと決まってくる。ボス格がやつってきた方向の正反対。レクトが陣取っていた川岸だ。

「小細工を弄するあたり、所詮はただの人間か……！」

エリスら全員が濃霧から抜け出たのとほぼ同じくして、『ボス』アドレー・カギュフも霧からの脱出を果たした。

しかし脱出を優先したためか、方向はかなりズレてしまつたようだ。

村の広場のほうへ駆けていく六人の背中が、薄霧越しにうかがえ

た。

「逃がすな！」

アドレーのひと声と共に、岸に待機させておいた手下たちが人間たちを追いかける。

こちらも六体。忌々しいかな、残存戦力すべてである。

リフィクとパルヴィーがそれぞれ真横と後ろにつき、ラドニスの傷を治す。

が、やはり走りながらでは意識を集中しきれないのか、ふたりがかりでも術の効きは鈍いようだった。

「面白い……！」

ラドニスが歯がみしながらこぼす。

とはいって、不意打ちのような一撃である。加えてあの巨大な得物。走れる程度のダメージに抑えただけでも大したものではなかろうか。

「充分よ」

アリーシュは先頭を行くレクトに続きながら、追走してくる敵集団へと視線を飛ばした。

ノーマルサイズが六体。その背後にボス格が続く。

それですべて……だろうか。どちらにせよ『ボス』が出てきたのなら、あとひと押しであることに変わりない。

正念場だ。ここが。

同じく後方を見ていたエリスの脳裏にも、同じ言葉が浮かんでいた。

『モンスター』のボス格。やはり下っぱを相手にしていてもようがない。倒すべきは頭。そしてそろそろ欲しい頃だ。白星が。

「おいつ、あいつの相手はあたしがするからなっ！」

先手を打つたエリスに合わせるように、アリーシュは思案をめぐらす。

六人一丸となつて戦えば『ボス』には勝てるだろう、というのが

アリーシュの予測だつた。

相手の力はまだ未知数だが、このメンバーならそつそつ遅れば取るまい。少なくとも互角の戦いは望めるはずだ。

しかし厄介なのは取り巻きの存在だろう。

まずはそちらをどうにかしなくては、話にすらならない。

「……私とエリスさんで『ボス』を食い止めるわ。皆はそのあいだに他の『モンスター』を！」

あえて危険な役目を自分に課すアリーシュである。

問題は、どれだけ持ちこたえられるか……といったところだろうか。しかしこればかりは仲間を信じるしかない。

「かしこまりつ！」

めいめい返事をする中パルヴィーの呑気な態度に、少しだけ肩の力が抜けたアリーシュだった。

最初にエリスが戦つていた、村の入り口にほど近い広場。特に意図したわけではないが、ラドニスの回復を待つていたらそこに着いてしまったのだ。

だがおおよそ八割といったところで、彼の治療を中断せざるを得なかつた。思つていたより『ボス』の足が速かつたからだ。

手下の『モンスター』を置き去りにするほどの駿足で、エリスらに急迫する。そして追いつかれる寸前で、件の広場へと差しかかつたのだ。

もはや捕まつてしまふかというギリギリのタイミングで、六人はキレイに左右へ分かれた。

アドレーから見て右方へ、アリーシュ、レクト、パルヴィー。そして左方へエリス、リフィク、ラドニスが散る。

一瞬、アドレーは狙いに迷つた。

そこからエリスとアリーシュだけが反転し、アドレーへ正対する。残りの四人はそのまま回り込んで、後続の『モンスター』たちへ

と立ち向かつていつた。

「たつたの一匹で、オレの相手をするつもりか」

アドレーはあざ笑うように、両者へ視線を走らせる。

「片腹痛い！」

誰が言い出したかは定かではないが、『ボス』と呼ばれる『モンスター』の強さは、通常の『モンスター』十体分に相当すると言われている。

アリーシュは常々、その風聞を言い得て妙だと思つていた。個々で若干の違いはあるものの、概ねその通りなのだ。

いくら時間稼ぎが目的とはいえ、それをふたりで相手にしようといふのはたしかにお笑いぐさである。

「センベイでも食つてろ『シカ』野郎一つ！」

そんな窮地にもめげずに、アイサツ代わりの野次を飛ばすエリス。『笑つてられんのも今だけだつ！ 見てろよー すぐに剥製にしてやるからなつ！』

別の意味で言葉を失うアリーシュ。わざわざ相手を挑発するエリスの意図を計りかねているのだ。

「剥製にするってことはな、つまり、皮あはいで腹かつさばいてハラワタ取り出して綿詰めて、また縫い直すってことだ！」

エリスは、ふつふつふつと笑いながら、律儀にも工程を説明する。「そんでもって将来あたしの家に飾つてやる…」

しかしアリーシュの思惑をよそに、これと言つた意図など特になかつた。単に言いたいだけなのである。

なにかと思慮深いアリーシュには、直感だけで生きるエリスの言動は理解しがたいものがあるのである。

「その威勢がいつまでもつか」

アドレーはジロリ、とエリスへ狙いを定めた。

「試してみたくなつた！」

そして超がつくほど巨大な剣を、片手で軽々と振りかぶる。

人間ふたりがかりでようやく持ち上げられるかどうか……というほど規格外な剣だ。まともに食らえば間違いなくまつぶたつにされてしまうだろう。まさしく文字通りに。

「もつももたねえもあるか。あたしの勢いは止まらねえっ……！」

止められねえよっ！」

緊張感に息を呑むアリーシュが見つめる中、エリスは弾かれたようには地面を蹴つた。

「誰にも一つ！」

アドレーめがけて突つ走る。そしてその勢いのまま、剣を振りかぶつてジャンプした。

「オーバーっ！」

刀身から火柱が巻き上がる。

「フレフ……！」

「弾け飛べえつ！」

エリスの声をはねのけるほど叫びながら、アドレーは自分の足元へ大剣を叩きつけた。

「グランドブلاست！」

その衝撃によって碎かれた地面が、水柱のように上空へと打ち上げられる。

滯空中のエリスへ、眼下から岩の雨が襲いかかつた。

巨大なものから鋭利なものまで、まさに雨のような無数の岩々。食らえば軽傷では済むまい。

「しゃらくせえつ！」

エリスは即座に目標を変更。剣を下方へ向けて振り下ろした。あまたの岩石を、炎の刃でまとめてなぎ払つが、次の瞬間。

岩石群を突破したエリスを待つていたのは、うねりを上げて迫るアドレーの大剣だった。

「一連撃……！」

エリスはとっさに、剣を盾にしてそれを防ごうとする。だが甘かつた。

剣と剣とが衝突した瞬間、エリスの剣が、まるで小枝のようにあつさりと碎かれてしまったのだ。

「！」

「グラヴィティホールド！」

それとほぼ同時に、エリスの体が、見えない力によつて急激に下方へ引っ張られた。

まさに紙一重のところで空気を裂く大剣。

エリスは真下の地面へ、思いきり叩きつけられていた。

まばたきするほどの、わずかな時間内での攻防である。エリスの窮地を救つたのは、アリーシェの放つた重力を操る『魔術』だった。受け身も取れずに全身を打つ羽目になつてしまつたエリスだが、

あのまま大剣を食らうよりははるかにマシだつたろう。

でなければ今頃は、上半身と下半身が別々のところに落ちていたはずだ。

すぐさま飛び起き、間合いを離すエリス。

「エリスさんっ！」

そこへアリーシュが駆けつけ、自分のロングソードをサヤごと手渡した。

「すまねえっ！」

エリスは柄だけになつた自分の剣を捨て、彼女の剣を受け取る。そして素早くサヤを投げ捨て、抜き身を正面に構えた。

普段エリスが使つているものに比べてかなり上等な剣なのだろう。美しく輝く銀色の刀身は、吸い込まれてしまいそうなほど妖しさに満ちていた。

「あなた、うかつよ。……それは折らないでね」

注意を含めつつも冗談めかした口調のアリーシュだったが、心情的には言葉ほどの余裕はないだろう。助かつたからよかつたもの、である。

「保証できねえな」

エリスは悪びれる様子も反省する様子もなく、口元をゆるませて答えた。

顔の下半分は笑つているが、上半分は真剣のように鋭く引き締まつている。

器用なものだ。

「……困ったさんね」

対するアドレー・カギュフは、冷静なまなざしで並び立つふたりを見据えていた。

たかだか人間ふたり。普段なら歯牙にもかけない相手である。気に止める必要すらない存在。

しかし、彼の中に油断はなかつた。

やられた仲間をまのあたりにしたからだ。一體一體ではない。根
じで……と言つていいほどだ。

故にアドレーは、初撃から本氣で斬りかかった。そして納得した
のだ。

「大抵の者ならばあの一連撃はかわせまい。ほめてつかわそつ
どんな形であれ、避けただけでも大したものだ。人間にしては充
分である。

「だが一度目はないぞ」

「そりゃこっちのセリフってヤツだよ」

エリスが威勢良く言い返す。

「今度こそ叩き込んでやる……！」このオーバーフレアをな！

「叩き込むと、どうなるのだ？」

「あたしの勝ちだ！」

「面白い！」

そんな意氣込みを笑い飛ばしながら、アドレーは四体を走らせた。
並ぶふたりの頭上から、大剣を振り下ろす。

幸いだったのは、先手を取つて放たれたリフィクの『魔術』が『
モンスター』一體を仕留めたことだろう。

それで四対四。数の上では互角になつた。

本来ラドニスやパルヴィーたちは、多数の『モンスター』と戦う
場合、ことやら慎重な作戦を取る。たとえ同数であつても戦力差は
著しいのだ。慎重に慎重を重ねるくらいでないと到底渡り合えない。
しかし今は、そうも言つていられなかつた。

アリー・シエとエリスが『ボス』を引きつけている。そのあいだに、
他の連中を片付けなくてはならないのだ。

たつたふたりで『ボス』の相手をするのは、どう考へても分不相
応。そう長くもつものではない。

今必要とされるのは迅速さだ。多少の危険を冒しても、素早く

『モンスター』を倒さなくては勝利はない。

その鍵を握るのがラドニスであると、彼自身自覚していた。

パルヴィー やレクトでは決め手に欠ける。リフィクも『魔術』を連発は出来ない。

やはり最後に命運を握るのは単純な腕力なのだ。

「スラッシュショット！」

パルヴィーが剣先から衝撃波を射出する。

「さらにスラッシュショット！ おまけのスラッシュショットつ！」

計三発の衝撃波がそれぞれ三方に飛び、『モンスター』たちの足元を襲つた。

それにより 一体は動きを止められ、一体は転倒させられる。難を逃れた一体は、剣を片手にパルヴィーへと攻めかかった。

迷わず逃げるパルヴィー。

「フラッシュショット！」

追走者へ、リフィクがロングレンジから光槍を浴びせかけた。全身をマヒさせられたように、『モンスター』はあえなくヒザをつく。そして四体目は、目下ラドニスと拮抗中であった。

至近距離で互いの武器をぶつけ合う。『モンスター』に正面から力比べを挑めるのは彼らのものだろうか。

しかしさすがに互角とはいかない。やはりラドニスの形勢が悪い。そこへレクトが援護の矢を射つた。それは狙いたがわず、奴の眉間に突き刺さる。

苦痛の声を上げる『モンスター』。力の均衡が崩れた。

「ぬんっ！」

すかさずラドニスが、気合いを込めた大斧を叩きつけた。容赦なく胸元をかっさばき、奴を血の海に沈ませる。

あと三体。

「くそつ！」

砂煙が飛散する中、エリスはもどかしそうに悪態をついた。

アドレーが大剣を縦横無尽に振り回すため、攻撃距離まで近付けずに入いるからだ。

恐らくそれがアドレーの戦い方なのだろう。

長大な得物の切つ先だけを当てられる距離を保ち、敵をふとこつに入れさせない。攻防一体の戦法。

それを可能にしているのは、アドレーの恐るべき膂力であろう。

いくら鍛えたところで人間には真似のできない芸当だ。

エリスは、高速で振るわれる斬撃の数々を避けるので精一杯だった。

直前にこの同じ場所でおよそ十五体の『モンスター』からの攻撃を避け続けてはいたものの、その時よりもはるかに追い詰められている。

戦闘が続き体力が減っているといつのも当然あるだろうが、大きな違いはやはり相手。

アドレーの剣捌きが、速さも正確さも手下連中とは段違いなのだ。攻撃は最大の防御とはよく言ったものである。

「おいっ！ 見てるだけかよっ！」

攻めたいのに攻められずフラストレーションを募らせるエリスが、それを晴らすかのように怒鳴り散らした。

その間にも襲いくる切つ先が、鼻先をかすめていく。

言葉の矛先は、アドレーの後方に構えるアリーシュへと向けられていた。

エリスの言う通り、彼女はなにもしていない。ただ押し黙つて様子をうかがっているだけだつた。

「……」

とはいえたアリーシュも、なにも休んでいるわけではない。

行動を必要最小限に抑えているのである。

挑発の効果か、アドレーは完全にエリスへと狙いを定めていた。

アリーシュは一の次……あるいは眼中にないと黙つてもいいかもしない。

そして今のところ、エリスはひとりで猛攻をしのげている。時間を稼ぐのが目的な以上、このまま力を温存しておくるもひとつ手。アリーシュは冷静にそう考えたのだ。

ちらり、と仲間の状況を確認する。ノーマルサイズの『モンスター』はあと一體となっていた。ラドースが万全でないことをふまえると、まだ少しかかるだろうか。

「……とはいって、このままというわけにもいかないわね」「温存するのも大事だが、これ以上エリスを消耗させるのも正直よろしくない。

アリーシュは自分に言い聞かせるように呟いたあと、意を決して攻勢に転じた。

「ロックブレイド！」

奴の背中めがけて、十数本の『岩の刃』をうち放つ。が、アドレーはまるで背中にも目がついているかのよつて、恐ろしく機敏にアリーシュに反応した。

振り返りざま『刃』をすべて斬り払う。そして間髪を入れずにまた振り返り、再びエリスを攻め立てた。

「ならば……！」

驚いている時間も惜しいとばかり、アリーシェはすぐさま次の『魔術』を練り直す。

その間徐々に、エリスの息が上がってきていた。間断なく回避をし続けているのだ。もはや体力は限界に近いはず。

対するアドレーは、顔色ひとつ変えていなかつた。この程度、奴にとつては軽い運動量なのであらうか。

「グラヴィティホールド！」

アリーシェが解き放つたのは、先ほども使用した重力を加算する術だつた。

しかし狙いはアドレー自身ではない。奴の持つ剣へ、だ。
袈裟がけに振り下ろされる最中、局地的に発生した高重力に引っ張られ、大剣の軌道が下方へズレた。

生じる地響き。

「！」

アドレーは驚いて顔をしかめる。大剣は狙いを大幅に外し、エリスのかたわらの地面へと深々と突き刺さつていた。

その瞬間、鉄壁を誇っていたアドレーにスキが生まれた。近寄ることすらできなかつたふところが、がら空きになつたのだ。

「あとでキスしてやつてもいいぞつ！」

援護に対する感嘆と謝辞を乱暴に述べながら、エリスは迷うことなく直進した。

ふところに入つてさえしまえば、巨大な剣も使い物になるまい。

無用の長物というヤツである。

「今度こそ燃えろおつ！」

エリスはそのまま跳躍。振りかぶつた剣から紅蓮の炎が噴き上が

つた。

先ほどと同じ攻め方なのは、ある種の意地もあつたのだろう。

「オーバーつ…………！」

「攻撃とはつ…………！」

斬り込もうとした瞬間。エリスの声をたえざるよつに叫びながら、アドレーは大剣からするりと手を離す。

「こうするものだ…………！」

そして握つた右拳を、まるで稻妻のような速さでうち放つた。鈍い音が響く。

直撃。

アドレーの岩石のような拳が、飛びかかつたエリスの顔面へとまともにねじり込まれたのだ。

息を呑むアリーシュ。

エリスはもんざり打つて、まるで投げ捨てられた人形のように地面を転がつた。

振り抜いたアドレーの拳から、真っ赤な血がざろりと滴る。

意識を失つていたのは果たしてどれくらいだろうか、と。

のろのろと立ち上がつたエリスは、まずそんなことを思った。

しかし足腰に力が入らず、とてもじゃないが自力で立つていられない。剣を杖のようにして体を支えるのが精一杯だった。

妙にぼやける視野で、周りの状況を見る。意識を吹つ飛ばされる前と、ほとんど変わつていないようだった。

ゆつくりと、余裕をみなぎらせた様子で、なかば地面に埋まつた大剣を引き抜くアドレー。

血相を変えて走つてくるアリーシュ。

意識を失つていたのは一瞬に近かつたのだろうか。

「…………」

はたから見ると、エリスはひどい有り様だった。

直撃を受けた顔面……恐らく折れてしまつてゐるであろう鼻の辺

りからは、粘度の高い血がとめどなくこぼれ落ちている。弱々しく荒い息。ぐつたりとした全身。地面で擦つたのか、肌の至るところも血がにじんでいた。

……まあ最後のは、生地面積の狭い服装を好むが故の自業自得であろうが。

どこをどう見ても、もはや戦える状態ではなかつた。立つていらるのさえ不思議なくらいだ。

「……一撃で……」

エリスは血を吐きながら、声にならない声で呟く。もしかしたら見た目以上にダメージは深刻なのかもしない。

そんな彼女を眼下に捕えて、アドレーが大剣を振りかざした。まるで断頭処刑でもするように切つ先が天へ向けられる。

「口ほどにもなかつたな」

エリスは言葉の代わりに、視線を奴へと送り返した。

満身創痍。目も当てられない状態になつていても関わらず、彼女の目は、まだ強い闘志に満ちていた。

戦う者の目。相手にスキがあればすぐにでも飛びかかるうかと、そんな意志を感じさせるような眼差しだつた。

その視線を、駆けつけたアリーシュの背中がさえぎる。かまわず、まつすぐ大剣を振り下ろすアドレー。

アリーシュは片手を前に突き出し、

「リジエクションファイールド！」

手の先に半円球の『光の壁』を作り出した。

打ち込まれる大剣。

しかし刃は、ふたりの体にも地面にも到達していなかつた。

何もない空中……アリーシュの手の先で、まるでアドレー自身が寸止めしたかのようにピタリとその動きが止められていた。

「なにつ……！」

アドレーは思わず驚愕を口走る。

いくら力を込めて大剣を押しても、そこから少したりとも刃が進

まないからだ。恐ろしく頑丈な壁がそこにあるかのよつ。

「動けないの！？」

アリーシュは防御の『魔術』を維持したままで、背後のエリスへ問いかける。

「……エリス・エーツェルをなめんなよ。……ちよつと休んでるだけ……」

エリスは虫の息で言つ返した。問つまでもなく、休めばどうにかなるという次元ではあるまい。

「……たかたがパンチ一発……んな地味で攻撃でやられてたまるかよ……」

口端に血を垂らしながら、言葉を続ける。

「……やられんなら、『アレ』でぶつた斬られてからだ……。じゃないとかっこつかねえだろ？が……」

「こんな時になにをつ……！？」

アリーシュは困惑するように眉根を寄せせる。

そんなボロボロの状態で。こんな危機的な状況で。『いいにそういう軽口を叩く余裕があるというのか。

もう諦観してしまったということなのだろうか。勝利をあきらめて、抗うこと放棄したか。それとも気が触れたか……。

しかし横目で彼女の表情をうががつた時、アリーシュは自分の考えが的外れだったことに気付かされる。

エリスの目には、まだ炎が灯っていた。彼女の心は折れていない。不屈の意志に満ちあふれていた。

「すぐに望み通りにしてやるの！」

アドレーは大剣を構え直し、再びアリーシュめがけて叩きつける。直接受けとはいひものの、アリーシュの顔に苦々しい色が走つた。

一度だけでは済まない。アドレーは何度も何度も、執拗に防御壁を打ち続ける。

攻撃が加えられる度に、アリーシュの表情が日に見えて曇っていく。息も徐々に激しくなり、にじむ汗の量も増えていく。物理的な衝撃をすべて防いでいるのだ。やはり力の消費は大きいのだろう。

「……お互い、覚悟を決めたほうがよさそうね」
アリーシュは険しい表情でそう投げかけた。

限界は自分自身で把握している。

ここが瀬戸際なのだ。

……恐らくエリスを見捨てさえすれば、アリーシュだけは助かるだろう。まだ逃げる力くらいは残っている。

だが彼女の頭の中に、その選択肢は存在していなかつた。

『モンスター』に虐げられている人々を救う。守る。それがアリーシュ・ステイシーの本懐だ。信念と言つてもいい。だから戦つている。

背にしたエリスも、そんな守るべき人間のひとりに変わりはない。どうして見捨てていけようか。

仮に自分がここで倒れようとも、同じ志を持つ仲間が、必ず自分の思いを遂げてくれる。そう信じているからこそ、アリーシュはその場を動かなかつた。

命尽きるまで、この身この信念を貫き続ける。

「短いあいだだつたけど……あなたのこと、好きになれそうだったわ」

アリーシュが、微笑むようにさせやきかける。それは彼女なりの別れの言葉だつた。

「もう少し、じっくりとお話ししてみたかった」

その表情には、ありありと諦念が浮かんでいる。

「……早すぎんだよ、あきらめんのが……」

それを察したのか、エリスは叱り飛ばすように声をしぼり出した。「体ひきちぎられて血へド吐いて、手足動かせなくなつて……目の前真つ暗になつて。あきらめんのはそれからだらうがつ……！」

実際、そうなりかけているエリスである。

しかしながらかけているだけで、なつてはいない。だからまだエリスはあきらめていないということなのだろうか。

こんな状況になつても、まだ。

アリーシュは力なく笑いをこぼす。驚きを通り越して呆れてしまつたのだ。

彼女はエリスのことを、恐ろしく精神の強い人間だと思っていた。だがその認識を、今少し改める。

単なるバカなかもしれない、と。

しかしその心意気だけは感心する。その不屈さ、不折さは、感銘に値する。

そんな人間で出会えてよかつた。最後に、と付くのが残念だけど。諦観しきつたアリーシュが視線を前に戻した、その時。

「……そうね」

ながば死にかけていた彼女の表情に、わずかな光が舞い戻つた。「たしかに、あきらめるのはまだ早かったわね」

「なかなかどうして、しぶとい」

アドレーはまるで楽しむように、アリーシュの防御壁へ大剣を打ち続いている。

刃は相変わらず彼女の身まで至らないが、打ち込むたびに彼女の顔がしかめられていくのが見て取れた。

如実に弱ってきている。あとひと押しだろう。

「だが悪あがきもこれまでだ！」

大剣をさらに大きく振りかぶった時。ななめ後方から、なにかが風を切る音がアドレーの耳に飛び込んできた。

アドレーは反射的に、そちらへ向けて剣を振る。

手応えはあつた。甲高い音を鳴らしながら、刃がなにかを弾き返す。

地面に落ちたそれは、一本の矢だつた。

が、それで終わらない。文字通り矢継ぎ早に、一の矢、三の矢が次々に飛来する。

それらをやすやすと払い落とすアドレー。

「スラッシュショットつ！」

その彼の足に、地をはう衝撃波が命中した。さらに背後から、屈強な男が飛びかかる。頭上に掲げた大斧が力強く振り下ろされた。

「それで攻撃のつもりか！」

が、アドレーは自分の体を回転させるよつに剣を振り回し、大斧の一撃」と男を跳ね返した。

アドレーは遠方、地面に転がる手下たちへと視線を送る。

「やられただと……？ 情けない！」

そして怒りをあらわに、自分を取り囲む人間たちへと向き直つた。『貴様ら……！ 我らに牙をむいた報い、我が同胞を手にかけた報い、オレが直々に臓腑の底まで思い知らせてやる…』

「エーシュルさんっ！」

後方から回り込むように駆けてきたリフィクが、無惨な姿のエリスを見て悲鳴のような声を上げる。

そして慌てて『治癒術』を施した。リフィクの片手と、エリスの体がほのかに輝き始める。

「すみません、僕ももう力が残ってなくて……」

言葉の通り、普段に比べて傷の治りがひどくゆっくりだった。

しかしそれでも、自分の体が楽になつていいくのをエリスはありました

りと感じていた。

「……あいつに一発お見舞いできりゃいい」

彼女の目は、離れたところにいるアドレーの背中を真っ直ぐにこらみつけていた。

レクト、パルヴィー、ラドースの三人が、あえて逃げるよつて戦い、奴をこの場から遠ざけているのだ。奴は奴で、どうやら重体のエリスからはもう興味をなくしてしまった様子である。

「それで決めてやる……！」

「三度目の正直とは言うけど。勝算はあるの？」

かたわらでビザをつくアリーシュが、つらそうな表情で確認した。彼女は限界近くまで『魔術』を使つたため、体力をほとんど失っている。今は休息に努めている状態だ。もしあとほんの少しでも使い続けていたら気を失つていたことだろ。

「勝てるだの負けるだのの計算は性に合わねえ。あたしはただ、やるだけだ。全力やつて道を切り開く」

愚直すぎるエリスの答えに、アリーシュは厳しい視線を差し向ける。

「けど『あれ』には通用しなかったじゃない

エリスの攻撃は、一度たりともアドレー・カギュフを捕えていない。それどころか反撃をまともに食らい、重傷まで受けてしまっている。

今までは、ただ大言壯語を口にしているに過ぎないのだ。

「たとえ体が癒えてもそれは変わらないわ」

『治癒術』で傷を治せても、失った体力は戻らない。すでに相当消耗しているはずだ。今まで以上の戦いができるとは思えない。

「そりやあ、さつきまでの大したなら、そうだったかもしねえけどな」

エリスは笑うように声のトーンを上げて、杖代わりにしていた剣から体を離した。

自分の足でしっかりと立ち、地面から剣を引き抜く。

「さつきまでの……？」

言葉の意味がわからず、眉根を寄せるアリーシュ。

ただノックアウトされていただけのあいだに、なにが変わったというのだろうか。

「あたしの目は節穴じゃねえ、つてこいつたよ」

しかしエリスはそれが答えだと言いたげに、いやに自信あふれる表情を彼女に見せつけた。

ラドニス、パルヴィー、レクトの三人は、それぞれ三方に散り、アドレーを包囲していた。

正対する者は構わず退き、必ず背後や横方向から牽制と攻撃を仕掛ける。その繰り返しだ。

はた目には善戦しているように見えるも、実際はそうではなかつた。ただ消極的だけ。そうせざるを得ないのだ。

こちらもこちらで激戦の直後。エリスやアリーシュほどではないが消耗している。故にいまいち攻勢に踏み切れていないのだ。

「……つまらん戦いだ」

そんな戦況に嫌気が差したか、アドレーは吐き捨てるみたいに呟いた。

元来、アドレーは戦闘行為自体に快感を覚える性格をしてくる。たまに他の『モンスター』のボス格のところまで赴き、腕試しを挑むこともあるくらいだ。

そんな彼からすれば、いつも消極的な戦い方はひどく退屈なのである。これ以上続ける気が起きないほどだ。

「終わらせる」

アドレーは大剣を高々と振りかざし、

「グランドブラスト！」

それを自分の足元へ強烈に叩きつけた。

「……！」

石を放り込まれた水面に、波紋が広がる。アドレーを中心とした地面が砕け、まるで火山の噴火のように岩々が上空へと舞い上がった。

逆方向から襲いかかる岩と石の雨が、近距離に構えていたラディスとバルヴィーを瞬時に飲み込む。中距離を保っていたレクトだけが、唯一その攻撃から免れることができた。

飛び上がった岩石群が、重力に従つて今度は本物の雨のように降り注ぐ。

レクトは、直視しがたい光景に息を詰まらせた。

アドレーの周囲に、岩に埋まりかけたラディスとバルヴィーが倒れている。意識を失っているのか、動く様子はなかった。

……死んではないと、思いたい。

「ただでは殺さん」

そんなふたりを見下ろしながら、アドレーが低く呟く。

「生きたままその身を食らひしめてやる」

そしてそのままその身を立てるかのようにアドレーに向かうれた。

レクトのヒタイから、冷や汗が流れ落ちる。

強大な相手だ。しかし、いすくまりはしない。

『モンスター』の『ボス』と対峙するのは、これで一度目。今度は言い訳はできない。やらねばならないのだ。

『』を引くレクトめがけて、アドレーが攻めかかる。

その横合いから、エリスが猛然と突撃してきた。

「勝負しろー、剥製野郎ー！」

普段の活発さを取り戻した彼女を曰にし、レクトはまつと胸をなで下ろす。

先ほどまでは、遠目からでもわかるほどエリスの状態は思わしくなかつた。それを見た時一瞬は血の気が引いたレクトだったが、すぐには気を取り直すことができた。こうして復活していくのを感じていたからだ。

恐らく大抵の人間ならば、体は無事に治つても心はそうはいかないだろう。あれだけの傷を負わされた恐怖が脳裏にこびりつき、足を震わせる。

しかしエリスに限つてその心配はない。

たとえ恐怖に身を縛られていたとしても、それよりもっと強い反骨心が体を前へ前へと突き進ませる。レクトの知るエリス・エーツエルとはそういう人間だ。

「憲りない奴め」

嘲笑氣味に、アドレーはエリスへと目標を改める。

「だが面白い！」

ある種の興味を抱いたのだろう。痛めつけてもまだ向かつてくる、その根性に。

アドレーは彼女めがけて、大剣を袈裟がけに振り下ろす。

エリスは走る勢いのまま、頭から地面に滑り込んだ。背中の直上を巨大な刃先が通り過ぎる。そのままぐるり返りの要領で立ち上がり、勢いを殺すことなく再び走り出した。

しかしそまだアドレーの間合いである。

大剣の軌道がななめから縦方向に変わり、再びエリスへ振り下ろされる。

紙一重のところで身をひねってそれを避け、エリスはさうに前へと駆けた。

巨体故に足元は死角になりやすい。エリスは駆け抜けざま、アドレーのヒザへと斬撃を残していく。

銀の刃が紫のしぶきを飛び散らせる。

恐らくアドレーにとつて、それはかすり傷程度のものなのだろう。がエリスは、まるで首でも取つたかのような表情を奴へと見せつけた。

「どうだつ！」

「……腑に落ちないな」

アドレーは足の傷などまるで気にせず、彼女に懷疑的な眼差しを向ける。

「そんな動きで、オレの攻撃を避けれるはずがない」

彼はひと目で見抜いていた。今のエリスには、もはや満足に体を動かせる力など残つていらないということ。

一拳手一投足が鈍く、重い。先ほどまでと比べるとまるで全身に鉛をつけているかのような遅さなのだ。

だというのにエリスは、アドレーの攻撃を一度もかいくぐり、あまつさえ傷を与えるに至つた。

普通なら有り得ないことだ。運良く……の範疇を超えていく。「考えられるとするなら……オレの剣筋を読んでいるのか？」

アドレーは楽しむような様子で推測を口にした。

体を動かせば大なり小なりクセというヤツが個々に出るものだ。手や足の振り方、視線などが顕著だろう。注意深く観察すれば、あるいはそれを見極めることもできるかもしれない。そして攻撃を先読みして剣が振るわれる前に動き出せば、たしかに避けることも可能であるつ。

……理屈の上では、と付け加える必要はあるが。

「まさかな」

アドレーは自分の考えを笑い飛ばす。あまりにも机上の空論すぎる、と。

「そりゃあ、あんだけやたらめつたら振り回してりやな」

しかしH里斯は、アドレーの推測に応じるよりついに左口角を持ち上げた。

「遠くから見りゃまるわかりだ」

まるで勝ち誇った表情。

遠くからと「うことは、アドレーがラディースたちとやり合つて、いた時のこと」を指しているのだろうか。至近距離で正対するより全体を眺めたほうがわかりやすいといつのも、理屈としてはうなづける話ではあるが。

アドレーはわずかに顔をしかめる。H里斯はなおも上調子に言葉を継いだ。

「それを見逃すほど、あたしの田はマヌケじやねえんだよ。つまりこのH里斯アイはなつ！」

肩で息をするリフィク。そのとなりでビザをつくアリーシュは、驚きの表情でエリスを見つめていた。

「……信じられない」

本当にアドレーの動きを先読みしているのだとしたら、大した洞察力と動体視力である。にわかには信じがたいが、それ以外の説明が思いつかないのも事実だつた。

しかし真に目を見張るべきは、そんなところではない。

彼女はあの瀕死の状態で……手足も口も動かせないような状態で、奴の動きを観察していたということになる。

痛みで卒倒しなかつたのが不思議なくらいの負傷だつたといつのに。彼女は本当にあきらめていなかつたのだ。

まだ戦うために。勝つために。その牙を研いでいた……！

その姿勢がすべてを物語つている。彼女という人間の心根を。

「エリス・エーツェル……口だけじゃない」

アリー・シェは一瞬だけ愕然と、そして一瞬だけ口元をほころばせて、ゆっくりと重い腰を上げた。

両足で地面を踏みしめ、深く息を吐く。

「少し元気をもらつたわ」

そして凜々しさのよみがえつた眼差しを、前方へ向けて射飛ばした。

振るわれる大剣の間隙を縫つて、エリスはアドレーの真下へとスライディングで滑り込む。

足のあいだをくぐり抜け、背後へ。そしてその背中に渾身の一撃を叩き込んでやろうとした、直前。

アドレーは恐るべき速度で振り返り、同時に剣を横なぎに払った。跳躍するエリス。足のわずか下を刃が走り抜けた。着地した次の瞬間、迷わずななめ後方に飛びずさる。一直線に突き出された大剣が、エリスの影を刺し貫いた。

「どうした、それで本気かっ！」

アドレーは笑いを混じらせながら、巨大な剣を高速で振り回す。

「口ほどにもないとは、まさにこのことっ！」

恐らくエリスの体力が万全な状態だったなら、もう少し『戦いらしく』もなつていただろう。

エリスは奴の攻撃を何度もかいぐりながら反撃を叩き込んでいた。しかしそのどれも、表面をなでるような軽傷しか与えられてはなかつた。

アドレーがそれしか許していないのだ。

レクトからの援護も行われている。だがアドレーはそれを斬り払い、あるいは避け、急所への直撃を巧妙に防いでいた。

ふたりがかり。だというのにスキが生み出せない。故に攻めきれない。なにかが足りないのだ。あと少し가及ばない。

「焦んなよ。今にでかいヤツをぶちかましてやるから……！」

距離を取り、エリスは剣を持つ手を握り直す。しかし当のエリスは、もう少し焦るべきだろう。体力が心許ない上に、決定打を与えられずにいる。その先に待つてるのはゆるやかな敗北だ。悠長にしている余裕はない。

「オレもやつ氣の長いほうではない」

アドレーはふと攻撃の手を止め、地響きのよつと低い声を投げかけた。

「こんなものは、ただの悪あがきだ。一時は人間にしておくには惜しい氣概と感じたが……どうやらオレの勘違いだつたようだ」

吐き捨てた言葉は、嘲りと失望を伴つて風に消えていく。

「お前の言葉は、すべて单なる虚言だ。吠えることしか能のない弱者に興味はない。手早く同胞への供養とさせてもらつ」

あえて口にしたのは、彼なりの礼儀なのだろうか。もしくは罵つただけか。それを確かめる術はない。

「言つてろよ！」

突き返すよじこ、エリスが激しくタンカを切つた。

「てめえがどう思おうが知つたことか！ 勝つのはあたしだ！ てめえは負ける！ そりなんのに変わりはねえんだよつ！」

「……やれやれだ」

「」の期に及んでまだ、と言いたげに、アドレーは鼻の先であしらう。

「まつたくね」

捨てられた言葉を拾い上げたのは、その場へ歩いてくるアリーシエだつた。

「口にするのは、なんの根拠もない大言壯語や屁理屈ばかり。態度が立派なだけで、あまりにも現実が伴つていない」

「懲りない奴がもうひとりいたか」

「だけど一切の迷いもなく、ためらいもなく言つものだから、不思議と、本当ににかを成し遂げてしまつのかかもしれないと思えてくる」

彼女の足取りは、お世辞にも軽快とは言えなかつた。顔色もまだ優れていない。無理をしているのは誰の目にも明らかだつた。

「そして信じてみたくなる」

エリスのとなりに立ち、足を止める。

「だから……！」

アリーシュの体が、うつすらと輝き始めた。

『魔術』の兆候。それを認め、アドレーはわずかに警戒の色をのぞかせる。

「……エリスさん、私が手を貸せるのは一度だけよ。それで決めて。それをしくじると、本当にもう勝機がなくなってしまう」

アリーシュは、エリスだけに聞こえるくらいの小声で真摯に告げた。正直な状況分析である。理屈抜きに、もう後がない。

「あなただってわかつているでしょう？」

「わかんねえな」

しかしエリスは、それを否定するべく言葉を返した。

「勝機はいつでもあたしの中にある」

活力に満ちた強い瞳は、まっすぐにアドレーへと向けられていた。

「それを捨てない限り、エリス・エーツェルに負けはない……！」

彼女の横顔を見るアリーシュは、無意識のうちに短く噴き出していた。どうやら自分は、まだまだ彼女のことを見くびっていたようだ、と。

アリーシュの瞳も、正面の強敵へと向けられる。

「頼むわよ」

「任せとけ」

エリスとアリーシュが、足並みそろえてアドレーへと立ち向かっていいく。

その姿は目にし、レクトは彼女たちの考えを推し量った。

その攻撃に、残る力をすべてかけるつもりであると。

この状況を開拓するにはもはやそれしかないだろう。口ではどう言おうと、エリスももう余力が残っていないはずだ。

捨て身の攻撃で決着をつける。

ならば自分もそれにかけるしかない。

レクトは構えていた弓を下げる、意識を最大限に集中し始めた。

こやとこいつのためこと思つていたが、紛れもなく今がその時だ
わづ。

「出し惜しみは無しだ……！」

「腹をくくつたか

正面から迫るふたりを田途に收めて、アドレーは全身に力を込めた。

「最後のひと花を踏みにじる。それもまたよし！」

そしてちょうど切つ先を当てられる距離を見計らつて、先陣を切るエリスへ大剣を振り下ろした。

エリスは舞うように刃を避け、さらに突き進む。アドレーが剣を引き戻したのと同時に、軽やかに空中へと飛び上がった。

「オーバーっ！」

エリスの振りかぶつた剣から、猛々しい炎が湧き上がる。

「ワンパターーンな奴め！」

アドレーはすかさず、大剣を自らの足元へ突き立てた。

「グランドプラスト！」

その衝撃で、砕けた地面が勢い良く弾け飛ぶ。が、その直前に、アリーシェが爆心地へと滑り込んでいた。

「リジエクションファイールド！」

そして地面に向け防御障壁を展開する。それによつて、上空へ飛び散る岩の弾幕に一力所だけ穴が生まれた。まるで直上のエリスを、意志を持つて避けるかのようだ。

「無駄だつ！」

アドレーは間髪を入れずに、エリスへと剣を横なぎにした。そこまでが勘定の上だ。最初にも見せた一連撃。いくら動きを読もうが、これはかわせまい。

が、しかし。

「フラッシュジャベリン！」

レクトの打ち放つた巨大な光槍が、大剣を持つ腕を直撃した。

「なにつ……！？」

それは完全に、アドレーの予測を外れた攻撃だった。彼からの援護など、弓を射るくらいしかないと悔っていたのだ。

貫かれた腕の力が奪われ、大剣が手からすっぽ抜けた。

「フレアああ！」

次の瞬間。炎の刃が、アドレーの胸を肩からバッサリ斬り裂いた。

傷口から広がる炎に、苦痛の声を上げながら身悶えるアドレー。

その様子を見ながら、レクトは力尽きてその場に倒れた。先ほど

の『魔術』に文字通りの全力を注いだからだ。

アリー・シェはなんとか意識を保ちながら、気を許したように座り込む。

しかしエリスだけは、疲弊した体にムチを打ち、しつかりとした眼差しで剣を構え直した。

奴はまだ倒れていない。

斬り裂かれ、火だるまになつた今でも、アドレーはまだ倒れていなかつた。

エリスの眉間にシワが増える。手応えで、斬り込みが浅かつたと

いうことを自覚していた。

詰めが甘かつたのだ。

「おおおおおおつ！」

アドレーが雄叫びを上げる。充血した瞳がエリスを見下ろす。そして固く握った左拳を、大きく振り上げた。

エリスは息を呑む。反射神経に体が追いつかない間に合わない……！

「フラッショウつ……！」

その窮地を救つたのは、リフィクがかるくつじて放つた小さな光弾だつた。

殺傷力もなにもない、単なる光の玉が、アドレーの眼前で炸裂す

る。

振り下ろされた拳は田測を外し、エリスのほんのわずか隣へ叩きつけられていた。

「……だからさ。言つたろうが……！」

エリスは剣先をななめ上へ向け、跳び上がる。

「勝つのはあたしだって！」

突き出した銀の刃は、アドレーのノド元を深々と刺し貫いた。

『シカ』に酷似した巨体が、今度こそ倒れる。それから一一度起き上がることはなかつた。

驚くほど時間がゆっくりと流れている。

そう感じるのは、極限まで高まつた緊張と興奮がなかなか覚めやらないからであろう。

まず優先させたのは、傷を負つて倒れたラドニースとパルヴィーの治療だつた。

しかし『治癒術』の使えるアリーシュとリフィクも相当に消耗していたため、それは時間をかけてじっくりと行われた。強い衝撃で気を失つただけで、命に関わる重傷ではなかつたのがせめてもの幸いだつたろう。

それが一段落ついた頃には、空は斜陽に染まつていた。

「エリスさん」

戦場となつた村の、なにもない小屋の中。寝転がつていたエリスへ、アリーシュが微笑みを携えて歩み寄つた。

「今回は、敵の力を見誤つていたわ。私たちだけでは負けていた。あなたたちがいてくれて、本当に助かつたわ」

そして右手を差し出す。

「ありがとう」

心からの感謝だつた。

若干の照れくささを感じながらも、エリスは起き上がりてその手を握り返す。

「まあな。助かったのはこっちも同じだ。お互い様つてヤツだよ」エリスも、全員が満身創痍になるまで奮闘したからこそこの勝利があるのでと痛感していた。

『モンスター』。それほどまでに強大な相手だ。ひとりでも欠けていたら駄目だつたろう。

エリスとアリーシェは笑い合つ。

肩を並べ、背中を預け、共に修羅場をくぐり抜けた戦友。死線を共にした仲。出会つて間もないふたりではあるが、彼女たちのあいだには確かに絆が芽生えていた。

無論それはふたりだけではなく、この場に生き残つた全員に言えることである。

「マスター、聞いたかよ」

大草原『グリンシー』の外れに位置する小村。そこに居を構える酒場に、ひとりの男が上機嫌に入ってきた。

正確には酒場と食堂と、二階の宿屋を兼ねた店である。

男は並ぶ丸テーブルを通り越しカウンター席に直行し、興奮気味に一の句を継いだ。

「近くに巣くつてた『モンスター』共がみんな死んでたって」

「もう何度も聞いたよ」

壯年の店主は苦笑してそれに答えた。

店に来る客来る客がそれを口にするため、喜ばしい反面どこか辟易している部分もあるのだ。

男の顔は、興奮とは別に紅潮している。恐らく酔つているのだろう。もう夜も深まつている時間だ、それも無理はない。

店主は注文された酒を出し、構わず続けられる常連客の話に付き

会つにした。

この店を始めて長い。酔っ払いの相手をするのは慣れていた。

「最初に見つけたのはガキ共だったんだって」

「うん」

「言い付け破つて村の外まで遊びに行つて、奴らのすみかに入りやがつたんだ」

「らしいね」

「奴らが死んでたからよかつたものの、生きてたらどうなつてたことか。ぞつとするよ」

「まったく」

「……しつかし、なんで死んでたんだかなあ。マスターわかる?」

「さあ。『モンスター』同士で揉め事でもあつたんじゃないかな」

「……」

同じカウンター上で交わされる会話に、エリスは割り込みたくてウズウズしていた。

自分たちがそれをやつたんだと。だから褒め称えてもいいんだぞと。祟め祭つてもいいんだぞと。

しかし言わなかつた。アリーシェの言葉を覚えていたからだ。積極的に『モンスター』に抵抗し、なおかつ打ち破つた人間がいるということが知れ渡れば、奴らがなにかしらの報復を行うかもしない。

無論、それが自分にだけ向けられるのならば問題はなかつた。望むところである。しかしそれが自分以外の、目も手も届かない無関係の人間たちに向けられるのならば、たまつたものではない。

その可能性は充分にある。『モンスター』とはそういう奴らだ。故にエリスは黙殺する。

黙つて夜食の、熱々のビーフシチューをすすつていた。

……戦いのあと。一度落ち着いた場所で休息すべきと提案したアリーシェに則り、一同は近場にあつたこの村で宿を取つた。

そしてひと眠りしたエリスは、空腹を覚え、一階部分の食堂スペースまで降りてきて今に至るというわけだ。

酒場も兼ねているためか、夜中であつたが客の入りはまざまざといつたところだった。

「今回ばかりは、本当に危なかつたですね」

隣のイスに座るリフィクが、ため息まじりにささやく。彼の前には、水の入ったコップだけがぽつりと置かれていた。

熟睡していた彼を叩き起こして、強引に夜食に付き合わせたのは無論エリスだ。別にひとりで食べにきてもよかつたのだが、そこは枯れ木も山の賑わいというヤツである。

「一歩間違えれば、死んじやうところでした」

「いつだつてそーだろーが」

投げやりに答えるエリス。

「遊んでるわけじやねーんだから。間違えなくとも、ちよつとでも気を抜きやそこで終わりだよ」

口調は投げやりとはいえ、その内容は決して冗談の類ではなかつた。

敵は強大。自分よりも強い者。それを嫌といつほど思い知つて、なお軽口のようにビーフシチューを食べながら言えてしまう辺り、やはりどこか神経のズレているエリスである。

「……『ボス』と呼ばれる『モンスター』を相手にするのさえ危ないのに、さらにその上の『キング』に挑もうとしているんですね、エーツェルさんは……」

リフィクはしみじみと、思い返すように呟いた。今さら、ではあるが。

「やめませんか？ そんなバカげたことは」
顔をエリスに向け、真剣な表情で切り出す。

「なにも『キング』に挑まなくたつていじやないですか。アリー

シェ・ステイシーさんたちの、あの騎士団に入れさせてもらつて……それで、人間に率先して害を与える『モンスター』たちと細々と戦つていけば……！」

しかし当のエリスは、そんなリフィクの熱弁をマジメには聞いていなかつた。また始まつた、とつまらなさうに眉をひそめている。口を開けば同じことしか言わないからだ。やめよう、逃げよう、あきらめよう。飽きもせずそんなことばかり。

普段なら、エリスがそのまま無視して終わりだらう。もしくは怒鳴るか小突くか、その程度のものだ。

しかし不幸なことに、今のエリスは、言いたいことを言えないため虫の居所をひどく悪くしていた。だから普段とは少し違つた結果を招いてしまう。

「今からでも遅くないですよ。一緒に考え直しましょ？ ねつ？」

「……」

エリスは無言で、シチューをスプーンですくう。そして湯気の昇り立つそれを、カウンターの上に無防備に置かれているリフィクの手にポトリと落とした。

「ああつつあいつ！」

リフィクはそれにびっくりして、イスから転げ落ちてしまう。しかもその弾みに自分の手でコップを倒し、頭から水をかぶつてしまつた。

「エリス・エーチェルに一言なし！」

散々な状態のリフィクへ、さらに怒鳴り声が浴びせかけられる。

「あたしが決めたことはもう決まつたことだ！ 雨が降ろうが槍が降ろうがそれは覆らないんだよ！ 脳の底まで思い知れッ！」

こつそりとアドレー・カギュフのセリフを挿借するエリスだった。気に入ったのだろうか。

カウンター席から響く威勢の良い声を耳にして、アリーシェは含

み笑うように微笑んだ。

木製の丸いテーブルについている彼女。対面に座るゼーテン・ラドニス共々、今は鎧も武器も身に付けていなかつた。

ゆつたりとしたローブに袖を通し、鮮やかな色のハチミツ酒を味わつてゐる。

「元から笑みが過ぎ去つた頃。アリーシュは、深刻な表情をラドニスへと差し向けた。

「『銀影騎士団』……その全戦力を集めれば、『モンスター・キング』に対抗することができるかしら……？」

真剣そのものといつた様子の彼女に対し、彼は「らしくないな」と冗談を返すような口調で答えた。

「あんな娘の絵空事を真に受けるとは。アリーシュ・ステイシーらしくもない」

「……かもしれないわね」

アリーシュは顔を横に向け、カウンター席のエリスをじつと見つめる。

「けど、彼女という人を知つてしまつたから」
ラドニスも一度だけカウンターを視線を送り、グラスを口につけた。

「エリス・エーツェル。……私が彼女くらいの頃は、ただただ『モンスター』に怯えて生きているだけだったわ。戦おうなんて考えもしなかつたし、そんな力もなかつた」

アリーシュがこの道に入つたのは二十を過ぎてからだ。むしろそれまでは、逆に戦闘や暴力といった行為を忌避していた。しかし今は、そんな自分を少々後悔している。

「でも彼女はそれを持っている。私にはなかつたものを、すべて。もし過去の私が、彼女のような力と心を持つていたら……と思つたね」

普段より饒舌なのは、アルコールが入つてゐるからだろう。アリーシュは顔を正面に戻し、グラスに目を落とした。

「とてもうらやましくて。憧れて。少し妬ましい」

話がずれたわね、と呴いて、アリーシェはハチミツ酒をひと口含んだ。そしてラドースを見つめる。

「私たちがしているのは、終わりのない戦いでしよう? 一体でも『モンスター』を倒せば、それで救われる人間がひとりでもいる。

今まではそれで充分だと考えていたけど……」

端的に言つてしまえば、それは根本的な解決にはなつていなかっさすぎる抵抗。せいぜい悪あがきにすぎないのだ。

「彼女がやろうとしているのは、その根本の解決。……『モンスター』は強い生き物で、人間は弱い生き物。それが常識。だけでもしその人間が『モンスター』の最高峰である『キング』を倒すことができれば」

常識が覆る。

「世界が変わるかもしれない」

無論、『モンスター・キング』を倒すなどラドースの言つように絵空事だ。人間』ときが口にするのもはばかられること。そして仮に倒せたとしても、この現状が変わるという確固たる保証はない。しかし。

「とても魅力的な目標だと思うの」

たとえイバラの道であつたとしても、それが成されれば、自分たちがやつてきたことは比べ物にならないほどの人間が救われるかもしれない。命を救うことができるかもしれない。

『モンスター』と戦つていぐなら、これ以上ないというほどの目標である。

一瞬でも甘美な夢を抱いてしまった以上、それを忘れるというのがあまりにも酷な話だ。

「どれだけ大きな目標でも、心が折れない限りは挑戦できる。そしてエリスさんはそんな心を持っている。……だけどすべてを成し遂げるには、まだまだ力が足りていない。だから私たちがその力を補えれば、もしかしたら……と思って」

熱心に言い終えたアリーシュは、ノドを潤すようにグラスに手を伸ばす。

静かに聞いていたラドニスは、彼女がグラスをテーブルに戻した頃、ようやく口を開いた。

「『モンスター・キング』の力量を知らない俺には、なんとも言えない話だ」

「終わらせないでよ」

アリーシュはクスクスと、まるで少女のように笑いをこぼす。「たしかにそうだけだね。それに、仮に『キング』に太刀打ちできる目処が立つたとしても、騎士団の意志を決めるのはオーランド様ですもの。私が頭を悩ませていてもしょうがないわよね」

そして肩をすくめた。

「……だが、ひとつだけ言えることは、ラドニスはテーブルの中央を見つめながら、真摯な口調で断言する。

「俺はお前の決定に従うということだ。それは変わらない」

言葉と共に向けられた視線に、アリーシュは穏やかな微笑みを送り返した。

「……うん。ありがとう」

そんな時、店の奥にある階段から、パルヴィーが降りてくる姿が視界に入った。

「ねえー、エリスちゃん

「……あー？」

隣席に座るなり投げかけられた猫なで声に、エリスは怪訝顔でそちらを振り向いた。

「おねがいがあるんだけど」

このパルヴィー・ジルヴィアも、今は武器や防具の類を身につけていなかつた。ワイン色のワンピースに、髪を頭の両端でアップにしている。

そういう姿だと、やはり戦士ではなくどこかの村娘という印象が強かつた。ちなみにエリスはどこかの不良娘だらう。

「聞かねーからどっか行け」

エリスはそつけない態度であしらい、ビーフシチューを口に入れ る。

「えーっ？ そんな意地悪なこと言わないでよー。わたしたち友達 でしょー？」

パルヴィーはさらに甘えるようにすつまつした。うつとうしそうに 腕で振り払うエリス。

「いつからだよー！」

「えへへ。今から

あからさますぎる猫のかぶり具合で、エリスは鬼のような形相で 彼女をにらみつけた。

延々と『各地に伝わる一風変わった逸話』を喋りされていたリフィ イクは、乱入者の登場にひそかにほつと息をつく。

「あのかつこいい彼のこと、教えてくれない?」

「どいつだよ」

エリスは興味なさげにシチューを含みながら、それでも一応相づちを打つてやつた。

「ほら、弓矢の。レクトくんだけ? 彼のこと」

「あんなもん別にかつこよかねーだろ。あたしのほうがかつこいいつての」

妙なところでも負けず嫌いを發揮するエリスである。パルヴィーはかまわず食い下がつた。

「ねえ教えてよう、いろいろ。好きなものとか、嫌いなものとか、趣味とか、特技とか、将来の夢とか、女の子のタイプとかあ。なんでもいいから知りたいの」

好感と興味にあふれた表情が、ありありと浮かんでいた。その奥にあるものは、まあ、わからなくもない。本人も隠す気はないのだろう。

しかしエリスはまつたく相手にせず、シチューの中のエンジンを横によけるという作業を優先させていた。

エリスがつれないと見るや、パルヴィーはその向こう隣のリフィクへと矛先を変える。

「ねえリフィくんでもいいからさあ、彼のこと教えてえ」

リフィくん……。彼のヒタイに、妙な汗がひと粒浮かんだ。

「いえ、あのー……僕は、まだおふたりと出合つてから日が浅いので。そういうことは、あまり

詳しくないんです。と言い終わる前に。

「使えねつ」

パルヴィーは小骨を吐き出すよつこ、低い声で呟いた。

「えええーっ！？」

「んな回つべどこ」としてねーで、あいつに直接聞かやあこいじや
ねーか」

論
だ。

「えー？ でもー」
パルヴィーは再びかわいこぶりっこな仕草で、もじもじと照れ笑
つた。

1

空恐ろしいものを見るような眼をするリティケ。

なつて「そんないの、たぶん、胸元でものがあくじやん？ また早いが

「エーツェルさんつ……！」

最後に一気に飛躍した展開に、リフィクはたまらず声を上げた。
いつも一段三段、段階をすつ飛ばす。

卷之三

意外と乗り気な様子だつた。

思わずイスからずつひけたリフイク。

「そつちのほうが都合いいだろ」「でもでももう遅いし癪をやめてるかもしれないよね?」

イスに座り直そうとして、再び滑り落ちるリフィク。

「先手必勝」の世界にも通用するアレだ。ためらってち
ゃんちん詰めんなーぞや? ざつひいもんかな。奇襲ざる、奇襲・

親身に激励しているようにも聞こえるも、その実、ヒーヒーヒー

「うーん。……よーし！ 奇襲！」

そうとは気付かぬパルヴィーは、なにかを決意したのか、勢い良くイスから飛び降りる。

「やつてみる」

そしてペロリと舌なめずりをして、上機嫌な調子で階段を登つて行つた。

「……お互いの気持ちが大切なんじゃないと、僕は思いますが……」

真面目に咳くソフィークを横目に。エリスは彼女の背中を眺めながら、

「さかりつきやがつて」

と自分でそそのかしたことを見事に棚に上げて、白い皿で言い捨てた。まあ、あの程度の扇動でやる気になつてしまつ彼女も彼女でかなりアレなのが。

「別に。自然なことじゃない？」

そんなエリスの肩に、そつとやわらかな手が置かれた。

振り返つた先にいたのは、アリーシュ・ステイシー。その後ろにラドニスの姿もあつた。

「私たちの戦いはいつでも命がけだもの。焦がれた思いなら、ためらわずに伝えたほうがいいわ。遂げられないよりはね」

彼女の顔は、かなり紅潮していた。目が据わつていて、声や喋り方も普段と比べて甘つたるい。完全にできあがつていてるようである。

「あなたにも、そういう人のひとりやふたりはいるでしょ」

水を向けられて、エリスは短く鼻を鳴らした。

「どうだかな。あたしに釣り合つような奴なんかそういうこねーよ。」

」

言い終えてから、反撃のよつて「あんたはどうなんだよ?」と聞き返す。

アリーシュは意味深な微笑みを見せて、

「さあ、どうかしら? もやすみ」

ラドニスを連れ立つて一階に上がつて行つた。

「おやすみなさい」とリフィク。

エリスはそれ以上はかまわず、他の客と話し込んでいた店主を力
ウンター越しに呼び寄せた。

「おかわり」

そしてビーフシチューをもう一杯注文する。

「まだ食べるんですかっ！？」

「悪いかよ」

リフィクは思わず目を丸くした。かれこれ三杯目だ。見ているぶ
んにはかまわないのだが、エリスが残したニンジンたちを食べさせ
られているのだから、たまたまものではない。彼女と違い特に空腹
だつたというわけでもないのだから。

断ると、食べ物を粗末にすんじゃねーよという理不尽な説教が飛
んでくる。

それがもう一杯ぶん追加されると思つと、不満を通り越して泣き
たい気分になるリフィクだった。

新たなシチューが運ばれ、ひと口ふた口と進んだ頃だらうか。パ
ルヴィーが戻ってきたのは。

彼女は無言でエリスの隣に座り、カウンターにがっくりと突っ伏
す。

「……マスター、キツイのちょうどい」

そしてその体勢のまま、なんとも暗然な声を吐き出した。

エリスはそんな彼女をチラリとだけ見て、特になにも言わずにス
プーンを運ぶ。

しばしのち店主が、小さなグラスをパルヴィーの前に静かに置
いた。大抵の場合、グラスの小ささに反比例して中身のアレの度合
いが強くなつていくものだが、さて。

それがきつかけとなつたか、リフィクがおずおずと口を開く。

「なにかあつたんですか……？」

様子を見るに、なにかあつたのは明白だろう。パルヴィーはグ

ラスに入ったものを一気に飲み干し、再びカウンターにうなだれた。

「……言いたくない」

「『その気持ちは嬉しい。だが今は、心から集中すべき』ことがある』

「彼女の言葉が終わるか終わらないかといつタイミングで、エリスがなにかを言い出した。

まるで紙に書かれた文字を追つているかのように、抑揚のない言い方。

「『それが済むまでは、他のことにまで気を回していられない』……とかなんとか、よくわかんねー御託でお茶濁されて、すいすい」と追い返してきたんだろ?」

なんのことだかリフィクにはわからなかつたが、パルヴィーは泥から出るように顔を上げ、じつとりとした目でエリスを見やつた。

「……なに? あんたエスパー?」

「あんなクソ真面目な野郎の言いそなことなんて、たかが知れてるつてこつたよ」

さらりと言つて、シチューをひと口。

「それにあいつだって行きずりの女と寝るほど落ちぶれちゃいねーだろ」

「エーチェルさん、言葉つ……」

あまりに遠慮のない物言つて、リフィクはたまらず眉をひそめる。しかしパルヴィーは、特にそれを気にした様子はなかつた。なにやら頬をふくらませながら、なめ回すようにエリスを見つめている。「なーんか、ずいぶん詳しそう。彼のことならなんでもわかつてますみたいな感じで」

やけにトゲの含まれた声。

「なんだそれ」

「どういう関係なの? レクトくんとは」

言葉的にも物理的にも、ずいと詰め寄るパルヴィー。エリスは目障りそうな顔を彼女に向けた。

「弟分だよ」

「……レクトくんのほうが年上に見えるけど」「気にはんな」

「それだけ？ いつから知り合いなの？ どうやって知り合ったの？ なんで一緒に旅してるの？ 本当にそれだけ？ ねえねえねえねえ？」

「つるせーなあつ！」

もう少しでキスしてしまいそうなほど詰め寄つていたパルヴィーを、エリスはガマンの限界とばかりに突き放した。

まあエリスでなくとも、こうしつこくされたら嫌気も差すだろう。「ガキの頃から一緒にいたつてだけだよ。わかつたらとつとと寝ろ、バカつつら」

「それって、幼なじみってこと？」

当初の位置に戻るも、パルヴィーは懲りずに話を続けた。

「……あやしい」

「なにがだよ？」

「だつて王道じゅん。なんだかんだあっても、結局そこに落ち着くじゃん」

「だからなにがだよ？」

「負けないからつ！」

パルヴィーはいきなり大声を出して、イスから飛び降りた。そしてそのまま、ふらふらとした足取りで再び階段を登つっていく。恐らく今度は自室に向かつて。

「鼻につく上に、よくわからん奴」

エリスはその途中まで田で追い、投げやりに言い捨てた。

世界のどことも同じように、その村にも朝はやつてくる。輝く太陽が顔を出し、さわやかな風が流れていく。

酒場兼食堂兼宿屋の軒先に、赤茶色の毛並みをした一頭の馬がつながっていた。アリーシュら、銀影騎士団の所有馬である。

と言つても彼らが乗せるのは人ではなく、人間ではなく持ちきれないほどの荷物だった。両側面に吊らした皮の袋の中には、代替用の武器防具がたんまりと詰め込まれている。

その馬のたてがみを、エリスがわしわしとなでていた。

動物に向けられる目は、いつもと違つて穏やかでやさしい。……

ような気がした。

背後から、旅支度を終えたレクトとリフィクが歩み寄る。

彼らに少し遅れて、アリーシュ、ラドニス、バルヴィーの三人も建物から出てきた。エリスら三人は自然とそちらに振り向き、対面する形になる。

「みんなで話し合つたんだけど」

アリーシュが口を開いた。

「あなたたちの旅に、私たちもお供することにしたわ。かまわないでしょう？」

と気持ち良く答えたのはレクトだった。心強い、という思いが全面ににじみ出ている。

「ありがとう」

「三人そろつてあたしの子分になるつてんなら、かまわねーけど」付け足したエリスに、レクトとリフィクが非難の目を集中した。アリーシュは「ふふ」と微笑んで、それをあっさり受け流す。単なる冗談だと思ったのだろう。エリス的にはあながちそうでもなかつたのだが。

「『モンスター・キング』を打倒するという最終目標まで付き合えるかは保証できないけど、協力は惜しまないわ。これから、力を合わせてがんばっていきましょう」

かしこまったく彼女のあいさつに「そばゆいものを感じながらも、エリスは笑顔でそれに応えた。

「 じょうがねーな。頼むよ」

人間が六人に馬が一頭というなかなか賑やかになつた旅路は、青空の下、大草原を渡る街道を進んでいた。

それなりに整えられた道は歩きやすく、疲労もない。人数が増えたことで交わされる言葉も増え、一行のあいだには陽気な雰囲気がただよっていた。

「……『キング』の居場所を知らずに、今まで旅をしていたの？」
その事実に、アリーシェは思わず目を丸くする。
あれだけ豪語しておいて、だ。目的の場所がわからない。もはやそれは笑い話のレベルだろう。

おかしそうに笑みを浮かべる彼女に、エリスは口を尖らせて反論した。

「まったく知らねーってこともねーよ。名前くらいは知ってる。えーと、あれだろ、『ルル・リラルド』とかって」
「そうね。北の地グッドレムに位置する魔都……。ヴァーゼルヴ・ヴァネスはそこにいるわ」

「それが親玉の名前か」

と、しみじみ呟くエリス。それすら知らなかつたのかということには、もう苦笑さえ起きなかつた。

いろいろとアンバランスな奴である。

「行つたことあんのか？」

「まさか」

気軽に訊ねたエリスに、アリーシェは心外とばかりに肩をすくめた。

「近付こつとも思わなかつたわ」

人間からすれば、そこはまさに悪鬼の總本山だ。ヤブをつついてヘビを出すこともあるまい。良識ある人間なら、耳にするのも避け

たい場所である。つ。

そのやり取りを、なんとも言えない心境で聞いているリフィクである。

先日は『モンスター・キング』の居場所はわからないと答えたもの、実はウソだったのだ。

知っていた。旅をしていれば嫌でも耳に入つてくる。

しかしそれを教えてしまえば、ますますエリスに拍車がかかつてしまふのは明白だ。

指をくわえて死地に行かせたくない。そして連れて行かれたくない。そう思つて、主に後者の理由で、あえてシラを切つたのだ。そんなリフィクのさやかな抵抗が、この瞬間に水泡に帰す。いづれはわかること、とあきらめていた部分もあつたにはあつたのだが。

「場所がわかりやあ、こっちのもんだな」

エリスは一行の先頭を意氣揚々と闊歩しながら、豪快にひとりごとをこぼす。

まるで最大の悩みが解消されたとでも言いたげな様子だった。実際問題、それは大した悩みではないのだが。もつとはるかに高い壁がそそり立つてゐるということは、考えないのだろうか。

……考えないのだろう。

上機嫌な彼女へ、レクトが横に並んで問いかけた。

「やつぱり必要だらう? 仲間は」

「まつ、いないよりはな」

先日とは異なり、一応は同意するエリス。

一連のことで思い直したのだろうか。良い傾向である。

「それよりお前」

と、エリスが話を変えた。彼の胸元を平手の裏で軽く叩く。

「あんまり女に恥かせんなよ

「彼女のことが」

レクトは少ない言葉から、パルヴィーのことを指しているのだと読み取った。それ以外に思い当たる節はない。

「出会いって間もなかつたからな。だが出発が決まってから、改めて返答をし直した。共に行くなら、これから互いを知り合つていく機会もあるだらうと。そしてその上で目的を達成するまで待つていてくれるのなら、このことを真剣に考えると」

重い……とまではいかないものの懇切丁寧な彼の態度に、エリスは「けつー」と吐き捨てた。良家のお嬢様かつ、お前は、と。

というかなにやら、少々ズレた受け取り方をしていろうつな気がしてならない。

「やつぱり男だな、お前も」

しかしその指摘はあえてせず、エリスは見下すように呟いた。

言葉の意味がわからず、難しい顔で一の句を待つレクト。

「自分に気がある女が、そうやって気長に待つてくれると思つてるとこがだよ」

その付け足しを聞き、よつやかく理解したように眉尻を下げた。

女性の立場から見た意見なのだらうか。女らしさなど揮発してしまつようなエリスなのだが。

「チャンスは少ねーんだから、えり好みできるような立場でもねーだろ」

ひどい決めつけである。

しかしレクトは、子供に言つて聞かせるような穏やかな口調で言葉を返した。

「そうだな。だが往々にして男は、健気に待つていてくれるような女性を求めるものだ。そういう身勝手さを包んでくれるような、やさしさを」

若さがほとばしる青少年とは思えないほどどの、老成した意見である。

エリスは呆れ顔を浮かばせた。

「傲慢なこつて」
「承知している」
微笑むレクト。

友人のようでも、家族のようでも、ましてや男女の仲のようでもない。ふたりのあいだには独特な関係が形成されているのだと、パルヴィーは内心で思っていた。

後方からレクトを見つめる彼女は、へそを曲げたようにふくれている。

戦いの時の勇ましい表情も良いが、そうして談笑している表情も良い……と、うつとりする反面、それがエリスに向けられていることが面白いのだ。

意中の男が他の女と楽しそうに話している光景は、あまり見たくないものである。

なのでパルヴィーは、

「ていつ！」

それを実力行使で妨げることにした。

海に頭から飛び込むようにふたりのあいだに割つて入り、レクトの腕をからめ取る。

そして不意を突かれてびっくりしているふたりにもかまわず、さらに会話をも妨げてみた。

「レクトくんつて『魔術』練習中なんだよね？ もしよかつたら、わたしが教えてあげよっか？」

花と緑の豊かな町『イーゼロッテ』は、最後の市庭とも呼ばれている。

各地から流れてくる人や物が、ほとんどの場合この町より奥地へは進まないからだ。

「ここから先は、人里が極端に少なくなる。好き好んで進むのは、なにか特別な理由のある者か俗世間に飽きた旅人くらいのものだろう。」

辺境最後の交易場。

そんな町の性質から、自然とそう呼ばれるようになつたのではないだろうか。

「うおっ……！　でかいっ……！」

その奥地からはるばるやつて来たエリスは、町の規模にただただ口を開きにしていた。

三角屋根の並び立つ木造建築の整然さと数。行き交う多種多様な人々の盛況。通りの先に建てられた、物見やぐらのような時計台。そのどれもが、エリスの知識レベルを超越していた。ここと比べれば、故郷の村など單なる家畜小屋にすら見えてしまつだろ？

「そう？　別に普通だけど」

驚いている様子のエリスを見て、パルヴィーが勝ち誇つたように茶々を入れた。

「そうですね」

と悪意なくリフィクも同意する。

「ぞりにある感じの……」

「マジかよっ！？」

「あんた、どういう田舎に住んでたわけ？」

しめたとばかりにからかうパルヴィーの横で、レクトは口から出そうになつた感嘆を静かに飲み込んだ。

時計の針は、一本ともが頂点を指そつとしている。

「まず宿を取つて少し休みましょう。そのあと分担して武器防具の修理や買い替え、食料、諸道具の買い出し、情報収集を。そして出発は明朝に」

様々な露店の並ぶ通りを歩きながら、アリーシェがてきぱきと予

定を決めていく。やすがに手慣れたものだった。

「情報収集つて？」

その中の一語を耳に止め、Hリスが聞き返す。アリーシュは「『モンスター』のよ」と小さな声で答えた。

周囲を歩く人間は多い。彼らの耳に入らないよう、とこう配慮だろつ。

「近くで、無闇に暴れていはないか。生活ができないほど苦しめられている村はないか。そういう情報をね。もちろん、この町が……」

「ということもあるけど」

普段からそうして戦つてきたのだろうか。Hリスは「なるほど」とうなずいた。

「『頭』を田指してはいるけど、『やつこつ』を見過しては行かないでしょ?」

「当然」

Hリスだけでなく、レクトも「クソと首肯する。

イーゼロッテの町は、普段と変わらぬ昼下がりを過ごしていた。

昨日と同じ普通な。おとといと同じ普通な。何事もない、平和な昼下がりを。

それはここ、中央にほど近い一角にある軽食屋『イーゼロッテ・サンドイッチ』も同じであった。

店名にあるサンドイッチが白髪の古顔は、老若男女を問わず住民に親しまれている。今日も昼時にはお客が殺到し、店主は目を回しつつもやりがいを噛み締め、サンドイッチを次々と仕上げていった。

しかし得てして。わざわいといつもの突然やつてくるものである。

「…………」

店主は、客が入つてきたりもや反射的に出る「こりりしゃいま

セ」という言葉が、言えなかつた。

『ピークを過ぎて客足が一段落した、そんな頃。ふらりとひとりの客の入つてきた。

店主は、どう接客すればいいのかわからなかつたのだ。

『モンスター』の客など初めてだつたのだから。

「…………」

『モンスター』というとまず巨体がイメージされるが、『それは、比較的人間に近いサイズに留まつていた。すらりと伸びた黒い四肢に、紫水晶のように輝く防具にも似た皮膚。そして顔の造形も、シリエットだけを見れば人間のそれとそう変わらなかつた。

しかし背中から生えるコウモリのよつな翼が、決定的に人間とは異なつてゐる。

「…………」

店主はなおも固まつていた。

どうして『モンスター』が? 『モンスター』もサンドイッチを食うのか? 今すぐ逃げたほうがいいのか? それとももしかして今日は自分の誕生日で、これは誰かが用意したサプライズイベントなのかな?

様々な混乱が思考を停止させてゐる。

すると質素な店内を見回していた『モンスター』が、向かつて右を指差した。

「あれをひとつ」「…………」

まるで冗談を言つてゐるような、軽い声。指の先には、『一番人気! ミラクルサンド』という張り紙がしてあつた。

それは紛れもない、注文である。

「…………」

それでもやはり硬直している店主を、『モンスター』は笑いかけるような声で促した。

「急いでね」

リフィクとアリーシェは情報を集めに。

ラドニスは諸道具を購入しに。

レクトとパルヴィーは消耗した武具を修理しに。それぞれ宿屋をあとにした。

そして残ったエリスはと、ぶらりと町並みを散策している。別に、分担作業をサボつたというわけではない。小休止のつもりがひと眠りしてしまい、起きた時にはもう誰もいなかつたのだ。

「薄情な奴らめ」

と、ぐちつたものの、なにもしなくていいのならそれに越した事はないか、と頭を切り替えて町へと飛び出したというわけである。イーゼロッテの町並みは、エリスにとってやはり壮观だった。目をこらして右を見ても左を見ても、町の外が見えない。それだけでも驚きだ。

「これで「普通」だと言つるのだから、世界とこつのは広いものである。

「おつ」

きよろきよろと周りを見回していたエリスの目が、遊んでいる子供たちを見てピタリと止まった。

通りから外れた空き地で、五人くらいだろうか。木の棒を剣に見立てて、無邪気に振り回している。

その光景がなんとも言えず懐かしくて、エリスはしばらく眺めていた。

「さつきのお店の人に聞いたんだけど、この先においしいサンディ ッチ屋さんがあるんだって」

武具屋から宿へ戻る道すがら。そうこえだと思い出すよひこ、パルヴィーが切り出した。

「行つてみない？」

のぞき込むように、並んで歩くレクトの顔を見る。

「そうだね。じゃあ、みんなの用事が済んでから
レクトはまほがらかに、そづつなずいた。

「……そづじやなくてえ」

いやいや、みんなで行つては意味がないではないか。

意図をやんわり受け流されたパルヴィーは、即座に直接攻撃に切り替えた。

「ふたりで」

「……」

すつと身を寄せられて、レクトは困ったよつた照れたよつた面持ちで苦笑つた。

武器と防具の修理は、アリーシュの見立て通り明朝には終わるそうだった。運搬用に連れて行つた馬一頭は、その武具屋に預けてある。仕事用に馬車馬を飼つてるので一頭くらい増えても構わないという厚意に甘えさせてもらつたのだ。

さすがにボツキリと折れてしまったエリスの剣は修理するより新しいものを買つたほうが早く安くつくため、レクトは適当なものを見繕つておいた。

普及的な鋼鉄製の両刃剣が、今は彼の片手に収まつている。

「それにしても……この町は、ずいぶんと平和なんだな」

押し切られるよつた形で歩むレクトが、町並みを眺めながらまつ

りとこぼした。

「まるで別世界だ」

自分の村を含め、今まで立ち寄つてきたところは少なからず、『モンスター』による恐怖や実被害が見受けられたものだ。しかしここは違う。

人々の様子や町の景観を見ても、あまりそれらしい雰囲気は感じられなかつた。

「『モンスター』が少ないのかもね、この辺」

「地域によつて差が?」

パルヴィーの相づちに、レクトは興味深げな視線を送る。

「うん、まあ。……たぶん」

パルヴィーとしては、『こういう話よりももっと明るく気軽なお喋りがしたいところなのだが。ただ彼が興味あることならそれでもいいかと思い、話を続けた。

「それか、『取り引き』みたいなものが成立してゐるのかも」

「取り引き……?」

今のは話と結びつけにくい単語にレクトは眉根を寄せた。ふたりは道を曲がり、大きな通りへと出る。

「『モンスター』が人間を襲うのつて、わたしたちが動物を狩るのとおんなじ感覚なんだって」

パルヴィーは「アリーシエ様から聞いたことなんだけど」と前置いてから、それに答えた。

「でも、いちいち山に入つて探して狩るより、牧場みたいなものを作つたほうが簡単に手に入るでしょ?」

「……まさか」

話の全体像が見えかけて、レクトは顔を険しくする。

「これくらいの町になると、そういうこともあるんだつて。近くに住む『モンスター』と町長みたいな人が取り引きするの。町で暴れたりしない代わりに、決められた日が来るたびに人間を何人か差し出すつていう……」

「まるで生け贋じやないか、それは……！」

レクトは思わず歩く足を止めた。言い表せない憤りが体の内から湧き上がってくる。

それは取り引きなどではなく、脅迫に近いものだということがたやすく想像できた。

似たケースは前にも出くわしたことがある。あれはたしか、ハーニスとリュシールに出会った村だつたろうか。

あの村の場合は、ただ普通の食料だけを要求していた。しかしこの話の場合は次元が違う。……人間を。同じ町に住む同胞を差し出せという要求なのだ。

「そんなことを……！」

レクトはキツく拳を握る。

「いやっ、あのう……別に、この町がそうだつていう話じやなくて、そういうパターンもあるよねっていう話で……」

熱気をほとばしらせる彼を、パルヴィーは慌てて落ち着かせようとした。

レクトとしても、それはわかっている。

だがどうにも許せないのだ。そんなことが現実に起こつていると、いつこが。それをさせている『モンスター』が。

村人全員が家族のように触れ合つていたレクトの故郷と、こういう大きな町とでは住人同士の意識は違うのかもしれない。しかしそれでも、心を痛めない人間はいらないだろう。

犠牲になつた人のことを思うと、いたたまれなくなる。

「……」

頭を冷やそうと、レクトは深く息を吐く。

そこでふと周りを見て、あることに気付いた。

立ち止まつてているのは自分たちだけではない。

話に没頭していく気付かなかつたのか。大通りにいるほとんどの人間が足を止め、なにやら一点を遠巻きに眺めながらぞわついていた。

レクトとパルヴィーは、何事かと顔を見合わせる。その時。

皆の視線が集まっていた建物が、突如爆発を起こした。

轟音と爆風と衝撃波が、ところどころから悲鳴を上げさせる。吹き飛ぶ建物の木片に紛れて、『イーゼロッテ・サンドイッチ』と書かれたポップな看板が正面の書店に突き刺さった。

恐怖と驚異にかられて、人々が一斉にその場から退避する。しかしレクトとパルヴィーのふたりだけは、人の波に逆らうよう前に前へ前へと進んでいた。正確には、進むレクトのあとをパルヴィーがついて行っているのだが。

爆発の余波も治まらぬうちに、ふたりは爆心地を視界に收める。それはなにかの建物だったのだろう。無惨にも両隣を巻き添えにして全壊し、黒い煙をもくもくと吐き出している。

その時、煙の中から人影らしきものが歩み出た。

ふたりは目を見開き、思わず足を止める。

それはしかし、人ではなかつた。人間に似た黒い四肢の、鎧のような箇所だけ皮膚が紫色に輝いている。肩甲骨の辺りから「ウモリ」のような翼が生えたその姿は、まるで寓話に登場する悪魔のようだつた。

「『モンスター』つ……!?」

パルヴィーが驚きに息を呑む。

恐らく爆発の中心部にいたと思われるその『モンスター』の体には、傷ひとつ、ヤケドひとつすらついていなかつた。

まったく無傷の『モンスター』は悠然とした足取りを止め、建物の跡を振り返る。ペロリと舌なめずりをしたその口が、「ううううさま」と動いたような気がした。

「……みんなを捜して、連れてきてくれ」

レクトは動揺を抑えて、肩越しにパルヴィーへと指示を送った。

ふたりでは勝てない。だが、このまま奴を野放しにしておくなど到底できない。

レクトは、エリスのためにと買った剣を引き抜いた。

「それまで、俺が引き止める」

「でも……」

と、パルヴィーは戸惑いをうかがわせた。仲間を呼びに行くためとはいえ、彼ひとりを残すのは気が気がしない。

無謀だ。相手は『モンスター』。一体だけとはいってもその力は未知数。さすがに、この状況で楽観視はできない。

「いいから行くんだ。迷っていたって状況は好転しないだろう？ なら動くしかない。自分の行動で状況を打破するんだ」

レクトは言い聞かせるように、彼女を促した。

「う……うん……」

その言葉に背中を押されるように、パルヴィーは後方に向かって走り出す。

それを確認してから、レクトは剣を両手で握つて正面に構えた。

臨戦体勢のレクト。彼の存在に、『モンスター』も気付いたようだった。

「おや」

感情というものがまったく読み取れない、水晶玉のような瞳が彼をとらえる。

「なにかな？」

発せられた言葉は、ひどく軽いものだった。笑い話でも始めるような、真剣さの欠ける声。

「もしかしてその剣で、僕とやり合いつつもり？」

だというのに。その瞳に射抜かれた瞬間、レクトの背筋に冷たいものが走った。

えも言われぬ圧迫感が心臓の鼓動を早める。逃げるべきだ。そんな言葉が脳裏をよぎった。

「だとしたら面白いよ。傑作だね」

しかしレクトは、戦う姿勢を崩さなかつた。

無意識下の部分が警鐘を鳴らしているが、それを無理矢理押し殺す。

「……なぜあんなことをした……！？ 貴様がやつたんだろう……！」

時間を稼ぐ。そのために、レクトは問答を口にした。利くかどうかはわからなかつたが。

「なにが目的だ！……金か？ 食料か？」

それを聞いて、『モンスター』はなぜかおかしそうに噴き出した。甲高い笑い声が、ひとけのなくなつた大通りに響き渡る。

「君は人間だね」

ひとしきり笑つたあと、唐突にそう切り出した。

レクトは顔をこわばらせる。他のなにに見えるというのだ。

「そういう、枠にとらわれた考え方が実に人間らしい」

『モンスター』の笑いの種類が、嘲笑へと変化する。

「でも僕は違う。目的なんてないわ。必要ないんだよ。あるのはただ破壊の衝動だけ。『人間』には到達することも、理解することも、想像することもできないだろうね」

レクトは心の中で吐き捨てた。なにが衝動だ！ わかりたくもない。理性なき暴虐者がつ！

「誰かが大事にしているものを壊し、消し、潰し、裂き、焼き、奪い、破壊することによって得られる至高の快感。それを思うままにできる絶対的強者。……それが僕だ」

「『モンスター』……！」

レクトは憎々しげに呴いた。それが敵の名前だ。それが敵の正体だ。奴らを倒さなければ、人々に安息は訪れない。

「それが君の枠だよ」

『モンスター』は、なおもせせら笑うように言葉を続けた。

「僕はトユループ。それ以外の名前はいらないよ」

レクトは得体の知れなさに気圧されて、息を詰まらせる。

田の前に立つこの『モンスター』は、今までに見てきた奴らとは
にかが決定的に違っていた。まとう雰囲気が異質すぎる。

「……！」

その時、レクトは見た。

奴の後方から駆けてくる、ゼーテン・ラドニスの姿を。
騒ぎを聞きつけたのだろうか。たまたま近くにいたのは幸いだ。
彼の片手の、抜き身のロングソードが光る。

レクトは少しだけ胸をなで下ろし、視線を戻した。

奴はまだ気付いていないようである。冷笑しているような表情を
レクトに向けたま。

ラドニスが急速で迫る。

走っているにも関わらず、足音というものがまるで聞こえてこな
かつた。どういう技術なのかはわからないが気配を完全に絶つてい
る。

理想的な奇襲。

しかし。斬りかかるまであと一歩とにじりひで、トユループが
いきなりその翼を広げた。

バック宙でもするように、ふわりと飛び上がる。

その下を、あえなくラドニスが走り抜けた。

「残念」

トユループは同じようにふわりと着地して、からかうように言つ
捨てた。気付いていたのか。

ラドニスは特に聞き耳持たず、身を翻してロングソードを構え直
す。ちょうどレクトと並ぶような形でトユループに正対した。

「ひとりか。無茶をする」

発せられた言葉は、レクトに向けられたものだった。レクトは、
かいつまんで状況を説明する。

「今パルヴィー・ジルヴィアが他のみんなを捜しに行つてます。そ

れまで食い止めようと……」

「意気は買う。だが相手が悪かった」

レクトはついらドニスの顔を見た。彼の目は、わずかな動きをも見逃さないと言わんばかりにトユループを熟視している。

厳しく引き締まった表情が、ことの切迫さを物語ついていた。

「あれは危険すぎる」

エリスは、
「ふはははははっ！ よくぞ！」今まで来たな、勇者ども！」
木の棒を片手にむげで、まるで悪役のよつよつ芝居がかつた口調で
高笑つていた。

「この魔王の力、知らぬわけではあるまい！」

彼女と向かい合つて、同じく木の棒を剣のように構えた子供
が五人ほど並んでいた。

「さあ、どいつから我が必殺のオーバーフレアの餌食になりたいの
だ！？」

「なんか違うよ」

すかさず子供たちからツツ「ミミ」が入つた。

「うつせえバーカ。細かいこと気にしてると泥棒の始まりなんだぞ」「
と、どちらが子供なのかわからないような言い返しかたをするエ
リス。

「それもなんか違う気がする」

が、最終的に折れたのは子供たちだった。顔を見合わせてやれや
れしようがないなど肩をすくめ、「」遊びを再開させる。

そんな時だった。

「エツ、リース！」

通りに面した空き地に、息せき切らせたパルヴィーが駆け込んで
きたのは。

「エリース！」

「おお、ちょうどいいところに来たな、我が片腕よ」

しかし彼女の慌てた様子など意に介さず、エリスはそんなことを
言い出した。予想外の展開に子供たちが「なにっ！？」と驚く。
「勇者どもよ、私と戦う前に、まずはアイツを倒すがいい！」

エリスはビシリ！ つと人差し指を突き出した。指の先にいるのは言つまでもなく、肩で息をするパルヴィー・ジルヴィアである。

「おーっ！」と盛り上がりながら、子供たちは一斉に彼女へと突撃した。

そして周りを取り囲んで、棒でポカポカと袋叩きにし始める。パルヴィーはまるでいじめられっ子のように、しゃがみ込んで頭を抱えた。

「いやあーっ、痛い痛い痛いっ、やられたあ……って遊んでる場合じゃなくて！」

見事なノリツッコミを一応披露してから、子供たちを払いのけるように立ち上がる。そして自分が今々やつてきた方向を指差し、真剣な表情でエリスに訴えかけた。

「『モンスター』がっ！」

腕を組んでニヤニヤしていたエリスの顔にも、さすがに緊張感が走る。

アリーシュとリフィクは、オープンテラスのカフェでコーヒー片手に談笑していた。

どちらも、各地を旅してきた身の上だ。なにかと話も合つのだらうか。

歩き回つて町の住人たちにそれとなく話を聞くも、田舎での情報はあまり手に入らなかつた。

『モンスター』の少ない地域なのかとアリーシュは推測したが、断定はしなかつた。もとより情報収集などしらみ潰しに行なつて初めて成果の出でくるものだ。早計はよくない。

ひと息だけつこうと入つたカフェでよもやま話に花が咲いてしまつたのは、アリーシュとしても苦笑するしかなかつた。少々サボつてしまつたなど。

そしてコーヒーを一杯飲み終わるうかという頃である。

ふたりは、町の異変に気が付いた。

「……騒がしいわね」

どこからか喧騒が聞こえ出す。通りを走る人間が目立ち始め、それらが徐々に拡大していった。

ただこと、ではないだろう。

「もしかしてさつきの大きな音が、なにか……事故とか……」
不安げに眉をひそめるリフィク。対照的に、アリーシェは物々しい表情を浮かび上がらせた。

「その程度で済めば御の字だけど」

彼女は、確信に近いものを感じていた。

逃げ惑うように道を走る人々。その必死とも取れる様子には、見覚えがあった。

まるで命の危機……根源的な恐怖に震えているような、そんな逃げ方だ。

よく知っている。そんな恐怖を拭い去つてやりたいと思って、今日まで戦ってきたのだから。

「……行きましょう」

アリーシュは、深刻な表情のまま席を立つた。

子供たちに家へ帰るよう言いつけてから、エリスとパルヴィーは現場に急いだ。

視界の至るところで、住人らがクモの子を散らすように家の中へと駆け込んでいる。

かなり波紋が広がっているようだ。急激な勢いで。

そんな目に見えてひとけのなくなっていく町並みの中で、見慣れたふたりの姿を発見した。

「アリーシュ様あつ！」

なかば抱きつくように、パルヴィーが彼女へと走り寄る。

「なにがあつたの？」

アリーシュはその様子からただならぬ雰囲気を感じ取り、落ち着かせるように説明を求めた。

「町の中でいきなり『モンスター』が現れて……今レクトくんがひとりで戦つてるんです！」

「なんですか……！？」

それを聞き、アリーシュとリフィクはそろって息を呑んだ。恐らく『モンスター』のほうではなく、レクトのほうにいる。

「おいつ、早くしろっ！」

そんな三人をエリスがせかした。今は話をしている時間も惜しい、と言わんばかりに。

「そうね。場所は？」

「こっちです！」

唯一現場の位置を知っているパルヴィーが再び急いで走り出し、他の三人がそれに続いた。

やがて大通りに到達した頃には、すっかり住人の姿は見えなくなつていた。昼間だというのに、まるで深夜のように静まり返つている。

「無事だつた！」

通りのはるか先に見えたレクトの姿に、パルヴィーはほつと胸をなで下ろした。他の者も同じく。

彼はラドニスと共に、例の『モンスター』を剣で攻め立てている。遠くからではよくわからないが、危機に瀕しているというわけではないようだつた。逆に押しているようにも見える。

「……あれは……！？」

その『モンスター』を視認した途端、アリーシュが愕然としたように戸をもらした。冷静沈着な彼女らしからぬ、ひどく動搖した声である。

「まさか、『灰のトユループ』……！？」

奴の名前だろうか。それを耳にし、リフィクとパルヴィーが「ええつー？」と反応を示した。

エリスは、自分がわけのわかつてない状況に軽く口を尖らせ
る。

「なんだよ。知り合いか？」

「……己の衝動のままに、なんの見境もなく破壊を繰り返す異端の

『モンスター』にして、悪の権化。それがトヨループよ」

少し落ち着きを取り戻した口調でアリーシェが説明する。エリス
は、ただの『モンスター』とは違う、ということを感じ取った。
「できることなら戦いたくはなかつたけど、こんな町中で出くわし
てしまつたのなら……そもそも言つていられないわ」

彼女の声から迷いが消えていく。瞬時に覚悟を決めたのだ。

この辺りは、やはり年の巧である。

「それよりあなた、どうやって戦つつもりなの？」

腹をくくつて心の余裕が生まれたのか、アリーシェはエリスの体
へと視線を向けた。

アリーシェとパルヴィーは、鎧にしつけていないが習慣として武
器を携帯している。それに引き替えエリスは、まったくの丸腰なの
だ。

「……そういうばつ！」

手ぶらだった。ということに、言われて初めて気が付くエリス。
この思慮の浅さは決してかならないものだろうか。

なぜレクト・レイドが『矢を愛用しているか』といつと、それは單
純にどの武器よりも得意だからである。

一意専心を信条としているレクトは、ひたすら『』の鍛錬だけを重
ねてきた。故に剣での戦い方など粗末のものだった。
しかしそれでも、彼は戦う姿勢を取り続けている。
不慣れでもいい。無様でもいい。ただ、目の前にある害悪を放つ
ておくわけにはいかないのだ。

「レイド！」

ラドニスが、レクトの名を叫ぶ。

彼の斬撃を後退して避けたトユループが、挾撃する形に位置取つていたレクトの攻撃範囲へと飛び込んだからだ。

「はあっ！」

レクトは気合いと共に踏み込み、奴の背中めがけて剣を振り下ろす。

しかしトユループは羽ばたいて、上方へと軌道を変えた。レクトは空振り、勢いあまつてつんのめる。

その背後に着地したトユループが、彼の背中を蹴り飛ばした。地面に打ちつけられるレクト。彼を守るよつに、ラドニスが両者のあいだへ走り込む。

その時、突然トユループが、後方へと素早く下がつた。

なんのつもりかとラドニスが訝しんだ、次の瞬間。

今まで奴の立っていた地面が、巨大な刃のように隆起した。

「……ロックブレイド」

アリーシュが遠距離から放つた『魔術』は、しかしあつさりとかわされてしまった。

だが牽制と考えるなら充分だろう。トユループとの間合いが離れているあいだに、戦闘態勢を作り上げてくる。

アリーシュとラドニスは一瞬だけアイコンタクトを交わして、すぐに戦へと向き直る。

蹴り倒されたレクトが起き上がる頃には、エリスとパルヴィーが最前線へとたどりついていた。

「エリス！」

諸々の状況を素早く把握したレクトは、即座に持つていた剣を丸腰のエリスに手渡す。

「おうっ！」

「大丈夫だった？」

駆け寄るパルヴィーの気遣いに、

「ラドニスさんのおかげで、なんとか」

と答えて、レクトはひとまず前線から退いた。

「みんなを連れてきてくれて、ありがとう」と律儀にも付け加えて。

「ずいぶんと増えたね。仲間かな？　君たちも僕と戦いつもり？」
増援として現れた彼女らに、トユループは好奇的な笑みをかたむけた。

ただそれは人間の認識による『笑み』であるため、実際に笑っているのかどうかは定かではないが。

「そうだとしたら、君たちはバカだよ。もしかして僕のことを知らないのかな？」

愚かしい者を失笑するように、投げかける。その口調からは、まるで自分のことを神とでも思っているような不遜な自信と余裕が感じ取れた。

「んんんーなもん知つたことかっ！　てめえこそあたしのこと知つてんのかよ！？」

しかしその手の不遜っぷりならエリスも負けてはいない。むしろ彼女の領分であろう。

エリスは三角の陣形の頂点に立ち、新しい剣を片手にぶら下げる。その両翼にラドニスとパルヴィーが構え、少し後方にリフィク。そのさらに後方にアリーシュと後退したレクトが控えていた。

「全然」

トユループは見下した笑みを含ませたまま答える。

「モグリめつ！　じゃあ覚えとけ！」

エリスの物言いに、リフィクは寿命のちぢむ思いを味わっていた。『灰のトユループ』の悪名は各地に轟いている。わざわざそんな相手にそんな口を叩かなくてもいいだろうに、と。火に油を注ぐだけである。

まあ、今に始まつたことでもないのだが。

「あたしはエリス・エーツェル！　朝でもエリス！　夜でもエリス！

風が吹こうが雨が降ろうが不变不動のエリス・エーツェルだつ

！」

「……当たり前じゃん」

豪快に言い切った彼女の名乗りを聞き、パルヴィーがぼそりと呟いた。

次からは正しく、普通のこととをさも凄いことのように豪語するエリス・エーツェル、とでも言つてもらいたいものである。

「だが呼ぶ時は『炎のエリス』と呼べ！」

「それパクつてない！？」

『灰のトユループ』に対抗して作った呼び名なのは、はなはだ明白だ。内心「うらやましい」と思つていたのだろうか。ふたつ名を自分で言い出していくれば世話がない。

「興味ないよ」

トユループはをせやいて、悠然と進み出す。

「どうせ君も、ここで破壊されるんだから」

「そんでもって、こいつが」

奴の言葉などまるで聞かずに、エリスも駆け出した。正面切つて攻めかかる。

振りかぶった剣から、炎の渦が湧き上がった。

「あたしのオーバーフレアだ！」

それが戦闘再開ののろしとなる。彼女に呼応するよひに、他の皆も動き始めた。

エリスの初撃は、すんでのとひりで回り込むよひにかわされてしまう。

「スラッシュショットつ！」

回避した直後の背中へ、パルヴィーがショートソードから衝撃波を撃ち飛ばした。

矢のような速さで飛ぶそれは、しかしふトユループの足元を通り過ぎる。飛び上がって避けられたのだ。

「フラッシュショジャベリン！」

滞空中のトユループを、次にリフィクの『魔術』が狙い撃つた。

無数の光が尾を引いて襲いかかる。

トヨループは触手のようにうねりながら追尾する光条を、地面すれすれを滑空して回避していく。目標を見失った光が地面に着弾し、小さな穴を穿つた。

高速で滑空するトヨループの前方へ、ラドニスが走り込む。そして絶妙のタイミングで、ロングソードを振り下ろした。しかしトヨループは、まるで時間を止めたかのように、ピタリと急停止をしてみせる。ラドニスの刃はしたり顔の前を通り過ぎ、見えなく地面を叩いていた。

「ひょいひょいと逃げやがって！」

そこへすかさず、駆けつけたエリスが躍りかかった。

「その翼からぶつた斬つてやる！」

「無理だよ」

トヨループは薄ら笑いを貼り付けたまま、エリスが剣が振るつよりも速く、回し蹴りを叩き込んだ。

「君にはね」

脇腹を強打されたエリスが、吹き飛ばされるように地面を転がる。

「……たしかに奴は、トユループと名乗りました」

陣形の最後列。上がった息を整えながらアリーシェの説明を聞いていたレクトが、真新しい記憶を引っ張り出してそう答えた。

前線では他の四人と、トユループと名乗った『モンスター』による激しい攻防が続けられている。

剣がきらめき、炎が舞い、『魔術』が輝く。

やや距離を置いたこの場所からも、その苛烈さが肌で感じられた。

「そんな相手だつたなんて……」

レクトは愕然をかみ殺すように独語する。

灰のトユループと呼ばれる破壊の化身。人間も『モンスター』も動物も、数え切れないほどの命が奴の手によって奪われている。なんの理由もなく、ただイタズラに。

生きる天災。出会つたしまったこと自体が不運。他の『モンスター』とは、比較にならないほどに危険な存在。

それを聞いた時、レクトは己の軽率さに戦慄した。そんな相手にひとりで立ち向かおうとしていたのだから。

「……しかし」

それならば、と、レクトの中に新たな疑問が浮かび上がってきた。自分は、無事だ。不慣れなことをしたために体力を浪費してしまつてはいるが、目立つた外傷すら負つていない。たとえ一対一の戦いだつたとしても、それは妙ではないだろうか。

レクトは激戦の空間を凝視する。

……ずっと、そうだ。トユループの攻撃はすべて殴る蹴るといった打撃ばかり。しかもその力も、せいぜい人間と同じ程度だった。頻度も限りなく低い。思い出したように、反撃の形で繰り出しているだけだ。

「……」

手を抜いている？　この数で当たつても、奴からすればまだ、鼻も引っかけない程度ということなのだろうか……？

レクトがそんな思考に至つた時、

「呼吸は落ち着いた？」

横に立つアリーシェが再び口を開いた。

「剣ならここにあるけど」

自分の腰元を田で指す。

レクトはつられるようにそれを見てから、ひとつ疑問を訊ねてみた。

「あなたは、戦列には？」

彼女は最初の一撃以降ずっと、こうしてここに立ち廻っていた。戦いに加わるそぶりすら見せていない。

自分の倍に近いほど年齢とはいえ、この場へ駆けつけるだけで疲れてしまつたといふこともあるまい。……と、微妙に失礼なことを思うレクトだった。

「もしあれが、本当に『灰のトユループ』だとするなら……きっと、可能な限り力を温存しておくのが私の最善だと思つの」

アリーシェは前方を見すえたまま、重々しく答える。そのあまりに厳然な表情に、レクトは思わず眉根を寄せた。

「この町を、地図から消すわけにはいかないから」

「……それは、どういう……？」

なぜトユループに『灰』という通り名がつけられたのかを、レクトはまだ知らなかつた。

「ウインドライン！」

パルヴィーが発生させた突風によつて、滞空中のトユループが体勢を崩す。

そこを見計らつて、エリスとラドースが両側から飛びかかつた。

「くらええつ！」

叫びながら斬りかかるエリスに、黙つて斬りかかるラディース。正反対のふたりであつたが、しかし、そのどちらの刃もトユループには届かなかつた。

トユループは高速で風見鶏のように回転し、広げた翼でふたりを弾き飛ばす。

「フラツ・シュ・ジヤベリン！」

その間隙を狙つてリフィクが放つた光槍は、やはり素早い動きで避けられてしまった。

「くそつ……！」

受け身に失敗して尻餅をついたエリスが、苦々しく吐き捨てる。四人がかりで怒涛のごとく攻めているのにも関わらず、ここまで一撃たりともトユループには当たつていなかつた。

「こと」「とく」、いなされるか避けられるかしてしまつのだ。だが少しずつではあるが、攻撃の精度が上がつてきたように思える。恐らくトユループの動きに皆の目が慣れてきたせいだろう。

とらえるのも時間の問題。

そういう楽観を頭に浮かべながら、エリスは跳ねるように立ち上がりつた。

「全然ダメだね、君たち」

まるでそれを待つていたかのように、トユループが口を開く。

「あー？」

威圧的に聞き返すエリス。それ以外の三人は、なにを言つつもりなのかと様子をうかがつた。

「楽しくないよ」

そんな時、後方から、銀色のロングソードを携えたレクトが戦列に復帰してきた。

四人はそれぞれ、横目で彼の姿を確認する。

「ひとり増えてもね。同じことさ」

言いながら、トユループは右手を前に突き出した。皆に警戒の色

が走る。

「だから

その右手が、まばゆいばかりの光を帯び始めた。

やがてその光は手の先に集まり、細長く収束していく。その形は、まるで剣。

「このライトニングレイピアで」

トユループはスパークを散らす光の剣の柄を、本物の剣のようにつかむ。そしてそれをハスに構えた。

「そろそろ僕も攻撃させてもらつよ」

レクト、リフィク、パルヴィー、ラドニスは、慎重にトユループの次の動きを洞察する。

剣状の形から察するに、やはり近距離での斬撃というのが攻撃方法なのだろうか。

しかしあれも、恐らく『魔術』の一種。うかつに断定はできない。見た目を凌駕する効果があり数え切れないほど利用法があるのが、『魔術』の頼もしいところでもあり恐ろしいところでもあるのだ。

「たつぱり『間』あ使って喋りやがつて！」

しかしエリスは、まったく警戒することなく再び奴へと攻めかかつた。

「エリス！」

レクトの制止など聞くわけもなく。

四人は仕方なく、彼女のフォローに急いだ。

「オーバーフレアあつ！」

エリスが肩口へ振りかぶった剣から、激しく炎が噴き出る。何度もかわされてしまったそれだが、しかし今回は様子が違つた。トユループが、まるで避けるそぶりを見せない。

翼をたたみ地に足をつけ、棒立ちのよう迫るエリスを眺めていた。

斬れるものなら斬つてみる、とでも言わんばかりに。

エリスは「なめんなよ」と言外に表わしながら、最後の一歩を踏み込んだ。

猛る刃が振り下ろされる。その瞬間にあって、よつやくトヨループが動きを見せた。

肉薄する炎の刃を、自身の光の刃で迎え撃ったのだ。

『魔術』の刃同士が衝突し、周囲の空気が震動する。吹き飛ばされそうなほどの衝撃波が生まれ、そのまま互いの姿勢が膠着した。

「防ぎやがつた！」

歯がみするエリス。いくら剣を押そつと、その状態からピクリとも動かなかつた。

炎と光の向こう側で、人間に酷似した顔が薄ら笑いを浮かべている。

「笑つてんじやねええつ！」

なおも押し続けるが、やはり動かなかつた。

そもそも力比べに持ち込んでしまつた時点でエリスには分が悪いのだ。

威勢だけは超人級だが、身体的にはやはりまだ十代後半の小娘である。人間の大の大人にも劣る腕力が、どう転んでも『モンスター』に敵うわけがない。

もとより一撃必殺の『オーバーフレア』があればこそ奴らに対抗できていたのだ。それが通用しない場面では、たちどころに無力となつてしまふのも当然な結果である。

しかし、たとえそうだとわかつっていても、エリス・エーツェルは引き下がらない。

「このつ！ このつ！ 」

「少し力を入れるよ」

だがトユループがささやいた次の瞬間、逆に押し返され、エリスの上半身がのけぞつてしまつた。

「この野郎つ……！」

「エリス、持ちこたえろ！」

側面へ回り込んだレクトから激励が飛んでくる。

エリスが動けずにいるということは、相対するトユループも動いていないということだ。包囲するのはたやすい。

すなわち絶好の好機。

レクト、ラドニス、パルヴィーの三人が正面以外の三方を取り囲み、先んじてラドニスが背後から斬りかかった。

「背中を狙うのは常套手段だけど、僕には無意味だよ」

トユループは正面を向いたまま不敵にささやく。剣が体に到達する直前に、彼の翼が勢い良く後方に伸びた。

そして爪のように鋭い翼の先端が、ラドニスの両腕を深々と刺しそう。

「……！」

「ほらね」

滴る鮮血。ラドニスは驚異と苦痛に、険しい表情をそりと険しく歪ませた。

それと同時に、トユループの視線が左を向く。ラドニスのあと間髪を入れずにたたみかける予定だつたパルヴィーを、その瞳がとらえた。

彼女はすでに至近距離まで走り込み、ショートソードを引き絞っている。今さら急には止まれない体勢だ。

「不用心だよ。攻撃するって言つたのに」

迫るパルヴィーに向け、トユループは左手を突き出す。

「ライトニングレイピア」

そしてその左手から、右手同様『光の剣』を出現させた。

伸びた刃が、パルヴィーの肩に突き刺さる。その瞬間、電流が走つたように彼女の体がけいれんし、短い悲鳴と共に地面に倒れた。

そしてトユループは、ラドニスの両腕から翼の先端を引き抜き、元の位置にたたむ。

ヒザをつくラドニス。

トユループの顔が、あえてゆっくりと右側へ向けられた。

「君は来ないのかな？」

「……！」

レクトは、思わず足を止めてしまっていた。
ほぼ同時に攻めかかったふたりが、手玉に取られたように返り討ちにあつてしまつた。しかもたやすく、エリスからの攻撃を受け止めたままで。

「賢明だね」

トユループは顔を、正面のエリスへと戻す。
そして炎の刃とせめぎ合つてゐる右手の剣に、左手の剣をクロスするように重ね合わせた。

倍化したエネルギーに、エリスはたまらず吹き飛ばされる。

「でもこっちからは行くよ」

トユループは再びレクトに向き直り、黒い翼を開いた。
その異形のシリエットに、レクトは改めて目を見開く。
エリスは激しく地面に叩きつけられるも即座に跳ね起き、負けじと再びトユループへ躍りかかった。

「ジルヴィアさん！」

切迫したリフィクの声に呼びかけられて、パルヴィー・ジルヴィアは失っていた意識を取り戻した。

すがめながらまぶたを開ける。映った視界の中では、まだ戦いは続けられていた。

エリス、レクト、ラドニスの三人がかりで果敢に立ち向かっている。がやはり、形勢が優れているとは言えなかつた。

トユループには傷ひとつ、ダメージひとつ見受けられない。対して三人は、重傷こそなさそうだが見るからに傷だらけといった様子だつた。小さいダメージがかなり蓄積している。

『モンスター』と戦う限り楽勝などという言葉は期待していないが、いくらなんでも圧倒されすぎだらう。まるで相手になつていない。

「……強すぎでしょ」

パルヴィーはぼつりと呟いた。

いくらかは『モンスター』と戦つてきた彼女である。いわゆる『ボス』と呼ばれる手合いで、一体だけならば、三人でかかれば最低でも手傷くらいは負わせられるはずだ。

今は正味五対一の戦い。だといつのに、このままである。

「やんなつちやうな、もう」

「大丈夫ですか？」

彼女のため息まじりの呟きを取り、リフィクが再び声をかけた。今度は穏やかに、やさしい声調で。

「うん、大丈夫大丈夫。おかげでね」

パルヴィーは苦笑いに近い笑みを作つて、よつこらせと体を起こした。

刺された傷は完治している。それを確認してから、かたわらのショートソードを再び手に取った。

「強いけど……倒さなきやね」

手足にはまだ若干のシビレが残っているような気もあるが、動くのに支障はないだろう。パルヴィーは苦笑っていた顔に、普段とは打って変わった真剣な表情を浮かび上がらせた。

「『モンスター』は

翼による高速滑空と、両手それぞれに携えた『光の剣』。主にそのふたつにエリスたちは苦戦させられていた。

その動きの前では攻めることもままならず、その攻撃の前では防ぐこともままならない。

そんな圧倒的な差がありつつもエリスたちがいまだに戦い続けていられるのは、トユループがまだまだ手を抜いているという証に他ならなかつた。

遊んでいるのだ。その気になれば、その高速移動をもつて急所に剣を突きつけることも不可能ではないはず。一いちらには避けようもないのだから。

「そろそろ飽きてきたかな」

交戦の最中。ため息を吐くように、トユループが聞こえよがしに独語した。

と同時に、エリスの右ももが斬り裂かれる。

「くそっ！」

体勢を崩して尻餅をつくエリス。

「ヒーリングシェアッ！」

そこへ、ダウンしていたパルヴィーが復帰してきた。やわらかな光が足の傷を癒していく。

「なんだよ、生きてたのか」

「『あいさつだこと』

と緊迫した状況に反して軽口を叩き合つてから、エリスは軽やか

に立ち上がる。

顔を上げた時には、トユループはまたしても棒立ちをしていた。レクトとラドースは、エリスが体勢を整えるのを待っていたのか、穴が開きそうなほど奴をにらみつけて待ち構えている。

エリスはもとよりパルヴィー、リフィクも戦線に戻り、再度一斉攻撃を仕掛けようとした、その時。

「いけないよ、これは」

トユループはおもむろに、両方の剣を手から放した。たちまち剣の形が崩れ、『魔術』の光が霧散する。

「戦いが始まつてどれくらいが経つたのかな？ でも僕は、傷も負つてない。……ダメなんだよ、それじゃあ」

トユループの聲音がわずかに変化した。楽しそうにあざ笑う声から、突き放すように冷たい声へと。

「なに言つてやがる。まだ途中だろ？ が。最後までやつてから言いやがれ！」

「もう終わりだよ」

エリスの反論にも、冷ややかなまでに吐き捨てる。

「僕が終わらせる」

「勝手に決めんな！」

「生きていっても僕の欲を満たせない君たちは、死んで僕の欲を満たすしかないんだからね」

「意味わかんねえことぬかしやがつて！」

「さようなら」

それを言い残したとこりでトユループは羽ばたき、真上へ向かって飛翔した。

「逃げる気かよっ！」

エリスが慌てて追いかけようとするが、真下に着いた時には、すでにジャンプしても手が届かない距離にまで上がってしまったあとだった。

「降りてこーい！ 勝負しろーっ！」

さりに上昇を続けるトヨループ。が、ビツヤー、この場から去る
といつわけではないようだつた。

湯気のように、ただ上へ上へと昇つていくだけ。

やがて奴の姿が虫ほど小さくなつたといひや、よつやくその上昇
が止まつた。

「……？」

ヒリスは目を細めて、上空を見つめる。空中で静止するトヨル
ープ。なにかをするつもりなのだろうか。

すると見る見るうちに、空に暗雲がだだよい始めた。青空があつ
といつまに、灰色に染まる。

太陽が隠れ周囲が薄暗くなつてくると、トヨループの体が輝いて
いるといふことがはつきり見て取れた。

「なんだよ……？」

ただならぬ異変に、ヒリスは顔をしかめる。この天候の異様な変
化は奴の仕業なのだろうか。

「まさかっ……！？」

その横で、リフィクが驚きをあらわに声をもらした。
「なんだよ！？」

振り向くヒリス。

「えつ、あれが噂の……！？」

さらにその横で、パルヴィーもこぼした。

「だからなんだよ！？」

「……こんな近くで拝むことになるとはな……」

「あれが……？」

続けてラドニスとレクトも呟く。ヒリスは、またしても自分だけ
が置いてけぼりを食らつてゐる状況に、ひどくもどかしさを募らせ
た。

「なんだよーつ、教えろよーつー」

これではまるで、いじわるをされている子供である。

「少しづがつていて」

と凜として言つたのは、いつのまにか近くに来ていたアリーシェだつた。

「……できるのか？」

深刻な面持ちのラドニスが、彼女に問いかける。

「失敗した時は、大人しく恨みごとを聞くわ。天国でね」

アリーシェは冗談めかして肩をすくめた。

頬をふくらませたエリスが、

「だからあれは……」

なんなんだよ、と訊きかけた時。

『天地を焦がす霹靂は』

まるで反響しているような、トユループの声が降り注いできた。エリスははつとして再び上を向く。トユループを包む輝きは、もはや太陽と見間違うほどに強くなつていた。

『雷帝来たりて降り注ぐ』

「あれこそが、奴が灰のトユループと呼ばれるゆえんよ」

同じく空を見上げながらアリーシェが説明する。その口調には、冷静な中にも憎々しさと忌々しさがたっぷりと含まれていた。

『すべてを滅ぼす声のもと』

「すべてを灰燼に帰す」

『破壊の光を今ここに』

『ディストラクトレイ……！』

トユループの体を包んでいた光が上空へ放たれる。次の瞬間、イーゼロツテの町へ強大な雷が落下した。

だがそれを雷と呼ぶには、あまりに規模が違いすぎる。

圧倒的な光量は町を丸ごと飲み込み、大地に激震を走らせる。まさに天災にも匹敵する驚異の力。

そのすさまじい衝撃と大音量は、空中をただようトユループ自身にもビリビリと伝わつてきていた。

「ふふつ……」

大量の砂煙と黒煙が立ち込める眼下を眺め、トユループはこらえきれずといった様子で高らかに笑い出した。

「はははははははつ

消した。

破壊してやつた。奪つてやつた。数えきれないほどの命を。丹精込めて作り上げられた建造物を。歴史を重ねた集落を。この手で。思うまに！

「あはははははつ」

トユループの中が、えもいわれぬ悦楽と優越感で満たされていく。死んだ命はその時なにを思ったのだろう。苦しんだ？ 悲しんだ？ 怒つた？ それとも自分が死んだことにも気がつかなかつた？ その様を想像するだけで笑いが止まらない。

飽きることがない。至高の快樂。

生殺与奪の権を持つことへの快感を、彼は存分に味わつていた。一陣の風が吹き、黒煙がわずかに薄れて、大地がのぞく。

「……へえ」

それを見た時、彼の笑いが別種のものになつた。

あまりに想像を超越したことが起きると、人間は一時頭の働きを止めてしまう。エリス・エーツェルもその例外ではなかつた。

「…………

田を見開き、言葉を失い、石になつてしまつたかのように固まつてゐる。それは他の人々も同じであつた。

目の前から、町並みが消えていた。

道も建物も花も緑も、そして恐らく住人たちも。ほんの少し前まで町であつたその景色が、ただの焼け野原へと変わつてしまつた。

まるで消しゴムで消したように、キレイさっぱり。跡形もなく。

ところどころから黒煙が上がる、残骸すらもほほない見渡す限りの焦土。それが忽然と、目の前に現れていた。

その焦土と無事な大地の境目に立っていたアリーシェ・ステイシーが、立つ力を失いガクリとくずおれる。

「防いだんだ」

トユループははしゃぐように笑いながら、好奇的な目で大地を見下ろしている。

町であつた場所は、いつものように消し去った。
だが、一方だけ。ひと切れだけ残つたピザのように、町の中心部から細長い三角形を描くよう無事に残つていて、部分が見て取れた。その三角形の頂点は、今さつきまで戦いをしていた場所だ。ならばあの中の誰かが防いだ、ということになる。

「見直したよ」

それだけで、トユループは少しだけ彼女らに興味を抱いた。
だが、まだ足りない。

「けど一発目はどうかな？」

酷薄な笑みを浮かべるトユループの体が、先ほどと同じように輝き始めた。

座り込むように倒れたアリーシェを、ラドニスがすかさず支えた。彼女はトユループの『ディストラクトレイ』を、防御用の『魔術』で防いでみせた。しかしそのたつた一回で、全快に近かつた体力を使い切つてしまつたのだ。

立つ力すら、残つていない。

「……なんだよ、これ……」

エリスは目の前に広がる惨状を見つめながら、呆然と呟いた。

常に恐怖と緊張が抜けきらない自分の故郷とは、正反対のようにな違つところのはずだった。活氣のある明るい町。住む人々も楽しく、幸せそうだった。

だが、これはなんだ？ その光景はどこへ消えた？ 数多くの住人たちは、どこへ行つてしまつた？

エリスはぎこちない動作で背後を振り返る。アリーシュが守つた無事な町並み。しかし確かめるまでもなくわかる。こんなものは、ほんの一部だ。たつたのひと握り。あのすべては、灰となつて消えてしまつた。

奴の手によつて。目の前で。

直接的な憤慨が、エリスの心をさらに激しく燃えた。

「あたしの見てる前で、こんなこと……！」

キツく拳を握りしめ、再び頭上を振りあおいた。

「あの野郎つ……！」

「……ねえつ、また光つてない！？」

同じよつに空を見上げるパルヴィーが、奴へ向けて人差し指を掲げる。

暗雲を背景に輝きをまとうトコループ。それは先ほどとまったく同じ光景であつた。

「まさか、また『アレ』を……やる気なのか……！？」

自分たちが置かれている状況を瞬時に察したレクトが、信じがたい様子で息を呑む。

アリーシュにはもう頼めないだらう。再び『アレ』を放たれたら、防ぐすべはない。残つた町と住人もとも、すべてが光の中へと消えていく。

「悠長にしてる場合じゃねえよ！ なんとかできねえのか！？」

エリスが皆を振り向くも、望んだ回答は得られなかつた。一様に口を閉ざし、苦い顔をしている。

その顔が物語つていた。この状況を開拓する手立てが思いつかない。

放たれたら終わりな以上、その前に止めるしかないのだが。ではどうやつて止めるのか。

はるか上空にいるトコループを攻撃するとなると、普通の武器で

はダメだ。ならば『魔術』？しかし生半可な威力のものが通用するとは思えないし、それをこじらえる猶予が残されているかは怪しいところだった。

素直にやめてくださいとお願いするわけにもいかないだろう。そしてこの場から逃げるのも、恐らくは間に合わない。お手上げである。

その場に、あきらめの気配がただよい始めていた。ただひとりエリス・エーシエルをのぞいて。

「もういいつ！あたしがなんとかする！」

エリスは辺りをキヨロキヨロと見回すようにしながら、必死に頭を回転させる。

「なんとか……って？」

そんな彼女に、パルヴィーがため息まじりに問いかけた。
よく聞く言葉で、三人も集まればなにかしら良い考えが浮かぶものだ、という類のものがあるが、今はその倍の六人もいる。だとうのに打開策が浮かばずにいるのだ。

なんとかできるものならなんとかして欲しいものである。
「そりゃ……なんとかするんだよ！ なんとかして、なんとかするしかないだろつ！」

「考え方がないんじゃん。もう無理だつて
「無理じゃねえよ！ 決めつけんなつ！」

「そう言われてもね」

パルヴィーは苦笑いに近いものを浮かべた。余裕すら感じられる態度は、すでに結末を受け入れてしまつていてのことなのだろうか。

「……『モンスター』と戦つてるんだから、もしかしたらこうこうことになるかもって、いつも覚悟はしてたし」

懸命に頭をめぐらすエリスの横で、パルヴィーは遺言のようひとりごとを言い始めた。

「それがちょっと、思つてたより早かつたかなつていうだけで。
まあ、心残りがないってこともないんだけどね」

伏し目がちに、レクトへ視線を送る。

そのレクトは、いちぶの隙もなく上空のトヨループをにらみ続けていた。まるでそれが、せめてもの抵抗であるかのようだ。

トコループを包む光は、見る見るうちにその輝きを強めていく。先ほどは『アレ』が放たれるまでにどれくらい時間がかかっていただろうか。もはや体感時間はあてにならないが、そつなくは待つていられないはずである。

もういくばくもない。

「おいつ、『魔術』かなんかで、飛べるようになるヤツはないのか！」

その時エリスが、誰に向けてでもなく質問を投げつけた。「攻撃が届かないなら、あたしが直接あいつのところまで行つて叩き落としてやる！」

発想としては、それは間違つていなかもしれない。しかし皆の表情は好転しなかつた。

「飛べるようになって……ないんじゃない……？」

パルヴィーが、記憶を探るようになぐく。思い当たらぬ。もしかるのならば、もっと早くに気付いているはずだわ！」

「……いいえ、なくはないわ」

だがそう答えたのは、ラドースの腕の中でぐつたりとしているアリーシュだった。

「このまま、終わりを待つくらいなら……ね。私も、まだあきらめてはいないもの」

彼女は強い意志を秘めたまなざしで、エリスを見つめる。「『魔術』で、真上へ向かつて突風を起こす。その気流に乗れば、あの位置まで飛べるはずよ」

「なんだよ、あるんじゃねえか。そんな単純な方法が活路を見い出し、エリスはパッと表情を明るくした。

「ちよつ、ちよつと待つてくださいっ！」

しかしそこへ、リフィクが口をはさむ。

「それだと、エーツェルさんが無事では……」

「どういうこったよ？」

歯切れの悪い言葉に、エリスは水を差すなど言いたげに口を尖ら

せた。

代わりにアリーシュが説明する。つまりこれは、真上へ向けて小石を投げるようなものだ、と。

ある程度の狙いはつけられるが、微調整はむずかしい。そして仮に狙い通りのところへ飛び、わずかなチャンスでトヨループを阻止できたとしても、そのあとに問題が待っている。

はるか上空から落下してくる小石を、受け止めるすべがないのだ。そのまま地面に激突して無事で済むはずはない。落下スピードを軽減する手段もあるにはあるのだが、それは焼け石に水程度の効果しかないだろう、と。

「だから私からは、強制もお願いもできないわ」

手短に説明をし終わり、アリーシュは申し訳なさそうに言った。

「選ぶのはエリスさんよ」

まさに命がけの攻撃。しかし彼女にとって、それはささいな問題であつた。

「言つまでもねえ。あたしがやらなきゃ誰がやるつてんだ」

即答するエリス。リフィクはやはり不安げに、それを考え直させようとした。

「危ないんですね！ なにか、別の方法を……」

「やるやらねえと論じてるあいだに、ああなつりまつのがオチだろ！」

エリスは声を荒げて、人差し指を突き出した。その先には、無に帰した焦土が広がっている。

「あとのことはあとで考えればいい！ 先のことばっかり考えてて目の前のことをやらなきゃ、本末転倒つてヤツだろ！ 今考えんのは、今のことだ」

なにもしなければ、このまま灰となつて消えるしかない。ならばどんなことでもやらなければならぬのだ。

ダメで元々、この絶望的な状況が少しでも良くなれば、それで上出来というものである。

「わかつたらさつさと準備！」

無論エリスひとりでは、なにもできない。『魔術』の使えるリフイク、パルヴィー、そしてレクトの力が必要なのだ。三人の力を合わせれば、少ない時間でも、人間ひとりを打ち上げられるだけのパワーを捻出できるだろ？

「……わかつた」

最初にそれを了承したのはレクトだった。不本意ながらも意を決したといつた様子で首肯する。

「わつ、わたしも」とパルヴィーも続いた。

ふたりはすぐさま、『魔術』を使うべく意識を集中させる。

「そんなつ……」

苦い顔のリフイクであったが、それを見て、悩みながらもふたりのあいだに加わった。

三人がちょうど△三角形を描くように立ち、力を集中させしていく。エリスは最終確認のつもりか、頭上を仰いだ。

灰色の空。太陽のよう輝くトユループ。あれは許してはいけない光だ。どうあっても、打ち倒さなければ。

「エリスさん」

アリー・ショウに呼びかけられて、エリスは顔を下げる。彼女は自分の両手首から、宝石のようなライトグリーンの腕輪を外しているところだった。

「これを」

そしてそれをふたつとも、エリスに手渡す。

「なんだ？」

「身につけることで『魔術』の力を高めてくれるものよ。あなたの炎の技も、それで強化できるはず」

「へえ、便利なもんだな」

エリスは気おくれた様子もなく、微笑みながらそれを自分の腕へとつけた。

「一蓮托生だ。任せる」

アリーシュを支えるアーデースの言葉に、エリスは「任せろ」と力強く答えた。

そして三人が結ぶ三角形の中央へと移動する。そこは正確に、トユループが位置する真下だ。

その時。

『 天地を焦がす霹靂は』

トユループの例のセリフが、こだまのよみに響いてきた。

「……雷帝来たりて降り注ぐ」

実のところ、これを口にする意味はまったくなかつた。

『ディストラクトレイ』を放つためには、かなり長く力を溜めなくてはならない。そのあいだの退屈しきとして考えた口上なのである。

毎回のように口にしてはいたが、『灰のトユループ』という名前ほどには知れ渡つていかなかつた。それを聞き、生きている者があまりにも少ないからというのが一番の理由だろうが。

「すべてを滅ぼす声のもと」

トユループは眼下を眺めた。

わずかに残つた町の一角。しかしそれも、もうすぐ消え去ることになる。さすがに二連続ともなると多少時間がかかつてしまつたが、大した問題ではない。

どの道、消えることには変わりないのでだから。

「破壊の光を今ここに！」

トユループははやる気持ちに従順に、口調を高ぶらせる。

しかしその時、彼の感覚器官がなにやら異質なものをとらえた。聴覚と触覚が下方から吹く強い風を感じし、そして視覚がその正体を認知する。

だが認識した時にはすでに遅かつた。

高速で飛び上がってきたエリスとすれ違つた瞬間、トユループの

片腕から紫色の血が噴出する。

それで意識の集中が途切れたのか、彼の体を包んでいた光がたちどいに拡散を始めた。

高山の頂上から見下ろすような、果てしなく雄大な景色。しかしエリスには、そんな景観を堪能していられる余裕はなかつた。

しきじりやがつて、と数瞬前の自分を叱り飛ばす。

『魔術』によって打ち上げられたはいいが、そのスピードと勢いが思つていた以上にすさまじく、ろくに攻撃の姿勢もとれなかつたのだ。

それでもなんとか切つ先を触れさせることができたのは、彼女の意地の表れであろうか。

強い風の音しか聞こえず、体の自由もほとんど利かず、上下左右もわからない、刹那の世界。悔いも刹那に捨て去り、エリスは必死に目と顔を動かして奴の姿を探した。

すぐに見つかった……のはいいのだが、かなり距離が遠かつた。普通に考えたら、ここからの攻撃は不可能だろう。弓矢でもなければ届くはずがない。

しかしエリスは剣は振る。

この期に及んで、不可能だつたとあきらめられるわけがない。なにも考えず、ただ届け届けと自分の力に思いを込めながら、それを放つた。

「オーバー……フレアああっ！」

声が出ていたのかどうかは、自分でもわからなかつた。

トユループは、茫然自失となつていた。なにが起きたのかを理解するのに時間が必要だつたからだ。

数多くの者と戦つてきたトユループであつたが、こういつ対応をしてきた者は初めてだつた。

有翼種ならば、無論、飛んだトユループを同じく飛行して追いか

けてくることもある。だが翼を持たぬ人間が、こうして上空にまで追撃をかけてくるなど今まで有り得なかつたのだ。

とはいえその驚きに固まつていたのは、一秒にも満たないほんのわずかな時間である。

トユループは上へ視線を向け、彼女の姿をとらえた。

打ち上げられた際の気流から中途半端に外れ、風にもみくちゃにされている。あの状態では意識を保つているかすら怪しいだらう。あとはもうあのまま、重力に従つて落ちるだけである。

一興としては充分だつた。トユループはニヤリと口元を歪ませる。捨て身の攻撃が浅かつたのはさぞや悔しかろう、と。

しかしそのトユループの見ている前で、彼女の持つ剣から、激しく火柱が噴き上がつた。

「……？」

地上で戦つてゐる時に何度と見た、あの攻撃をするのだろう。だがこの距離。到底届くはずがない。

徒労に終わるのはわかりきつてゐる。

そうほくそ笑んだトユループの予測は、しかし裏切られることがなつた。

「もう一度、術を！」

『魔術』で烈風を起こしエリスを打ち上げた次の瞬間には、レクトはもうそれを口にしていた。

再び風を起こし、落ちてくるエリスの落下スピードを可能な限り減殺してやろうと考へてゐるのだ。

アリー・シェはその声を耳にしながら、しかし……と思つ。

はるか上空まで飛び上がつたとはいえ、落ちてくるまで数秒もないだらう。そんな短い時間で力を溜めて、たかが知れてい。

ずつと空を見上げていたアリー・シェは、すべてを見届けていた。飛び上がり、すれ違つた際に軽い一撃を与えたこと。

次いで放つた剣技が、貸したブレスレットにより強化され、炎の

刃が普段の何倍にも伸びてトユループの胴へ傷を「えた」と。

そして、その傷があまり深くなかったことを。

……よくやった、というところだろうか。

もう少し近ければ、確実に胴体を両断できていたはずだ。あの状態から一撃目を放ち、当てただけでも大したものである。充分健闘した。

上昇軌道が折り返し地点を過ぎ、ヒリスは落下軌道に入る。もう誰にも止められない。見ていることしか、できない。

が、その時、トユループが動いた。

高速で落下するヒリスを追いかけるように、さらなる高速で急降下し出したのだ。

「……！」

なにを……？ 自分の手で直接トドメを刺そつとでもいうのか？ と直感的に思うアリーシュが見守る中、両者の距離がまたたく間に狭まっていく。

そしてヒリスが地面に激突する寸前、トユループが、まるで獲物を捕るワシのように、彼女の体を拾い上げた。

助けたのだ。

予想だにしていなかつた結果に、それを見ていた全員の時間が少しのあいだ止まる。

エリスを小脇に抱えたまま、トユループがふわりと地面に降り立つ。

その体には、先ほどにはなかつた傷が刻みつけられていた。胴体を斜めに走った、火傷を伴つた大きな斬傷。そして右腕にも小さいものが見受けられる。血が流れているものの、どちらも重傷という気配はなかつた。

皆一様に、息を呑んで彼の姿を見つめている。手を出すどころか、声を出すこともできない。これからどうなるのか、ただ眺めているだけしかできなかつた。

抱えられたエリスは、ぐつたりとしたまま動かない。意識を失っているのだろうか。

そんな彼女を、トユループは自分の前へと放り捨てた。どさり、とわざかに砂ぼこりが舞う。

「なんて言つていたかな？」

トユループの問いかけに、誰もすぐには答えられなかつた。

気圧されているというのもあるが、問われた質問があいまいすぎてわからなかつたのだ。

そこをトユループが、自分自身で補足する。

「彼女の名前」

「……エリス・エーツェル」

声を絞り出すように、レクトが答えた。

「そう」

トユループは微笑みながら、眼下のエリスと、自分の体の傷とを交互に見た。まるで楽しんでいるかのように。

「覚えておくよ」

そしてそれだけ言つと、再び大きく翼を開いた。

はつと身構える一同を尻目に、くるりと背中を向ける。トユループはそのまま、どこかへ向かつて飛んで行ってしまった。

トユループが空の彼方に消えた頃には、頭上にただよっていた暗雲は消え去り、青空が戻っていた。

奴の姿が見えなくなつてからようやく、固まつていた皆の心にも平常が戻り始める。

しかし無事に生き延びることができたという喜びは、あまり感じられなかつた。悪夢から覚めた直後のように、後味の悪いものが胸にこべりついている。

生きた心地がしないとは、こんな時に使う言葉なのであらうか。

「……まさか本当に、なんとかしてみせるとは……」

ラドニスがエリスを見ながらしみじみと呟いた言葉を、近くにいたアリーシュだけが聞き取つた。

なぜトユループがいきなり去つたのかは、この際どうでもよかつた。他のことで頭が一杯で考えている余裕などなかつたからだ。

エリスたちから出た犠牲は、ほとんどないと言つていい。

あるとすれば、馬が一頭。預けた武具屋もろとも、光の中に消え去つてしまつたのだ。幸いにも借りた宿屋のある区画は無事だつたので、もう一頭とその他の荷物はことなきを得ることができたが。しかし住人たちの犠牲は、その程度では済まない。

町のおおよそ八割が、無惨にも消滅してしまつたのだ。知り合いもいただろう。恋人、家族もいただろう。直前まで世間話を交わしていた者すら、もういない。

その事実が知れ渡つた時の混乱と怒りと悲しみは、想像を絶するものがあつた。

阿鼻叫喚のるつぼ。

エリスたちは最低限の休息を取つたあと、そのたゞ中へと足を踏み出していった。

破壊された部分はまさに灰となつたよう[.]キレイになくなつてしまつてゐるので、無事な部分との境目が一番の被害地と言える。衝撃と余波で建物はほとんど倒壊しており、ケガを負つた人や生き埋めになつてしまつた人がいるという声があちらこちらから叫ばれた。

『治癒術』の使えるリフィクとバルヴァーはケガ人の治療にようと
う。それ以外のエリス、レクト、ラドニスは、ガレキの除去を手伝

心身共に力を使い果たしていたアリーシュには、まだ少しの休息が必要だった。

妙な叫び声を発しながら建物の破片を片付けるエリスを、周りで同じ作業をする住人たちが奇異の目でチラチラと見ている。彼女は少々虫の居所を悪くしていた。

その原因は、やはりトループである。

ていたあいだのことも、なんとも腹立たしかった。

他の皆の話によると、奴は自分を助けた上に、その場を見逃してどこかへ行つてしまつたといつのだ。そういう見下されたような、情けをかけられたような態度が、非常に鼻持ちならないのである。氣に入んねー。

気にくわねー。

「あの薄ら笑いヤロウ……今度会つたら……」

エリスを力を込めるように低く呟きながら、新たなガレキに手をかける。

の人間は見ないよつにしていた。

アリーシュが宿屋から出たのは、諸々の作業が一段落ついたあとだつた。

彼女は重い足取りで、町の様子を見て回る。

さすがに一時の混乱からは立ち直つたようだが、それでもまだ、住人たちの怒りや悲しみが形を持ったように周囲に渦巻いていた。崩れた建物の跡に座り込み、泣きむせぶ女性がいる。アリーシュはその光景を少しだけ見つめたあと、痛みに耐えるようにまぶたを閉じた。

多くの犠牲者が出てしまつたが、中には被害を免れた者もいる。それを直接的に守つたのは他ならぬアリーシュだ。

これだけでも守れたと喜ぶべきか、これだけしか守れなかつたと嘆くべきか。

彼女は後者を選んだ。

「……なんて無力な……」

その場に立ち廻くし、血を吐くように咳く。しじうがなかつたと片付けることは、彼女にはできなかつた。

「……アリーシュさん」

そこへ声をかけたのは、レクトだつた。口調は重く、暗い。アリーシュは目を開け、背後を振り返る。

「すみません」

それと同時にレクトが第一声を発した。その表情は、声と同じ暗さを秘めている。

「俺が勝手な手出しをしなければ、もしかしたらこんなことに……」

伏し目がちに続けられた言葉から、アリーシュは彼の心境を汲み取つた。

トユループと最初と対峙したのはレクトである。こんな結果に直

面してしまえば、もしあの場面でなにもしなければ……と思わずにはいられないのだろう。

そしてその憂いを、どこかに吐き出したかった。アリーシュに詫びることでもないところのは、彼もわかっているはずだ。

「……同じことよ」

アリーシュはゆるやかに首を振る。抑揚の弱い声だった。

「相手は『モンスター』……言葉も聞かない殺戮者だもの。なにもしなければ無事で済むなんていうことは有り得ないわ」

彼女の鋭敏な瞳が、レクトを射抜く。

「私たちにできるのは戦うことだけ。灰のトループといつ脅威にいち早く対応できたのは、あなたがいたおかげよ」

戦わなければなにも守れない。奪われるだけ。そして、泣き寝入りをするしかなくなる。

だから戦つて抗うしかない。アリーシュの瞳は、雄弁にそれを語りかけていた。

「戦い続けましょ。その後悔すらも力にかえて、脅威を断ち切るのよ」

「……はい」

レクトは重く、しかし先ほどよりは少しだけ軽く、そうつなぎいた。

断章「いつも嵐は突然に」

つららかな時間が流れていた。
のどかな町の一角。路上。屋台の軽食屋の脇に、簡素なテーブル
セットがいくつか並んでいる。

その一席に、旅姿の若い男女が仲むつまじい様子で座っていた。
はたから見た光景は、なんとも平和で微笑ましい。

テーブルの上に置かれた大きな皿に、数枚のバンズや適量の野菜、
肉、調味料の小瓶などが乗せられている。男性がそれらをいくつか
組み合わせてハンバーガーを作り、

「さあ。できたよ、リュシール」

黒髪の女性へと手渡した。

女性はそれを、なにやら人形めいた無感情な顔で受け取る。男性
が慣れた手つきで同じものをもうひとつ作り上げたのを見てから、
そのハンバーガーに口をつけた。

昼食には少々早い時間なためか、他のテーブルに客の姿は見えな
かつた。

通りをゆく人間たちは、彼らの食事風景を視界に入れ、自分の昼
食はなににしようかとぼんやり考えるのだろう。

やがてふたりが、皿の上を空にする。

その頃には、周囲の席も埋まり始めていた。集客力からするとな
かなかの人気店なのだろうか。

男性の口元についていたケチャップを、女性がナプキンで拭う。
やはり無表情であったが、その仕草から、ふたりの深い間柄が見て
取れた。

ただの知人同士ならそういうことはやらないだろう。

「ありがとう。そろそろ行こうか」

男性が微笑んで、席を立つ。彼に続いて女性も立ち上がった、そ

の時。

彼女の目つきが変化した。

まるで野生の獣のように鋭く険しく、物々しい雰囲気へと瞬時に
変わる。腰に吊っていたロングソードに手をかけ、いつでも抜き放
てる姿勢を作った。

不意に彼女が空を見上げる。つられるように彼も顔を上に向けた
……次の瞬間。

それは舞い降りた。

不敵に。堂々と。そして軽やかに。

大きな翼を羽ばたかせて、ふたりの目の前へと着地する。

『モンスター』だつた。

人間に近い四肢と顔面に、黒と深紫の体。コウモリに似た翼をた
たんだ彼は、柔軟な笑みをふたりへとかたむけた。

「やあ、久しぶり」

旧友と再会した時のような、明るくほがらかな声。
しかしそれが発せられた時には、すでに周囲は悲鳴に包まれてい
た。

突然の『モンスター』の出現に、食事もほつたらかしにして人間
たちが散り散りに逃げていく。あつといつまに、そこに立つ三者だけが残された。

男性が、静かに唾を飲み込む。それがただの『モンスター』でな
いことを、経験をもつて知っていた。

「これはこれは……灰のトユループ。……なにかご用で？」

男性は驚きと警戒の上に作り笑いを貼り付けて、あくまで融和的
に受け答える。

となりに立つ女性は、妙なことをしたら斬りかかるぞ、と言わん
ばかりの気配を全身からうち飛ばしていた。

しかしそんなことなどまつたく気にかけない様子で、『モンスター』が二の句を継ぐ。

「たしか君『治癒術』が使えたよね。ちょっとやってくれない？」

男性はそれを聞いてようやく、『モンスター』の胴体に大きな傷跡があることに意識を向けた。

血こそ出でていなが、それは刃物でバツサリとやられた跡だろ？。そしてまだ真新しい。

「……わかりました」

一瞬の間を置き、男性がうなずく。

こんな町の中では滅多なことはできない、と結論を出したのだ。もつとも、そんな気遣いなどなんの意味も持たない相手だといつことも承知していたが。

男性は『モンスター』に歩み寄り、その胴体へ片手をかざす。近くで見て、あることに気付いた。それがただの斬傷ではなく、火傷を伴つた斬傷であつたことに。

この傷をつけたのは、さしづめ炎の刃といったところだろうか。

「……」

男性には、少なからず思い当たるものがあった。しかしそれ以上は考えず、かざした手に光を宿らせる。

「ヒーリングシェア」

光が傷跡に移り、見る見るうちに再生がなされていった。

「……あなたが傷を負うとは、めずらしいのでは？」

「そりやね。でも面白い人間に出会つたから。まあ、君たちほどじやあなかつたけど」

「『人間』ですか」

楽しそうに語る『モンスター』のひとことを聞き逃さず、男性が思案顔で呴く。光が消えると、傷跡は完全になくなつていた。

「別に放つといてもいい傷だつたんだけど、たまたま君たちは見かけたからね。ついでにアイサツでもしようと思つて」

『モンスター』は確認するように、傷のあつた場所を指でなでる。『ありがた迷惑』という言葉の意味が、今わかりましたよ

そして男性の皮肉を笑顔で受け流して、翼を開いた。

「ありがとう。またね」

にこやかに言つてのけ、ふわりと飛び立つ。そのまま雲間へと消えていった。

嵐のよつて現れ、嵐のよつて去つていぐ。やうじつところは前と同じだ。

男性は肩の力を抜き、女性へと振り向いた。

「びっくりしたね」

彼女も彼女で体の力を抜き、剣から手を放す。目つきも普段の、さざ波のように穏やかなものへと戻つていた。

嵐がいなくなると、その場にざわざわといつ喧騒が生まれ出す。避難していた人間たちが帰つてきたのだ。恐るべくどこかで、この場の様子をうかがつっていたのだろう。

人間たちの視線が、自然とふたりに集中する。

しかしそれはただの視線ではなく、懷疑や悪意、敵意すらをも含んだ視線だった。

無理もなかろう。

『モンスター』と親しげに話をしていた上に、その傷まで治してやつていたのだ。逆になにも思わないほうがおかしい。

「……困つたものだね」

男性は周囲をぐるりと見渡してから、やれやれと苦笑つた表情を彼女にかたむけた。

「今日はこの町で宿を取ろうと思つていたのに」

女性は無言のまま、彼の瞳を見つめ返す。

第三章「吠え碎け！　スローグラウンド」（1）

木々に囲まれた山道をひと組の老夫婦が歩いていた。

「そろそろ、町が見えてくる頃だ」

ジャムス・グライドは背後の妻に振り向いて、明るく声をかける。ふたり合わせて百一十を超える年齢での長旅はかなり厳しいものがあつたが、それももうすぐ終わりだろう。そう染み入るように思つて、ふたりは互いに微笑みあつた。

グライド夫妻が暮らしていた村が『モンスター』に破壊されたのは、今よりひと月ほど前のことである。

からうじて逃げ延びたはいいが、もうそこに戻ることはできなかつた。家も生活も、隣人たちをも奪われてしまつたのだ。子供もなく、近くの村に頼れる人間もいなかつたので、ふたりは意を決して旅に出た。

最初に目指したのは、イーゼロッテという町である。そこは『モンスター』も少なく大きな町と聞いていたので、遠い道のりではあつたが、行く価値があると結論を出した。

もう一度とこのような目に遭いたくなかったからだ。

しかしやつとの思いでイーゼロッテに着いたふたりは、すぐさま愕然とすることになる。

町の大半が、焼け野原へとなつてしまつていたのだ。

聞く話によると、それはつい先日『モンスター』が行なつた破壊らしい。

わずかに残つた住人たちも自分のことで精一杯で、とてもじやないがグライド夫妻を受け入れてくれる余裕はなさうだつた。

ふたりは肩を落とす。

あてが外れたこともそつだが、どこまで行つても『モンスター』からは逃れられないという事実を突きつけられたようで、ひどい脱

力感に襲われたのだ。

山向こうにある『シルパリーサ』という町の話を聞いたのは、そんな時である。

そこは以前のイーゼロッテほどではないものの、規模も大きく『モンスター』による被害も少ないそうだった。

いちるの希望を抱いて、グライド夫妻はその『シルパリーサ』を目指した。

そして今、その町を見下ろしていた。

山道の途中にある崖から全景が一望できる。噂にたがわざ立派で、活気のありそうな町だった。

ふたりの口から感嘆がもれる。あの町ならば、きっと平和でにぎやかな、新しい暮らしを始められるだろう。それがなによりも嬉しかった。

だがその時、妻の二コールが、突然小さな悲鳴を上げた。

ジャムスはなにとかと後ろを振り向く。

ふたりはいつのまにか、大勢の人間に囲まれていた。

全員が全員武器を持ち、あまりキレイとは言いかたい、皮や毛皮の服を身に付けている。放つ雰囲気は粗野そのもの。ジャムスの脳裏に、山賊という言葉が浮かんできた。

「なつ……なんだ……！？」

ジャムスは妻を背中にかばうようにしながら、その人間たちに問い合わせる。ざつと見るに、男だらけのようだった。

そんな彼らを割って、真ん中からひとりの男が歩み出た。

まだ若い。青年と言つていいだろ。みずみずしく鍛えられた体に毛皮の服をまとい、両手と両足にだけ鉄製の防具をついている。武器は持つていなかつた。

その青年が口を開く。

「食料と金目のものを、半分だけ置いていけ。そうすりや見逃して

やる」

ジャムスは、頭に浮かべた言葉が間違つていなかつたのだという

」とを実感した。

「ぐはあああー」

エリス・エーツェルはベッドに飛び込むなり、断末魔のような奇声を上げた。

いつも通りの肩へそ太もも丸出しな格好で、三つ並んだうちの真ん中のベッドに、そのやわらかさを堪能すべく顔をうずめている。外にハネた短い茶髪頭には、ハチマキをしていたり布を帽子のように巻いていたりというバリエーションがあるが、服に関してはほとんど同じようなものしか見たことがなかつた。

普通の衣服の袖や裾を自分で切つているくらいである。

なんのこだわりがあるのかは不明だが、男性からすれば田のやり場に困り、女性からすればはしたなく見え、あまり評判はよろしくなかつた。

しかしそれをまったく気にしていないのは、彼女の良いところでもあり悪いところでもあるのだろう。

「ベッドを作つた奴は偉大だな……」

しみじみと言つエリス。顔がシーツに埋まつてゐるのでぐもつた声だつた。

「どこでもすぐに寝られるようなのが、よく言つー」

彼女と同年代の少女パルヴィー・ジルヴィアが、銀色の防具を外しながら横目に見た。

地面の上だらうと岩の上だらうと木の上だらうと、なんの問題もなく快眠できるエリスである。そんな彼女にはベッドの快適さなどわからないと思つていたが、どうやらそうでもないようだつた。

「旅をするようになつてから改めて気付くことも多いものね」

同じく銀の防具を脱ぐ、ふたりの姉と呼ぶには少々年齢を重ねすぎた感のある女性アリーシエ・ステイシーが、包容力の高い微笑みを浮かばせた。

三人がいるところは、『シルパリーサ』といふ町の安宿の一室である。

ベッド三つで部屋がほぼ埋まつてしまつほどの狭さで、他のものは一切置かれていない。まさに寝るためだけの宿だが、安さを考えれば妥当なところだらう。

旅の身からすれば、あれやこれやと付加されて料金が高くなつてしまつのも考え方のなのだ。

「たしかさつき、この町には温泉が湧いてるつて言つてましたよね？」宿の人

わくわくとした表情でバルヴィーが言つ出す。

「みんなで行きましょうよー！」のあと

「いいわね」

アリー・ショは窓の外を見た。日が沈み、夕焼けもそろそろ消えかかっている。時間的には少し急ぎたいところか。

「温泉か。……その前に」

耳ざとく聞き入れたエリスが、跳ねるよつてベッドから飛び降りる。

そして荷物の中からひと振りの剣を引っ張り出し、そのままドアに手をかけた。

「汗かいてくる。置いてくなよ」

振り向いてそう言い残し、部屋から出していく。残されたふたりは、特に言われずとも「アレか」と見当がついた。

「熱心ね」

「まつたくです」

閉じたドアを眺め、それぞれ呟く。

廊下の先に白いローブ姿の若い男を見つけ、エリスは駆け寄りついでにその肩をひっぱたいだ。

「あうひー」

リフイク・セントランの柔軟な顔が情けなく眉尻を下げる。

「エーツヘルさん……なんですか？」

「あいつ？」

「ゼーテン」

「ラドースさんなら、まだ僕たちが借りてる部屋にいると思いますけど……」

バシッと、エリスのローキックがリフィクのふくらはぎをとひらえた。

「ひぐつ」

悶絶するように体をくねらせるリフィク。

「だからその部屋がどこにあるか聞いてんだよ」

初耳である。なんと理不尽な仕打ちだらうか。

リフィクは以前一瞬の氣のゆるみから、エリスの『子分』にさせられてしまつた経緯がある。そのせいか、七つほども年下の彼女にいまいち頭が上がらないのだ。

もつとも、そもそも氣の小さい性格だといつものもあるのだらうが。「蹴らなくてもいいじゃ ないですか……」

リフィクが弱々しい声で訴える。

言つてることは正しい。しかしこの力関係においては、悲しいかなエリスがすべて正しいことになつてしまつのだ。

「前から思つてたんですけど、やっぱりエーツヘルさんはもう少し品位というものを意識されたほうがいいかと……。今いままでは、はしたないと言つますか見苦しいと言つますか……」

エリスが再び足を後ろに引いたのを見るや、リフィクは即座に小言を中止させた。

「突き当たりの部屋です」

その返事代わりに、一発目のローキックが見舞われる。

「はぐつ……」

「あつ、やうだ。あとでみんなで温泉行くとか言つてたから、あんまつづラづラ出歩くなよ」

そしてエリスは、なにごともなかつたようにリフィクの横を通り過ぎていった。

行動力の塊のような彼女に言われるのもなんだか微妙な心境である。

こんな扱いにもめげずに彼女に付き合つてゐる辺り、彼の人柄の良さは大したものだらう。

ただ受動的なだけとも言えなくもないが。

楽な格好に着替えたアリーシュとパルヴィーが、ギシギシと音の鳴る階段を下る。

宿屋の受付と出入り口を兼ねた狭いホールまで降りたところで、窓際に立つ十代終わり頃の青年が目に入った。

「そこでやつてゐるの？」

アリーシュが声をかける。青年レクト・レイドは「ええ」と年齢のわりに落ち着いた口調で答えて、田で窓の外を指した。

裏庭か空き地だらうか。

そこでエリスが、たくましい中年の男性とウッドブレードをぶつけ合つてゐた。

ゼーテン・ラドニスとエリスが、こうして稽古をするのになつたのは少し前からのことである。

持ちかけたのはラドニスだ。最初のうちは口頭で指南していたのだが、エリスがうとましがつたために今のような模擬戦形式へと変化する。

もつともエリスにしてみれば稽古をつけてもらつてゐるという意識などなく、ただラドニスから一本取つてやろうとこうつ田標に燃えているだけなのだが。

ちなみにその目標は、まだ一度も達成されていない。

「今日はここまでだ

つばぜり合いの体勢から押し飛ばされたエリスが尻餅をついたと

「ひで、ラドニスが口を開いた。

握ったウッドブレードを下げ、ヒタイの汗を拭う。

「バカ言つてんじゃねーよ。まだやるー！」

エリスはすかさず起き上がり、すかさず抗議を述べた。するとラドニスもすかさず反論を送り返す。

「あまり皆を待たせておくわけにもいくまい」

窓越しにうかがえる建物の中では、レクト、アリーシュ、パルヴィー、そしてリフィクと、全員が集合している。もうあとはふたりを待つだけの状態なのだろう。

「待たせとけよー！」

しかし肝心のエリスがこうこう言ごべをする。

模擬戦闘とはいえ、やられっぱなしな彼女だ。どうにも自分が勝つまでは終わらせたくない性分なのである。このセリフを待つている面々が聞いたらどんな顔をするだろうか。

「しばらくぶりのウッドだ。今日は旅の疲れを取ることに専念したほうがいい。いざ実戦で疲労が残っていたら形無しだからな」

もはや毎回のよつに似たやり取りが行われるため、ラドニスも彼女の扱いを覚えつづあつた。背中を向け、そつそと宿へ戻ろうとする。完全にやる気がないとアピールすれば、エリスとしても矛を收めるよりないので。

「疲れてねーよ」

エリスのすねた声が浴びせかけられる。

「お前らみたいな年寄りと一緒にすんなー！」

お前らの『ら』に彼以外の誰が含まれているのかは、あまり深く考えないほうがいいだろう。

そんな言葉を背に受けるラドニスの中では、非常にムラがある…

…というのがエリスに対する評価だった。

良いところはとことん良いのだが、悪いところはとことん悪い。その差が激しいのだ。

剣の基本はまったくないつていかないのだが、不思議と剣筋は悪くない。それは恐らく動体視力と反射神経が優れているからなのだとラドニスは見当をつけているが、なにより迷いがないと「いうのが一番大きいだろう。

攻撃にしろ防御にしろ回避にしろ、一拳手一投足すべて、一切の迷いもためらいもなく行われる。故に動きが鋭いのだ。

時折息を呑むほどに。

それは努力してもそういう身につけられるものではない。体ではなく心の問題だからだ。

訓練という状況ではなく真剣勝負で、なおかつあの炎の技を使われたら……もしかしたら危ういかも知れない。

ラドニスは密かにそう考えていた。

朝をさわやかだと感じるのは、吹く風がまだ夜の名残を含んで涼しいからだろうか。もしくは本能的に、太陽の光に安堵するからなのか。

そんな小難しい考えなど頭の片隅にも抱かないエリスは、宿の外に出てぐうーっと体を伸ばした。

「今日は体が軽いな」

腕や腰を曲げたり回したりしながら呟く。

子供のように底知れないパワーと元気さを常に放っている彼女である。逆に体が重い日というのがあるのだろうかと疑問に思つリフイクだつた。

「温泉のおかげね」

エリスのひとりごとに、アリーシェが相づちを打つ。

湯治とこう習慣からもわかる通り、温泉の効能は意外とバカにできない。日々の旅の中で気付かぬところまで疲労していることを、こういう休息の時に思い知るのだ。

「私とラドニスさんは、『コーポメンバー』のところに顔を出していくわ。あとことはよろしくね」

宿屋の軒先に集まつた仲間たちを見ながら、アリーシェが本題を告げた。

「なんだ、それ？」

上半身を限界までのけぞらせたエリスが、耳慣れない単語を聞き返す。

「私たち『銀影騎士団』の協力者のことよ」

アリーシェは彼女のそんな態度にも、昨日ちゃんと説明したはずだという記憶にも一切かまわず、和やかに答えてみせた。

「実働メンバーは四十人弱だけど、その他に水面下で協力をしてくれ

れる人が大勢いるの。いろいろな町で、普段は普通に暮らしている人たちだけどね。装備品や資金の支援をしてくれたり、その人たちを通じて団員同士が連絡を取つたりもできるわ」

「へえー」

「ふんふんとうなずくエリス。まるで初耳のようなリアクションだ。
「……ひと晩寝ちゃうと忘れちゃうわけ?」

「ぼそりとパルヴィーが呟いた。

アリー・ショとラドニスという年長組が抜けると、残るはエリス、レクト、パルヴィーのティーンエイジャー組と、ひと回り弱上のリフィクという構成になる。

順当に考えれば年長のリフィクが中心になるべきなのだが、あいにく彼の発言力は風前の灯火なみに弱かつた。

「とりあえず武器屋に行こうぜ。いつまでもこんななんじやかつこつかねーからな」

町の往来を先頭立つて歩きながら、エリスが自分の剣を引き抜く。

「うわっ」

それを見て、パルヴィーが苦いものを食べたような声を上げた。刃がボロボロになっていたのだ。

もはや刃こぼれなどというレベルではない。岩にノコギリのようになにこすりつけたとしても、恐らくこなはならないだろうとこつまどだ。

「それ、ちょっと前に買ったヤツじゃない?」

そのスチールソードは、この『シルパリーサ』のひとつ前に寄つた町『イーゼロッテ』で購入したものである。買う場に立ち会つていたパルヴィーには、かなり清新しく見覚えがあつた。

「扱い難すぎー」

「勝手にこうなつたんだよ! こんな不良品つかまされやがつて。

節穴野郎め

「剣 자체はいくく普通のものだ」

と、買った張本人であるレクトが一応弁解した。そしていぶかしげに眉をひそめる。

「しかし、この消耗の仕方は妙だな。逆にどうすればこうなるのかわからない」

あれからまだ十日も経っていない。習慣として剣を振っている彼女は目にすると、買ってすぐの灰のトヨループ以降実戦は行なっていないのだ。まず消耗する機会がないはずである。

「だから不良品だからだろって」

レクトの疑惑をよそにエリスは完全にそう決めつけ、剣をサヤに戻した。

別段反対者がいるわけでもなかつたので、一向はひとまず武具屋を探すこととした。

シルパリーーサの町並みは、木造よりもレンガ造りのおもむきが多い。ざつと見回すと、今まで建築中の建物が田に入つた。赤褐色の焼成レンガが外壁に生まれ変わつとしている。

山が隣接しているため資源も豊富で、汗を流すための温泉も湧いている。ともすれば労働意欲の刺激される環境だ。

この町が活気を含んでいるのはそういうた側面もあるからなのだろう。

ここもエリスの故郷などからすれば信じられないほど広く人も多いのだが、少し前にこのさらに上をいく町をまのあたりにしていたため、さすがに感慨は薄れていた。

とはいえて充分驚異に思つてはいるが。

「ところで、なんでお前がいんだよ？」

エリスは右へ左へ目を動かしながら、無遠慮な物言いでパルヴィーに問いかけた。

「あいつらと行かねーで」

イメージ的にはまつたくそぐわないが、パルヴィーもアリーシュやラドニスと同じく、れっきとした銀影騎士団の一員である。そのふたりが行くのだから、パルヴィーもあちらについていくのが自然

な流れのはずだろ。

「別に、どうせ行つても楽しくないし」

パルヴィーが、わかりやすい理由を答える。果たして楽しい樂しくないで決めていいものなのだろうか。これを聞いたアリーシュの本音をうかがつてみたいところである。

「それに……ね」

彼女の視線に射抜かれて、レクトはせき払いをしながら顔をそむけた。

「はつ。良いご身分だな。普段は大して役にも立つてねーくせに」

エリスが率直な感想をこぼす。

パルヴィーが少しむつとした表情を浮かばせたところで、

「あつ、あれ そうじやないですか？」

話の矛先を変えるように、リフィクが人差し指を突き出した。

指の先には、『ブレード・ヴァン』と書かれた看板が掲げてあつた。たしかに武器屋っぽい屋号である。

狭く薄暗い店内に、大量の様々な剣が並んでいる。奥にはカウンターがあり、さらにその奥には鍛冶場のようなものが見て取れた。

「……あんた、『術剣技』を使うのか」

カウンター越しに座る、いかにも職人氣質な老人男性が低くうなつた。

彼が手に取つて眺めているのは、例のエリスの剣である。

「術剣技？」

と知らない言葉をオウム返しする彼女に、

「エーツェルさんがいつも使つてるヤツですよ。ほら、火が出る」

リフィクがざつくりと説明した。『魔術』を応用した剣技をそう呼ぶこともあるのだ。

「はー。わからんのか？」

エリスは感心しながら聞き返した。

「得物を見りやだいしたいのことはな。人間なんかよりはよつぽど雄弁だ」

店主はつまらなさそうに答えて、剣をサヤに収める。ビヒとなく氣難しそうな雰囲気が感じられた。

剣を見ただけでそういうことがわかるようになるまで何年かかるのか、想像もつかない。これも職人芸というもののだらうか。「新しいもんを買うなら、もうこいつ『普通』の得物はやめとくな。こんなふうになつちまつたのを見るのは良い気分がしねえ」

「この消耗の仕方は、その術剣技によるものですか？」

当のエリスよりも興味深げに、レクトが訊ねた。店内が狭いため、エリスの肩越しから。

「ああ。あの手の技は武器にかかる負担がでかいからな。それ用のもんを使つたほうがいい」

ふとレクトは、自分の記憶を掘り起こした。そういうえばエリスは昔からよく武器を壊していくような気がする。ただ取り扱いが適当なだけだらうと思つていただが、もしかしたらその辺りに理由があつたのかも知れない。

「しかし、彼女はずつとあの技を使つていましたが、こんなに激しく武器が消耗したのは初めてなんですよ」

なおも熱心に聞くレクトに、エリスは「別にいいだら、そんなこと」と言い捨てた。彼女にとつて関心は薄いらしい。

「そりや……この嬢ちゃんの力が上がつたつてこつたう」

だが続く店主の言葉に、エリスの耳がわかりやすくピクリと動いた。

「技の力に武器がついていけなくなつたんだらうな。ガキがサイズの合わねえ服を着せられてちんちくりんになつてゐるよつなもんだ。そりや破れもする」

「それ用の剣つてのは、この店にあんのか？」

レクトの発言を押しのけるよつに、エリスが訊ねた。ビヒとなく

上機嫌になつてゐるようと思える。

「ピンからキリまでなんでもござれだ。好きなもん選んどくれ。質は保証する」

よつやく商談に入つたからか、店主の声もワントーン高くなつた。しかし選んでくれと言われても、素人目にはどれが『それ用』でどれが『それ用』でないのかまったくわからない。倉庫かと見間違うほどズラリと並べられている大量の剣の中から目当てのものを探し出すのは、容易なことではないだろう。

骨が折れる。

「めんどくそくだな」

エリスがそれをストレートに口にした。

「剣なんて使えりやどれも一緒だろ。おい、じいちゃん、あんたが適当に選んだヤツでいいよ」

土地勘ならぬ店勘のある人間に任せたほうが早いはず。

「あ……？」

彼女としては何気なく言つた言葉なのだが。それを聞いた店主の顔つきが、みるみるうちに堅くなつていつた。

エリスは、制作者に向かつて言つてはいけない言葉ランキングがあるとしたら間違いなく上位に入るであろう言葉を、ずばり本人の前で言つてしまつたのだ。

どれも一緒

特にこうじう、長年こだわりを持つて作り続けてきた感のある職人には禁句中の禁句である。

「……帰つとくれ」

完全にヘソを曲げてしまつた店主が、低い声で呟いた。

「なんだよ？ 急に」

しかしまつたく心当たりを感じていないエリスは、無邪氣とも言える態度で小首をかしげる。不幸にもそれは、怒つてゐる人間の神経を逆なでする態度であった。

「物の価値のわからねえ人間にはオレの作ったもんは売れねえつて

「こつたよ」

なのでついつい、店主の口調も強くなつてしまつ。

「所詮、女にはわからねえ世界だ。向かいの服屋で髪飾りでも買つてろ」

「あの、穩便に……」

怪しくなつた雲行きに、リフィクが先手を取つてなだめようとする。

「エリスが悪い」

そこへパルヴィーが、こじぞとばかりに口を挟んだ。たしかに発端はエリスのひとことだが。

「そうだな。謝るべきだ」

レクトも同意し、事態の沈静化を図る。じじでエリスが素直に謝れば、すべてが丸く收まるのだが……。

「ふざけんなじじい！」

どつこいそはならないのがエリス・エーツェルである。カウンターに乗り出す勢いで言い返す。

「あたしの目が節穴だとでも言つつもりか！？」

「そうじやなけりやガラス玉だ。オレの得物が全部一緒に見えてるわけだからな」

エリスでなくとも、さほど違ひがあるようには思えない……と他の三人は思つたが、それは心の小箱にしまつておいた。

「事実一緒じやねえか。大した差なんてねーよ！」

「普段から下等なもんしか見てねえからそんな言葉が出てくんだけよ」もはや売り言葉に買い言葉である。どう仲裁していいものか、リフィクとレクトはそれぞれ迷つていた。

パルヴィーは対岸の火事のようにただ眺めているだけだったが。「じゃあ見せてみろよ、その上等なヤツつてのを！」

「よからうつ。見せてやる」

事態の方向性が変わつたのは、その時だった。

店主は店の奥へ入つていつたかと思うと、すぐに細長い木箱を大

事そうに抱えて戻つてくる。そしてそれをカウンターの上に置き、見せつけるようにしてフタを持ち上げた。

「これぞ我が『ブレード・ヴァン』開店史上最高傑作、名付けて『ブレード・マリア』だ！」

興奮のためか、店主の口調もやや芝居じみている。

箱の中には、ひと振りの抜き身の剣が収められていた。

形状的にはごく普通のロングソードだが、目を見張るべきはその刀身。刃全体が、まるで宝石のようなライトグリーンに輝いているのだ。

「おおっ……！」

エリスを含む四人から感嘆の声がもれた。

武器の域を脱した美術品じみた美しさに、ただただ見とれてしまつていてる。

その反応を見て、店主は満足したようだった。

「すごいです！」

まずリフィクが率直な感想を口にする。

「やるじゅねーか。じいちゃんよ」

そしてエリスも、店主の言い分を素直に認めた。

感情をストレートに出してしまうのは彼女の悪い部分であるが、相手を認めるべき時にはわだかまりなく認められるところは良い部分であると言えるだろう。

事態が沈静化へ向かうと思われた、そこへ。

「これって、ただ見た目がキレイっていうだけ？」

パルヴィーが新たな火種を放り込んだ。

「……帰つとくれ」

パルヴィーのひとことを聞き逃さず、店主はまたしても険悪な表情で吐き捨てた。

ふりだしに戻れだ。

他の三人の視線が、パルヴィーに集中する。

「え？ えーと……『めんなさい』

失言の空氣を感じ取り、彼女はすぐさま謝った。

なんてことはない行動なのだが、エリスのあとだと非常に素晴らしい偉業に見えてしまう。

「ふん……」

しかし、店主の気分は上向きにはならなかつた。恐らく先ほどの怒りもぶり返してきたのだろう。

「いいが、コイツにはな、『魔術』の力に干渉しやすい『魔導鉱石』つつーもんがふんだんに使つてあるんだ」

まるで説教のように、この剣の説明をし始めた。

「術剣技を使おうってんなら、コイツ以上にふさわしい得物はねえと断言してやる。よその店のひつこが作ったもんとは格が違うんだよ」

こちらのせいで機嫌を損ねてしまったのだから、黙つて聞くしかない。という思いの三人である。

しかしエリスだけは、店主の言葉などひくに聞かず、田の前に置かれた剣をまじまじと眺めていた。

この輝くライトグリーン。どこかで見たことがあると思ったら、あれである。トヨループと戦った時にアリーシュから借り受けたブレスレット。あれと同じ色をしているのだ。

あのブレスレットをつけた時。今まで感じたこともないほどの力

が、体の底から湧き上がってきた。

もしこの剣に、あれと同じ効果があるとするならば……。

「魔導鉱石つてのはな、アクセサリーみたいなもんに加工するのも十年、二十年の修行が必要だ。それぐらい取り扱いがむずかしいんだよ。こんなふうに剣の形にして、なおかつ切れ味、重量、見た目、握りとの相性なんかを完璧に兼ね備えられるつてのがどういうことかわかるか？ ええ？」

「よし、買った！」

得意げに語る店主をまるっきり無視して、いきなりエリスが大声を上げた。

内心で助かつたと思つ二人である。彼女の失礼千万な性格も、こいつの時はありがたい。

「売らんぞ」

店主は仕方なく講釈を途中で打ち切り、冷ややかに言い捨てた。

「売れよ！」

「……わざわざも言つたが、コイツはオレの最高傑作だ」

店主の口調が、怒りを含んだものから真剣そのものといったものへと変化する。

「ただ金を出して売つた買つたって話じゃねえんだよ。魂の問題だ」
そう言つて捨てるど、店主はそそくさと剣を箱にしまい奥へと引っ込んでしまつた。

「あつ……くそつ！」

エリスは恨めしそうな顔でパルヴィーを睨む。

そもそもの原因を作つたのは自分だということは、完全に棚に上げていた。

客が去りひつそりとした『ブレード・ヴァン』店内に、新たな客がやつてくる。

若い男女のふたり組。

「おう、お前さん方が」

それを見た店主は先ほどとは打つて変わつて表情を明るくし、ふたりをほがらかに迎え入れた。

「お久しぶりです」

男性が礼儀よく頭を下げる。しかし後ろに立つ長い黒髪の女性は、まるで背後靈のように佇んでいるだけだった。

「相変わらずだな」

店主はそんな女性を笑い飛ばして、

「おい、『ブレード・ルシッド』を見せてみる」

相手の用件を聞く前に片手を突き出した。

男性が振り返つて女性を見る。それに応えて、女性は自分の腰元に吊つた剣をサヤごと受け渡した。

店主は剣をサヤから引き抜き、黒い刃のそれをじっくりと眺め始める。

「ところで、先ほど来ていた方々は……？」

と、前置き代わりに男性が切り出した。

「ただの、見る目ねえボンクラ共だよ。あいつらがなんだ?」

「いえ。大したことでは」

男性の口元が、わずかに笑つたような気がした。

店主が剣をサヤに戻し、女性に返す。

「だいぶ斬つてるみたいだな。腕前のほうも相変わらず見事なもんだ」

「ええ。おかげさまで」

答えたのは男性だつた。女性は喋りつともしない。店主も、それは期待していないようだつた。

「それで今日は、この剣の代金を支払いに来たのですが……」

男性が本題を切り出した途端、店主は顔をしかめて小さく手を払つた。

「おいおい。よせよせ、そんな無粋な真似は」

口調には呆れたようなニュアンスが込められている。

「そいつはお前さん方にくれてやつたもんだ。金なんぞいらねえつ
つただろ」

「しかし、やはりそういうわけにも」

「いいんだよ。前に言ったことがすべてだ。お前さんがたがその剣
で『モンスター』をバッサバッサと斬り倒していく……それでチャラ
だつてな」

言い切り、反論は受け付けないとばかりに店主はそっぽを向いて
しまった。

男性は困り顔で、女性と目を合わせる。

あのあと向軒か武具屋を回り、ランチのために食堂で落ち着いた
エリスたちである。

結局エリスの剣は買わざじまいだつた。

いわゆる『術剣技』用の剣は他の店にもあったのだが、そのどれ
も、値段が普通の剣と比べて十倍以上も高かつたのである。到底手
持ちでは足りなかつた。

「意外と高いんだな、ああいうの」

エリスは鶏肉のフライが挟まつたハンバーガーをペロリと平らげ、
深々と呟いた。世の中まだまだ知らないことが多い。
手についたソースを舌で舐め取つていたら、レクトから行儀が悪
いという注意が飛んできた。無視したが。

普通の剣ではそう長持ちしないと知つた以上、買つなれば『それ
用』のものしか考えられない。

とにもかくにも問題は金である。

「そういえば、みんなはどうやってお金稼いでたの？」
サンディッチを片手に、パルヴィーが唐突に訊ねた。
それは、トリフィクが答える。

「道中で見つけためずらしい薬草をつんで売つたり……獣の毛皮や

牙なんかもお金になりますし」

「ふーん、けつこう地道だね」

たしかに地道な稼ぎだが、贅沢をしなければ意外とそれでなんとかなつたりするものである。ちなみにパルヴィーらと合流してからは、すべての出費を彼女らに頼りきりであった。

「そういうお前らの金の出所はどこなんだよ？」

逆に、トーリスが同じ質問を返す。

しばらぐ一緒にいるが、彼女らは旅の身とは思えないほど羽振りが良かつた。食料も充分に買えるし、なにより武器や防具に関しては金に糸目をつけないほどである。

一緒にいるあいだの行動には、特に収入源になるようなものは思ひ当たらなかつた。

「お金は、あれだよ。『コーポメンバー』」

「あいつらが会いに行つてる奴らか？」

一般人の中には、銀影騎士団の後援者のことである。

「そ。お金だけじゃなくて、他にいろんなものくれたりもするけどね」

口ぶりだけ聞くと、まるでおじこぢやんおばあちゃん孫のようだ。

武器や資金が用意されていれば、戦つまつは戦つことに専念できる。すると自然と成功確率は高くなり、能率も上がつていいだろつ。最善の形になる。

そういう構図ができあがつてこりとこりとは、銀影騎士団の歴史はかなり古いのかもしねない。

「だからアリーシュ様に言えば、剣くじらこせまつと置つてくれると思つよ」

たしかに、微笑んで応じてくれる光景がありあつと田口浮かぶ。

しかし、トレクトが芳しくない表情を作つた。

「それでも安い買い物じゃないだろ？ 今以上にお世話になるわけにはいかないよ。この代金くらい、なんとか俺たちで稼いでみんな

いか？」

これくらい大きな町ともなれば、田雇いの働き口もいくつかあるはずだろ？。パルヴィーは除くとしても、三人がかりならそう時間はかかるないかもしない。

「別にそんなの気にしなくてもいいのに」

パルヴィーがこぼす。恐らくアリーシュやラドニスも同じことを言つただろう。

「いや大事なことだ。なあ、エリス」

「ん……そうだな」

とエリスから返つてきたのは、いまいちしゃんとしない生返事だつた。

別に働くのが嫌なわけではない。とあるひとつのが、彼女の頭の中を席卷しているのだ。

最初に訪れた店で見た、あのライトグリーンに輝く妙剣。他のどの剣を見ても、あれが忘れられずにいる。

ひと目で魅了されてしまった。

ついつい、あの剣のことを考えてしまうのだ。思い人に恋い焦がれるように。

……エリスには似合わないロマンチックなたとえだが。

「それなら、『旅人支援所』に行きましょうか？ 来る時に見かけました」

するとめずらしく、リフィクが提案を口にした。

「それは？」

知らぬ言葉にレクトが小首をかしげる。

旅をするというのは、様々な面で見ても困難と言える。

その中でも一番はやはり金銭的な問題だろ？。

なにかしら一芸を持つ者ならばそれで稼ぐこともできるが、世の中にはそうでない者のほうが多い。

そんな稼ぎ口に困った旅人を支援するために各地に設けられたのが、読んで字のごとくの『旅人支援所』である。

システムは単純だ。基本的にはその町の住人が、なにか人手の必要なことを依頼し、その依頼を旅人が受ける。そして然るべきのち依頼主から報酬が支払われるのだ。

旅人は金を手にでき、住人は困っていたことを解決できるという具合である。

もつとも旅人だけでなく、仕事のない住人が依頼を受ける場合もあるのだが。その辺りの線引きはやや甘くなっている。

そういうた説明をリフィクがしているうちに、一行は目当ての建物へと到着した。

辺りの建物と比べても立派と外観だ。

中に入ると、すぐにホールのような広い空間が待ち受けていた。

「旅人というのは、それほど多いのですか？」

レクトが訊ねる。こんな施設まで作られる以上は、そういうことなのであろうが。

「そうですね」

少し声量を落として、リフィクが答えた。

「『モンスター』に住んでいたところを奪われてしまったり、その一歩手前の状況が嫌になってしまったりして、どこか新天地を求めて旅をする……そういう人も少なくないと思います」

「……」

レクトは痛ましい心境で周囲を見回した。

旅姿の人間が、ざつと二十人ほどいる。若者だけでなく子供連れや、老夫婦とおぼしき人たちも見て取れた。皆少なからずそういう境遇にあるのだろうか。

そういうた人々を救済したり手助けをするためにこの施設が作られたというのは、人情的にごく自然な流れだったのかもしれない。

「そういえば、リフィクさんはどうして旅をしていたのですか？」

視線を戻してレクトが訊く。彼は旅の途中でレクトとエリスの故

郷『ファイオネイラ』に立ち寄ったという話だったが、そのところの詳しい話はまだ聞いていなかつた。

「えつ？ それは……その……」

リフィクはあからさまに言葉を濁す。

「別に……たいした理由ではないです。全然。そんな『もしや言いにくいことだったのだろうかと気を遣つて、レクトはそれ以上追及しなかつた。

ホールの奥に大きな掲示板のようなものがあり、そこに何枚もの紙が貼り付けてある。

ざつと目を通すと、どうやらその紙に依頼が書かれているようだつた。

内容は多岐に富んでいる。

飲食店の手伝いに、ベーシッター。屋根の修理、農作業、ペット探し、果てはただの話し相手というものもあつた。

「退屈そうだな」

それらを眺めながら、エリスがため息まじりに呟いた。期待していたものとは、少し違っていた。もっとこう……うまくは言えないが、エキサイティングなものを予想していたのだ。

肩すかしである。

「……おっ？」

落胆しかけた彼女の表情が、一枚の紙を目にとめてわずかに明るくなつた。

それを掲示板からちぎり取り、改めて書面に目を落とす。ニヤリと白い歯がのぞいた。

「山賊退治か」

「おい、これやうづぜ」

それぞれ掲示板を見ていた皆を呼び集めて、エリスはその紙を見せつけるように突き出した。

「んー？ 山賊退治？ 報酬は……一百万ルーツうつ！？」

読んだパルヴィーが、とてつもない大金に驚き奇声を発する。

周囲にいた人間たちがその声を聞いて、彼女らに視線を向けた。

「かつ、書き間違いじゃないんですか？」

リフィクはその紙を取り、目を皿のようにする。

他の依頼と比べて、報酬の額がまさに桁違いであった。一二百万ル

ーツもあれば、当分は遊んで暮らせるだろう。

「依頼主は、この町の町長と書いてありますね」

横からのぞき込んだレクトが、紙の最下部に田をとめる。依頼の概要の下に、『シルパリー サ町長リッキー・ロッキー』というサインが記してあった。

町長名義ということは、町をあげての依頼ということなのだろうか。それならこの額も納得できなくはないが。

「面白そうだろ？ とつとと退治しに行こうぜ」

得意満面で乗り気なエリス。しかし他の三人は、やや慎重な姿勢を取っていた。

「あのー……報酬の額が大きいということは、それだけ困難だとうことだと思います」

リフィクがおつかなびっくり反論の口火を切る。それをレクトが継いだ。

「金額は魅力的だが、あまり規模が大きい話なら俺たちだけでは解決できないかもしね。お金を稼ぐだけなら、もつとふさわしいのがあるんじゃないかな？」

「そうそう」

と、パルヴィーが締めくくる。

たしかにそれは正しい物の見方ではあるが、口で言つて聞くようなエリスではなかつた。

「なんだよなんだよ、へっぴり腰になりやがつて！ 一発でガツンと稼げるんだからそれでいいじゃねーか！ つまといかなかつた時のこと考えてもしようがねーだろ」

口を尖らせて反論に反論する。もしや反対されるとは思つていなかつたのだろうか。

「なんかギャンブルで人生失敗する人みたいな言い方だけど」

パルヴィーがチクリと刺す。正しい評価だ。

「決断が早すぎると言つてゐるんだ」

穏やかな口調で、レクトがなだめようとする。

「ここに貼つてある仕事の依頼に、まだ全部目を通していない。決めるのはそのあとでもいいんじゃないか？」

「じゃあお前らはそうしろよ」

しかしエリスは意見を曲げずに、リフィクから依頼の書かれた紙を乱暴にひつたくつた。

「給仕でも掃除でもして地道に稼いでろよ、勝手につ！」

勝手なのはどちらなのか。

エリスは捨て台詞を残して、出入り口へふとくされようつに歩いていった。

「すねちゃつた」とパルヴィーが肩をすくめる。

やることが子供だ。

三人は、やれやれと顔を見合わせる。彼女は本当にこのままひとりで行くつもりだろう。放つておくのも、なんだか気が引ける。

「ホテルさんつ、まずはここで依頼を受ける手続きをするんですよーつ

建物を出ようとする彼女の背に、リフィクが慌てて呼びかけた。

山賊がいるというのは、この『シルパリーサ』に隣接するようこそびえ立つ『ベガ山』山中。被害の報告が頻繁に上がるようになつたのは最近。何度か町の有志による討伐隊が出されたが、そのことがごとくが返り討ちになつてしまつた。

故に腕の立つ旅人に力を借りるべく依頼を出した。山賊とおぼしき連中のほぼすべてを捕まえるか始末してくれれば、報酬を支払う。

紙に書かれた依頼の概要と、町役場の人から聞かされた話。それらを合わせると、つまりはこういふことらしい。

『旅人支援所』で依頼を受け、役場へ詳しい話を聞きにいつた帰

路。

エリス以外の三人の表情は、重く張り詰めたものになっていた。

「聞いた？ 返り討ちにあつたんだって。何度も」

パルヴィーが眉尻を下げる。

「つつても人間だろ？ 『モンスター』に比べりやどうつてことね
一よ」

憂慮すべき情報を、エリスは一言のもとに切つて捨てた。
が、たしかにその通りなのである。彼女が乗り気になつている一
因もそこにあつた。

どれだけ腕が立とうが、所詮は人間なのだ。強者『モンスター』
と何度も戦つてきた彼女からすれば、造作もない相手。
流れのゆるやかな川を渡るよつたものだ。海を渡るのに比べれば、
へつちやらすきてあくびが出てくる。

それで大金が手に入るのだから、やらない理由などなにもないは
ず。と、エリスは考えているのだ。

「比較問題じゃない」

が今度は、レクトがそれを切り捨て返した。
なんだろうと厄介なものは厄介なのだ、と。

「とにかく一度戻つて、アリーシェさんとラドニスさんにも話をし
よう。当初の目的からは外れるが、俺たちだけでは手に負えないか
もしれない」

気を取り直すように、レクトが指針を提案する。その内容は事態
に前向きなものだった。

「ようやくやる気になつてきたか」

彼の心境の変化見て取り、エリスが軽く茶化す。

「……そうなの？」

パルヴィーが確認の意味を込めて訊ねた。てっきりまだ、やるか
やらないかを考えている途中だろ？と思つていたのだろう。

レクトは真剣な表情で答える。

「さつきの話を聞いた限りでは、町の人たちの被害はかなり大きか

つた。『モンスター』に苦しめられている人がたくさんいるつていうのに、人間が人間を苦しめるなんていうことがあっていいはずがない』

大きな脅威に対し協力することもなく同胞を傷つける。レクトからすれば、その行為はどうにも許せないのである。

旅人や商人を襲うなど同じ人間として黙つていられない。

彼の中では、すでに金の問題ではなくなつているのだ。

「だから俺たちでなんとかしよう。君も力を貸してくれ」

「う、うん……」

なにやら頬を染めた様子で、バルヴィーは「クリとつなぎた。頼りにされるのが嬉しいのだろうか。

リフィクはなりゆきを傍観しながら、また危険そうなことに巻き込まれるのか……と悲観的なことを思つていた。それでも『モンスター』と戦つよりは気が楽だつたが。

宿へ着くと、用事を済ませたアリーシュとラドニスが先に戻つてきていた。

「……なるほど」

部屋は狭いので、宿屋の玄関口を陣取つておおよそのいきさつを話す。するとアリーシュは、深く静かにそうつなずいた。

「たしかにそれは放つてはおけない問題ね。私たちも協力するわ。いいでしょ?」

一応といった様子でラドニスにも確認を取る。

彼が「ああ」と快諾するのを受け、レクトは「助かります」と頭を下げる。

「なあー、早く行こうぜー」

そんな話の早いやり取りも待つてられないのか、エリスはつづりと催促し始めた。

短気もここまでくるとあっぱれである。

「はー やー ケー ケー ケー オーゼーー」

「……それはかまわないけれど。あなた、且当ての剣は買ったの？」
アリーシュは苦笑いで受け流しつつ、別件の経過を訊ねた。

「そりゃ、まだだけど」

「ならそつちを先に済ませてしまつたほうがいいんじゃない？」そ
の山賊と、ことをかまえた時に武器がなくては困るでしょう？」
彼女の言ひことももつともなのだが、そもそも、その剣を買った
ために山賊を退治しようこうのが話の流れなのである。

「当然、まだ買えるわけがない」

「まあ……アレで充分だろ」

とはいえエリスも、それをまったく考えていないわけではなかっ
た。たかだか人間相手、ちゃんとしたものを使つまでもないだろう
と甘く見てはいるが。

「あつ、そういえば！」

とエリスはいきなり、なにかを思い出したように大きな声を出
した。

「あの剣の値段聞いてなかつたな」

「あの剣？」

疑問符を浮かべるレクト。

「偏屈なじじいがいる汚え店の縁の剣だよ」

「……ああ。あの店の」

失礼極まりない説明だったが、それだけでもなんなく伝わったよ
うだった。

「あれを買つもつか？」

「おうよ

「でもさ、値段がどうこうつて雰囲気じゃなかつたと思つけど……
パルヴィーも同じものを思い起にし、呟く。仮に聞いたとしても、
値段などつけられないと言わるのがオチだろ」

「そこはあたしとあのじじいの根比べだる」

なにごとも自分の通りにさせたがるエリスだが、今回の相手
はどうも分が悪そうである。

「絶対手に入れてやる！」

誰に向けてなのは不明だが、高らかに決意を宣言してみせた。そんなやり取りを聞いていたアリーシェが、もしかして、と訊ねる。

「そのお店つて……『ブレード・ヴァン』？」

「その道では、知らない人はいない名匠よ」

シルパリー・サの町並みを歩きながら、アリーシェが件の人物についての説明をする。

「そして私たち銀影騎士団の『コーフメンバー』でもあるの。打った剣を提供してくれているわ」

彼女とラドニスを加えた六人で、一行は再び例の武器屋へと向かっていた。

「会つたことあんのか？」エリスが訊ねる。

「数えるほどだけど、印象に残る人だからよく覚えているわ。この町に来ると思い出す」

「わたし大丈夫かな……」

と、パルヴィーが不安げな声を上げた。

部外者のエリスはともかく、団員であるパルヴィーが彼のヘソを曲げてしまったのは、それなりに問題があるかもしれない。下手をしたら大事である。

「大丈夫よ」

アリーシェがほがらかになぐさめた。

「剣に関してはカツとなりやすい人だけど、基本的にはいい人だから。きちんと話せばわかるわ」

たしかに、いい人でなければ彼女らへの協力などしないだろう。しかし見るからに頑固そなあの人、老人が、話せばわかるかと言われても疑問が残る。

「たしかこの辺りでしたよね」

周囲の建物を見回しながら、リフィクが呟いた。

剣専門の武器屋『ブレード・ヴァン』。店主の名前はアルムス・ドローズ。

そしてその『ブレード・ヴァン』を訪れた若い男女の客は、男のほうがハーニス。女のほうがリュシールという。

三人はドローズの自宅で、この町特産のハーブティーを味わいながら、たわいのない話に花を咲かせていた。

ちなみにそのハ割を喋っているのはハーニスである。残りの一割がドローズ。リュシールはまさかのゼロ割となつていて。

ドローズの自宅は、店舗と一体になつた造りだ。

建物を真上から見て、左下に店舗。右下に居住区。そして上半分が鍛冶場と倉庫になる。

妻を亡くしてひとりで暮らすようになつてからは、もう五年ほど経つただろうか。

ハーブティーが半分ほど減つた頃。店舗のほうから、なにやら彼を呼ぶ声が聞こえてきた。

「今日はずいぶん客が多いな」

よつこらせとこぼしながら、ドローズはテーブルから離れる。

「ちょっと待つととくれ」

「お構いなく」

ハーニスたちに短く断わつてから、面倒くさそうにダイニングキッキンをあとにした。

残されたハーニスは、優雅な仕草でハーブティーをひと口含む。そして少々いたずらつぱく、となりに座るリュシールへと微笑みかけた。

「聞き覚えのある声だね」

「おーい！ いるんだろじじーーー！」

エリスはカウンターはバシバシと叩きながら、姿の見えない店主を呼び続けていた。

ガラの悪いことこの上ない。店側からすれば、間違いなくもつとも接客したくないタイプの客である。

もつほんの少し続けていたらアリーシュカレクトあたりに止められていたらうとうといふ、すんでのところで。店の奥からドローズがやつて來た。

「なんじやい。あんたらにはなにも売らんと言つたはずだがな」

最前のエリスの姿を見て、さつそく短いため息を吐く。

「……お？」

しかしそのとなりに立つアリーシュを田にした途端、一転して顔から険悪な雰囲気が抜けていった。

「いつもお世話になつています」

アリーシュと、そしてラドニスがそろつて頭を下げる。

「さつきはあのー……失礼つかまつりまして……」

ひと呼吸遅れてパルヴィーも頭を下げた。緊張のせいか言葉遣いが妙なことになつていたが、指摘した者はいなかつた。

「たしか……アリーシュ・ステイシー。それとゼーテン・ラドニスだつたか」

ドローズは首をひねりながら記憶を掘り起こす。様子を見るに、パルヴィーのことはあまり気にしていなかつたのだろう。

あくまでエリスの失言が尾を引いていよいよつである。

「無事に生き残つてゐみたいだな。前に会つてから、もう何年経つんだ？」

「四年と記憶しています。そちらもお元気なよつで、なによります

「じじいのくせに意外と物覚えいいんだな」

旧知との再会のあいさつを、エリスの正直な感想がぶち壊した。どうしてそれを胸の中などめておけないのか、毎度のことながら小さく頭を抱えるレクトである。

ドローズはカウンターの定位置に座りながら、ふん、と鼻を鳴らした。

「美人の顔ならそういう忘れねえぞ。お前さんの顔は明日の朝には忘れるだろ？」「な」

そしてきつちり言い返す。しかし前に店を訪れた時とは違い、その声には多少の冗談っぽさが含まれているような気がした。

「この、はすっぱな娘もあんたらの身内か？」騎士団の

「いえ。ですが彼女とこちらのふたりも、共に『モンスター』と戦う同志です」

アリーシェはエリスと、背後に控えるレクトとリフィクを手で指して紹介する。

彼女らを見るドローズの目が、ほんの少しだけ変化した。諸々のあいさつも済んだところで、エリスが余計なことを言う前に、とアリーシェが用件を切り出す。

「彼女が剣を探しているのですが、そちらの『マスター・ピース』をとても気に入つたよ」「うで

「あの緑色の剣だ」

「……それを、いぐりでお譲りしていただけるのか、『相談にうかがいました』

ドローズは合点がいったとこいつ顔をしてから、軽くあしらつみに息を吐いた。

「だから売らんと言つたろ？」「あれは売りもんぢやない」しかしそこで言葉を終わらせず、「だが、まあ」と一の句を継いだ。

「『モンスター』を斬るつてんなら、他の剣なら売つてやる」まったく売らないの一点張りだった状態からすれば、目覚ましい進歩と言える。

「ボケんなよ、じじい」

だがエリスにとつては、その程度の進歩などたいした意味はなかった。

「あの剣以外はいらぬ——よ。」「いや」「いや」「ねてね——で、耳そろえてとつとと売りやがれつ」

耳をそろえるのは売るほうではないのだが。

「いいか、じじい。あたしらが倒しに行くのはただの『モンスター』じゃねえ。奴らの頂点だ」

エリスはカウンターに身を乗り出す勢いで言い募る。

普通の魚よりも一歩上の魚を使つたほうが、樂は保せるからだ。

まず倒せることとが前提なのが恐ろしいところである。

たぶんだけどな！」

ボス【とかてのカ?】 んなもん大

「あん?
」

ドローズの目が、初めて興味深げに開かれた。半笑いでエリスを

「うーん、『ミソシタ』の『うーん』が、かわいいな

「仰る通りです」

助け舟を出すよう」、アリーシュがすかさず口添えた。

「先ほど、『一ノツメンバー』を通して他の団員にもその話を伝え
て頂くよう頼んできました」

「ノミカニ」

ドローズは、彼女をにらみつける勢いで見やる。

アリーシュはその目を、鋭い眼光をもつて見つめ返した。真に迫つた意氣がにじみ出る。

「死ぬぞ」

「そつならないために、あなたの『マスター・ピース』を譲つて頂きたいのです。そうすれば百人力。他の剣では力が足りません。……

アリーシュはこれで援護は終わりと言いたげに、最後にエリスへ微笑を向けた。

「そういうことだ」

エリスはあるで、それが自分の代弁であつたかのようにならずいてみせる。調子の良いことだ。

「…………」

ドローズはムスリと押し黙り、なにかを考え込む。迷っているのだろう。それはつまり、少なからず贅沢の選択肢が生まれたということ。心が揺らいでいるということだ。

アリーシュの言葉がかなり効いているようである。

「……条件がある

エリスが待ちきれなくなるだらう寸前、ドローズがやおひ口を開いた。

「最近、近くの山に賊が住み着いて町のモンが迷惑してゐる。その連中をひつ捕まえてこい。そうすりや、考えてやらんこともない」

「……それって」

と、パルヴィーが呟く。

なんとも都合のいいこと、これがの目的とつまへ合致してしまつた。一石二鳥といつヤツだ。

「お安い御用だな。捕まえてくりやいこのか?」

エリスは喜々としてそれを引き受ける。もとより断わる理由などない。

「ああ。説教のひとつもしてやらにゃならんからな。それに入間同士、命の取り合ひをすることがあるまいて……」

「待たせたな」

ダイニングに戻つたドローズに、ハーニスは「いいえ」と首を横に振つてみせた。

「どんな用件だつたのです?」

「こきなり俺の『マリア』を譲れときた。最近の若いもんは礼儀知らずでいけねえや」

困ったふうに顔をしかめながら、よつよつらせとイスにつくドローズ。カップに残ったハーブティーを一気にあおるが、もう冷めてしまっているだろう。

「あの負けん気が彼女のいいところでもありますか」苦笑まじりに言ったハーニスに、ドローズは「あ?」と片眉を上げた。

「知り合いみたいな言い方だな」

「何人かとは面識があります」

このダイニングと武器屋店舗は、ドア一枚を隔てた距離にある。先ほどのHリスたちとのやり取りもほとんど筒抜けであった。

「そうかい。ならあの嬢ちゃんに田上に対する口の聞き方を教えてやつといてくれ」

「言つて聞くとは思えませんが」

ハーニスは小さく肩をすくめる。

「……して、例の剣。彼女に譲るつもりで?」

「わからんが、やらんだろうな」

ドローズは不明瞭なことを即答して、ティー・ポットから新たな茶をカップに注いだ。

「あの嬢ちゃんがこいつの嬢ちゃんくらいの腕前なら、まあ俺も気分良いくれてやるとこりなんだが」

ぐびりと飲むが、恐らくそれも冷めているだろう。とはいえ冷たくなつてもさほど風味が損なわれないのがこのお茶の特徴ではある。「ただの人間が束になつてかかったところで『モンスター・キング』になんぞ勝てるわけがねえ。小娘と一緒に土に帰すにやあ、惜しい傑作よ」

「では、なぜあのようなことを?」

「山賊を捕らえてくれば考えないこともない、と。

「断わる理由を考える時間が欲しかつただけだ。まあ困つてんのは

事実だからな。一石一鳥つてヤツだよ

ハーニスは「ふふっ」と声を出して笑つた。食えない老人である。「ですが、それを考へる必要はないと思ひますよ」「なぜだ?」

「たしかに腕はまだ未熟ですが、胸に秘めた氣概はそうではあります。常人とは一線を画しています。精神は時に肉体を凌駕する……将来性を考慮すると、彼女に渡してみるのも悪い話ではないでしょう」

ハーニスはよどみなく、すらすらとエリスに対する評価を並べていく。ドローズはそっぽを向いて面白くなさそうな顔をした。

「ずいぶんと買つてるじゃねえか。あのおてんばを」

「個人的な感情で見る目が甘くなつていい可能性もありますが」

対照的に、ハーニスは冗談めかして笑う。

「少なくとも、『ただの人間』で片付けるには惜しい少女には違いません」

なんにせよ高評価であることには変わりない。それがいまいち理解できずに、ドローズはぽりぽりと頭をかいた。

「……そこまで言つならな。連中が戻つてきたら、そここの嬢ちゃんと腕試しするとい見せてくれよ。それでまた判断し直す」

ドローズはドローズで、リュシールの腕をかなり高く買つているらしい。ただ実際に戦つているところを見たことはなく、使つている剣を見ただけのはずなのだが。

「よろこんで……と言いたいところですが、残念ながらそれはお断わりさせていただきます」

まさか断わられるとは思つていなかつたのか、ドローズはポカンとした表情でハーニスの顔を見た。

ハーニスはカップに少しだけ残つていたお茶を飲み干し、音を立てないよう静かに受け皿に戻す。

「少女らと一緒にいたのは『銀影騎士団』でしょう?彼らと顔を合わせるのは、いささか避けたいところなのですよ」

空になつた彼のカップへ、リュシールがティーポットをかたむけた。

準備を万端に済ませたのち、エリスたちはシルパリーサの町をあとにした。そしてそのまま『ベガ山』へと足を踏み入れる。山を登り始めてからまだまだといつたところで、

「そろそろ休憩にしましょうか」

とアリー・シェが提案した。

「なんでだよ？ まだ入ったばっかりだ」

すかさずエリスが異を唱える。一行の中ではもはや見慣れた光景となっていた。

アリー・シェはわざわざしなどみじんも表さず、丁寧に言い聞かせる。

「山道を歩くのは自分が思つてはいる以上に体力を消耗するわ。その消耗をしてはいる時に戦いになってしまったら、力を満足に出せなくなるでしょ？ だから早め早めに休憩をして、体力を常に温存しておく必要があるのよ」

先日立ち寄ったイーゼロッテからシルパリーサへはこの山道を越えるのが最短ルートであったのだが、エリスたちはあえて山を迂回し、平地で町へとやつて来ていた。

その理由がこれである。

ただの旅人なら疲れるまで歩き、休み、また歩き出せばいいのだが、彼女らの場合は事情が違う。なにを置いても戦闘ということを考えなくてはならないのだ。

普段なら『モンスター』。今のは山賊との。

どこで出くわすかわからないため、どこで出くわしてもいいよう常日頃から心掛けなくてはならないである。

「ふーん。そうなのか」

いつも懇切丁寧に正しいことを説明されでは、エリスとしても納

得するしかない。

特に反対する者もいなかつたので、一行は提案を実行に移した。

町の住人が採掘や伐採によく訪れるからか、ベガ山の山道はとてもよくならされていた。

細くて長い木が所狭しと林立し、視界を茶色と緑に埋め尽くす。さわさわと風が葉を揺らす音と鳥のさえずりは、とても賊がいるとは思えないほどのどかな雰囲気をかもし出していた。

「ククルスですね……」

山道の真ん中に立つて木々を見上げていたリフィクが、ぽつりと咳く。

「……なにが?」

じつとしていられずになにやらひひひひしていただエリスが、その咳きを耳にして問いかける。

「鳴いてる鳥です」

「はー……」

興味の薄い返事でそのやり取りは終了した。

レクトとパルヴィーとアリーシュは道の脇に腰を下ろし、ラディスは荷物を載せた馬（オルセーくんといつ名前らしい）の首をなでている。

「なー、よー、いつまで休むんだ?」

落ち着きのないエリスへ、

「そんなんにうるうらしていたら休憩にならないでしょ

アリーシュが苦笑いをこぼした。

しんがりをつとめるラディースが足を止めたのは、それからじばらく進んだ頃だった。

「……囮まれてるな」

それを聞き、皆もそれぞれ足を止める。だが周囲を見回してみて

も、特に変わった様子はなさそうだった。

「レイド」

とレクトを呼びながら、ラドニスはわきの林を指で差す。

「木を避けて射れ」

「はい」

意図は飲み込めないものの、レクトは言われた通りにやつてみた。手早く弓を構え、矢を抜き、狙いを定めて引き絞る。

放たれた矢は密集する木々をかいくぐるように飛び、やや間を置いてトスンと木に突き刺さった。

変化が起きたのはその瞬間だった。

うわっ、という短い悲鳴。それに端を発するように、あちらこちらから生物の気配が次々と現れていった。

「……！？」

どこに隠れていたのか、現れたのは人間の男たち。一様に毛皮や皮の衣服をまとい、剣や斧といった武器を手にしている。

「この人たちがっ！？」

泡を食うリフィク。反射的にエリスたちも武器を取り出し、応戦の形を取つた。馬を中心に、六人が互いに背を向け合つた円形の構え。

「待ちくたびれたぜ」

エリスは好戦的に笑いながら、ざつと辺りを見やる。

一行を取り囲む彼らは、おおよそ十五人から二十人はいるだろうか。注がれる視線はあまり友好的とは言いかたい。

「無事か！？ ジョゼフ」

そんな時、男たちの誰かが、仲間に向かつて大声で訊ねた。

「大丈夫だ、びっくりして声出しちまつただけだ！」

その反対側から返事が飛んでくる。どうやら先ほどの悲鳴は彼のものらしい。

そのやり取りを聞いた周囲の男たちが、小さく息を吐くのが伝わってきた。

さしづめ仲間がやられたと思い、いきり立つて出てきたといつたところだろうか。ラドニスがそこまで計算していたとしたらかなり策士である。

「金田のものと食料を、持つている半分だけ置いていけ」

今度はエリスたちに向かつて、男たちの誰かが声を投げた。

「そうすりや無事に山を降りられる」

そうしないと無事には降りられないところとか。やはり、な展開である。

声の主は、ちょうどエリスの正面に立つ、顔の下半分がヒゲで埋まつた男だった。年齢は恐らく三十を越えたほどで、肥満に見えるくらいの筋肉をたくわえている。身長も高く、手にする斧も他の者と比べて大きかつた。

「半分たあ、ずいぶんお優しいこつたな。身ぐるみはいでいかねーのか?」

とエリス。ヒゲ面の男は、さも当たり前と言いたげに答えた。

「オレたちは『モンスター』とは違うからな。同じ人間にそんなむごこマネはしねえ」

「……よくも言つ」

「盗つ人猛々しいとはこのことね」

横目で聞くレクトとアリーシュが不快感をあらわにした。冗談だとしても、聞くに堪えない。

「さあ、痛い目を見るか大人しく従うか、さつさと選べ」

男が選択を迫る。

「痛い目見るのはてめーらのほうだよ!」

これが答えとばかりに、エリスは手に持つ剣を頭上に掲げた。ちなみにそれは、ラドニスとの模擬戦で使う木製の剣である。

「エーツェル騎士団、ござ出陣んんつ!」

そしてウッドブレードを振り下ろしながら、自身も正面へ向かつて突撃していく。

それに呼応するように周りの皆も動き出す。

「だから勝手に名付けないでってーつ！」

パルヴィーのツッコミだけが、その場に取り残された。

「逆らう気か

エリスたちの反応を見て取り、賊たちも威勢良く襲いかかつた。

「お前ら、目にもの見せてやれ！」

まとめ役らしいヒゲ面の男が号令をかけるが、すでにそれをかき消すほどの喧騒がその場に渦巻いていた。

のどかな山景はいそいそと姿をひそめてしまっている。

「てめえが頭か！？」

エリスは一直線に、ヒゲ面の男へと急進した。

彼女の持つウッドブレードを手にし、男は短くあざ笑う。

「恨むなよ、嬢ちゃん！」

そして大きな斧を振りかぶり、エリスめがけて振り下ろした。

腕力と武器の重量がタンデムを組み、振り下ろされる速度は電光石火に迫る。しかしエリスには、それがとてもゆっくりに思えてしまった。

「やつぱりな

斧が地面を碎く。厚い刃は、エリスの影すらをも捕らえられなかつた。

男ははつとした表情で天を見る。

「やつぱりてめえらなんぞつ！」

目を見張る男の顔面に、声と陰が落ちた。

「敵じやねえつ！」

頭上から叩き込まれた猛烈なひと振り。男は、そのたつた一撃で昏倒させられてしまった。

エリスは猫のように身軽に、スタリと着地する。

やはり『モンスター』に慣れきった体からすれば、人間など大した脅威ではない。

それはエリスだけでなく、他の皆も少なからず思っていた。

普段が死線をさまよう戦いなのに對し、今は相手を殺さないよう手加減する余裕すらある。『モンスター』相手では考えられないことだった。

だが……と、レクトなどは、それを少し不安にも思つていた。

『モンスター』と比べて人間はかくも弱い生物だ。そして自分たちもまた、その人間なのである。

放つた矢が、名前も知らない男の片足を斬り裂いた。

勝敗が決するのは驚くほど早かつた。最初は十六人いた賊たちも、今はもう五人にまで減つている。残りは氣絶させられたり急所を外した傷をつけられたりして、無念にも地面に倒れていった。

「なつ、なんだこいつら……！？」

賊のひとりである若い男が愕然と咳く。

今まで襲つた奴らの中にも、当然抵抗してきた者はいる。町の連中が束になつてかかつてきただこともある。しかしそのどれをも、自分たちは蹴散らしてきただ。

この無様な状況はなんだ！？　どうなつてる！？

「おいつ！」

と、仲間のひとりが彼のもとへと駆け寄つてきた。

「アニキを呼んできてくれ！」

「えつ……！？」

その言葉に、彼は息を呑む。生まれるために、しかしそうも、考えを改めた。

たしかに、もはやそれしかない。醜態を見せることになつてしまふが、こうなつてはもう、頼れるのはひとりしかいないのだ。

なりふりを構つてている場合では、ない。

「誰を呼んでくると？」

その時、不意打ちのように女の声がかけられた。

「！」

「！？」

同時に飛来した二条の光が、ふたりの体を貫いていく。

倒れている男たちの腕をロープで縛る。十六人ともなれば、ちょっとした重労働であつた。

「ヒーリングシェア！」

縛り終えたのち、負傷のある者には最低限の『治癒術』を施していく。全員分が終わる頃には、氣を失っていた者もすっかり目を覚ましていた。

「で、こいつらを町まで連れてきやいいんだよな？」

エリスはヒタイの汗を腕で拭い、ひと息つく。

いまいち物足りない幕切れではあつたが、これで大金とあの剣が手に入ると考えれば悪い話ではないだろう。

男たちは暴れるでも罵詈雑言を吐くでもなく、大人しく座り込んでいた。

圧倒的な力の差を見せつけられ、なおかつ傷の治癒までされでは、ぐうの音も出ないのだろうか。

「まだ他にも仲間がいるはずよ」

すっかり終わり気分でいたエリスの横から、アリーシュが口を挟んだ。

「そうでしょう？」

アリーシュは男たちをすらりと睥睨する。質問は彼らに向けて投げられたが、返答は得られなかつた。

じつとりとした沈黙が場に広がる。

「……お前らなんか、アニキがいりや返り討ちだつたつてのに

それを破つたのは、若い男の愚痴だつた。

「……まったくだぜ。たかだかオレたちをやつたくらいでいい気になりやがつて」

「偉そうな顔すんのはアニキに勝つてからにしろ！」

「そうだそうだ！」

それがきつかけとなつたか、男たちは次々と言葉を吐き出し始めた。

内容は微妙に情けなかつたが。

「アニキ……？」

とレクトが疑問符を顔に浮かべる。

「誰だよ？」

エリスの問いに、一番近くにいた男が恨みごとを言つように答えた。

「オレたちの頭だ。あの人にかかりやあお前らなんかまとめてポイだぜ！」

やはりまだ他にも仲間はいるようだ。

「頭つて……こいつじゃないのか？」

エリスは自分が真つ先に倒した、ヒゲ面の男を指差した。たしかに見た目のイメージからするとそれっぽくはあるが。

「…………」

彼は彼で、むつすりと黙りこくつたままだつた。

「まあいいか。じゃあてめーら、そいつんとこひに案内しろよ」

エリスの要求に、男たちは再び騒ぎ始める。

「バカかよ。頭を売れつてのか！」

「いや待て、アニキがこいつらを叩きのめしゃあ結果オーライだぜ」

「いくらアニキでも、オレらを人質に取られたら身動き取れねえんじゃねえか！？」

「人質だと！？ こいつら卑怯なマネを！？」

なにやら彼ら同士でも意見が割れていよいよつである。が、なんにせよやかましいことこの上なかつた。

「うるせええーっ！ 四の五の言つてねーでさつさと案内すりやいいんだよつ！」

とエリスも持ち前の威勢を發揮するが、それでも彼らは一向に黙りうとしなかつた。荒くれ者の手法は同じ荒くれ者には通用しにく

いのだろうか。

いよいよ対処に困りかけた、そんな時。

「よしやがれ野郎共！」

と野太く一喝したのは、例のヒゲ面の男だった。

男たちが一転して、水を打つたように静まり返る。

「お前らの知つてゐるザット・ラッシュは、こんな奴らにやられるほど情けない男か！？」違うだろ。騒げば騒ぐだけアニキの名を落とすつてことがわからねえか！」

トップではないにしろ、彼も一団の中でそれなりの地位についているのだろう。皆、彼の言葉を黙つて聞いている。

「必ずオレたちの仇は取つてくれる。だから無用な心配はするな！」みたび、男たちから声が上がつた。だがそれは先ほどまでの雑然としたものではなく、ある種の団結力を伴つた声だった。

アニキと呼ばれる彼らの頭。ザット・ラッシュというのがその名前だろうか。ここまで信頼されているということは、ひとかどの者であるのは間違いない。

「望み通り案内してやる」

皆の様子を見て取つたあと、ヒゲ面の男はエリスに向き直つた。

指針は決まつてゐる。捕獲すべき山賊がまだ残つてゐるのだから、それらを捕らえに再び山を進む。案内役もいるので、その者を信じるなら、リーダー格のところへは手早くたどりつけるだろ？

決まつていなければ手段のほうだった。

「……どうすんだ？」

エリスたちは今、捕らえた賊を眺めながら作戦タイムの真っ最中である。

議題を彼らの処遇についてだ。

このまま十人超の人間をそろそろと引き連れて山道を登るのは、正直言つて厳しいものがある。

だからと言って、ここに置いていくのもまづい。見張りを残さな

ければならないし、そのまま夜になつてしまつたら面倒のことになるのは目に見えている。

ということは、選ぶ道は絞られてくる。

「案内役だけ残して、あとは町へ連れて行く」
消去法で弾き出した答えを、代表するようにレクトが口にした。
異論は出ない。

次に決めるのは誰が連れて行くかであるが、これは即座に名乗り出る者がいた。

「私がひとりで連れて行くわ」

アリー・シェである。ひとりという部分に懸念の声が上がったが、
「まさか全員で戻るわけにはいかないでしょ?」「

というひとことに丸め込まれてしまった。

「戦力は多いほうがいいわ。私は大丈夫よ」

山賊たちがあと何人残っているのか定かではない。たしかに、頭
数は多いに越したことはないだろうが。

それでもひとりで彼らを連行しようとは、彼女らしからぬ
少々無茶な行動に思えた。

アリー・シェを除いた五人と、荷物を載せた馬一頭、そして案内役
として選出したヒゲ面の男が山を奥へ奥へと進んでいく。

無論ロープで腕を縛つたままだ。

「……あんたら、町の奴らか?」

男が訊ねる。

「まあ、そんなとこだな。そいつらに頼まれたんだよ」
答えたのはエリスだった。他の者は、大なり小なり話もしたくな
いと言いたげな表情を浮かべている。

「で、どこにいるんだ? そのアーキつて奴は」

今度はエリスが訊ねる。男は礼とばかりに、「もう少しだ」と素

直に答えた。

「……ホントに大丈夫かな。アリーシュ様」

その後方で、パルヴィーが不安げな咳きをもらした。

なんとなく言いくるめられてしまったが、よくよく考えると心配である。同じ『ひとり』なら、ラドニスに任せたほうがよかつたのではないか。

「本人が大丈夫だと言つたのだ。心配はない」

と、そのラドニスが彼女をなぐさめた。年長者特有の包容力のある声が、パルヴィーの不安をほんの少しだけやわらげた。

「……そうだね」

そんなパルヴィーの心配をよそに。アリーシュ一行は、すこぶる順調に下山の道を歩んでいた。

ロープで腕を縛られた男たちが、さうこもつ一本のロープでビーズアクセサリーのようにつながれている。先頭でロープの端を握っているのは、無論アリーシュだ。

歩を進めるたびに、彼女の心は幾分か軽くなつていった。

皆には言わなかつたが、なるべくならこの一件から手を引きたかったのである。

実際に対峙してみて、ようやく実感した。やはり自分の剣は『モンスター』を斬るためにある。悪しき血を流し尽くすためにある。命を奪わないとはいつても、人間を斬るのは良い気分ではない。たとえ悪人だとしてもだ。

我慢して付き合おうとも思つていたが、都合良くチャンスがめぐつてきた。

自分がいなくとも、彼らなら充分に任をまつどうしてくれるだろう。

任せておけば安心だ、と。

やがてしばらべ下つた頃。男たちのあいだから、小さな咳きがもれた。

「なあ……逃げれるんじゃね？」

力の差をまのあたりにしてすっかり逆らつ氣力をなくしていたが、よく考えたら相手は今ひとりなのである。

縛られているとはいえ、大の男が十五人だ。全員がその気になれば女ひとりくらい造作もないはず。

生まれた提案は、水面に浮かぶ波紋のように広がっていく。

「…………」「…………」

小声でその計画を立てる男たち。

それが聞こえたのか、もしくは最初から想定のうちだつたのか、アリーシェは歩きながらするりと剣を引き抜いた。

銀色の刃が、日の光を反射して美しくきらめく。

「……ロックブレイド」

彼女が言葉を唱えると、一行の真横の地面から、まるで巨大な刃のような岩が勢い良く隆起した。

何本もの木が、まつぶたつに両断される。まるで小枝のようにたやすく。

「…………! ?」

男たちのあいだに戦慄が走つた。先ほどの戦いでは、あんな殺傷力の高そうな『魔術』など見かけなかつたはずだ。

アリーシェは振り返ることも、声をかけることもしない。無言の圧力。背中から放たれるプレッシャー。

男たちは完全に、その威圧に飲み込まれてしまつていた。

その後なにごともなく町まで下りられたのは、言つまでもない。

なおも山の奥深くへと進んでいくエリスたち。

その時不意に、前方の茂みがガサリと揺れた。はっとして身構える一同。

茂みから姿をあらわしたのは、ひとりの若い男だった。
背格好からすると賊たちの仲間だらうか。

「……」

男は、エリスたちと縛られたヒゲ面の男とをじろじろと眺めながら、ゆっくりと近寄つてくる。

「……なにがあつた？ ダドリー」

そして険しい表情で訊ねた。どうやらダドリーと云うのが、このヒゲ面の名前らしい。

「町から来た奴らだ。他の連中も捕まつた」

「なんだつて！？」

ダドリーの説明を聞き、男はますます顔を険しくしてエリスたちをにらみつけた。

が、にらむるだけで、これといった行動は起こさない。やはりこのダドリーが縛られている手前、滅多なことはできないといつことだろうか。

「こいつらはアーニーに会いたいそつだ。今どきにいる？」

「アーニーか……」

ダドリーに訊ねられたからか、その名前が出たからか。男の顔が、ほんの少しだけやわらかくなつた。

「今は、風呂に入つてゐるところだが」

岩に囲まれたくぼみから白い湯気がもくもくと上がり、辺りを霧のように包んでいる。

地中から湧き出た温泉が溜まり、天然の露天風呂と化しているのだ。入浴するのはもっぱら山に住まう動物たちであるが、たまに人間が利用することもある。

そこに今、十数匹ものサルと共に、ひとりの男がつかつていた。伸ばしていると云うよりも伸び放題な髪の毛に、しなやかに鍛え

られた肉体。周りを囲むサルたちは、まるで彼を仲間だと認めているかのようになついている様子だった。

「アーニーっ！」

そこへ、彼の手下が慌ただしく駆けてくる。

途端にサルたちは湯から上がり、逃げるよつにその場から去つてしまつた。

「……なんてい？ 騷々しい」

後頭部から返ってきた声は、意外にも若い。

「それが……」

「てめーがこいつらの頭か？」

手下の声を押しのけて、エリスがずうずうしくも問い合わせた。

聞き覚えのない声の出現に、彼は怪訝そうに振り返る。

「なにもんだ？」

その顔は、声にたがわず若いものだった。

二十代。いや、十代の終わりといつても通用するかもしれない。彼を『アーニー』と呼ぶほとんどの男が、彼よりも年上ではなかろうか。

「聞いたのはこつちが先だ」

とエリスが返す。

彼はゆつたりと湯につかつたまま、エリスたち五人と、縛られているダドリーと、最初に駆けつけた男を順に見ていった。

「かたじけねえ、アーニー」

ダドリーが、おおよそのいきさつを説明する。

「……そうかい。うちのもんが世話になつたみたいだな」

それを聞き終え、彼は勢い良くバシャリと湯の中から立ち上がつた。

「たしかにオレが、こいつらの頭のザット・ラッドだ」

「にやあああああーーっ！」

しかしその自己紹介は、パルヴィーの超音波のよつな悲鳴によつて、後半がかき消されてしまつた。

ザット・ラッドは、全裸だったのだ。

まあ温泉に入っていたのだから当たり前のだが。

「……オレがこいつらの頭、ザット・ラッドだ！」

聞こえていなかつただろうと踏み、ザットは名乗りをやり直した。その立ち姿は、非常に凜々しく堂々としたものだった。たくましい肉体はまるで彫刻のような美しさと力強さにみなぎっている。裸でなにが悪い、と言わんばかりの佇まいだ。

だがせめて、最低限一力所だけは悪く思つてほしにパルヴィーであつた。

「あたしはこいつらの頭の、エリス・エーシールだ！」

心身共に威風堂々としたザットに負けじと、エリスもズバッと威勢良く名乗り返した。

「勝手に頭にならないでよつ！ つてゆーかなんで平然としてんのーつ！」

パルヴィーは顔を真つ赤にしてつりも、聞き逃さずにシッコミを入れる。

彼女らふたりは同年代のはずだが、この反応の違いはいったいなんのだろうか。エリスはどこで、道を間違つてしまつたのだろうか。

「お前、意外と純情なんだな」

と冷静に分析するエリス。いつぞやは夜這いを仕掛けようとした奴とは思えないほど乙女なリアクションである。

パルヴィーは恥ずかしさと、やるせない怒りと、行き場のないもどかしさを平手に込め、何故かリフィクの顔面へと叩きつけた。

「ていつ！」

「なんで僕っ！？」

まつとうな疑問を残しながら、リフィクはその場にくづおれた。

「うちのモンを人質に、このオレを捕らえようつて魂胆か？」

ザットは眼光鋭く、エリスたちをにらみつける。全裸で。

パルヴィーなどは、完全に彼へ背を向けてしまっていた。

「ばーか、人質になんかするかよ」

エリスは縛られているダドリーを見せつけるように跳りつけ、自分たちから遠ざける。

「けどめーらをひとつ捕まえにきたのは当たりだ。面倒なことはごめんだから、ここはいつちよ手つ取り早くいこつぜ」

ザットは「ほう」と続きを聞く。

「こつちとてめーで一対一の勝負するんだ。こつちが勝つたら、てめーは残ってる手下共をまとめて、大人しく捕まる。頭ならそれくらいやれるだろ?」

要是は決闘ということである。

「オレが勝つたらどうなるんだ?」

「勝たねーからいいんだよ」

はつはつはつ、とザットから笑いがこぼれた。あざ笑つていると、も、挑戦的とも取れる笑いだつた。

「いいぜ。ついてこいよ」

ザットは温泉から上がり、そのまま奥へと歩いていく。全裸で。

どうやら話は受け入れられたようだ。

彼のあとを追おうとする、その前に、不意にエリスが、半笑いの表情をレクトに向けた。

「……負けてたな」

「なつ、なにがだ……?」

声が上ずるレクト。

「ねえー、もういーいー?」

背中を向けてなおかつ顔までふさいでいたパルヴィーが、誰にでもなく問いかけた。

場所は変わつて、木々が刈り取られた小広い空間。傾斜もほぼないその一画に、いくつもの人影が集まつていた。

一方はエリスたち五人。もう一方は、ザット・ラッドを始めとした野性味あふれる男たちである。

両者が、一定の距離を置いて向かい合つていた。

ザットは毛皮をポンチョのようにかぶり、腰巻きを巻いただけと
いう軽装。武器や防具のたぐいは見えない。背後に控える手下たちは、おおよそ十人くらいはいるだろうか。ちなみにダドリーもすでに繩を解かれてあちらの陣営に加わつている。

「まだけつこう残つてたんですね」

高まる緊張に、リフィクが生睡を飲み込む。

とはいえ先ほど戦つた人数よりは少ない。もし総力戦になつたとしても、おくれを取るようなことはないはずだ。

「じつちが勝つたら、全員ガン首そろえてお繩につく。一言はねえな？」

エリスが念を押す。ザットは大きくうなづいてみせた。

「間違いねえ。その代わりオレが勝つたら、てめえらが捕らえている他の奴らを解放してもらつ」

「残念だが、今頃はもう町の牢の中だ」

と、レクトが答える。

そう答えるがわかつていたかのよひに即座に、ザットは言葉を続けた。

「そつから解放してこいつつ話だよ」

つまり脱獄を手伝えということだらうか。そんなことをすれば、まず間違いなくお尋ね者である。『モンスター』と戦つている場合ではなくなつてしまふ。

とはいえる彼らも自身の行く末がかかるつているため、条件としては対等なかもしれないが。

「いいぞ」

エリスはあっさりと、その条件を飲んでしまつた。

「いいの？」

「一応確認するパルヴィー。

「負けねーから心配すんな」

エリスは杞憂だと軽く笑い飛ばして、そもそも当然のように前へと進み出た。その手にはウッドブレードが握られている。

「せつ、始めようぜ」

「……なんだと？」

その様子を見て、ザットは不愉快そうに片眉を上げた。

「まさか、お前がオレの相手をするつもりじゃないだろ？ な

「見てわかんねえか？」

「ふざけるなっ！ そこの男を出せ！」

ザットは一喝して、ラドニスを指差した。パッと見た感じ一番強そうな彼を指す辺り、腕には相当の自信があるのだろう。

「なんだよ、あたしじゃ不満だつてのか！？」

「いきがつたところで所詮は女だ。話にもならねえ」

眼中にないと断言され、エリスの堪忍袋の緒が紙のよつとあつたり千切れ飛んだ。

「上等だつ！」

有無を言わぬ突撃する。口よりもまず、腕すぐで思い知らせてやううといふことだらう。いつもと同じだ。

やれやれと言いたげに、じつしりと待ち構えるザット。

ウッドブレードが振り下ろされる寸前、彼は後方へ跳んだ。そして右の拳を固めて引く。

エリスはまだ剣を振り終わつた体勢。スキがある。

そこめがけて踏み込み、ザットは右ストレートをうち放つた。

避けられる距離ではない。

しかしHリスは剣を振った勢いを利用して、そのまま足元へでんぐり返った。

「！？」

空を裂く拳。Hリスは、彼の狙いの左下にいる。

「ゼやああつ！」

Hリスはしゃがんだ体勢から跳ね上がりながら、ウッズブレードをザットのアゴ下へと叩き込んだ。

「ぐつ……！」

うめき声が口から出でていかない。衝撃は一直線に脳を貫き、彼の視界を揺さぶった。

「どうだつ！」

してやつたりと、勝ち誇るHリス。今のはかなりの手応えがあった。もし真剣だつたら、一撃で勝負がついていただろう。

「……所詮女と言つたのは、取り消す……」

ザットは頭を押さえながらフラフラと踊る。あれで倒れなかつたのは驚嘆すべきところだろ？

「……今ので、オレの油断は消え去つた……」

だが、効いているのはたしかだ。もはやまつすぐ立つてもいられなくなつていい。

「……ダドリー！」

泥酔したかのように足元がおぼつかないザットが、嘔吐するように手下を呼んだ。

「へい」

Hリスたちも顔なじみの、ヒゲ面の男が前に出る。

「オレは殴れつ！」

「へい！」

ダドリーの迷いのない右ストレートが、ザットの顔面にぶちかまされる。痛烈な音を響かせながら、ザットは地面に倒れ込んだ。

「……もうわたしたちの勝ちでいいんじゃない？」

パルヴィーが咳く。

「ダアドオリイイイイイイイイイイイイイイ！」

それが聞こえたわけでもないだろ？が、ザットは叫びながら、飛び立ちそうな勢いで起き上がった。

「面倒をかけたなああつ！」

大仰に礼を言い、ダドリーを下がらせる。立ち上がった彼は、ものの見事に復活していた。

むちゅくちゅな復活方法である。

だが復活どころか、先ほどよりも霸気が増しているように思えた。

「お前にもだつ！ 女！」

ビシッと音が出そうな迫力で、エリスは指差す。

「おうおづ、天下のエリス・ヒーツェルを『女』呼ばわりとは、まだわかつてねえみたいだな」

「なんでもいいつ！ 見くびつた詫びに、オレの本気を見せてやる。だからお前も、そんなオモチャじやなくちやんとしたモンを持て！」
オモチャとは、このウッドブレードのことを指しているのだろうか。ということは、ちゃんととしたものとは真剣のことである。

「負けたあとで、武器のせいにされてはたまらんからな」

「するか、そんなこと… けどまあ、それが望みなら変えてやつてもいい。後悔すんなよ」

相手の望み通りのことをした上で勝てば、ただ勝つよりも『勝つた感』が増す。なんとなくそんな気がしたので、エリスはそれを快く引き受けた。

双方が、仲間のもとへと踵を返す。

「持つてろ

エリスはウッドブレードを、それが子分の役目とばかりにリフィクへ投げ渡す。

「借りるぞ」

そしてパルヴィーの腰元から、ひょいとショートソードを抜き

取つた。

「ちょっとー！」

当然の『ごとく彼女からは抗議が飛んでくるが、借りるべりいいだろつ』

というひとことだけで済ませてしまった。

「貸してもらえないか？」

そんなエリスの代わりに、レクトが折り目正しく頬み込む。

「……いいけど」

彼に言われてしまつたら、パルヴィーとしても断わりにくいやうだった。

「ありがとウ」

そしてレクトは、エリスに向き直つて一応の忠告を口にする。

「あの技は使うなよ」

人間相手に『オーバーフレア』を使えば、致命傷は免れられない。条件が条件とはいえ、殺してしまつては意味がない。

「わかつてんよ」

当のエリスからは、本当にわかつてゐるのかどうか怪しい返事が返ってきた。

「意外と軽いんだな、これ」

エリスはショートソードの握り、心地へ確かめながら、もとの位置へと舞い戻る。するとザット・ラッドも、本気を出す準備とやらを終えたようだつた。

先ほどとは違い、両腕と両足にだけ金属製の防具を装着している。ブレートアーマーでいうところの籠手とブーツに似てゐるだろうか。ザットは防具で覆われた拳同士をぶつけながら、気迫充分といった感じでエリスに正対する。

「今のオレに油断はない」

「それつけたら、なんか変わらぬのか？」

「やればわかる」

「じゃあやるか」

エリスはショートソードを、両手で握つて正面に構える。普段使つているものよりだいぶ短くて軽いが、使つてはいるつちに慣れるだろうと、相変わらず楽観的であった。

両者構えたまま、一瞬一瞬とにらみ合つ。

先に動いたのはエリスだった。地を蹴り疾駆し、真正面から突き進む。

一拍遅れてザットも直進していた。互いに向かつたふたりが、その中間点で衝突する。

剣を振り下ろすエリス。右腕を突き出すザット。だがザットの狙いはエリス本体ではなく、彼女の振る剣に定められていた。

刃に対してななめ方向に拳が入る。ショートソードは腕具の表面を滑り、その軌道を曲げられてしまった。

「!?

瞬間、息を呑むエリス。まっすぐ振り下ろしたはずの剣は、しかし袈裟斬りの軌道でなにもない空間を斬つている。

至近距離でのこのスキは命取りだ。

すでにザットは左腕を引き絞つていて、エリスの無防備な上体めがけて。

そこでエリスは、腕を振つた勢いに身を任せ、そのまま前方へと飛び込んだ。先ほど彼へ直撃を与えた時と同じ、あの動きである。ザットの左拳が、影だけを打つ。

だが彼も先の失態を忘れたわけではない。田はしつかりと、影のその先を捕らえていた。

刹那のインターバル。そこからの第一撃は、どちらも放てば当たるタイミングだ。まさに早いもの勝ちという状況である。

わずかな差で出足を制したのは、エリスのほうだった。でんぐり返るや否や、体を風見鶏のよつて回転させ、ショートソードを振り上げる。

それは見事に、ザットの胴体を斬り裂いた…………はずだった。

「……」

エリスは、我ながらにして呆気に取られる。手応えがない。ザットも一瞬、目を見張っていた。

避けられたわけではない。狙いを外したわけでもない。完璧な一撃だった。

だつたのだが、ザットの体は、切つ先のわずか向こう側にあつた。剣が短くて、ほんの少しだけ届かなかつたのだ！

「うつかりすぎるミスである。

「…………やつちまつた」

咳くエリスの脇腹に、ザットの猛烈な蹴りが打ち込まれた。

「バカだ」

まるで小石のよつに蹴り飛ばされて地面を転がつたエリスを眺め、パルヴィーは心の声をそのまま口にした。

「ねえバカのせいで、わたしたち悪の手先にならなきやいけなくなつたみたいなんだけど」

そして仲間たちを見やる。

今の蹴りは、間違いなく直撃だつたはずだ。事実地面に倒れたまま、エリスは動かない。

沈黙する四人とは対照的に、賊たちはおおいに沸いている様子だつた。もう勝負がついたかのよつな盛況ぶりである。

ザットも同様だった。

「全員相手にしてやつてもいいぞ！」

すでにエリスなど眼中になさげに、四人に向かつて叫ぶ。

「ああ言つてることだし、ルール変更させてもらおつか？」
と軽口を叩くパルヴィーの横で、レクトが彼へと言い返した。

「油断はないんじやなかつたのか？」

言葉の意図を察したのか、ザットはエリスへ視線を戻す。少し目を離したスキに、彼女は起き上がつていた。

「立つか」

ザツトの声には感心の一コアンスが含まれていた。

エリスは口から垂れる血を拭い、剣を構え直す。

「慌てんなよ。これでおあいこだ」

たしかに双方共に、一発ずつ打撃を食らっている。だがどう見ても、エリスのほうがダメージが重そうだった。

「どうやら女についても、オレの知ってるのとは少し違うみたいだな」

好戦的に笑うザツト。そして勝負は再開される。

それぞれ相手の出方を見たからか、今度はどちらも、そろそろ直撃を許さなかつた。

ザツトの手下たちは、全員が全員、ふたりの勝負を観戦しているわけではなかつた。

日頃と同じく山中に散らばり、『獲物』が探している者も何人かいる。

「……！？」

そのうちのひとりが、驚いて顔を青ざめさせていた。

見てしまったからだ。

連なる木々の向こう側。しばし距離を隔てたところを歩く、人ならざる者たちの、その姿を。

黒い体毛に長く尖つた口元。のぞく牙。鋭い目。三角の耳がピンと立つたその容姿は、どことなく狼を連想させる。それが三体。

「……『モンスター』……！？」

もらした声は、ため息よりも小さい。

だがまるでそれを聞き取つたかのように、『モンスター』は男と目を合わせた。

エリスとザットの戦いは、表面上は互角の様相を呈していた。最初の一撃以降は、どちらも直撃は受けていない。

剣を持つてるぶんだけエリスに攻めの利があるが、腕と足の防具がザットに守りの利を与えていた。筋力的にはザットが勝っているが、反射神経はエリスが一枚上手といったところだった。

今の時点では一進一退を繰り返している。

だがこのまま局面が進めば、まず間違いなくエリスが劣勢になるだろうとラドニスは分析していた。

やはり体力の差だ。男と女の絶対的な体格差が、時間が経つほど如実に現れてくる。

とはいえた抵の男が相手なら、そうなる前に倒せる実力を彼女は秘めているはずだ。目をつけるべきはザット・ラッド。

ラドニスは、彼の腕前に高く評価していた。

エリスの腕のほどは、少し前から始めた稽古で把握している。この戦いでの動きも悪くない。

なのに勝負がついていないということは、彼の腕前が優れている証だろう。

抜きん出でいる。他の賊たちとは一線も二線をも画している。まだ若い彼が年長揃いの男たちの中で頭と認められているのも、この腕っぷしなら頷ける話だ。

「やはり生命線はあるの技か」

ぱつりと呟くラドニス。『オーバーフレア』を取つてしまつたら、彼女はただ威勢が良いだけの少女に過ぎない。だからこそ、基礎から地力を鍛える必要があったのだ。

「……負けだな」

均衡が崩れたのは突然だった。

「はああっ！」

ザットが裂帛の気合とともに、右の拳をうち放つ。その一撃が、エリスの手からショートソードを弾き飛ばしたのだ。間髪を入れずに、ザットは回し蹴りを繰り出す。それはもの見事にエリスの側頭をとらえ、彼女の体を地面に沈ませた。

男たちから歓声が上がる。

ザットは勝ち誇った表情で、のろのろと起き上がる彼女を見下りしていた。

「女だてらによくやつたが、もついいだりつ。お前の負けだ」きつぱりと勝利宣言をする。しかしエリスは、ちゃんとやらおかしいと言いたげに口角を持ち上げてみせた。

「まだ途中だろうが。なんでそんなことがわかるだよ」「オレの蹴りが効いていないはずはない。それにもつ武器もない。どうやって戦つつもりだ？」

ザットでなくとも明白だりつ。エリス本人の態度とは裏腹に、立ち姿は押せば倒れてしまいそうなほど消耗しているのだ。

「アホか。あたしが剣を拾いにいきやあいいだけの話だろ。なんなら、素手でやつてもいい」

強がりにしか聞こえないセリフに、ザットは小さくため息を吐いた。

「わからねえなら、わからせてやるしかねえみたいだな」そして彼は両拳を握り、攻撃の構えを取る。

「その体に！」

トドメを刺すつもりだりつ。ダウンさせてしまえば文句なしの勝利である。是非もない。

エリスは黙つて相手をにらみつける。

ザットは息を吸つて攻撃の準備を整える。

一秒後には拳が繰り出されていたであらりつ、そんな瞬間。

その場に、乱入者が飛び込んできた。

「アニキーつ……」

息せき切らせて、ザットの仲間らしき男が走つてくる。彼は勝負のことなどまるで無視して、向かい合つたりのすぐそばまで駆け寄つてきた。

「アニキ！」

「勝負の最中になに考えてやがるてめええつ！」

ザットは攻撃の構えを解いて、その手下を激しく叱りつけた。仲間内からもブーイングが上がる。

しかし彼は、それにも構わず言い募つた。

「そんな場合じゃねえんだよアニキ！ 奴らがつ……！」

彼の様子はただごとではない。それに気付いたザットの脳裏に、瞬時にとある想像が浮かび上がつた。

そしてそれは、現実のものとなる。

「『モンスター』がつ！」

その報せが耳に入り、賊たちのあいだが一気に騒然となつた。勝負の興奮とは違う、戸惑いのうずまくどよめきである。

当然それは、対面のギャラリーにも聞こえていた。

「なんだと……！」

息を呑むレクト。町の平和な様子に触れていたせいか、完全に油断してしまつっていたのだ。動搖が隠せない。

「武器を取れ！」

アリー・シェの代わりとばかりに、ラドニスが鋭く喝を飛ばす。

その声に頬をひつぱたかれたようだ、一同は揃つて動き始めた。

「わたしのはーつ！？」

パルヴィーはどこかへ蹴り飛ばされてしまつたショートソードを、急いで捜索し始めた。

「くそつー、なんで奴らが来やがる…………！」

歯を食いしばって悔しがるザック。

「ヒーリングシェア！」

その横では、駆けつけたリフィクがエリスへ『治癒術』を施している。

それが終わるや否や、彼女はリフィクの頭をペチンと叩いた。

「お前もかよー！ 勝負の最中に入ってきたやがつてー。」

「ええーーー！」

理不尽な暴力に驚きの声を上げるリフィク。

『Hンスター』の出現に傷ついたままではまずいと思い、治療をしたここまで走ってきたのだ。どう考へても自然な流れ。むしろ礼こそ言わても、叱責されるいわれはないはずである。

「なにが勝負だ。そんな場合じやねえだらうが」

そのやり取りが耳に入ったのか、低くぼやくザック。そのあと、

戸惑う仲間たちを一喝した。

「落ち着け、お前ら！ あわててたって始まんねえだりー。」

「どつ、どつする？ アニキつ……」

「どうせこいつもねえ。みんな集めて、アジトの荷物まとめて逃げる準備だ！ 早くしねえと逃げ切れなくなるー。」

「わかったー！」

報せを持つてきた男が、指示を受けて弾かれたように走り出す。

「ちょっと待てええいつー！」

がその矢先、Hリスが彼を呼び止めた。男は思わず転びそうになつてしまふ。

「なつ、なんだ……？」

「奴らはどうにいんだ？」

詰め寄りながら訊ねる。

「……俺が聞いたのは、あつちだ。三体くらいいたらしいが……」

指差された方角を見ながら、Hリスは一やりとほくそ笑んだ。

「よし、行つていいぞ」

そしてザットに振り返る。

「倒してきたり続きたからな」

「……なんだと？」

疑問顔の彼には取り合はず、ヒリスはむりと仲間のまくへと走つていってしまった。

ヒリスを追うべく走り出すリフィク。

その腕を、ザットがつかみ取つた。

「おい待て！」

「ひいいっ！」

まるで少女のよつなか細い悲鳴が上がる。びびりすぎだ。

「あの女の言葉、どういう意味だ？」

そんな情けない反応には構わず、詰め寄るザット。質問の意味が汲み取れなかつたのか、リフィクは数秒ほゞきょとんとした。

「言葉の通りだと、思いますけど……」

腕を握る力が、ギリッと強くなる。言葉を聞いてわからないからわざわざ訊ねているのだ、と。リフィクは今度は、その内心を汲み取れた。

「その……『モンスター』を倒しにいって、そのあとでまた、あなたと戦うつもりでおられるのだと……」

というか訊ねるまでもなく、そつとしか聞こえなかつたと想つのが。だが。

ザットの手の力がゆるむ。

リフィクはそのスキを見逃さず、罠から解かれた子鹿のよつこ一目散に走り去つた。

「……倒すだと……？ 奴らを……？」

愕然と咳くザットだけが、取り残される。

「あつたーっ！」

と歓喜の声を上げながら、パルヴィーが草むらの中から自分のシ

ヨートソードを拾い上げた。

だが。

「さんきゅう」

やつとの思いで探し出したそれを、エリスが横からかすめ取つてしまつた。

「返してよー！」

「だからまだ借りてる途中だつてー」

そんなことを言いながら、パルヴィーとエリスが追いかけっこをする。危機感のなさは、さすがである。

そうこつしているうちに、レクト、ラドニス、リフィクが合流するべくやつてきた。

レクトは弓を、ラドニスは大斧を、それぞれ手にしている。

「あっちだつてよ」

エリスが、先ほど聞いた方向を指差す。その背後では、パルヴィーが不満そうに頬をふくらませていた。

「体力は大丈夫か？」

ラドニスが確認を取る。途中だつたとはいえ、一戦していたエリスだ。さすがに万全というわけにはいかないはずである。

「元気印のハナマルよ！」

言葉の意味はよくわからないが、まあ大丈夫ということだろうか。そうラドニスは受け取り、気を引き締めるべく号令をかけた。

「では行くぞ」

「妙なところだな」

山林に佇む、三つの巨大な影。その左側に立つ一体が、訝しげに呟いた。

全身が黒く短い毛に覆われた、狼に似た顔立ち。胴体にはレザー

アーマーをつけ、腰にはブロードソードを下げている。

三体の姿勢はほとんど同じであった。

「この山奥にしては人間の気配が多い。村でもあるのか？」

三体の足元には、人間の男がひとり、血まみれで倒れていた。外見からするビザットの一昧だらう。今しがた、彼らが仕留めたものだ。

「妙といえばこの匂いだろ。なんだこれは？」

「まるで鼻が利かないな。面倒なところに迷い込んでしまったもんだ」彼らが顔をしかめている原因は、地中から漏れ出る温泉の匂いである。人間からすれば気にならぬような匂いでも、それをひどく嫌う種族が存在しているのだ。

特に嗅覚の優れた彼らからすれば、ことさら不快なはずである。

「鼻が利かないなら条件は同じだな。ゲームでもしないか？」

向かって右側に立つ『モンスター』が、嬉々としてそんな提案を口にした。

他の二体は、こんな時に？と難しい顔をする。

「いつもと同じ要領さ。この山の中にいる人間を、誰が一番多く狩れるかってな」

すると真ん中に立つ『モンスター』が、呆れながら彼の肩を叩いた。

「おいおいなにが条件は同じだよ。この中で一番耳が良いのはてめえじゃねえかよ。普段勝てねえからって、こんな状況で」

「ちつ、バレたか」

「まあいいさ。鼻の悪いグンドラムにもたまには花を持たせてやるう。それにこんな状況だ、ゲームでもして気を紛らわすのもいい」と、左に立つ奴が承諾する。それを聞き、「しょうがねえな」と真ん中の奴も渋々うなずいた。

提案者である『モンスター』は、仲間の気が変わらないということ、いそいそと開始の合図をするのだった。

「それじゃあ、こぐぞ！」

ザット・ラッドを先頭とした集団が、草木のただなかを疾走している。

獸道にも近いかすかな道ではあったが、長らく山中で暮らしてきた彼らからすれば充分すぎるくらいの道であった。

彼らが目指しているのは、自分たちのアジトである。『モンスター』から逃げるため、皆一様に必死で走っているのだ。

だがザットだけは、他の者たちとは少し違う心境にその身を置いていた。

どこかうわの空。心ここにあらず。ヒリストの言葉が、びりじょつもなく気になつていていたのだ。

『モンスター』といえば、強い者。凶悪な者。そして決して勝てない者だ。ずっと、そう思つていた。

だが彼女は倒すと言つた。そいつらを。簡単なことのように。それを聞いた瞬間、ザットの心に深い爪痕が刻みつけられた。それは刻々と痛みを増し、有無を言わざず存在を主張してくる。

……倒す？ 倒せるのか？ しかも、たつたあれだけの人数ですか？

……無理だ。倒せるはずがない。

それは予想というよりも、彼の願望に近かつた。

もし倒せてしまつたら……自分はどうなるのだ？ 勝てないとあきらめ、仇を取ろうともせず、逃げ、隠れ、恐怖していた今までの自分は、どうなつてしまつのだ？

やられた皆にも、『おかしら』にも、いつたいどんな顔を向ければいいのだ！？

「…………」

ザットはいつのまにか歩調を落とし、ゆるやかに立ち止まつていた。

「どうしたー？ アーキ

後方から気遣いの声がかけられる。

「……ダドリー、あとは任せる」

が、ザットは背中でそれだけ告げたあと。振り向かずに、横道へと走つていってしまった。

「アニキつー？」

男たちが口々に呼び止めるが、効果はない。

「ジョナス！」

後事を任せられたダドリーが、ハツとして仲間のひとりを呼びつけた。

「アニキのあとを追つてくれ！ 様子がおかしかった」

「わっ、わかりやしたつ……！」

任を受けたのは、ザットとほど近い年齢の青年。彼は急いで、消えた頭のあとを追いかけた。

散開して『狩り』を始めた『モンスター』が、風のように縁のないだを駆け抜けていた。

彼らの聴覚は、かなり広範囲に渡る空間の音を、漏らすことなく聞き取っている。そこから人間の発する音だけを抽出し、位置を絞り込むのだ。鼻が利けばさらに正確さが増すのだが、人間を相手にするぶんには充分だろう。

「近い！」

『モンスター』の一体が、走りながらほくそ笑む。他の者より先に、自分が獲物にありついたのだ。

人間の数は恐らく五つ。固まって一方向へ走っている。

感じ取つたのも束の間、すぐにそいつらの姿が見えてきた。

「一步リードさせてもらつぜ」

そこにはいよいよ仲間へ優越感を誇示しながら、彼は獲物めがけて足を速めた。

その彼の気配が、消失する。

「グンドラム……？」

それを感じ取り、一体の『モンスター』が走る足を止めた。

獲物にいち早く飛びついたはずのグンドラムの、『音』が消えたのだ。どういうことだ？

だが彼が襲いかかつたはずの人間たちの気配は、まだそこにある。彼だけ感じ取ることができないのだ。

「どうなつている……？」

「何が起きた？」

「バルトロ？」「

もうひとりの仲間もその異変に気付いたのか、気配が消えた場所

へと方向転換したのが伝わってきた。距離的には奴のほうが近いが。「なにもなればいいが……」念のためといつ思いで、彼もそこから踵を返した。

「アニキッ！」

林間をひた走るザットは、後方から自分を呼ぶ声を聞き、振り返つた。

「ジュナス！？ なんでついてきやがった！」

「ダドリーのアーニキに言われて……それにオレも心配で！」

「……あいつめ」

ザットは、顔に似合わず世話焼きな仲間へ小さく舌を打つた。

「しようがねえ、ついてこい！」

今ひとりで戻らすのも心配だ。ならば自分と一緒にいたほうが、まだいくらか安心である。

返事をするジュナスを引き連れて、ザットは再び駆け出した。動物たちも本能的に危険を察知したのか、鳥のさえずりが先ほどからピタリと聞こえなくなっている。

ふたりは網の目のように並ぶ木々を軽やかに避けながら、疾走する。

「どこに行こうってんです？」

「あいつらの様子を見に行く」

「あいつら……」

という言葉だけど、どうやらジュナスには伝わったようだった。

あの五人、と。

やがて木々のあいだに、彼らの姿を見つけることができた。

「いたつ……！」

近づくにつれ彼らの様子がはっきりわかってくる。彼らは、戦闘の真つ最中であった。

相手は一体の『モンスター』。狼に似た種族の奴だ。

「本当に戦つていやがつた……！」

ザットはほどほどの距離で立ち止まり、食い入るようにその戦いを見た。

自分と戦つた女と大男が前衛となり、あの三人が『矢や『魔術』で後衛をつとめている。『モンスター』の動きは素早いが、彼らが苦戦している様子は感じられなかつた。

むしろ逆。圧倒していると言つてもいい。

「アニキ、あそこ！」

隣に立つジユナスが、なにかに気付いて指を差した。彼らから少し離れたところの地面。その先を見て、ザットも大きく目を見開いた。

今対峙しているのと同種の『モンスター』の死体が、ひとつそこには転がつていたのだ。

「……！」

ザットは言葉を失う。すでに一体、倒したあと？　あれは一体目だというのか……？

「やつた！」

ジユナスがガツツポーズを決めるが、ザットは呆けたように無反応だつた。

大男の大斧が、『モンスター』の背中をバッサリと斬り裂いたのだ。おびただしい量の紫の血が、周囲に飛散する。

かろうじて持ちこたえていた『モンスター』だつたが、やがて力を失い、その場にドサリと倒れ込んだ。

決着、である。

「すげえ、ホントに倒しやがつた！」

ジユナスが、まるで自分のことのように喜ぶ。

ザットも内心ではそう叫びたい気持ちだつた。だが心の中でくすぶるなにかが、その気持ちを強く押さえつけていた。

自分でもその『くすぶり』の正体がわからずにいる。心に霧がかかつてしまつたような状態だ。

故に。

背後から迫る巨大な影に、気が付くことができなかつた。

「貴様ら、よくもつ……！」

頭上から、低い怒声が降り注ぐ。

「！？」

ザットは振り向くよりも先に、前方へと飛び出していた。ほとんど無意識による反応だったが、それが彼の命運を分ける。

背中越しに聞こえてきたのは、なにかが風を切る音。地面を砕く音。そして、

「ぐわあああっ！」

ジュナスの叫び声だった。

「ジュっ……！」

振り向いたザットは、目の前に広がる光景に愕然とする。そびえ立つ狼型の『モンスター』。手に持つは赤く染まったブロードソード。そして奴の足元に、下半身が血まみれとなつたジュナスが倒れていた。

「……！」

ザットの体は、まるで石のようには硬直していた。

仲間の危機。すぐに助けなくてはならない。そう前進しようとする一方で、もうひとりの自分が手足を押さえつけていた。

行くな。やめる。死ぬぞ。放つて逃げる。怖いんだろう？　あれはお前の敵う生物じゃない。

立ち向かおうとする自分と恐怖する自分。そのふたつがせめぎ合い、ザットの体を縛りつけていた。

だが時間は彼の葛藤など待ちはしない。

仲間をやられた怒りに目をむく『モンスター』は、眼下のジュナスをにらみつけた。まだ息があることに気付き、トドメを刺そうとする。

やめろ！　その声を出せない自分が、ザットは悔しくてたまらなかつた。

ブロードソードが振り上げられる。

その時。

彼の真横を、なにかが素早く通り抜けていった。

ザットはハツと息を呑む。あの女？

『モンスター』へ直進するのは、ザットと戦つたあの少女。彼女の持つショートソードから、激しい火炎が噴き上がった。

「！？」

「オーバーフレアあつ！」

炎の刃が、『モンスター』を一刀両断する。

火だるまとなつた体が地面に倒れ、落ちたブロードソードが、ジュナスのすぐそばに突き刺さつた。

「ヒーリングシェア！」

駆けつけたリフィクが、ジュナスへ『治癒術』を施す。やさしい光と共に、脚部の大きな傷口がみるみるふさがつていった。

「ありがてえ……」

「大丈夫か！？」 ジュナス

ザットが気遣わしげに彼の様子をうかがう。ジュナスは「なんとか」と力なく笑つてみせた。

「あなたは、ケガは……？」

彼の治療が終わると、リフィクはザットへと振り向いた。

「いや、オレは平気だ。……恩に着る」

ザットはかぶりを振つたあと、痛み入るようく深く頭を下げる。

「これで全部かな？」

と、パルヴィーが小首をかしげる。

三体倒したところで、『モンスター』の来襲はピタリと止まった。

まだ他にもいるのなら、出てきてもよさそうなところではある。

「たしか、三体とかつて言つてたな。もういないんじゃねえか？」

エリスが、情報を知らせにきた男の言葉を思い出し、呟く。

「だが警戒する必要はある」

ラドニスは冷静に言い添えながら、リフィクのまづへと視線を向けた。

彼とザットとジユナスの三人が、並んで歩み寄る。ジユナスの下半身は真っ赤に染められていたが、傷自体はもう治っているため、痛みはないようだった。

「とんだジャマが入っちゃまつたけど」

エリスがザットへ言葉を投げる。

「さつさと続きやろうぜ」

それを聞き、彼は小さく吹き出した。そして、意氣消沈にうつむく。

「勝負はもうしなくていい」

絞り出すように、心が吐かれる。

「……オレの負けだ」

エリスたちよりなにより、ジユナスが驚いたようだった。

「なつ、なに言つてんだよ！？ アニキ」

狼狽して兄貴分の顔を見る。

「そ、そりゃあ、こいつらは『モンスター』を倒しちまつような奴らだけ……さつきはアニキが勝つてたじやねえか！」

「……そんな問題じやねえんだよ」

「それに、アニキだつてまだ全力だつたつてわけじやねえ」

「ジユナス」

「あの技だつて……」

「そんな問題じやねえんだよ！」

ジユナスの言葉を振り払つように、ザットは吠えながら地面を殴りつけた。彼の中の、なにかが爆発したようだ。

「オレらが戦おうともしなかつた『モンスター』共に、こいつらは臆せもせず立ち向かつてた！ その差だ！」

ザットの声からにじみ出るのは、ある種の悔しさ。そして自分に對する憤りの色だった。

「その差が、オレには『力ずきるんだよ』……！」

「…………」

ジユナスは言葉を失っていた。彼のそんな様子など、見たことがなかつたからだ。

ザツトは、締めつけられるよひにせをやいた。

「…………すまねえ」

ザツト・ラッヂ一味のアジトは、山深い洞窟の中に築かれていた。そこが今や、火事があつたかのように慌ただしくなつていて、頭の指示通りに、そこから退避する準備を急いでいるのだ。

「ダドリーのアニキ！」

と、洞窟の入り口に立つダドリー・ベイカーのもとへ、若い男が駆けてきた。

「準備、終わりやした。いつでも逃げ出せます！」

「そつか。なら、あとはふたりを待つだけか…………」

報告を受け取つたあと、ダドリーはいかめしい顔で洞窟の外へと視線を戻した。

ザツトとジユナス。いくら火急とはい、彼らを置いていくわけにはいかない。先に『モンスター』たちが現れないことを祈るばかりである。

焦りと緊張が最高潮に達しよつかという頃。

「！」

ダドリーの目に、渴望のふたりの姿が飛び込んできた。

共にいる部外者五人を一瞥しつつ、ダドリーはふたりへと駆け寄る。

「すぐに行けます！」

「いや、その必要はなくなつた。奴らはたぶんもういねえ」

やけに落ち着いたザツトの返答を聞き、ダドリーは無意識に、部

外者たちを再び見た。

「ただ、みんなは集めてくれ。お縄につく準備だ」
だが続けられたその言葉に、驚いて視線を戻す。

「……勝負を？」

あいまいな質問が出てしまつたが、それも仕方あるまい。自分の知らないところで、事態がガラッと変わつていたのだから。

「はなつから、勝負にすらなつてなかつたんだよ」
さわやかと取れるほど快活に、ザットが自嘲する。そして、かしこまつて頭を下げた。

「勝手に決めちまつて、申し訳ねえ」

少々面食らつたダドリーだったが、一拍置いたあと「いや……」と首を横に振つた。

「アニキが決めたことなら、文句はないわ」

ささやかれたのは、年長者らしい柔軟な声。そのあと彼は振り返り、
「野郎共、集まれ！ アニキが戻つてきた！ それから、ずらかる
のは中止だ！」

声を張り上げながら、洞窟の中へ戻つていった。

やがて洞窟の入り口の前へ、ずらりと男たちが並ぶことになる。
総勢十八人。

皆の視線を一手に集めながら、ザットが威勢良く口を開いた。

「すまねえみんな！ オレはこいつらに負けた！ 最初の約束通り、
全員大人しくお縄について、町で豚箱に入る！」
口づてに聞いていたのか、衝撃はさほど大きくなかった。
「だがオレは、お前たちを無理強いしたくない！ 気に入らない奴
は前に出て、オレから『頭』の座を奪い取つてみろー。」

「えー？」

と異を唱えたのは、はたで見ていたパルヴィーだけだった。

男たちは、そんな気などさらさらないとばかりに、口を閉じてい

る。彼らもダドリーと同じ気持ちなのだろうか。
しばしの沈黙を、ザットが破つた。

「……わかつた。感謝する」

それでこの一件は無事に終わった……かに見えたが。

「あの、アニキ……」

端に立つ男が、おずおずと口を開いた。

「サミニュエルの姿が見えねえんだけど……」

「サミニュエル？」

それを言われて、ザットを含む全員が辺りを見回した。たしかに、姿が見えない。

「まさか！」

と声を上げたのは、ザットとエリスのもとへいち早く襲撃の報せを持つてきたあの彼だった。

「オレあいつから聞いたんだ、『モンスター』が来たって。あいつ、他の奴にも知らせてくるって……」

他にも何人かが同じような報告をしたが、それ以上の情報は得られなかつた。

「やられちまつたんじゃ……」

嫌な予測が声となり、ざわざわと波及する。ザットは焦るようになり、エリスたちへと振り返つた。

「仲間がひとり戻つてねえ。捜しにいってもいいか？」「えーー？」

「まあ、いいぞ」

パルヴィーとエリスから、正反対の答えが返つてくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3880v/>

ブレイズソード・レックレス

2011年10月7日03時12分発行